

新漢字新仮名遣い版

三木清全集 第十六卷

一九六八年一月十七日 岩波書店刊 より

## 凡例

本PDFは、岩波書店刊『三木清全集』（1966～68、1986年）より作成したものである。以下のような改定を施している。

- ・旧漢字は新漢字に改め、旧仮名遣いは新仮名使いに改めた。
- ・送り仮名を一部現代的に改めた。「表はす・現はす・顕はす・著はす・露はれ」は「表す・現す・顕す・著す・露れ」と、「明か」は「明らか」、「少い」は「少ない」、「異なる」は「異なる」など多数にのぼる。
- ・「婦著」など現代的には「著」ではなく「着」が使われるケースは「婦着」等と変えた。「屢」は「屢々」とした。「愈」いよいよも「愈々」ますます、「益々」ますますと。
- ・人名などカタカナ表記は論文によって異なっているケースがあるが、主なものは統一した。殊に「ギ・ギ・プ」など現代では使われないものはすべて変えた。
- ・ルビは底本にあるものはすべて取り入れていたが、加えて、漢字の読みとして作成者が追加した。それらの区別はしていない。
- ・□は編者。■による注記、およびページ左端の脚注は作成者のものである。「解題」は作成者による。
- ・文献名が青字斜体であるのはネット上に公開されていることを示す。文献中のローマ数字はアルファベットI, II, IV, Xで代用している。
- ・ギリシヤ文字はTekniaGreek fontを使っている。但しσは作成ソフトとの相性が悪く別フォントである。

底本とした全集の編集方針は、「原則として最終稿を原典とし、校異は特別の他示さない。明確な誤記・誤植以外は原形を保存する。歴史的意義を持つ初期著作は原形のまま収録し、各種発表されたたぐいのものは、分類し年代順に配列した。」とある。

底本とした全集は、次の五氏の編集よりなつたものです。

大内 兵衛

東畑 精一

羽仁 五郎

梶田啓三郎

久野 収

三木清全集第十六卷 時代と道徳・現代の記録

目次

時代と道徳

現代の記録

続現代の記録

コラム 『東京だより』 他

コラム 『東京だより』

コラム 『窓外』

コラム 『一朝一夕』

コラム 『大波小波』

コラム 『銃眼』

【解題】

## 時代と道徳

- 序 ○ 政治の過剰 ○ 外来思想の今日 ○ 閑暇 ○ フレッシュマン ○ 標語の力 ○ 郊外風景 ○ 原因と結果 ○ 儒教復興其後 ○ 瑣末主義の弊 ○ 英雄崇拜の顛倒 ○ 改組の効果 ○ 生活条件と時間 ○ 詩のない時代 ○ 世界の現実 ○ 世代の速度 ○ 国民文化の実力 ○ 現代の語彙 ○ 日本人の非合理性 ○ 外人の日本発見 ○ スポーツと自然 ○ 哲学と文芸 ○ 不使用の独占 ○ 人間の再生 ○ 隨筆時代 ○ 人物弘底 ○ 学位問題 ○ 雑誌文化 ○ 級長選挙の教訓 ○ 仏教と翻訳問題 ○ 「汝自身を知れ」 ○ 東洋人に還る ○ スポーツと健康 ○ 一つの日支問題 ○ 日本と支那思想 ○ 倫理の喪失 ○ 悲劇を知らぬ国民 ○ 「養老」の伝説 ○ 日本文化の方向 ○ 歳末風景 ○ 新世代の意欲 ○ 暗示の影響 ○ 「挙国一致」 ○ 肅正時代 ○ 国民的と国際的 ○ 政治と教育 ○ 試験の明朗化 ○ 詩の復活 ○ 社会の常識 ○ 競技と政治 ○ 停年制 ○ 公衆の解消 ○ 新個人主義 ○ 文化の公共性 ○ 教員の道徳 ○ 漢字の効用 ○ 文学者の不遇 ○ 地方と文化 ○ 国語国字の問題 ○ 低調な世の中 ○ 制度と人 ○ 人民の声 ○ 生産者の立場 ○ 明治の再認識 ○ 思想のない政治 ○ 養生の説 ○ 宗教の改革 ○ 世界の認識 ○ 「転向」の性格 ○ 開いた心 ○ 愉快な義務 ○ 「哲学のない日本」 ○ 派閥の醜争 ○ 英雄主義の待望 ○ 素人の説 ○ 二律背反の問題 ○ 人文教育の矛盾 ○ 知識と伝統 ○ 青年日本 ○ 保健問題の深刻性 ○ 古典と検閲問題 ○ 故郷なき市民 ○ 現代教養の困難 ○ 取締政治 ○ 統制と空想 ○ 原版後記 ○

## 序

この書を作品文庫に入れるに当って、私は何の修正も行わないで元の仮に留めておくことにした。時代のクロニクルの意味を有する本書の如きにおいては、それが正しいと考えたからである。その論ずるところは、現在ではやや不適切になった点もなくはないが、また現在において一層適切になった点もあるように思う。

嘗て芳賀矢一はその『**国民性十論**』（明治四十年）を次の言葉で結んだ。「嗚呼この過渡の時代、仏が出るか鬼が出るか。真に傀儡子の手箱の様な感がある。凡そ個人としても、その人の長所は直に短所である。我民族の美德の底には亦必ずその欠点の潜んで居ることも知らねばならぬ。世界の舞台に出た以上は亦それだけの覚悟が必要である。変えるべき所は変えねばならぬ。守るべきところは守らねばならぬ。よく我過去を知って、よく新來の長所を採る覚悟があらば、今の時は真に多望の前途を胚胎し得る時代である。今の時に之をなし遂げ得ぬ日本人は祖先に対しても済むまいとおもう」。現代は芳賀がこれを書いた時よりも一層重大な意味において過渡の時代で

ある。「嗚呼この過渡の時代、仏が出るか鬼が出るか」、我々の覚悟に依存するところが多い。この時代の一時期の風俗と精神的ミリュウ【Three 環境Ⅱ中間】とモラルとを批評的に記録したのが本書であり、私自身としては、今読み返してみながら若干の感慨を禁じ得ない。

一九三九年五月

東京に於て

三木清

## 政治の過剰

一法律学者の学説が政治問題化した。私は法律学上のことを論ずる資格を有しないが、仮りにその学説が間違っているにしても、そのためにその人が曲学者、非国民であるかの如く云うのは、いかがであろうか。そこにすでに政治の過剰が見られ、かかる政治の過剰が思想の悪化の一原因となつてはいはしないかと疑われるのである。

すべては政治化する。これが現代の特徴である。単に一法律学説のみではない、経済学説も、社会学説も、哲学説も、文学や芸術も、政治化する傾向を有し、また政治化しているのが現代である。かような現象の原因が根本的に究明さるべき場合、徒らにかような現象に追隨して政治の過剰を惹き起すことは危険である。

一定の思想に基づいて政治的に他の学説を非難し圧迫しようとするとき、それは単に政治的問題に留まり得るものではない。他を政治的に問題にすることによつて、自己が学問的に問題にされる立場におかれるということに注意しなければならぬ。論者は政治的権力によつて他に沈黙を



命令し得るかも知れない。しかし同時に自己が、欲すると欲せざるとに拘らず、問題の抛つて立つ論理上及び方法論上の諸法則の前に引出されることになるのである。

かようにして中世の終り、近世の初めにおいて、キリスト教神学は新しい科学的思想を非難し、圧迫すればするほど、却つて自己が科学的に批判される傾向を激成したのであつた。それは西洋のこと、過去のことであると云つてはならぬ。比較はすべての学問研究に要求される一法則である。

「命令的な人間は、いかに彼等が自分たちの神に仕えていると信じているにしても、自分たちの神に対してもまた命令するであろう」、とニーチェは書いている。

政治家は事件を好みがちである。ちようど医者が病気を好むように。病気をなくすることを目的とする医者が病気を好むように、事件を少なくすることを目的とすべき政治家は事件を好む。政治家は事件によつて思考するという習性を持つてゐる。それだから政治が過剰になると、国民は神経質にされ、事件によつて刺戟されることを求めるようになる。さなくとも今日のような社会的不安の時期においては、その不安の心理からとかく事件が期待されがちだ。物を不必要に政治問題化することなく、寧ろ政治の過剰の除かれることが望ましい。

政治の過剰は政治的思考の充実を示すものでなく、反対に政治の科学性の没却、政治哲学の貧困を語るものである。

(一九三五年三月十九日)

### 外来思想の今日

正規の教育を受けた者と独学した者との間に相違があることは、普通の人間の場合には、たいてい認められることである。独学者においては、学問上の常識が欠けているとか、その知識が有機的でないとか、その学問にゆとりがないとか、などと屢々云われている。このような相違は、独学者の多くが速修者であること、また彼が学校というような学問的雰囲気を知らないことに基づいている。

明治維新以後の日本の社会的発展は実に目覚ましいものであった。この発展は西洋の学問の輸入によつて為されたのであるが、その発展が急速であつただけ、日本は西洋の学問を絶えず速修することを余儀なくされてきた。ところがこのような必要から、日本の学問はいつしか速修者の学風とも云うべきものを作り出したのである。

或る思想について、その伝統、一般的背景、歴史的關聯を度外視して、ただその結論だけを覚え込もうとするのは、速修者の学風の特徴である。一定の思想が作られ、また動いている具体的な過程には興味を持たないで、ただその結論らしいものを捉えて議論したがるのも、速修者の学風の特徴である。こうしてただ結論だけが関心されるところから自然に形式主義が生れる。我が国に蔓延している形式主義は日本が従来西洋の学問を速修しなければならなかつたという事情と關係がある。そしてかかる思想上の形式主義は形式化された儒教道徳と結び附いて助長されたのである。

外来思想の排斥が頻りに叫ばれているが、そういう西洋思想の弊害は、よく考えると、西洋思想そのものの有する制限を正確に指摘したものでなく、却つてそれは我が国における速修者の学風の弊害に基づくものが多いと思う。そして実は、外来思想の排斥が盛んになつた今日、我が日本の学問はそのような速修者の弊を克服し得る段階にまで生長發展してきているのである。特に伝統や背景を必要とする文化科学哲学等に関しては、西洋思想のほんとのものは一般にはこれからやつと理解され消化され得る地盤が出来たのであつて、もちろん排斥など云うべき場合ではない。ただ今日必要なことは、速修者の学風、就中その形式主義を矯正することである。

道元は日本最大の思想家の一人であつた。この道元は支那崇拜を露骨に述べているが、そのことは彼が支那人も及ばない独特の思想を生むことを妨げなかつた。日本精神といわゆる日本主義とは同じでない。日本精神は主義以前の事実である。それは過去に固定したものでなく、発展してゆくものであり、それを発展の方向において眺めることが大切である。

(三月二十六日)

## 閑暇

七十年の昔、或るドイツの哲学者は自国民の特徴を記して、第一に、ドイツ人は閑暇を持つことを理解しない、と云つている。また次に、ドイツ人はあまりに沢山読み、そして支配的な党派に対して屈從的であることに熱中する、と書いている。

ドイツ人はヨーロッパ人のうち最も勤勉な国民であると称せられている。しかしそれは彼等が閑暇を持つことを理解しないからであると云われる。ドイツは世界中で本が最も多く出版される国として知られている。ドイツ人は沢山読む。読書はもとより甚だ必要有益ではあるが、ただあまりに沢山読んでいると、その思想がブツキッシュになり、抽象的理論に流れ、高い識見、こま

かな直観が失われ、広い批判力が養われるどころか、却つて意外に近視眼的になり易い。支配的な党派に対して屈從的であることに熱中しているという言葉も、ドイツの現状を考えれば間違っているとも云えぬであろう。

しかるに右の如きことがまた現在日本人の特徴と見られはしないかと危まれるのである。日本人の勤勉は世界的に有名である。出版される本の多いことにおいても日本は世界有数の国である。あまりに沢山読むという批評は日本人の場合にもあてはまらなくはないようである。

勤勉が美德であることには異論があり得ない。けれども、ただ勤勉であることは人間を知らず識らず屈從的ならしめる。ただ勤勉な人間は精神を失い、善き常識を、またエスプリを無くするのがつねである。我々は閑暇を持つことを理解せず、閑暇の価値を知らないのではないか。それは怠けていることでなく、大局に目をつけ、大きなものを捉えるために必要である。閑暇を持つことを理解し、閑暇の有する深い意味を知るのではなくては、真にすぐれた文化は生れ得ないのである。

日本人の勤勉によつて日本の商品は世界の市場を風靡した。日本人の勤勉によつて無数の書物が翻訳され、著述され、文化の華は開いているかのように見える。けれども、前の場合には閑暇

を持ち得ずに低い賃銀で働く労働者があるように、後の場合には閑暇も知らずに働かざるを得ないインテリゲンチヤがある。日本人の勤勉は称揚されてもよいが、また我々は閑暇を持つことを理解し、且つ閑暇を持ち得るようにしなければならぬ。いつまで我々の文化は熟しない果物のような状態を持統するのであろうか。

ドイツ人の勤勉はドイツ帝国を興隆せしめた。しかし彼等はあまりに勤勉で近視眼的となり、政治的智慧を有しなかつたために、世界大戦の大不幸に見舞われた。国民がただ勤勉を誇りとすることをもまた危しと云うべきである。

(四月二日)

## フレッシユマン

到る処、新入学の諸君に出会う季節になつた。大学の新生を意味するフレッシユマンという語は我が学生諸君の間でも日常化している。そういうフレッシユマンがいま全国各地から東京へ集まつてきて、この都会に新鮮な気分を漂わせている。

この光景に接しつつ、私は古代ギリシアのアテナイを想見する。そこには諸地方から、イタリ

アから、アフリカから、小アジアから、あらゆる身分の人間が知識を求めて集まつてきた。今日の諸君には奇異に思われるにしても、プラトンやツキディデスの頃にはどこにも本屋がなかったことを考え給え。書物の売買はアウグストゥス時代に至るまで存在しない。アテナイによつて供給された教育は、学生が实地に視るもの、聴くもの、心で捉えるものであつて、読むものではなかつた。もちろん近世の大学の如き組織は存しなかつた。いな実に、アテナイそのものが大学であつたのである。

ユニヴァーシティという語の示すように、大学のもとの意味は普遍的な知識の学校ということである。このことはあらゆる地方から出てきた人々の一つの地点における集合を意味している。あらゆる地方から来るのでなければ、どうして知識のあらゆる分科の教師と学生とが見出されるか。一つの地点に集まるのでなければ、どうして学校というものがあるか。このような、言葉の根本的な意味において、古代のアテナイ、近代のパリやロンドンは、これらの都市そのものが大学である。

大学の意味が限られた建物に存しないとすれば、今日の東京は、そのものが大学である。ここでは新聞、雑誌、書肆、図書館、展覧会、講演会、様々のものが事実において大学の機能を、即

ち普遍的な知識の学校の機能を営んでいる。知識を求めざる者、そして知識を職業とする者が全国からここに集まつている。

印刷術の發達は大学の意義を失わせると云う者がある。だがそうではない。多数の人間が集合することによつて作られる知的雰囲気の中に入り、思想を交換するということは有益である。話される言葉は書かれた書物とは違つた多くのものを与える。人間的な接触、談話の価値は極めて大きい。しかし今日の大学の実際では、教師と学生との接触、談話は稀なこととなり、書物の代り得ない部分は少なくなつている。それらのものは寧ろ大学以外で与えられる。今日の大学の不幸は、東京の如き都市では社会の知的水準が甚だ高まり、知的職業が拡大し、多様化し、知識人が集中し、言葉の根本的な意味において大学の機能を営みつつあるものが事実上大学の外にあるということである。

このような事實は、教育者諸氏はもとより、学生諸君も反省すべき多くの問題を含んでいる。

(四月十六日)



## 標語の力

標語がどのような力を有するかは、今日誰でも知っている。靴屋も、洋服屋も、理髪屋も、みな何か新しい標語を掲げて人の心を引こうと努力している世の中だ。うまい標語が掲げてあると、その言葉の力で、ついその方へ引かれてゆくというのが我々の心理である。とりわけ政治は多くの点でこのような人間心理を利用してゐる。

人間は政治的動物と定義され、また言葉を有する動物と定義される。かくの如き人間の特徴を最も鋭く現しているものは標語であろう。政治的動物は標語を有する動物である。

標語は政治的な言葉である。ということとは、それはつねに或る意図を含んだ政策的な言葉であり、その意図を正確に観て取ることが大切だということである。言葉は或る魔術的なものを有するが、言葉の魔術性は標語において発揮される。ということとは、標語の魅力に盲目的に従うのは屡々甚だ危険だということである。

例えば、西洋文明は物質文明であるという言葉は、標語的に繰り返されている。なるほど科学は西洋で発達したものである。しかし科学文明と物質文明とは必ずしも同一でない。西洋文明を

科学文明と云わないで物質文明と云うところにこの標語の魔術性がある。科学の發達には大なる精神的力が要求されるのみでなく、そのほか西洋にもすぐれた精神的文化が存在する。もし西洋文明を物質文明と称するならば、それは却つて従来日本が西洋文化のうちただその科学文明の輸入にのみ力を注いできたということを現している。即ち物質的であつたのは却つてこちらの態度である。明治以来の政府は、自然科学の方面は奨励したが、精神的文化の發達のためには殆ど何等積極的な努力をなさなかつた。これでは綱紀肅正の標語を掲げた内閣がみずから綱紀問題で倒れるのと同じような結果にならぬとも限らない。

非常時という標語が掲げられてから既に久しく、人心の倦怠を伝えられている。しかし我々の必要とするのはただ別の標語ではない。すべてが政治化する今日のような時代はまた既に標語過剰の時代である。学問上の問題ですらもが単なる標語によつて置換えられ、判断されるといふ状態である。標語に引かれて国民が分析と批判の力をなくすることの危険であるのは云うまでもなく、またあまりに多くの標語は、あまりに長く続く雄弁と同様、却つて我々を倦怠せしめ、無關心ならしめるものである。もとより政治と実践は標語を必要とする。過剰な標語を一掃して明朗な大衆の魅力を有する標語を掲げることが大切であらう。

(四月二十三日)

## 郊外風景

誰でも云うことだが、大震災以後東京は郊外の発達が著しく、そのために以前場末であった新宿、渋谷等が繁昌し、ほんとの中央、麹町辺は却つて寂れる傾向がある。次第に郊外へはびこり、そこに特殊な賑やかさをもつ郊外風景或いは郊外文化を作っているが、中心地は弱つてゆくように見える。

これは家屋を始め、我々の種々の生活様式と関係があることはもちろんであるが、併しこうやたらに外にばかり拡がつては、不利不便も色々生じてくる。交通政策にもつと思慮を費すならば、中央の繁栄も回復し、そのことはまた郊外の健全な発達のためにも必要であろう。

私は郊外居住者の一人として、かかる郊外風景を見ながら、考える、日本の現在の文化はこの東京の状態がよく象徴してはいはしないかと。文化上の大地震は関東大震災よりずっと古く、明治の初めに溯られる。この大地震以後日本の文化は新しいものを追うて外へ拡がり、ここに特殊な「郊外文化」を現出したが、その中心は衰弱していかないであろうか。丁度大樹の枝は繁茂してい

るが、伐り倒してみると髓が腐りかけていたり、中がうつろであつたりするのと同じように。

ジュベールは書いている、「毎年我々には樹木においてのよう節が出来る、何か智慧の枝が伸び、或いはうらがれ、また枯死する」。青年には青年の智慧の枝が出ている。中年になると新しい節が出来、そこから中年の智慧の枝が出るが、そのために前の枝は日蔭になつてうらがれる。それぞれの年齢には、他の年齢のため、或いは他の年齢になるとうらがれてしまう智慧がある。一国民の文化にも同様に年齢があり、新しい節から枝が出ると前の枝が枯死するのは自然であるが、しかし樹心がうつろになつてしまつては、新しい智慧の枝も茂り得ないであらう。

現在日本の文化が中心の衰弱した都会の「郊外文化」の如き有様であるには種々の理由がある。外国文化の主に新しいところが取入れられて、その根柢をなすギリシア文化やキリスト教についての根本的理解が欠けていることも一つの理由である。西洋の文化には、神の問題、意志自由の問題の如き中心問題がつねに存在して、哲学者も文学者もこれと格闘することによつて自分の思想を發展させ、深化させている。然るに今日の日本の文化にはこのように決定的な中心問題がはつきり存しない。実はかかる中心問題を明瞭に設定することが今日我々の任務である。尤も我々もつとに無意識的にせよ執拗につきまといつてゐる東洋的な「自然」の如き問題もあるのであつて、これ

と新たに格闘するなど、今日の文化の中心問題である。

いずれにせよ、郊外と中央とを活潑に結び附ける文化上の交通政策は思想の自由である。特に日本の文化に対する批評の自由であつて、そうでなければ現に見られる如く徒らに末梢的なことにとらわれ、せいぜい「和魂洋才」というぐらゐが落ちであろう。

(四月三十日)

## 原因と結果

最近非常な歓迎を受けたのは小原法相の似而非愛国主義者に対する取締についての演説である。私も法相の言明に大いに敬意を表するものであるが、同時にそのような似而非者流の輩出するに至つた原因を考えてみる必要があると思ふ。

いつたい愛国心を持つておらぬ人間は先ずないと云つてもよいので、もし自分には愛国心がなると云う者があれば、虚勢を張つてゐるに過ぎぬと考へて間違ひないほどである。自分の国のことをいろいろ批評する者も、根本において自分の国を愛しておればこそ批評するのであつて、もし何の愛もなければ批評する興味すら起らないであらう。しかるに自分の国のことを批評する者

は愛国者でないかの如く非難されるとすれば、それは言論の自由が認めらるべきものでないという前提の下においてでなければならぬ。言い換えると、似而非愛国主義者の出たために言論が圧迫されたというのみでなく、寧ろ言論の圧迫があつたために似而非愛国主義者も生じ得たのである。言論にもつと自由が認められていたならば、そのような似而非者流の輩出する筈もなかつたであらう。

また似而非者流の出てくるということは、偏狭な道德主義乃至精神主義の弊害の現れでもある。金持は自分は金を持つているとは滅多に云わぬものだが、狭隘な精神主義の存する場合、ひとは誰でもが持つているものを自分だけが持つているかの如く称したがるものである。そしてそのように自称することが更に政治的意義を有し得る場合、なるべく早く名乗る者が勝つというのが政界の常道であるので、似而非者流も生じ易い。似而非者流をなくするには偏狭な道德主義乃至精神主義に陥らないように、国民に科学的な或いは哲学的な見方を教えることが必要である。客観的真理と主観的信念とが必ずしもつねに一致するものでない限り、主観的に純真でありさえすれば足りるとは云い得ないのである。

道德主義者において屢々見られる欠点は、猜疑心が強いことである。これは彼等のいう道德が

歴史的現実から離れて主観的なものとなつてゐる証拠である。精神教育を盛んにするのも結構であるが、愛国心の如き事柄について国民が互いに猜疑するといふような結果に陥らぬ、偏狭な主観的なものでないことに留意しなければならぬ。

論語に「三人行必有<sup>二</sup>我師<sup>一</sup>焉」といふ句がある。どんな人の行いでも、自分の手本とならぬものはないという意味である。そのみでない、どんな人も他の師であるかのように振舞いたがるといふのが人間普通の心理である。言い換えると、人間はとかく説教したがるものだ。愛国主義者もその例だが、かかる人情を抑制することがまた人間にとつて大きな修養である。尤も説教心が人間に具わつてゐるのは、各人いづれも何かすぐれたものを持つてゐる兆しであるとも見られ得る。他人に説教するのもよからう、ただ他人の説教も大いに聴くことを忘れてはならぬ。

(五月七日)

## 仏教復興其後

仏教復興が唱えられてから既に時を経たが、實際に仏教がどれほど復興したか、疑問である。

近年最も盛んになったものと云えば、仏教でなく寧ろいわゆる類似宗教を挙げねばならぬ。人或いはこれ呼んで「新興宗教」と云う。そのように類似宗教の勢力の伸張にはめざましいものがあり、かような現象のうちには社会学的考察を要する種々の問題が含まれている。

むろん或る意味では仏教の勢力は次第に強化してきた。仏教が思想善導の道具として用いられることは多くなり、仏教家の側でもこれを大いに徳とするという傾向である。先日、地方長官会議の席上で松田文相は、「一般大衆の思想を啓発し、国民精神の作興を図るには宗教団体及び宗教家の自覚を促す」ことが必要であると述べているが、このような訓示が地方長官の前でなされるということは、すでに宗教家にその用意のあることを示しているとも云える。また仏教家の間でファッショ的政治団体に類する組織も作られたそうである。政治に結び附いた勢力としては仏教も確かに強化してきた。

けれども、仏教家が修身教科書にあるような国民道徳を説いて廻ったところで、仏教は復興するであろうか。もしそこに何物かの復興があるとしても、それは断じて仏教のことでなく、或る他のものことである。仏教家が国民道徳の説教者になるとき、彼等は自分自身で仏教を無用ならしめているのである。もしも仏教が道徳論と異ならないならば、仏教は無用であろう。またも



し今日仏教家が国民道徳を説いて廻る内部の必要があるとすれば、それは教団自体が「株式会社」などと全然同様のものとなつてゐる証拠でなければならぬ。

今日の社会において真の宗教家として生きることが極めて困難なことであろうと思う。しかるに我々は教団内部の醜い紛争については屢々聞かされるに反して、そのような精神的困難、これに対する苦惱、破綻については殆ど何事も聞かないのである。現代において真の仏教家として生きる事が如何に困難であるかが正直に告白されるだけでも、仏教に対する人々の関心をもつと喚び起し得るに相違ない。

明治以来仏教はあまりに道徳論化し、宗教としての特質を失つてきた。今日仏教が復興するとすれば、それはそのような道徳論化から自己の純粹性へ還ることに始まらなければならぬ。それは恐らく現実の社会においては甚だ不利な、危険な結果にならう。併しもし現実の政治的勢力と結び附いて現世の繁栄を計ることがすべての問題であるならば、仏教とは名のみのものである。

(五月十四日)

## 瑣末主義の弊

官公の諸役所の瑣末主義のために事務が渋滞し、一般市民の蒙る迷惑も少なくないという非難を聞くことは既に久しい。その改善もなかなか行われ難いようであるが、この頃はまた新たな瑣末主義が特に思想や教育に關する方面において見られるようになった。

先日、來客の話に、今度仏英和女学校が改称されて白百合女学校と became したという。仏英和といえ、東京でもかなり評判の好い女学校と聞いていたが、立派な伝統のある名称が變更されるに至つた理由は、仏英和と云えば、日本がフランスやイギリスの下に立つてゐることになるから善くないという非難があつたからだそうである。まるで言葉の遊戯だ。それが何処で真面目に考えられたか私は審かにしないが、ともかく改称が行われた点から見ると、その非難は有力な筋から出たものであるに相違なからう。私はこの学校と何の關係もない、ただ現今の瑣末主義の一例として挙げるまでである。

国粹主義が盛んになると共に、この種の瑣末主義が流行するようになった。ほんとの日本精神はもつと潤達澄明なものであると思うが、この頃ではそうでなく、日本主義は瑣末主義に陥りつ

つある。外国文化の移植は外国崇拜にもとづくと言われるけれども、それは、もし欲するならば、文化上の外国侵略であると考えてもよいわけだ。「東方からの光」と云えばもとキリスト教のことを意味したが、その「東方からの光」は西洋を侵略した。或いは寧ろ西洋によつて侵略されて、その文化の血肉となつた。同じように日本はインドの仏教を侵略してきた。ところが近年ではその仏教が学術的研究の方面では多くヨーロッパに侵略され、更にそのヨーロッパの学術的研究を日本が侵略しているという有様である。

外国への伸張の意図が猛烈である場合、政治上の場合にも見られる如く、文化上の場合にも国内のことが疎略にされるといふことは起りがちであつて、この点を警戒すべきであると云うのは正しいことである。しかし同様の警告は、特に政治上の場合についても、絶えず発せられねばならぬことなのである。

瑣末主義が形式主義であることは云うまでもない。しかるに現今流行の瑣末主義の一因は、日本主義が外国流の独裁主義にかぶれて、独裁者気取の風を作りつつあるところに存すると云えない。権力を欲する独裁者気取の者が自己の狭隘な権力を示すには瑣末主義が甚だふさわしいのである。

教育及び文化のことは特にいわゆる百年の大計を樹立することが大切である。しかるにこの方面における瑣末主義の流行が今日注目すべき一特徴となつていたのである。 (五月二十一日)

### 英雄崇拜の顛倒

ひとを攻撃するのは、その人を重んじているからである。その人を何等重んじていなければ、攻撃の相手にするという気にもならないであろう。だから社会的に活動する者にとつて最も恐しいことは、他人から攻撃されることでなく、全然黙殺されるということである。攻撃を受けている間は社会的生命があるわけだ。

今日は名士の受難時代であるということを屢々聞かされる。実際、血盟団事件以後、名士の災難に遭つたものは一々記憶できないほどである。現に名士の身辺警戒のために使われている人の数を調べてみれば、意外に大きな数字が出てくるかも知れない。警視庁の今度の暴力団狩によつてそのような警戒をどこまで減じ得るに至つたか疑問であろう。

名士の受難は、今日我が国において広く見出されるところの顛倒された英雄崇拜の一つの現れ

にほかならない。社会が少数の英雄たちによつて動かされているかのように考えればこそ、名士を襲撃する気にもなるのである。またそのことが何か英雄的行為でもあるかのように考えればこそ、暴力も振われるのである。すべては逆立ちした英雄崇拜にもとづいている。ファッショ的傾向が盛んになると共に、かくの如く逆立ちした英雄崇拜が種々の形をとつて現れている。そしてそのことはまた、我が国のファッショのうち、真に崇拜されている英雄が存しないということの間接に証明しているわけだ。

警視庁の暴力団狩はまことに結構なことであるが、その一方、政府の近来大いに奨励している精神教育とか国史教育とかいうものうちに英雄崇拜の氣風を助長するものが少なくないとすれば、矛盾であると云わねばならぬ。暴力団的行為をなくするためには、歴史を動かしているものが少数の英雄たちでなく大衆であるということ徹底的に教え込むことが何よりも必要なのである。とりわけ今日の我が国の情勢においては、英雄崇拜は逆立ちする危険が甚だ多いことを考えねばならぬ。英雄崇拜が逆立ちすると、真の英雄も作られないのであつて、現代の日本に大人物がないということも日本人があまりに英雄崇拜的であり、自由主義的などころがないということにも大きな原因がある。

人間はあらゆる場合に自分を現すものだ。この頃の外国思想攻撃なども逆立ちした英雄崇拜の一例であり、攻撃者自身が却つて外国思想を極めて重大視しているのであつて、これに反し外国の善いところをどしどし取入れて自分を養つている者は外国をそれほど崇拜もしていないのである。

(五月二十八日)

## 改組の効果

帝国美術院の改組を繞つて描かれる波紋は次第に拡大してゆく。それがどのように落着するにしても、所期の目的を達することは覚束ないのではないかと思う。というのは、この改組自体が根本的に新しい原理に立つたものでなく、依然として展覧会本位に考えられているように思われるからである。

これまで帝国美術院は展覧会を開くだけの能しかなく、従つて世間ではただ「帝展」という名で通つていた有様であつた。このように展覧会本位であるということが、いろいろな弊害の生じてきた最も大きな原因であつた。その会員はいずれも多数の門下生を擁して、帝展という組織を

利用して勢力を張つていた。そこに多くの情弊が生じていたのであつて、文部省がその打開に乗り出したものとすれば、理由のあることである。ところがその後の紛擾を見れば、今度の改革もやはり展覧会本位ということとを離れていないことを示している。しかるに帝国美術院の改革は実はこの展覧会本位ということの打破でなければならなかつた筈である。

すべての組織は、いつたん出来上ると、独立の生命を具えたものとなり、それ自身の運命を有するものとなる。しかもその運命はその組織が生存している社会的環境との関係において決定されることが多いということに注意しなければならぬ。その運命が社会的環境に依存している場合、どれほどそれ自体の組織を改良しても到底再び栄えることができないことは、例えば或る事業会社にとれほど政府が保護を与えても更生発展しないということによつて屢々実証されている。そのような場合にはその組織の局部的な改良をやめて新しい組織を新しい原理の上に立つて作ることが却つて成功の近道である。

帝展が行詰つていたのは単に内部的原因からのみでなく、また社会的環境との関係においてであつた。そしてそのように社会的環境との関係において行詰つていたのは単に帝展のみでなく、どの展覧会中心の美術団体にもそれと同じような行詰りが感ぜられていた。そのことが、今度文

部省が在野有力展覧会の代表者たちを引抜いてくることに成功した大きな原因であると見ることができ。帝展のみでなく、あらゆる美術団体が、早晩そのような行詰りを打開する必要がある。

文部省の投じた一石によつて美術界に分解作用が行われて、今後どのように発展してゆくかが興味のある問題である。それによつて美術界に新しい機運が生ずるならば、文部省の意図したと云われる美術統制とは反対の意味において今度の改組には大きな効果があることになるのである。

(六月四日)

### 生活条件と時間

昨日は時の記念日であつた。最近毎年、時の記念日の宣伝が行われているが、その宣伝の目的は主として時間の正確とか時間の厲行れいこうとかの奨励しょうれいにあるようである。

集会、訪問、出勤、その他いかなる場合にも、時間が正確に守られることは大切であり、善いことである。その意味で時の記念日はまことに結構な企てである。しかしそれと共に我々は時間が決して抽象的なものでないことを考えなければならぬ。



一般的に云つて、都会人は田舎者よりも時間の観念が強いであろう。ちようど都会人の会話が速く、田舎者の談話が緩やかであるように、そこに生活の速度の差異があるからだ。また労働者は農民よりも時間の観念が強く、会社の従業員は個人商店の使用者よりも時間の観念が強いであろう。このように生活条件の異なるに依じて、人々の時間の観念もおのずから異なっているのがつねである。そして時間の観念の強い者はあらゆる場合に時間を厲行するというのが普通である。だから西洋人が我々よりも一層時間の観念が強いということは、彼等の生活がいわゆる「機械文明」に滲潤されているためだとも云える。そして我々日本人も、そのような機械文明が次第に滲透してくるに依じて、おのずから時間の観念が強くなつてきているのである。これは時の記念日の宣伝などとは独立に進行する社会的發展の事実である。

具体的な時間は我々の生活時間である。労働者にとつて時間の問題は何よりも労働時間の問題である。時間の厲行などと云つても、抽象的に考えらるべきことではない。そこでまた農村の工業化が拡大することになれば、農村生活者の時間の観念も一層強くなるであろう。或いはまた都市の商店が、外国において見られるように、特殊なものを除いて、一般に夜間は閉鎖するようになれば、少なくとも日曜日は休業するようにならなければ、都市居住者の時間の観念も更に強くな

るに相違ない。

近年各個人の家の時計の時間がたいへん正確になった。これはラヂオの普及がもたらした最大の効果のひとつである。時間の厲行の方面において公私の生活の改善さるべき点はなお多く、時の記念日はその改善を目差しているのは有意義なことである。しかしこのような機会に時間の問題が生活時間の問題として具体的に人々の活潑な関心の対象とならなければならぬ。時間の厳守によつて他人の時間を無駄にしないことも大切だが、また他人の時間をやたらに搾取しないようにすることが甚だ大切である。

(六月十一日)

### 詩のない時代

日本は詩人国だと云つて誇りにされている。なるほど和歌や俳句を作る者はどこにもいる。しかし以前「新体詩」と云われた種類のもの、和歌や俳句から区別される固有な意味での詩は、次第に衰微してしまつた。今日の日本は詩のない時代である。

外国では詩と文学、詩人と文学者という語はしばしば同じ意味に用いられ、文学の中で詩は高

い位置を占めている。我が国の現代文学は多分に外国文学の影響のもとにあるが、詩の位置、詩人と作家との関係に至っては外国の如くでない。そして詩がないということが今日の日本の文学全般の、いな、単に文学のみでなく文化全体の欠陥を極めてよく象徴しているのではないかと思う。明治時代にはもつと詩があつたのではないか。いわゆる「文芸復興」も詩の復興から始まらねばならぬと云えるであろう。

現代の青年が和歌や俳句にどれだけの関心を有するか、問題である。恐らく彼等は今日の四十代の人が持つたような感興をそれに対して持つていないであろう。そのような青年も年を経るに従つて次第に和歌や俳句に興味を持ち、自分でも作るようになるかと云われるかも知れない。そのようになることには確かに我々日本人の持つ好きがある。しかし同時にそこに我々の精神的発展の制限があるということも考えねばならぬ。そこに我々の間からスケールの大きな文学者や思想家の出てこないひとつの理由が隠されているのである。

もちろん和歌や俳句の世界においてもいろいろと革新の努力がなされている。それは喜ぶべきことだ。けれどもそれだけでは不十分であり、新しい詩の興ることが要望される。我が国の現代語は詩に不適當であるという意見（萩原朔太郎氏）もほとんどであろうが、しかし他方詩が盛んに

なることこそ我々の言葉が浄化されるために最も必要なことであると考えられるのである。和歌や俳句の革新にしても新しい詩が勃興することによって容易に実現されるであろう。一部の人々の間で唱えられる浪漫主義の運動なども詩の復興運動として具体的になれば遙かに有意義であるう。

新しい詩が興るということは何よりも若い世代が自己自身の感情を率直に表現し、自己自身の意欲を大胆に確立することである。今の若い世代に詩がないということは日本の社会と文化にとつて大きな不幸である。彼等をして詩を失わしめたものは誰だ！詩のない今日の社会において「詩吟時代」（正宗白鳥氏）が現出した。詩吟と浪花節とが返り咲き、そしてあの感傷的な、頽廢的な小唄が氾濫している。かくて真の詩はいよいよ失われてゆく。これが現代の文化政策であろうか。

（六月十八日）

### 世界の現実

人類の歴史は「世界」が生成しそして拡大してゆく歴史である。むかし世界征服を企てたアレ

クサンドロス大王が夢に描いた世界も、今の小学生が知っている世界に比してなお甚だ小なるものであろう。そのように世界は拡大した。或いは同じことだが、そのように世界は縮小された。

嘗て世界はひとつの「理念」に過ぎなかつた。しかるに今では世界は一個の「現実」である。このことを無視する限り、国民主義も抽象的な、非現実的な理論に過ぎない。

現代は国民主義の時代だと云われる。なるほど国民主義は今日顕著な世界的風潮である。といふことはまた、国民主義は、一国だけが国民主義的であり得るものでなく、一国の国民主義は必然に他国の国民主義を誘致し、激化させるということを意味する。このように国民主義が「世界的」になつてゐる一方、かかる国民主義を限界する「世界」が一個の現実として存在し且つ発展しつつあるということも動かし難いことである。国民主義にとつての脅威は、今日恐らく、他の国民乃至国家であるよりも世界である。そこに今日の国民主義の焦躁がある。

国家は個人の総和以上のものであると云われるように、世界は国家間の関係以上のものである。従つて世界的ということは単に国際的ということではない。旧い自由主義は国家を個人間の関係と考えたように、世界主義を単なる国際主義と考えた。しかし世界が現実的になるといふことは世界が一全体として成立するということである。全体は部分の和以上のものであり、部分間の関

係に尽きるものでもない。全体主義は国家主義の論理であると云われる。しかるに世界が現実的となるに従つて、全体主義は単なる国家主義であることができなくなり、そして同時に全体主義の哲学そのものが破産せざるを得ない。

国民的自覚が喚起されることは、それ自身としては喜ぶべきことである。けれどもそのために世界が今日においてはもはや単なる理念ではないということ忘れてはならぬ。「世界史」は次第に現実化してゆく。

『世界に於ける希臘文明の潮流』『概観世界史潮』などの好著を世に示された坂口昂先生が逝かれてから既に数年になる。先生の歿後、我が国において先生の如き世界史的眼光を有する歴史家が殆ど見られないことは寂寥の感に堪えない。

(六月二十五日)

## 世代の速度

この二三年來我が国で流行しているものは、ドストエフスキーにせよ、ニーチェにせよ、ベルグソンにせよ、以前我が国において一度も二度も流行したことのあるものである。そう云えば、

日本文化の内部における西洋的なものもすでに歴史を持ち得るまでになったことがわかる。やがて日本におけるドストエフスキー研究の歴史、ニーチェ解釈の歴史などという論文が書かれるようになるであろう。

しかし他方特徴的なことは、それらの文学者や哲学者の場合にしても、以前の研究と今日のそれとの間に殆ど何等連続的な方面がないということである。解釈の相違はもとより、研究する者も、深く関心する者も、さほど長くもない時期の間に違つた世代へ移つてしまつてゐる。我々は時代の推移のあまりに速かなるに驚かされるのである。

外国ではかなり年をとつてから初めて世に出る作家も少なくないが、日本の新進作家と云われる人々はいずれも若か過ぎる。これは作家に限らず、評論家にしても学者にしても同じである。そしてそのようなことにも理由があるのであつて、時代の推移の速度を語るものである。

人間の一世代即ち親子の間に規則的に観察される年齢の差異は平均三十幾年かであり、三世代がほぼ一世代にあたるとされる。しかしこれは生物学的意味における世代のことであつて、歴史の意味における世代の形成は、人間が特にその感受性の豊かな青年時代に経験する社会的及び文化的諸事件の影響によつて決定される。従つて社会上及び文化上の変化が甚だ急速に行われた現

代日本の如き場合には、世代の推移も速いわけである。そのうえ我が国ではこれまで正直に見て、青年はつねにより多く西洋的なものに親しむに反して、年をとると次第に東洋的なものを好むようになるといふ一般的傾向があるために、世代の推移も特殊な調子を持つてゐる。

世代の移りゆく速度は大きい。しかもこの国において特に老人が幅をきかしているのである。現代日本の政治が青年の心に訴へることのないのも当然であろう。老人と青年とが互いに理解できない言葉を語つてゐることが如何に多いか。しかもこの国において格別に思想問題がやかましいのである。そこにさまざまの悲喜劇が見られる。そしてまた世代の速度を考えると、いつまでも若くて新しいものに良き理解を持つ少数のすぐれた年長者は、この国においては特別の尊敬に値する理由がある。

世代の速度を考慮しなければならぬ。それは就中文化や思想の問題において我々が如何にあり、また何を為すべきかについて種々の示唆を与えるであらう。

(七月二日)

## 国民文化の実力



最近唱道されている選挙肅正が歓迎されるべきものであることは論を俟たない。選挙は国民がいめい独立の判断を有し、それを自由に発表し得る場合に意味がある。ところが選挙肅正運動が企てられている一方、思想統制を強化し、国民を一つの思想色で塗りつぶそうというような運動が行われていることは、少し奇妙である。皆が同じ意見になれば選挙も不要ではないか。

官僚の手で行われる選挙肅正運動がいつのまにかこのような思想統制運動と結び付き、結局選挙など無意味にする政治的傾向を助長することになりはしないかを、政党は注視すべきであろう。統一は力であるという意味で、統制も時には必要である。しかしまた統一の力は統一されるものの力に依存する。日本は国家的統一においてはつねに誇るに足るものを持つていた。改善を要するのは寧ろ、国民が政府に頼り過ぎる結果、個人的完成を有せず、独立心に乏しいということであつた。自由主義は個人主義として非難されるけれども、それが独立の個人としての完成をもたらしものである限り、我が国の如きにおいては、まだまだ効力もあるのである。

哲学者は多様の統一と云う。ただ一色のものの集まりは却つて力が弱く、統一とも云えないであろう。「その平和が恰も家畜の如く単に奉仕することをのみ学ぶように導かれる国民の無気力に依存する国家は、国家というよりも荒野と呼ぶべきである」とスピノザは云つた。

外的強制による統一は国民を無気力ならしめ易い。この頃の思想統制にしてもそのような結果になりつつあるのではなからうか。統制強化のために知的文化的生産が不安にされ、不活潑になつてはしないか。しかも現代日本文化の特殊な事情において、我々自身の文化的生産が衰える場合には、外国の文学や思想の輸入が或る意味では寧ろ盛んになるということが考えられる。

翻訳書の洪水は今に始まらないが、失業インテリゲンチヤの唯一の武器が語学であるということと伴つて、自分の自由を奪われた思想を外国人の口を藉りて表現するために、我が国自身の文的生産の萎縮のために満たされない要求を外国のもので満たすために、ますますそれが激しくなるということもある。そこに現代日本文化のおかれている特殊な事情がある。

かくて思想統制は却つて外国思想輸入を助長するという日本主義者の欲するのとは反対の結果になる。もつと思想の自由を認めることによつて、自国民の文化的生産活動を活潑ならしめることが、やがて我が国独自の強力な文化を築き上げ、外来思想から独立し得る道ともなるのである。統制のみが国民文化の実力を作るものでないことを理解すべきである。

(七月九日)

## 現代の語彙

ソビエト・ロシヤでは、子供の集團的生活が彼等の語彙を貧弱にするという事実が問題になっているようだ。今日のロシヤは集團的生活を最も重んずる国と考えられているが、子供を託児所、幼稚園等に委ねておくことは子供の言葉を貧困にするという結果を生じている。絶えず集團的に生活するために皆が同じような言葉を語り、各人がそれぞれ特殊な経験を表現する言葉を学ぶことが少なくなる故であろう。

この事実は我々にとつても種々教訓的である。それは直接には幼稚園教育の問題に関係をもっている。幼稚園の利益は我が国でもなお疑問とされており、出てから数年たつて悪影響が現れると論ずる者がある。特にその子供は饒舌家になるということが注意される。しかし右の事実は広く家庭と学校の問題、学校における教育方法の問題を含んでいる。それは更に一般的には社会と個人の問題について示唆的なものをもっている。社会と個人の問題が公式的理論によつて考えられるほど決して単純なものでないことを暗示するのである。

だが語彙の貧困化はもつと悪い条件のもとに大人の世界においても見られはしないか。社会的

ということは今日あらゆる方面で合言葉となつてゐる。これは疑いもなく重要なことに相違ないが、他面において、丁度集団的生活に委ねられた子供の語彙が貧弱になるように、それが思想の貧困を結果してはいないかを省みることが必要である。社会的ということが、社会に個人が徒らに追隨するという意味になつて、個人的な言葉を少なくしてはいないか。真に社会的であることと社会の風潮に追隨することとは同じでなからう。封建的事大思想は我が国ではなかなか抜け切らない。個人主義は排斥されるべきものであるにしても、個性の尊重ということがそれと一緒に蔑視されるのは間違つてゐる。

そのうえ様々なタブーがある。日本は世界唯一の伏字国でもある。その他枚挙にいとまがない多くの理由によつて現代の語彙は貧困化しつつあるように見える。もとより世界における国民主義が人類思想の語彙を豊富にしたと考えることはできないので、事實は寧ろ反対だ。嘗ては世界第一の哲学国と云われたドイツの新刊書の如何に多くが、一々繙くを要しないほど類似の内容のものであるか。

思想的語彙は貧弱になり、若干の政治的スローガンが代用される。思想的語彙の貧困化によつて饒舌家が減じたわけでない。思想の貧困が却つて饒舌の根源であり、あらゆる饒舌を可能にす

るのである。

(七月十六日)

## 日本人の非合理性

日本人は理窟が嫌いだと云う。理窟を云うのは野暮なことだ。日本は昔から「ことあげせぬ国」である。理詰めで、合理的であることは非日本的事のようにすら考えられている。

政治家にしても、人気のあるのは志士風の、豪傑肌の非合理的な人間であつて、合理的な、従つてほんとは政治的力量のある人間は一般に人気がない。近年最も人気のあつた人物と云えば、多くの者が国際聯盟脱退当時の松岡洋右氏を想い起すが、この人の政治的手腕は問題でなく、ただその非合理的なところが好かれたのであろう。

日本人がほんとに非合理的な国民であるかどうかは疑問である。西洋の小説に出てくるような非合理的な人間のタイプが我々の間に見出されるであらうか。その非合理主義は、合理主義をどこまでも突詰めた末に生れたものとは云えないであらう。むしろ私は、日本人が理窟嫌いで非合理的だという意味は日本人が実際的であるというのと同じでないかと思う。従つてそれは却つて

それ自身の意味における徹底した合理主義でもある。ともかくこの実際的ということは我が国民性の重要な一要素であつて、日本人の強さと共にその弱点を現している。

理論は非現実的だと云うが、ほんとに非現実的になるまで純粹に理論を追求した日本人があるであろうか。合理追求の激しさがなければほんとの非合理主義も生れてこない。日本主義者は非合理的ということを経験的精神的というのと同じように考へているが、そうすれば日本人が特別に精神的であるかどうか、甚だ疑問になる。

国民性の問題は別として、合理的な政治家はこれまで人氣の点でとかく損をしてきた。しかしながら国民性と雖も不変のものではない。日本人が非合理的な人物を好んだのは、この国の社会の特殊性のために封建的イデオロギーが残存していたからである。社会の変化するに應じて国民性も変化する。そして政治家にしても合理的ということが次第に喜ばれるようになってくる。

例えば、荒木前陸相はどこか非合理的なところがあつて人氣を得たが、今の林陸相はもつと合理的な政治家のように感ぜられる。林陸相今回の人事行政は果然好評を博した。それが一般政治問題として客観的に何を意味するかについては相反する見解がある。ファツシズムの場合にしても、封建的非合理的要素を清算して資本主義に適合した形態へ変化しつつあるのである。ただフ

アツシズムはその本質上合理性を發展させることができぬ。そして今後その合理性を破壊せざるを得なくなる場合、危険は以前の封建的非合理主義の場合に倍加するであろう。(七月二十三日)

## 外人の日本発見

軽井沢を始め、この頃の有名な避暑地には、外人によつて開發されたものが少なくないようである。今私の逗留している山中湖などもそうのようである。外人の避暑客も多く、またこの一帯の風景にもどこか「日本離れ」のしたところがある。近年登山者が頗る殖えた日本アルプス等の如きも、外人によつて初めてその美を發見されたものであると云う。

自然は芸術を模倣するというのは、オスカー・ワイルドのよく知られた言葉である。自然の美も人間によつて發見される。私どもがいわゆる「日本的な」自然の美とはやや異なる新しい自然の美を知るようになったのは、徳富蘆花の『**自然と人生**』の影響によることが多い。その中の武蔵野の風物を叙した文章など中学時代には暗記していたもので、初めて東京へ出てきた私がこの平野の美しさを味わうことのできたのは蘆花の感化によつてゐる。その蘆花にしても恐らくイギ

リスの文学や芸術の影響を通して関東の平野の美を発見するようになったのだらうと思う。

西洋人の発見した自然が近年日本人に好まれるようになった大きな理由の一つには、我々の生活そのものが種々の方面において西洋的になってきたということがある。我々の感ずる自然の美の如きも生活と全く無関係であるとは云えないのである。

自然のみでなく芸術などにおいても、浮世絵の場合のように、外人によつて発見されてから日本人が高く評価するようになったものも少なくないであらう。我々はそのことを必ずしも恥とするにあたらないので、寧ろ外国人を感心させ得る立派なものを我々が所有していることを誇りにしてよいのである。進んで考えれば、我々が我々自身の東洋的な眼をもつて西洋のものを大いに研究して、西洋人がこれまで気附かずにいたようなものをそのうちから発見することに努めるのが、人類文化にとつて有意義なことであり、またそのことは我々自身の文化の発達向上にも役立つのである。或いは我々自身が西洋の学問や芸術をしつかり身につけて、その眼で東洋のものを見直すことによつて従来注意されなかつた好いものを発見するようにならなければならぬ。現に山岳の方面では、日本アルプスの美を西洋人から学んで以来、この種の新しい美を日本人自身が自分の国において到る処発見するようになってゐる。



この頃国際文化振興会などによって日本的なものを外国に紹介するという努力がなされているが、右のような事情を考へてみることはその事業にとつても必要であらうと思う。(七月三十日)

### スポーツと自然

西洋人は自然を征服しようとするに反し、東洋人は自然に順応する。そこに両者の生活態度の対立があり、東西文化の本質的な差異が存すると云われている。このような差異は医術の方面においても認められるところで、西洋の医業の学は理知的、分析的、局部的であるが、漢方、本草の学は直観的、総合的、有機的であることを特色とすると称せられる。

しかし今日我が国においても西洋流の医学が支配的となり、我々の身体や健康についての考へも變つてきた。一般に自然の見方、自然に対する心にも變化が生じている。これは単に学問や実生活の方面においてのみでなく、我々の生活の周辺をなすに過ぎぬように見えるスポーツの如きにおいても認められることである。

登山、キャンプ、ハイキング等、自然を対象とするスポーツは年を逐うて盛んになつてきた。

これらのスポーツのうちには、古人が自然に遊ぶと云つたのとは異なる、自然に対する新しい心が動いているであろう。そこには自然から分離し、自然に対立するようになった精神がある。そこにはこの対立と独立とを意識している人間がある。これは自然に順応すると云われる東洋的な心とは違つたものである。これは寧ろ自然を征服しようとする西洋の近代科学の精神に通ずるものを有するであろう。スポーツそのものにも知的な、科学的なところがあるのであつて、このよ  
うな理知性、科学性を無視しては近代的なスポーツの快味も味はひ得ないのではないかと思う。

自然の征服においても自然に対する従順を必要とする。自然に従うのでなければ自然は征服されぬ。ただこの従順は東洋的な自然への順応とは異なる新しい道徳である。そして自然に順応することを根本的な生活態度としたと云われる日本人も、このような新しい種類の順応においてはなお甚だ欠くところがあるのではなからうか。山の遭難者が多いのもそのためである。

尤も、医学の方面で西洋医学に対し東洋古来の医学の価値が顧みられねばならぬと云われているように、我々の生活において東洋的な自然への順応を想起することも時にとつて有意義である。現代日本人はこのものをも忘れてしまおうとしている。毎年夏になると、昔の物語にある一夜城のように、海にも山にも「何某銀座」というものが出現する。都会からの避暑客が田舎へ都

会の生活をそのまま持ち込むが如きことは、東洋的復古主義の盛んな今日、やめた方がよい。

(八月六日)

## 哲学と文芸

先年文部省の思想問題調査会か何かで、フランス思想の研究を奨励せよという案が答申されたと報道されたことがある。いわゆる思想問題の対策の一つとして、フランスの「ソリダリテ」(連帯性【solidarité】)の思想を鼓吹するがよろしいというのであつた。その後これがどうなつたか知らない。ただ確実に云い得ることは、今日ではこのような、なまやさしい説をなす委員は一人もないであらうということである。

政府の方針などとは無関係に、近年我が国の文学に、特に若い世代の文学に最も顕著な影響を与えたのは、外国文学のうちフランス文学である。不安の文学、新リアリズム、行動的ヒューマニズム等、近年の注目すべき文学現象は、主としてフランス文学の影響のもとに現れた。他の外国の作家に対する関心でさえ、フランス文学を通じて喚び起された場合が少なくない。このよう

な事実には一般に文化上の、社会上の、また特に文学自体に關する、種々の理由があるであろう。一つの実際的な理由として、大学の仏文科の卒業生は、英文科はもとより独文科に比してさえ少数であるにも拘らず、英独文科の卒業生の大多数のように教師として就職する見込が少ないために、却つて文学に専念するということもあるであろう。

我が国でフランス文学が盛んになつたのは、もとより単にかような外的な理由にのみよるのではなく、それが若い世代の心に内面的に通ずるものを多く有するからであるに相違ない。ところが文芸の隣の哲学はと見ると、これはまた依然としてあまりにドイツ的だ。今日の日本の學問で哲学ほど一面的にドイツ的なのは他に類例がないのではなからうか。哲学の重要な顧客先が教員であつて、その影響が普遍化しない理由がこの辺にもあるように思われるほどである。いかにもドイツ哲学は学校教師的に出来ている。私自身主としてドイツ哲學的教養を有し、またドイツ哲學の長所を十分に認めようと欲する者である。しかし同時に今は日本の哲學の偏頗なドイツ依存についてまさに反省すべき時機であらうと考える。

最近のドイツ哲學は何と云つても昔日の面影を有しない。「ドイツ哲學」はもはや終結した一体系ではないかとさえ感じられる。現代哲學の研究者がもつとフランス哲學の如きに注目するこ

とが必要である。この非合理主義の時代に、伝統的に主知的な、合理主義的なところのあるフランス哲学を知ることが望ましいのである。私は決して西洋模倣を勧めるわけではないが、そのことは文芸の場合から推しても日本自身の哲学の発展のために有益であろうと信ずる。

「人間を彼の祖国に限ることは事実を否定することである。そこまですら我々は動物である。ヒューマニティ（人類性）によつて我々は人間である」。これはこの頃我が国でも有名になつたアランの、あの世界戦争当時の言葉である。だから、今日こそ哲学は益々ドイツ的にならねばならぬと云う人もあることであろう。

（八月十三日）

## 不使用の独占

特許というものは使用の独占を意味すると考えられるであろう。ところが専門家の話によると、特許の規定が今日では屢々、大会社で新しい発明を買つて、自分がそれを使用するというのではなく、却つてただ他がそれを使用するのを防止する目的に利用されているとのである。新設の会社に新式の機械をもつて競争されてはたまらないからである。特許の規定はかようにして使用

の独占から不使用の独占の意味に変化する。折角の発明も利用されることなく、しかも独占される。これは社会的に見て重大な問題でなければならぬ。

しかし単に特許の場合に限らない、不使用の独占は到る処にある。就中すべての特権というものはつねに何程か不使用の独占の意味を含んでいる。特権者が「高貴に」、「貴族的に」見えるとすれば、それは多かれ少なかれ不使用の独占にもとづいている。使用の独占だけでは高貴さや貴族らしさは感じられないであろう。

ところで私に特許の話をしたのは或る大学教授であつたが、私はそのとき、いつも夏になると考えることを思い出した。それはあの大学の図書館である。学校ほど長い夏期休暇を有するものはないが、その間図書館も殆ど使われていないようである。平生は無理であるとしても、せめてこの期間はそれを公衆に解放してはどうかと思う。そうすれば、そこで有効に銷夏しょうかのできる者も少なくないであろう。ここにも一つ不使用の独占が存在するのではないか。それとも大学の「高貴さ」の一部分はかくの如き不使用の独占に依存するのであるうか。

尤も、このようなことを考えねばならぬのも、いわば一種の応急策としてであつて、我が国では公共図書館があまりに貧弱であるからにほかならない。研究に用い得る唯一のものと思われる

帝国図書館も、建築設備において東京帝大図書館に、蔵書数において京都帝大図書館に及ばない。パリの国民図書館、ロンドンの大英博物館文庫等、外国の著名な公共図書館に比しては、もちろん全く問題にならぬ。新興ロシアのレニングラード公共図書館が今や蔵書数において世界第一と称せられるのも、注目すべきことである。最近対外的な文化宣伝に多額の費用が投ぜられているが、日本も世界の文化国に伍して恥しくない公共図書館を持つことなど、一層急務でないか。

公共図書館がこのように貧弱な一面、我が国では書物に対する思想にもなお根本において骨董趣味に通ずるものがある。骨董趣味は不使用の独占の要素を含み、それが貴族的に見えるのも一つはそのためである。かかる骨董趣味からの脱却は、美術館はもとより図書館の発達のためにも必要であろう。公共的な美術館や図書館の未発達は、社会性を有する芸術や思想の未発達を端的に象徴するものであり、またその一原因でさえある。

(八月二十日)

## 人間の再生

今月(九月号)の諸雑誌は先般の国際作家会議について報告している。それは去る六月二十一

日より二十六日まで三十八ヶ国を代表する多数の文学者によって文化擁護の目的のためにパリで開かれたものである。この会議がファッシズムを文化の敵として、これに対する闘争を決議したことは特に注目すべきことである。

その席で種々の傾向に属する文学者によってなされた演説のうちジードの演説がやはり最も興味深い。彼の言葉にはヒューマニズムの精神が溢れている。私は飽くまでフランス人でありながら、飽くまで国際主義者である、私は衷心からコンミュニズムに賛同しながら、飽くまで個人主義者である、と彼は云う。今日は人間を、新しい人間を獲得することが先ず緊要だと云い、そして彼は、ソビエト同盟がその新しい人間を作りつつあることに熱意を寄せている。しかし彼は、ソビエト文学において現在作られつつある新しい人間が未だ形をとって現れていないことを遺憾としている。永続する芸術作品の中には、単に或る階級や或る時代の一時的要求に応えたものよりも、より多くの、より善い内容がある、ソビエトにおけるプーシュキンの新たな刊行、シェークスピアの上演等はその一時的意義しかもたぬ無数の出版よりも、文化に対する真の愛をよりよく示す、とも彼は述べている。

このような考え方はむろん政治的見地からは種々非難され得ることである。そしてその非難に



も道理がある。しかしまた最近ソビエトでも「プロレタリア人道主義」というようなことが問題になり、さしあたり子供、結婚、家庭等について新しいヒューマニズム的な考え方が起つていと云う。

社会的とか歴史的とかいうことを強調するのは重要であるが、それがこの頃とかく、あまりに政治的な、時事的な見地にとらわれて理解されてはいはしないであろうか。社会的とか歴史的とか云つても、そのうちにはより永続的な、ヒューマニスティックな問題も含まれるのであつて、かような問題を見逃さないことが文化にとつては大切である。時事問題が重要でないというのではない。ただあまりに時事的な見方が却つて種々なる形態の反動を誘致する危険が感ぜられるのである。

現代ヒューマニズムの根本問題は人間再生の問題である。人間再生などと云えば、政治的な考え方をする人々からはあまりに甘い、浪漫的なこととして笑われるであろう。しかしまた反対に、一時的な問題に熱中している者が却つて、人間性の真実を知る者からは、あまりに甘い、浪漫的なこととして笑われるかも知れない。

(八月二十七日)

## 隨筆時代

隨筆は日本文学において特色あるものと見られている。日本人は短歌や俳句を好むように隨筆を好む。そして短歌や俳句が西洋の詩と比較して日常性の文学として特色づけられるように、隨筆文学の根柢をなすのは日常性の思想であろう。隨筆と云われるものには西洋のエッセイと違つたところがある。日常性の尊重は東洋思想の一特色をなし、その基礎には東洋的な自然の思想が横たわっている。

しかし時代は變つた。この時代において、我々の思想的課題は、東洋古來の「自然」と如何に對質するかということにある。西洋思想の理解が徹底的になればなるほど、我々自身の思想に對する要求が運命的になればなるほど、この課題は愈々切実なものとなるであろう。今後日本の思想は恐らくそのような「自然」との對質乃至格闘において發展するのほかないのではないかと思う。

隨筆と云われるものも變りつつある。西洋のエッセイに類する文章が我が国でも次第に作られるようになってきた。いな、ほんとはそれにもなり切ることができないで、新しいタイプを意識

的に或いは無意識的に求めているのが現状であると云えるであろう。

近年我が国は随筆時代をもつた。それはマルクス主義の流行が種々の原因から衰えるに従つてやつてきた。社会科学書の後に随筆書の流行が続いた。多少とも名を知られた者は誰でも随筆らしいものを書き、もしくは書かされた。このような随筆流行が我が国の随筆文学の発達にどれほど貢献したか問題であるが、確実に云い得ることは、このような随筆流行が思想の弾圧と共に生じてきたということである。

そうだとすれば、今日なお、寧ろ今日益々随筆時代が来ているとしても、不思議はないであろう。言論の抑圧のために、ひとは甚だ屢々随筆的に書くことを余儀なくされている。単にかくの如き外的事情によつてのみでなく、最近インテリゲンチヤの内的な思想的困惑の結果、思想そのものが随筆的となつている。更にこの頃流行の日本主義は、思想と云い得るほど組織的なものを有せず、それ自体もともと随筆的である。かくて日本人に伝統的な随筆趣味に助けられて、随筆として書かれたのでない文章までもが著しく随筆的傾向を有するに至つている。

ここに謂う随筆的傾向が眞の随筆文学の精神とかかわりのないものであることは云うまでもない。この猥雑な随筆時代に克つて理論的意識に生かされた活潑明朗な思想的文章が興るときは、

同時に新しいタイプの眞の隨筆が現れるときでもあろう。

(九月三日)

## 人物払底

床次竹二郎【とこなみ 1867-1935】氏が急逝された。私は氏について特別に知ることなく、氏がどれほど大きな人物であつたか分らないが、どうやらその一派にとつて氏に代るべき人間がいならしい。人が死ぬる毎に人物払底と云われる。後輩は先輩よりも、後任者は前任者よりも、人物が小さいというのが常則であろうか。ともかく人間の型が段々小さくなるように感ぜられる。単に政界のみでなく、官界でも、学界でも、社会のあらゆる方面において、型の大きな人物が次第になくなつてゆくように感ぜられる。これは何に因るのであるうか。

私の中学生の時分『成功』という雑誌が出て、広く読まれていたように記憶する。成功と名のつく書物もたくさん出版されたようである。「成功」という語がいわばその時分の合言葉であつた。それは日露戦争後における日本資本主義の急激な発展時代であつて、飛躍的に成功することも実際に可能であつたのであろう。今日はもとより、もはやそのような「成功時代」でない。時代は

変つたが、しかし人間のイデオロギーはつねにそれに応じて急速に変わるわけではない。今日も立身出世主義というものが、儒教的功利主義もしくは實際主義と結び附いて、なお甚だ多く存在している。

立身出世主義は通俗道德の根幹をなしている。通俗雑誌の主なる内容の一つがそれであることは云うまでもなく、家庭において親が、学校において教師が、社会において先輩が説く道德も、立身出世主義が意識的に或いは無意識的にその基調となつてゐることが極めて多い。

立身出世主義の説教は、それを聴く者の利己心または功利心に訴えるという強味をもつてゐる。ところがそれは、実は、それを説教する立場にある者にとつて最も都合な道德なのである。下級の者、支配されている階級の者、後れて来る者が、みな立身出世を夢みて励んでくれれば、これほど御し易いことはないであろう。立身出世主義者は権力を有する者に対してつねに従順である。

かの「成功時代」においては、それでもなお冒險的な、野心的なところがあつた。しかるに現実において立身出世の可能性が益々少なくなるに従い、立身出世主義にはもはや浪漫的なところもなくなつて、愈々卑屈となり、阿諛的となり、事勿れ主義となる。人間の型が小さくなるとい

うことには、もとより種々の原因があろうが、立身出世のイデオロギーも注意すべきものである。人物払底は立身出世主義の通俗道德の結果である。この通俗道德の批判が我が国では種々の意味において必要である。

(九月十日)

## 学位問題

さきほど文壇は賞金問題で賑わった。その後を承けてというわけでもあるまいが、いま一学位論文に端を発して学園騒動が起つている。先達ては文芸懇話会の賞金の出所がだいぶん問題にされたが、今度は論文審査の教授会における白票問題が議論の出発点となつている。

賞金は或る「業績」に対して与えられるものであろうが、学位は一定の「人間」に対して与えられるものであろう。だから賞金は、学術上の業績に見られる如く、数人の共同研究の結果である場合には、それら数人に共同に与えられる。しかるに学位は分割されない、それは業績というよりも人間に対して与えられる。もし数人の共同研究に成る論文が学位論文として提出されたとすれば、どうなるであらうか。私は学位に関する規定を詳しく知らないが、もしも学位が業績に

対して与えられるものであるならば、その場合それら数人がその論文によつて同時に博士になり得る筈である。賞金は、同じ人間が自分の業績によつて数回受賞することも可能であろうが、学位は、一度授けられると、生涯保持されることになつてゐる。

尤も、業績と人間とは全く別のものでなく、或る人が学者として資格があるかどうかは業績によつて判別するのほかないから、学位授与も論文によるのは当然であるが、対象は人間である故に、なにもいわゆる学位論文だけでなく、その人の過去の業績及び将来に予期され得る業績が考慮に入れられなければならない。学位が人間に与えられるところから、診療とは無関係な研究で医学博士になつた人間も、診療の名手であるかの如き誤解を世間に与えるようなことも生じてゐるわけである。

学位が人間に与えられるものとすれば、その決定に際して白票は無責任なことと云わねばならぬ。問題の杉村助教授の論文が哲学に関係しているため、自分たちには分らないとして白票を投じたという当局者の釈明もあつたようであるが、同じ学校にいる者には杉村氏が学者として博士に値するかどうか、平素の仕事からも分かつていなければならぬ筈である。それも分らないとすれば、同じ教授会は同氏を助教授に推薦する資格もなかつた筈である。或る専門学者の書いたも

のを他の専門の者が残りなく理解できないとしても、その人が学者としてどれほどのものであるかは、学者としての常識で判断できる筈である。

福田博士、左右田博士の時代、日本の経済学界をリードした東京商科大学も、今や元の「専門学校」となり、「専門学者」ばかりとなってしまったのであろうか。

(九月十七日)

## 雑誌文化

今日我が国にどれくらいの種類雑誌が存在するか、正確には分らないが、大取次店東京堂で調べたところによると、現在一般雑誌が九百四十七種は発行されているとのことである。実に夥しい数である。しかもこれは東京堂で扱っている雑誌だけで、学会の機関雑誌、文芸の同人雑誌、地方で売出している短歌や俳句の回覧雑誌、商店の宣伝用雑誌などは、この数字には殆ど入っていないのである。九百四十七種のうち教育雑誌が最高位を占め、百二種ある。これによって見ても、教育ジャーナリズムの問題がもっと一般的な関心と批判との対象になることが緊要である。

雑誌は現代人にとって殆ど必需品となっている。今日の学生は雑誌ばかり読んで本を読まない



という非難は、私どものよく聞くところである。この非難にも確かに正当な理由がある。しかしそれだけ雑誌が現代人の嗜好に適したものであることも明らかである。

雑誌は一般に現代文化の特徴をなしているが、特に我が国の現代文化は雑誌文化として特徴附けられることができる。これはこの文化がその主要な要素においてなお「啓蒙的」であることを意味している。或いは啓蒙的ということが現在我が国の雑誌の大きな特徴である。書物や雑誌の広告が毎日新聞の一面に出るといふことは、西洋では見られない、我が国特有の現象である。かようなことは、我が国の文化が啓蒙主義的であつて、主要雑誌にしても、毎月、種々の立場における論説、種々なる種類の読物を何でも雑多に包含していることから、必要なのであろう。「雑誌」といふ言葉がまことに適切にその特徴的な内容を現している。

日本の雑誌はもつと根本的に我が国の文化の特徴、いわばその随筆的傾向を示していると見られ得る。それは我が国では古来西洋的な意味における科学や哲学が発達しなかつた丁度その傾向に相応している。これまで屢々日本人の特徴として模倣性が挙げられてきた。しかしどこの国の文化も外国の模倣を含まないものはなく、また日本文化にしても単に外国の模倣に留まるものではない。私は寧ろ「流動性」が恐らく日本文化の根本的な特質であつて、日本人が模倣を好み、

流行を追うというようなこともこれに関係しているのではないかと思う。雑誌はこの流動性の表現に最も適している。かように見ると、雑誌文化は日本の場合特に検討さるべき重要な問題となってくるのである。

(九月二十四日)

## 級長選挙の教訓

小学校生徒の級長選挙が問題になっているようである。級長選挙の運動資金を得るために、小学生在が板の間稼いぎをしたり、また落選したのを恨んで放火を企てたりしたというような事実がある。級長選挙の弊害が叫ばれ、その廃止が唱えられているとのことである。

級長選挙の弊害が、自治というものを形式的に考え、小学生にまで認めるのに由ることは、過日、本紙の論説欄において指摘されていた通りであろう。そのような選挙の弊害は小学校だけでなく、大人の社会においても見られるところで、寧ろ子供は大人の為すことを単純に、率直に真似たに過ぎぬとも云える。

i 風呂屋の脱衣場で金銭を盗むなど。

日本人の形式主義について屢々語られるが、この形式主義はかなり特殊なものである。形式主義は抽象的な考え方からくるのが普通である。然るに物を抽象的に考えることが日本人の特性であるかどうか、疑わしい。過去の歴史において「科学」を持たなかった日本人は、純粹に抽象的に、理論的に考えてゆくことは寧ろ不得手なのである。理論を抽象的だと云つて非難し得る資格があるほど、我々は嘗て純粹な理論を發展させたことがあるであろうか。

日本人は物を距離において見ることができない。だから物を客觀的に見ることができず、科学が発達しなかつた。どのような理論を学んでも、すぐ實際に当嵌めて、自分自身のこと直して考えないと承知しない。理論を理論として見ることができないために、どのような抽象的な理論でも、そのまま實際に行おうとする形式主義が生じてくる。何でも實際の意味にとられる我が国では、純粹な学説の発表も危険となるのである。理論を理論として尊重することを知らないために、理論そのものの具体的な展開に努力しないで、抽象的な理論で満足するということも起るのである。

どのように抽象的な哲学問題を論じても、それがすぐに個人的な道德、修養論に結び附けられる。深遠な哲学の裏に極めて通俗的な道德論が潜んでいる。それが日本人の實際主義である。こ

の實際主義はどのような理論をもすぐ實際に直して考える。それが却つて抽象論や形式主義の生ずる原因となつてゐる。智育の過重などとはなかなか云えないので、物を客觀的に見ることを教えるためにもつと純粹に智的な教育を行うことが必要である。日本人の實際主義そのものが批判的に反省さるべきである。

級長選挙は形式的自治主義の弊を現すものと云われるが、このような弊は日本文化一般に広く拡がっているのである。

(十月一日)

## 仏教と翻訳問題

さきには宗教団体法案が問題になり、最近はまだ学校における宗教教育が問題になつてゐる。宗教が政治的にも思想的にも新たな関心の対象となつてきたことは事実である。仏教が将来の思想の唯一の基礎であるかの如く考えることは問題であらうが、東洋古典としての仏教に対する興味は一般に増してきたように思われる。

しかるに一般人が仏教に近づこうとするとき障碍になるのは、先ずあの膨大な教典である。こ

れは何とか整理のできぬものか。尤も、各宗派ではそれぞれ要典が決つていようであるが、宗派的立場からでなく仏教を知ろうとする者にとって必要な教典が仏教家の手で選定されることが望ましい。これは学校における宗教教育の見地から云つても、この際問題になることである。

我々の有する仏典は殆ど凡て漢訳であるが普通の者には近づきにくい。そのうえ仏教特有の読み方があつて、書いて貰はないと、発音だけでは我々には分らないことがある。これも思い切つて改めて、他の場合一般に行われている読み方に従うことにしてはどうか。いずれは翻訳なのだから、普通の読み方でいけない場合には、むしろ進んでサンスクリットなりパーリなりの原語を用いるのがよからうと思う。難かしい読み方をしなければ有難味が分らない仏教でもあるまい。

近年大部の仏典の国訳が刊行されたのは、注目すべき文化的事業である。しかしなお一步を進めることが必要である。これは漢籍の場合にも云い得ることであるが、単に返り点をなくして読みくだけたというだけでは真の翻訳とは云われない。ほんとの国訳であるならば、西洋人が漢文を翻訳するときのように、原文を解釈しその意味を取つて、誰にも分る現代語に直さなければならぬ。漢籍は凡て支那音のまままで読み、国訳は純粹な現代語にするがよいと云つてゐる漢学者もあるが、正当な意見である。漢字の制限、一般に国字国語の問題が我が国の将来の文化にとつて

重大な問題になつてゐるとき、ただ読みくだせば翻訳であるというような考えがなくなる必要である。国粹主義の盛んな今日、インドや支那の典籍についても、純粹な国訳が企てられてよかりそうに思う。それは若干のディレッタントにのみ委ねらるべき仕事でない。

葬式や法要の場合、一般人には意味がまるで分らない経文が読まれることも、宗教的には却つて効果のあることかも知れない。しかし仏典のほんとの翻訳が出来ることは、一時の政治的意圖と結び附いた宗教教育などよりも文化的にもつと重要なことである。

(十月八日)

### 「汝自身を知れ」

「汝自身を知れ」という言葉は、哲人ソクラテスの名と結び附いて世界的になつた標語である。これほど古い起原と同時に普遍性を有する標語はないであろう。今日我が国において、西洋文化を排斥し国粹主義を唱える者が我々に向つて掲げる標語も、「汝自身を知れ」ということである。ひとの知るように、それはデルフォイの神殿の壁に記されていた言葉である。その元の意味はこうであつた、「汝等驕れる者よ、汝等は人間に過ぎぬことを考えよ、我れは神なり、我れに従え」

と。即ちその言葉は自己を神化せずにはやまぬ古代ギリシア人の驕り（ヒュブリス）に対する警告と訓戒であったのである。そしてまさにこの原初の意味に従つて、我々は今日多くの国粹主義者に向ひ反對に、「汝自身を知れ」と叫ぶべきではないか。

この哲学的標語は後の詩人や思想家によつて、そのときどきの自覚や必要の相違に依じて種々の意味に解釈され直した。この標語とつねに結び附けられるソクラテスは、それによつて一方、我れ知れりと誇れる者の無知を自覚せしめ、他方それによつて、あらゆる人間に自己の価値を自覚せしめようとした。このようにして「汝自身を知れ」という言葉は、二つの相反する意味を一つに統一し、弁証法的に理解さるべき言葉となつた。自己の無価値の自覚による謙虚と自己の価値の自覚による矜持とが同時に必要である。それがこの哲学的標語の眞の意味であろう。

ところが国民の自己認識を要求する現在の国民主義はどうであるか。自国のものは何でも文句なしに善いもの、比較なしに最上のもつと認めるのでなければ満足されず、愛国者とは見られないのである。「汝自身を知れ」ということは、全く一面的な抽象的な意味においてしか考えられない。そこに現在の国民主義の一面性と抽象性が示されている。

「汝自身を知れ」ということは、人間を徒らに反省的懐疑的ならしめるとして、ゲーテはこの

言葉を好まなかつた。人間は、自分が何であるかを、単なる自己省察によつて知り得るものではない。「ひとりの人間は多くの人間のうちにおいてのみ自己を知る」と、彼はアントニオをしてタツソオに語らしめている。「汝自身を知れ、そして世界と平和に生きよ」と、ゲーテは自分自身に忠告した。詩人のこの言葉は、今日の国民主義に対して最も適切な標語となり得るであろう。

(十月十五日)

### 東洋人に還る

支那人は利己主義者だと云われる。尤も、彼等は必ずしも近代的意味における個人主義者でなく、家族主義的などころをなお多分に持つてゐるであろう。併し支那人は国家のこと政治のことなど殆ど考えないで、自分や家族の安全ばかりを考えているという点で利己主義者であると云われる。彼等には信頼し得る国家や政治が存しなかつたために、何はともあれ一身の安泰を計るようになったと見られている。このことが道德的に理由づけられて、明哲たる者は保身の道を講ぜねばならぬというが如き道德的イデオロギーを生じたとも考え得るであろう。



しかるに今日我が国において、特に知識階級の間では、各自がそのような保身の道を考えることが次第に著しくなってきたのではないかと思われる。今のような時代には何も云わないで黙っているのが賢明だ、と一人は云う。今のような時代には論文などは書かないで随筆でも書いているのだ、と他の一人は述懐する。今のような時代には理論など云わないで歴史でも調べているのが得策だ、と更に他の一人は勧説する。かかることが知識階級の思想的混乱ないし無確信によることは云うまでもない。しかしそこには必ずしも思想的苦悶もしくは知的絶望があるのでない。却つてそのことは、我々がいつのまにか承け継いでいる明哲保身のイデオロギーとも云うべきものによつて、知らず識らず道徳化され、合理化されている。これは注目すべき事態である。

現在、大多数の学生の脳裡に去來するのは何よりも就職問題である。しかも野心的な成功の望みを絶たれた彼等は、むしろただ、無意識的にせよ、伝來の明哲保身のイデオロギーに助けられて、思想問題や社会問題の如きに深入りする危険を避け、先ず就職だと考えるのである。

人々は東洋人に還る、東洋的イデオロギーに還る。しかしこれをもつて東洋主義の勝利と考えることは、女優が式部袴を着けて外出するようになってから、それを模倣して、近頃女学生の袴姿が流行しているのを見て、日本主義の勝利と考えるのと同様に皮相的であらう。人々は積極的

に東洋主義に賛成しているのでも信頼をおいているのでもない。むしろ思想的自由の抑圧、社会の希望の喪失、現在の政治に対する懷疑、等々が、人々をして知らず識らず、消極的に明哲保身のイデオロギーに還らしめたのである。それが時世への追隨を示しているとしても、實質は利己主義にはかならない。かくの如きことは国家のために慶賀すべきことであるか。

嘗てニーチェは、新しい人間の出生に対する熱意から、西欧的人間の徹底的な批判者として現れた。今日我々の間では東洋的人間の根本的な批判が必要ではないか、真に新しい日本人の生れんがために。

(十月二十二日)

## スポーツと健康

スポーツの秋だ。どこでも運動会が開かれた。神宮体育大会もちようど終ったばかりである。そこでは様々な美技妙技が見られ、種々の新記録が作られた。まことに新興スポーツ国日本の偉観であつた。

スポーツは明朗だ、秋の空のように。卓越せる者がなんの嫉妬も成心もまじえずに讚美され喝

采されること、スポーツの如きは稀であろう。この陰惨な世界情勢のうちにおいて、スポーツは我々の心を明朗にしてくれる恐らく唯一のものであろう。

この明朗なスポーツの秋に、国民健康の憂慮すべき状態を想い起すことは一種の不道德であるようにさえ感ぜられる。だが現実回避さるべきでない。学生、生徒の近視眼が驚くべく多数であることは、さきほど報告されたばかりである。結核患者の数はどうであろう。以前はしばしば話題に上った神経衰弱の如きに至つては、今では問題にもならないほど普遍的になつてゐるのではないか。

大衆の健康状態は改善されたか。女工の健康状態は。労働者の健康状態は。インフレ景気と云い、軍需景気と云うも、かかる景気は労働する男女の健康状態の改善に何等か貢献したのであるか。その反対でなければ幸いである。

スポーツは単に少数の人間を目標とする秀才教育の如きに陥り易い。一人の天才が生産した精神的文化は全人類共同の財産となり得るであろう。しかし健康はただ各人のものである。我々はそこに身体とその健康との有する或る宗教性をさえ認めることができる。宗教においてのように各人が銘々その責任を負わねばならず、そしてその前ではあらゆる人が平等である。

我が国の文学者が比較的短命で、その活動の期間も短いことについて、彼等の過労が指摘されている。過労！このものを単に文学者のみでなく殆どすべての人について云い得ることではないか。過労——それは現在を見れば病気ではない。しかしそれは慢性的だ。そしてそれはその結果を将来に向つて徐々に現してくるものである。かかる過労の社会的原因がどこにあるかを考えねばならぬ。

健康は最も日常的なものである。もしも日常的なものを尊重することが東洋思想の特色であるとするれば、我々はこの点において東洋人に還ることが必要であろう。またもしも精神を主とし肉体を軽んずることが東洋思想の特色であるとするれば、我々はこの点において東洋的であることから脱却しなければならぬ。

(十一月五日)

### 一つの日支問題

伝えられるところによると、日支問題も最近いよいよ重大性を加えてきたようである。政治上のことはよくは分らないが、日支間に何か事件が起るたびに、私が考える一つのこととは、あの支

那人留學生のことである。彼等の数は以前から相当に多いが、特に近年為替その他の關係でますます増加しているようである。先達ても某私立大学の學生は、この調子では我々の教室はやがて支那人に占領されてしまふであらう、と云つていた。

ところで、やや不思議に思われることは、これらの支那人留學生が本国へ帰ると、多くは排日家になり、少なくとも親日家とはならないという話を、しばしば聞くことである。日本の留學生の場合には、ドイツへ行つた人はドイツ鼻眞になり、フランスへ行つた人はフランス鼻眞になるのが普通である。尤も、極端な国粹主義者になつて歸つてくる人もあるが、そういう人は大抵、あちらで神經衰弱に罹つていた人だと云われるくらいである。

かくの如きことは日支兩國國民の相違によるのであらうか。必ずしもそうだとは考えられない。なぜなら支那人の場合でも、アメリカで勉強した者は親米家となり、イギリスで勉強した者は親英家になることが多いように見えるから。

實際、支那人に対し、我々が外国で経験したと同じような親切を示し、心のくつろぎを与える教授が我々の間にどれほどいるであらうか。私立大学の如きは、むしろ、彼等留學生をただ営利の対象として取扱つてゐるということがないか。かようなことは彼等にとつては固より、日本人

学生にとつても甚だ迷惑なことであろう。この間報道された不正入学問題の如きも、罪は支那人にのみあるとは云えないであらう。

しかし問題を単に学校内部のことだと考えると、大きな間違いである。外国へ行くと誰でも敏感になり、身体と精神のあらゆる器官が働くようになるものだ。留学生は広く社会から影響される。原因は、日本人の世界的大国民としての資格に関係していないか。日本の社会の文化生活の水準に関係していないか。我々のところへ学びにきている留学生に日本を真に理解させることができないようでは、日本文化の海外宣伝も意味がないであらう。かかる宣伝も、依然たる西洋崇拜に基づき、その消極的な形態だと云われても、致し方ないであらう。

留学生の問題は小さい問題かも知れない。しかしそこに日支問題の一つの大きな示唆がある。我々が真に日支親善の意図を有するならば、先ずこのような小さなことに関して我々の誠意を示さなければならぬ。彼等が排日的になつて帰る理由と責任とについて十分反省しなければならぬ。

(十一月十二日)

## 日本と支那思想

先日、本欄で支那人留學生のことを書いたが、その後会つた人々から、彼等にしてなお毎日的排日的であるのは、あの中華思想、即ち自己を中華として他の民族を夷蛮戎狄とする思想が依然として残存するためではないかという意見を聞いた。もつともな議論である。

だが翻つて考えるに、大多数の支那人は現在、西洋で学ぶのと同じことを、ずっと安価にこの地で学び得るといふ理由から日本へ来ていると見られ得るところがある。日本の文化は勿論それ以外の特殊性を有するが、しかしこのものは日本人が古来支那から教えられたものを多分に含み、またそれ以外の特殊性と云えば、単なる特殊性で、國際的普遍性に乏しいと考えられてはいはしないか。

現代日本の文化が、支那人がここで西洋的なものを簡便に学ぼうと考えるほど西洋的であることは、決して我々の恥辱ではない。我々が勇敢に勤勉に西洋文化を移植したことが今日の日本を支那に対して優越ならしめた一つの大きな理由である。

問題は第一に、この頃日本精神として日本主義者によつて強調されるものが、この国に遊学す

る支那人にとつても当然有意義と考えられるような普遍性を持つていかどうかということである。単なる特殊性では価値がない。日支親善などと云つても、その政策の政治的経済的實質は別にしても、思想的にも真に支那人を納得させ得る普遍的な理念があるであろうか。

問題は第二に、逆に見れば、この頃の日本主義者が日本的なものと支那思想、特に儒教とをあまりに無雑作に結び附けて考えるところにある。なるほど日本は有史以来支那の影響によつて発達してきた。それは日本がおかれた歴史的環境の必然的な制約であつた。しかし支那思想は果たして日本的なものを発展させ發揮させるにつねに好い影響のみを与えたのであるか。寧ろ反対の場合が常識的に考えられるよりも遙かに多くはなかつたか。

ただ文字だけについても、もし我々の祖先が支那の影響のもとなかつたとすれば、どうであつたであろう。昔から今に至るまで、日本の官僚的イデオロギーは主として支那思想、特に儒教によつて組織されてきた。それが現在もなお我が国の支配的イデオロギーの性格を規定し、そこから例えばその特殊な形式主義を生じている。そしてそれが現在の対滿対支政策のうちにも種々指摘することのできる形式主義の一つの根源であるとさえ云えるであろう。

従来の歴史的環境の制約から離れ得る今日、真に日本的なものを発見し将来に向つて發展させ



る立場から云つても、我々は日本と支那思想との關係について徹底的に反省すること、或いは支那思想そのものを批判的に新たに研究することが必要であろう。今後の支那に働きかけ得る思想が昔ながらの乃至日本化された支那思想であるかどうかさえ問題である。

(十一月十九日)

## 倫理の喪失

今日の社会及び人間生活を見て痛切に感ぜられるのは倫理の喪失ということである。現代の多くの青年によつてほんとに擱まれている倫理はデカダンスぐらいのものであるかも知れない。もちろん今日も、いな特に今日は、修身教科書の倫理や修養論は大いに説かれてゐる。しかしそのような通俗倫理は眞の倫理でなく、これに比してはデカダンスが寧ろ人間性により深く根差す故により倫理的であるとさえ云えるであろう。

現在の社会不安、生活不安、思想不安において躓いたとき、青年たちは何に彼等の行為の抛り所を求めるであろうか。私は次の如きことが今日次第に著しくなりつつありはしないかと思ふ。先ずより功利的な青年は小学校以来習つてきた倫理、儒教的倫理に拠るであろう。併し彼等は

それに真に共鳴しているのではない、むしろそれはどうでも好いことなのである。ただそれを守つておれば非難もなく、立身出世の便宜もあるからである。この場合彼等にとつて好都合なことは、かかる儒教的倫理はヒューマニティ（人間性）に関わることが少なく形式的なものである故に、精神的苦悶もなく全く形式的に従い得るということである。私はもとより支那における礼の思想が重要な特色を有すること、また如何なる倫理も礼的なところを有せねばならぬことを認める。しかし詳しい議論は措いて、ともかくそれが人間性を抜きにして形式化される傾向を多く有することは争われない。それがまた今日もなお日本の政治及び倫理的な生活の官僚的性質を助けている一つの力ではないかと思う。

他のより思索的な青年は東洋古来の「無」、支那思想の、特に仏教思想の無に還るであろう。そこではいつでも安心立命することができる。これは確かに我々東洋人にとつて大きな力である。この無はあらゆるものを自己のうちに入れることができる。その代りにここでは結局あらゆる現実がそのまま肯定され、従つて現実に対する批判がない、つまり倫理がない。特に文化に対する積極的な倫理が欠けている。仏教は偉大な宗教である。併し仏教本質論はともかく、少なくとも今日の仏教は何か特別の倫理を持つているであろうか。寧ろあらゆる現実に随順して現実批判の

倫理を有せず、倫理を説くとすればやはり修身教科書の倫理であるというのが実状ではないか。かくて取えて云う、倫理は喪失したと。いわゆる日本主義は國際的普遍性を有する人間的倫理となり得るか。私は何物の悪口をも云おうとは欲しない。しかし新しい倫理の確立は我々が今後眞の文化を作つてゆく上に特に重要なことであるのを感じざるを得ない。 (十一月二十六日)

### 悲劇を知らぬ国民

日本文学には悲劇がないと云われる。樗牛であつたかが、世界的な悲劇文学と評した近松にしても、義理人情の世界を多く出でず、あまりに美しいロマンスとあまりに速かなあきらめとがあつて、眞に悲劇的であるかどうか、問題である。

悲劇を知らぬ日本人は楽天的だと云われる。この楽天性にどれほどの根拠と大ききとがあるのかわからない。一方日本人は神経質でもあり、またその楽天性にはあきらめの要素も多く含まれてゐる。殊に今日の如き時世においてひとは眞に楽天的であり得るか、疑問である。

それにしても日本人は一種の楽天家に相違ない。我々はどうなるのか。「どうにかなるだろう」

と考へる。日本の将来は。——どうにかなるだろうと考へる。国家の財政は、支那問題は。——  
どうにかなるだろうと考へる。日本の国策も突詰めれば、この「どうにかなるだろう」を多く出  
ぬのではないか。

つまり追求が足りないのである。日本人の樂天性は風土にも關係するであろう。そのうえ我々  
の歴史は現在まで大きな悲劇を経験しなかつた。これは幸福なことに相違ない。しかし人間の世  
界における不幸はその実幸福であり得るように、幸福も他面不幸であり得る。悲劇を知らぬ者に  
は追求が足りない。悲劇的精神は追求の精神であるとも云へる。

ギリシア人は世界最大の悲劇文學を作つた。そのギリシア人は同時に世界最高の哲學を作り、  
そして科學の歴史の先頭に立つた。彼等の科學も哲學も、運命の前に問い続けて立停まる彼等の  
悲劇的な追求の精神と相通ずるところがあつたであろう。

幸か不幸か、大きな悲劇を経験したことのない我が國民は、今日も「どうにかなるだろう」で  
濟ませている。もちろん若い世代は彼等の生活經驗に強要されてそれほど樂天的でない。いわゆ  
る不安の思想は彼等の心に深く巣くい、悲劇的精神を形成するように見えた。それは、その追求  
が単に自己の内部に向つて社会的現實に向わなかつた点で非難さるべきであつたにしても、とも

かく我々に悲劇的な追求の精神を味わせた点では意味があった。しかしそれも今では「流行遅れ」になってしまったかのように見える。不安は克服されたのであるか。真の再建の代りに日本人伝来の「どうにかなるだろう」に還ったのではないか。

もし今後なお何時までも、どうにかなるだろうで済ませ得るとすれば、日本人こそ、果たして偉大と云われ得るか疑問であるが、ともかく幸福な国民である。

(十二月三日)

### 「養老」の伝説

改訂国定教科書にはかの有名な「養老」の伝説が削除されている。それは酒好きの病父に酒を飲ませたい一念から孝行息子が汲んだ水が美酒であったという話で、従来久しく国語教科書に親孝行のかがみとして載せられていたものであった。禁酒運動の人達は、親に酒をすすめるのは真の孝行でないという理由で、この話を教科書から削除せよと主張した。然るにそれを聞いた養老の滝の地元では承知せず、酒造組合などとも呼応して、その復活を文部省に陳情したという事実もあった。

養老の伝説の削除について禁酒主義者の運動がどれほどあつて力があつたのか、私は知らない。文部省側の意見として伝えられるものによると、この削除はその運動の影響によるのである。「養老」は実話物として書いたのではないさか妙なところがあるから省くことになつたのだというのである。これが誤伝でないとすれば、これまで小学校では養老の話を「伝説」としてでなく「実話」として教えていたのであろうか。もしそれを伝説として教えていたのであれば、禁酒主義者の反対も理由が薄らぐわけで、この有名な伝説をしいて子供の頭からなくしてしまわねばならぬ理由もなからうと思う。好くないのはむしろ伝説と史実とを混同することである。

親に酒を飲ませることが眞の孝行であるかどうかという議論になれば、医学的問題でもあるが、道徳的問題としては、少し考えるところいろいろ煩瑣道徳的問題を派生してくることである。国語教科書の中にある伝説から煩瑣道徳的問題を引出してくるにもあたらず、またもしその議論になれば、国語でも修身でも教科書には突詰めると煩瑣道徳的議論に陥らねばならぬ材料が遺憾ながら多過ぎるように思われる。伝説は純粹に伝説として教えるがよい。

伝説と史実とを区別せよということ、伝説をすべて破壊せよということではない。伝説には伝説としての深い意味がある。私はむしろ我が国の少年にとつて伝説が豊富でないことを悲しみ

たいほどである。西洋で酒の神ともされたディオニソス伝説は如何に多くの芸術と思想との源泉となつてゐるか。

しかし他方近代歴史学の批判的方法を尊重し、これによつて史実と伝説との区別を明確にすることが特に大切である。ところが我が国の歴史に関しては一般国民にとつてその区別があまり明瞭に示されてなく、しかも今日では益々その混同が行われてはしなないであろうか。養老の伝説を史実と見るが如きことは、むしろ無邪気な部類であるかも知れない。

(十二月十日)

## 日本文化の方向

故島地<sup>だんとう</sup>大等師は三国仏教を比較して、インド仏教は戒律支持に特色があり、支那仏教は慧学の發展に特色があり、日本仏教は定学の伝持に特色があると述べられた。即ちインド仏教が倫理的なことを、支那仏教が哲学的なことを特色とするに對し、日本のその特色は仏教を宗教として純粹化した点にあると云えるであろう。日本においてはかように仏教は純粹化されると共に、實際化され、單純化された。単題目や単念仏、単信心、単円戒等の思想はその傾向を現すものである。

ひとり仏教のみでない。支那文化にしても、日本において純粹化されたが、しかし同時に實際化され、單純化されて、そのとぼけた面白味、馬鹿氣た大きさをなくしたと云い得るであろう。かく純粹になるが、その代りに小さくなるのが、少なくとも過去の日本文化の一特質であるように見える。俳諧は発句に、長歌は短歌に、純粹化されると共に詩形を小さくした。能は謡に實際化され、單純化された。

純粹化されることはそれ自身としては好いことである。しかし能を劇の方向に發展させるような試みが真面目になされても好かつたであろう。短歌や発句に純粹化された詩を再び逆の方向に更に大きな詩形に發展させる努力が真劍になされても好かつたであろう。大きさの足りないのは島国の特徴であつたであらうか。

日本帝國主義の雄飛を欲する者は、日本の精神的文化の同様の偉大さを望むべきであらう。然るに事實は、皇道主義等の美名のもとに、純粹性すらない實際化と單純化とが種々の方面において行われているのである。例えば類似宗教の驚くべき流行は、現在の社会不安に基づく民衆の社会心理の反映であるが、ここには現在の社会情勢に相応して宗教の純粹性というものはなく、ただ實際化と單純化とによつて民衆を引き寄せているのである。類似宗教に弾圧が加えられるにし



ても、他方において日本精神の美名のもとにやはり非合理的な、実際のな、単純な思想が宣伝されてきているのでは、役に立たないであろう。科学思想の発達こそ却つてそれらの類似宗教に対する強力な武器である。

今日我々に必要なことは、純粹性を或る程度犠牲にしても、西洋文化を学ぶことによつて知的構成員、理論的組織力を養い、我々の文化に大ききを作ることとでなければならぬ。日本精神の純粹性に固執している間に、日本人の専売のように云われる東西文化の綜合というような組織的な構成的な仕事も、他に先鞭を着けられてしまわないとも限らない。

(十二月十七日)

## 歳末風景

歳末の風景はあわただしい。街は売出しの最中である。ネオンサインの色はいよいよ毒々しく、いよいよその数を増してゆく。看板、旗、幟、ちんどん屋、その他、その他。日本の街を見るとまるで植民地のような感じは、洋行帰りの者が誰でも感じることであるが、その植民地的風景が歳末になると、いよいよ濃厚になり、露骨になる。

しかし見よ、そのあわただしい街の中に、毒々しいネオンサイン、その他の下に、昔ながらの伝統に従つて、商家の入口には軒並みにすでに門松が立てられているではないか。何というゆかしさであるよ、と或る者は云うであろう。何という不調和であるよ、と他の者は云うであろう。

そして一層思索的な人は、ここにも日本文化の根本的な特徴と考えられる重層性（和辻哲郎氏）の一つの例を見るであろう。洋風の商店の内には角帯をしめた番頭がおり、外ではコンクリートの道の上に門松が立てられている。亭主は洋服で、細君は和服で、子供はまた洋服で買物に出ている。日本文化の重層性を示すものと考えられるであろう。

仏教の発達は神社崇拜を廃棄しなかつた。大抵の家は神棚と仏壇とを共に持つている。また同じ展覧会で、第一部には日本画が、第二部には西洋画が陳列されている。かようなことは一ドイツ人の評して云つた如く、日本が文化の並在の国であることを示すものであるか。それとも、そこには単なる並在以上に深い統一があつて、むしろ重層性を意味するものと解すべきであるか。

我々が日本画を鑑賞する場合と西洋画を鑑賞する場合において心の統一がないとは云えないであろう。だから重層性が認められる。しかしそれは心の上での統一であつて、客観的に表現された文化の上での統一ではない。従つて客観的に見て単なる並在或いは折衷主義と評されて致し

方のないところがあることも事実である。たしかに、客観的に矛盾したものを心の上で統一することにおいて日本人は比類のない才能を持っている。だから現在のそのような矛盾した社会においても人々は案外平気でいられるのである。それは日本人の美点であると云うことができる。

しかし他方において、そのような並存にも、重層性にも満足することなく、単なる折衷とは異なる真の総合的統一を客観的に示すような文化が作られることも甚だ望ましいことではないか。歳末のあわただしい風景を見ながら私はこのことを特に痛切に感じるのである。(十二月二十四日)

## 新世代の意欲

年末から年頭にかけては、あらゆる方面において回顧と展望がなされるならわしとなつていゝ。今度もこの種の論説がたくさん現れたが、そのうち私は新進科学者のピカ一、物理学の菊池正士と数学の末綱恕一氏との文章を特に興味深く読んだ。

世界の物理学界は現在非常な発展をなしつつあるのに、日本人の力がその中にどれほど貢献されていゝるか。皆無と云つて差支えない。一般に日本の科学は専門以外の人達によつてひどく買

被られている。他のことでは日本は何でも一流なのか知らないけれども、科学少なくとも物理に関する限り日本は二流の下或いは三流の国である。こう云つて、菊池氏は研究家の無責任と怠慢とを戒めている。

科学のほかのことに關しても、日本は何でも一流であるのではない。この頃の民族主義的風潮が自国のものは何でも最善であるかの如く国民に買ひ被らせるようにする傾向があるとすれば、極めて不真面目なことと云わねばならぬ。

近年の国粹運動の結果、科学的業績に關しても日本的特質を特に問題にして、日本民族の科学的能力について大真面目に議論する者があるのに対して、末綱氏は、かくの如き議論は時期甚だ尚早であると言ふ。我が国に仏教が渡来して日本的仏教が出来上るまでには六世紀を要した。しかるに我々が西洋の學問を始めて以來、『解体新書』から数えても百六十年ばかりしか経過していない。かかる僅かな期間に日本人の科学的能力を判定すること、殊にその民族的特徴を限定することは不可能であり、まして所謂日本の科学を要求することは全く無意味である。すべては今後の歴史に俟たねばならぬ。慨歎すべきことは国粹運動がメートル法等にまで累を及ぼすが如きことであり、また非常時と称して科学の利用の方面のみが強調され、純理論的方面の輕視される

ことである、と末綱氏は述べている。

確かに日本人の科学的能力、科学における特質はなお歴史的に未知数である。一般に西洋文化の移入以後、我々が如何なる大きさと高さとを有する文化を創造し得るかは、今日その実験の過程中にある。我々の世代はこの実験に身を投じなければならぬ。まだまだ西洋文化の弊害などについて議論すべき時期ではない。支那やインドの文化の伝承から日本人が何を作り得るかは、我々の祖先によつて既に或る意味で実験済みである。しかるに西洋文化に関しては、それはなお全く実験の途上にある。能、歌舞伎、その他、過去に如何なる勝れたものを有するにしても、今後それをそのままの形式で発展させることは不可能であろう。

新しき世代よ！身をもつてする実験者としての自己の意欲を確立せよ！（一九三六年一月七日）

### 暗示の影響

三原山自殺が一時流行したが、最近にはまた青酸加里自殺が流行している。実にいろいろなことが流行するものである。自殺の意識的な模倣というわけでもあるまい。何か絶望的な気持に陥

つた者が、青酸加里自殺のことを読んだり聞いたりして、ついそれに暗示され、殆ど無意識的に模倣することになるのである。

人心が不安焦躁の状態にある場合、暗示の力は特に大きい。あの大震災の時に朝鮮人や社会主義者が放火して歩くというようなことが真面目に信ぜられたのも、人々が暗示にかかり易い精神状態におかれていたためである。今日の所謂邪教の流行にしても、或いはまたドイツにおけるユダヤ人排斥などにしても、同様の心理を利用しているところがなくはないであろう。

現在のような社会状態では、簡単な事柄も種々複雑な暗示を与え、人心をいよいよ不安にすることが多い。先達て本紙に、日本理科教育聯盟理事長の談として、地方では国体明徴運動に理科教育は不必要だとして見当違いの迫害を受ける事実を度々聞くと、話が載っていた。何も文部省あたりで国体明徴のために理科教育排斥をあからさまに唱えているわけではなからう。けれどもこの頃のように日本精神作興、智育偏重排斥が無理論に叫ばれては、そのような見当違いの暗示となる危険は十分存在するのである。

暗示の行過ぎや穿違いは、暗示が権力者から与えられる場合特に多いであろう。とりわけ平生あまり独立の判断力を働かせることができないような状態におかれている者においてはそれが多

いのである。例えば俗吏根性というのがそれで、権力者の一言によつて種々の暗示にかかり、その心をいろいろ忖度して行過ぎたもしくは穿違えたことをして大衆に迷惑を及ぼすことが少なくない。しかもこの頃では政党人の或る者までがそのような俗吏に似たところがあつて、軍部の意向というものから種々の暗示にかかり、困つたことをする。

不安な社会では凡てが暗示になる。このような時には益々明瞭な理論が必要な筈である。ところが実際には却つてただ暗示を刺戟するようなことが多くなされている。他方明瞭な理論を有する者も明瞭に云うことができず、単に暗示するにとどめることを余儀なくされているという有様である。

まことに現代は種々の意味において暗示が横行し、暗示によつて不安にされている時代である。

(二月十四日)

## 「拳国一致」

各々の時代において社会はそれぞれ自分に特徴的な特別の言葉を持つている。我々の時代にお

けるこのような特別語彙を蒐集することは、たとい現代の眞の政治史や文化史の認識に役立たないにしても、風俗批評の見地からでも興味ある材料となるであろう。

最近政友会は、すでに数多い現代の特別語彙に新たな一つを加えた。「擬装的挙国一致」というのがそれである。これは言葉としても「類似宗教」などという語と好一對をなし、まことに面白い。

ナポレオンは警句の天才であつた。今日常用されるイデオロギーという語の実用的意味を初めて作り出したのもナポレオンであつた。政治家や軍人には特殊な言葉の天才がなかなか多い。いよいよ選挙となれば、今日の政党にだつてそのような天才がいろいろ現れることであろう。

ともかく今度の選挙の特徴は「挙国一致」の争奪戦にあるかのように見える。政府もそれを云つて議会解散を行った。民政党もそれを唱えている。そして政友会も政府の擬装的挙国一致を攻撃して、みずから挙国一致を叫ぶ。ただ政治的警句は必ずしも論理的でない。その意味が曖昧なところに却つて實際的效果があるのであらうか。

政府が挙国一致のために議会解散を行わねばならぬとすれば、それは政府が政党を地盤としていないからである。政友会や民政党が挙国一致を云うとすれば、その前提には政党連繫が必要と



思われる。けれども政党連繫は少なくとも選挙戦のスローガンとしては魅力がない。しかも政党人の殆ど誰もが実際に考えているのは、選挙後たとい岡田内閣が退却しても、やはりこの式の挙国一致内閣が出来るに過ぎないということである。選挙における政党の問題は多数党であつて挙国一致でないであろう。憲政の常道は多数党内閣であつて挙国一致内閣ではなからう。しかも現実においてはただ挙国一致のみが問題になり得る。それが非常時なのである。

「多数者」から「挙国一致」へ——それはただ喜ぶべき量的増加を意味するに過ぎぬかのように見える。しかし実は、それは量の問題でなく質の転化である。だから挙国一致は政党政治の否定であることができる。挙国一致は場合によつては独裁政治の別名となり、従つて挙国一致は場合によつては眞の多数者としての「大衆」に対立するものであることができるのである。

擬装的挙国一致と云われるが、挙国一致はとかく擬装の名手である。これは論理であり、また世界歴史の現実によつて既に示されていることでもある。我々の望むのは強要されない下からの挙国一致である。政府も政党も挙国一致の論理を先ず明示せねばならぬ。

(一月二十三日)

## 肅正時代

今日は節分。昔ながらの豆撒きは私どもの心をも何となくなごやかにする。人生に祝祭は必要だ。春の立ちそめるのを祝うて、「鬼は外、福は内」と愉快に一夜を過すのも結構であろう。

本年は選挙肅正と並んで宗教肅正が唱えられ、豆撒きに対してもいろいろ厳しい取締が行われるようである。これも確かに必要であるが、他方またこの頃官僚的形式主義によつて民衆の生活があまりにも窮屈にされ過ぎているところも少なくないようである。

尤も少し心を澄して、「鬼は外、福は内」と年男が叫ぶ声を聞くとき、私は人間性のどん底の叫びを聞くように感じて慄然とせざるを得ない。幸福、むしろ幸福に対する人間の欲望の如何に激しいかを思うのである。

宗教は幸福に対する人間の限らない渴望を出発点とする。もとより宗教はそれ故にこそ幸福についての高い観念をもっており、現世的幸福を人生の目的と考えることを欲しないであろう。迷信邪教の排撃は最近の流行題目となつている。いわゆる類似宗教が病氣の治癒その他の現世的利益を説くことをインチキとして宗教家は攻撃する。けれども今日多くの神社仏閣は、「鬼は外、

福は内」と呼ぶ声のうちに露骨に現れているような現世的利益の迷信によつて繁昌しているのが事実である。

無邪気な民衆は問わず、社会の幸福に対して責任のある政治家は果たして迷信的でないと言えらるであらうか。先勝や大安の日に立候補の届出が多かつたというが如き、御幣担ぎのしるしにほかならない。選挙粛正運動でさえも今日は宗教化されている。認識や理知を離れて、政治も次第に迷信の要素を加えつつあるのではなからうか。

宗教粛正のために芸妓、女給、ダンサーなどが年男になることは禁ぜられた。しかるに伝えられるところによると、今度東京では山の手十二花街組合がちょうどこの節分の日から芸妓にお座敷で「選挙音頭」を唄い踊らせることに申合せが出来たそうである。お祭騒ぎであつても結構な豆撒きは厳格にされ、他方厳粛であるべき選挙はお祭騒ぎになる。宗教家も、政治家も、官吏も、それぞれ自己にとつて第一義的なことは顧みず、末梢的なことにのみ力を入れているのが「粛正時代」というのであらうか。

(二月四日)

## 国民的と国際的

文学者の中にも、本国よりも外国で先ず一層有名であるような人がある。アナトール・フランズなどそうであつたと云われるし、アンドレ・ジードの如きもそうであると云われるかも知れない。先年のゲーテ百年祭は我が国でもずいぶん盛大に行われ、現在また邦訳ゲーテ全集が刊行されつつあり、ゲーテに関する勝れた研究書も次々に出版されている。しかるにシラーは、今日のドイツで国民的詩人として騒がれているに拘らず、日本ではそれほど人気がないようである。

我が国において所謂大衆文学は純文学に比して遙かに多数の読者を持つているが、外国人が読む段になると、恐らく純文学の方が読まれるに違いない。このような区別が純文学そのものの内部においても認められるのである。一般に外国人が好む作品は、純粹に国民的なものよりも国際的色彩の濃いものであろう。もちろんゲーテがドイツ的で、ジードがフランス的であることは確かである。仮に全く国民的特色を含まぬ文学があつたとすれば、それは外国人にも読まれないに違いない。しかしシラーとゲーテとを比較すれば、そこに国民主義的と世界主義的というような差別がある。

日本の文学や思想も今後大いに世界に飛躍しなければならぬとすれば、このような問題についても十分考えてみなければならぬ。これまで日本の物はエキゾチズムから外国人に読まれていたために純粹に国民的なものが却つて彼等に喜ばれるという傾向があつたが、今後はそれも變つてゆくであろう。日本人の作品がたくさん外国に翻訳紹介されるようになれば、諸作家の文壇的地位にも多少變動が生ずるのではないかと思われる。

学問でも芸術でもあまり国民主義的になると、外国人には無用になり、歓迎されなくなる。ドイツは書籍の輸出が一つの重要な貿易であることを誇りにしていたが、それがナチスになつてから、近年次第に減少してきたことを、統計的数字は示している。ここにも知識の國際性が窺われる。余のことは問はず、少なくとも文化上の侵略に関しては国民主義には大きな制限がある。日本文化の特殊性については固より何等の問題も存しない。併し我々の文化が單なるエキゾチズムから外国人に喜ばれるというのでは躍進日本の恥辱である。我々の文学や思想がその本質的普遍的な価値に従つて彼等から歓迎されるように努力しなければならぬ。

(二月十一日)

## 政治と教育

肅正運動の圧力によつて選挙に対する国民の関心が萎縮した観があるのに鑑み、政府は漸く政治教育の必要を悟つたと云われている。

元來、選挙肅正は選挙そのものに関しどこまでも手段であつて、目的であるのではない。手段を目的であるかの如くやかましく云うことは、官僚的瑣末主義に属している。選挙が政治教育の絶好の機会であることは常識であるが、政治教育が行われるためには政治の動向と目標とについて明確な認識が必要である。現在の政治家は果たしてそのような認識を有するのであろうか。寧ろそれについて何等確固たる信念がない故に、手段に過ぎぬ選挙肅正を<sup>あたか</sup>目的であるかの如く幻想することになつたのではなからうか。試験におけるカンニングばかりやかましく云つて、答案に対して何等の規準も有しない者が教育家と云えるであらうか。

選挙に限らず、政治はすべて教育である。これは詭弁でなく、単なる哲学論でもなく、社会の上昇期においては政治家は皆このことを意識しており、またこのことをつねに実行しているのである。政治が教育であることをやめるのは、社会の発展が行詰つた証拠である。

こう云われている。凡庸な政治家は、人間が彼の国家にとって必要であるような風でないことを不平がるのをつねとする。一層善い政治家は、与えられたままの人間から彼の欲する国家形態を組合せる術を心得ている。しかし最大の政治家は、単に政治形態のみでなく、この政治形態のうち、またこの政治形態によつて、このものを担うに適する人間のタイプを、創造的に作り出すものである。

最大の政治家は同時に最大の教育家である。なぜなら彼は大衆から新しいタイプの人間を創造的に作り出すものであるから。しかも人間は社会から生れるのであるから、新しい人間を作るためには社会を変化することが必要である。真の教育家は彼の教えることに大衆の関心を力強く引き寄せることを知っている。なぜなら彼は大衆のうちにある要求を客観的に表現し形成することを目的とするものであるから。

それは抽象論でも理想論でもなく、歴史の事実に合致したことである。社会の上昇期においては政治家はつねに新しい社会形態に適するような新しい人間を作ること努力しているのである。抽象的形式的に選挙粛正を唱え、国民の政治的無関心を不平がっている現状は、今日の社会の行詰りの一つの象徴にほかならない。

(二月十八日)

## 試験の明朗化

小学校から大学まで、あらゆる学校において試験の行われる時が来た。生徒学生はもとより、家庭にとつても、まことに憂鬱な季節である。

アランの『教育論』は学校の先生がたに読んで貰いたい書物の一つであるが、その中で彼は試験についても意見を述べている。「試験は意志の訓練である。この点においてそれはすべて善い」と、アランは云う。自分はある場合臆病であつた、心が乱れていた、などと云う弁解は悪しき弁解であつて、人間のそのような欠点は最も大きな欠点だ。平生は完全に答えることのできる問題を、試験の日に間違えたり、最初に正しい答を見出しておきながら突然逆上したりするような子供を、私はどう考えよと云うのか。それはちょうどボール紙で作つた猪に対してよく練習した射手が、自分の生命を救わねばならぬ日に適確に撃つことができぬのと同じである。知つていて、知つてゐることを使わないのは、知らないのよりも一層悪い。知らないことは精神の如何なる悪徳をも現さない。これに反し感情の動揺による過失は教育されていけない精神を、いな、正しくな



い精神をすら現すのである、とアランは書いている。

私は試験の単純な反対者ではない。それには意志の訓練、或いはその他の道德的效果も含まれている。しかし現在の日本の憂鬱な試験を見れば、アランにしても先ず大いにその弊害を指摘したくなるであろう。あらゆる徳は心の朗かさを予想する。試験から教育的意義を期待するならば、何よりも試験を明朗化しなければならない。

簡単に云うと、試験のうちにスポーツの精神が、コンクールの精神が導き入れられなければならない。試験のスポーツ化、もしくはコンクール化は今日我が国の状態においても或る程度まで不可能なことではなからうと思う。現在の制度の俛では試験は男らしい競争心の代りに陰險な敵対心を、優秀な者に対する讚美の代りに嫉視を、協同の精神の代りに利己主義を、要するに道德的にも種々の悪徳養成の源泉となる。

試験が一般に有害であるのではない。或る種類の、或る方法による試験は智育上徳育上必要であろう。弊害は今日の如く試験が教育的目的以外のものに制約されているところにある。即ち社会的条件に原因する入学の困難、就職の困難は、教育機関を単なる入学準備機関、或いは就職機関と化し、試験もそれに従属せしめられている。かくして試験の明朗化は、カンニングの取締の

如き「試験肅正」によつて達せられ得るものでなく、根本において社会の明朗化に俟たねばならぬ。

入学の困難、就職の心配が存しなかつた昔は、試験制度の弊害も問題にならず、試験勉強家は「点取り虫」として軽蔑された。

(二月二十五日)

## 詩の復活

詩の復活は最近注目すべき現象である。もちろんそれが確固たる地盤を獲得したと云うにはまだ早い、この頃同人雑誌などにおいても詩が以前には見られなかつた位置を占有するに至つたことは事実である。

この現象はいろいろに評価されることができであろう。思想が弾圧されている結果、或いは思想が無くなつた結果、いずれにしても文学が内容をもち得なくなつたために、形式的な、感覚的な文学として詩が復活するようになる。詩の復活は思想的に無内容な新形式主義もしくは新感覺主義の文学の流行の先駆にほかならない。このような見解も成立するであろう。

かかる見方にも一理はあるが、私はそれに全部は賛成することができぬ。詩の復活が何を意味

するかについての意見の相違は、恐らく、知識階級の、特にその若い世代の最近の精神的状況を如何に考えるかということに依存するであろう。そして私の見るところによれば、若い世代は、あの不安の時期の後にこの頃、極めて徐々にはあるが、確実に立直りつつある。かかる立直りは注意深く観察するとき種々の徴候において現れている。詩の復活も立直りつつある知識階級の一つの表現と解することができる。

文学においても心境小説などの復活と詩の復活とは、そこにおのずから意味の相違がある。詩の復活がたとい感覚的な、形式的な文学への傾向を示すとしても、そこには少なくとも近代性への意欲がある。新しいモラルへの意欲が動いている。自己の感情に形式を与えようとする意欲がある。いわば新しいクラシズムへの意欲が含まれている。詩の文学における位置は、自然科学における数学や哲学における論理の位置に比較することもできるであろう。本格的な文学の復興は詩の復興に俟たねばならぬ。私は詩の復活をもつて本格的な文学に対する要求が次第に現実的になってきたことの一証左と見、そして一般的には漸く立直りつつある知識階級の一表現と見ようとするものである。

もちろん現在の詩がどれほど新しいもの、積極的なものを示しているかは疑問である。なお思

想性が足りないことは確かであろう。しかし詩の復活はそのこと自身少なくとも心の一定の態度を示している。我々はそこに新しい出発を見てはならないであろうか。

春はまだ遠い。けれども我々は希望を棄ててはならない。希望は徳である。希望を持つということの大きな徳であることが今日ほど忘れられている時代はないのである。

(三月三日)

## 社会の常識

或る種の改革家は社会の常識を蔑視する。エミール・ファージェによると、あの空想的社会主義者といわれるブルードンなど、そういう人であった。

ブルードンは、或る觀念が民衆の間に拡がっているものであるというだけで、もしくは彼の同時代の大多数に信じられていっているものであるというだけで、殆ど本能的に、その觀念をくだらないものであると結論した。この民主主義者はその点で甚だ貴族主義的な精神をもつていたと云う。

かような貴族主義は、改革家が社会的組織の聯関の客観的認識を基礎としないで、道德的感激乃至確信から出発する場合、極めて普通である。彼等は社会の常識を軽蔑して、ひとり自ら高し

とすることによつて自己の道徳的感情に媚びる。従来の観念論者が好んで口にした精神的貴族主義というものも、社会の常識のうちに含まれる真理を無視して個人主義的立場に立っている。かような貴族主義は、社会の常識がそれに反抗すればするほど、自ら悲壮になり、興奮を加えるのをつねとする。

もとより社会の常識が決してその佯全部真理であるのではない。しかし民衆が絶対的に間違ふことはあり得ず、大多数の人間が真と信ずるものうちには一つの中心的な真理が含まれており、多くの蔭に包まれて一つの内的な真理が横たわっている。少なくともそこには或る瞬間にとつての相対的な真理、その時に適切に役目を果たし得る真理が含まれている。

最近我々は、社会の常識が如何に大きな力を有するかを二度まで経験した。しかもそれが二度とも消極的な形でその圧力を現したことに注意しなければならぬ。

一つは先般の総選挙である。政友会の近来の態度に対する不満が消極的に民政党の勝利となつて現れた。無産党の進出は、今日の風潮に対する大衆の批判が、これもまた消極的抵抗の形をとつて、現れたものである。次に二・二六事件の際に、国民が騒がずに静かにしていたということも、その力強い批判を消極的に現したものである。

あらゆる方面に互り徹底的な改革が要求されている。このとき大衆の批判がただ消極的にしか現れ得ないということは遺憾である。先ずそれが自由に積極的に現れるように改めなければならぬ。炯眼けいがんな政治家は少なくとも消極的な形で現れた社会の常識のうちに隠された積極的な真理を捉えて、改革を断行すべきであろう。道徳的改革家の知らず識らず陥る貴族主義は空想的に終り易いのである。

(三月十日)

## 競技と政治

今回のオリンピック大会が東京で開催されることは全国民の熱望であるが、今夏のベルリン大会は種々問題を惹起しているようである。

さきにはドイツにおけるユダヤ人排斥に絡んでアメリカでオリンピック不参加運動が行われ、今度はドイツ軍隊のラインランド進駐に対してフランスでベルリン大会不参加の叫びがあがっている。更にイギリスにおいてもオックスフォード大学では、ドイツ政府当局がスポーツに対して余りに政策的で、スポーツを政治的目的に、言い換えれば戦争の目的に従属させているという理

由で、ベルリン大会には参加を拒否すべきであるという論が起つてゐることである。

スポーツが政治的目的に従属させられるのは確かに好ましくないことである。スポーツは戦乱時代の武技が平和の時代に変質したものであるとすれば、今日それが戦争の目的に使用されることはスポーツの先祖返りとも云うべきものであつて、このようなアタヴィズム（先祖返り）は今日の如き反動時代には他の方面においても多く見られる現象である。

しかしたといドイツの政治的行動には非難されるべきものがあるにしても、その理由からオリンピック大会に参加しないということは、自分自身スポーツを政治化するものであつて、賛成できない。寧ろ現在の如き世界の情勢においては、スポーツを通じてでも国際親善の行われることが望ましいと考えられる。政治と競技との混同は避けたいものである。

ナチスの理論家カール・シュミットは、政治的なものを規定する根本概念は、敵・味方という範疇だと述べている。しかるにオリンピック競技の淵源をなした古代ギリシアにおいては、凡ての生活が競技的な根本性格を有し、ギリシア人とギリシア人との血腥い衝突にあつても戦いは「アゴーン」（競技、試合）であり、相手は試合の相手であつて「敵」ではなかつた。

社会の統一が維持されてゐる間は、政治も何等か競技的性格を具えている。自由主義の華かで

あつた時代には、政治におけるスポーツマンシップについて屢々語られた。ところが社会における内部的対立が激しくなると、政治はあらゆる競技的性格を失い、全く敵・味方の関係で規定されるようになり、スポーツマンシップなどもはや問題にならない。そしてスポーツも、体操の如きも、政治的目的に従属させられることになる。これは独りドイツのみのことでなく、あらゆるものが政治化する必然性を有する現代の特徴的傾向である。

(三月十七日)

## 停年制

「硬骨」真鍋嘉一郎<sup>1)</sup>学士は、大学で内規として行われる教授停年制に対して爆弾を投じ、衝動を与えた。これは、人事刷新とか官吏の身分保証の法律とかが問題になっているこの頃の世に桃戦したものととして「硬骨」の面白さもあろうが、その趣旨には賛成し難い。

なるほど停年で退職するのは惜しい教授もある。けれどもそれは寧ろ例外であつて、この例外を認めるならば、他の遙かに多い例外はどうすれば好いのか。世の中には現在の教授以上の学力

i 1878-1941、1926年から東京帝大医学部教授。日本における理学療法の先覚者。博士論文を出さず学士のママ。



を持ちながら教授になれない者がいくらかもある。高等教育を受ければ立派な学者となり得る素質のある者で、大学に入ることのできぬ者に至つては、無数にある。また適当な後任がないから退職しないと云うのであれば、自分の在職中にそのような弟子を作らなかつたことが却つて自分の責任問題である。

何も大学のみが学問の場所ではなからう。真鍋学士の如き「硬骨」の土が、停年後には純民間人として研究所の如きものでも作つて、民間の学問の発達に尽力されることを期待したのである。教育の方面においても停年制は寧ろ大いに拡張されることが至当である。それは高等学校の如きにまで拡張されて好い。殊に高等学校では、あの学校インフレ時代に就任した教授の中には若朽じゃつちゆうも多く、今日高等学校教育不振の原因となつていと云われるほどであるから、老朽と共に若朽の淘汰も必要であらう。

この革新時代においては青年の力が用いられねばならぬ。使われない力が下層に鬱積しているということは、社会にとつて不健康な状態である。人事刷新は我が国においては一の生理的な必要であるときえ云える。最近統制ということが頻りに唱えられ、それが必要な方面もあるうが、そのために国民が萎縮してしまつて、その力が使われないで鬱積するというような結果になつて

はならぬ。

かかる弊害は、我が国の如く自由主義が十分に発達せず封建的なものが多く残存しているところでは、特に生じ易いのである。この頃青年文学者の間で云われているデカダンスなども、自由に伸びることのできない力の鬱積という謂わば生理的な現象から来ていると見られ得る。思想統制とか文化統制などにしても、かようなデカダンスを益々甚だしくする危険を含んでいる。

(三月二十四日)

## 公衆の解消

公衆は解消した、もしくは解消しつつある。最近我々はかようなことを特に強く感じないであろうか。

公衆とは輿論という知的表現をもつたものである。輿論と公衆との関係は精神と身体との関係である。近代においては輿論を作り、輿論を代表し、輿論を再生産するものは主としてジャーナリズムである。だが輿論形成の根柢にはつねに談話がある。いかに新聞雑誌が発行されても、ひ

とが談話しないならば、それらは精神に持続的な滲透的な作用を及ぼすことができないであろう。ジャーナリストは寧ろ公衆の談話の書記であると云つてよい。かくて、言論の自由或いは談話の公共性の存在が公衆の存在の基礎である。

あの二二六事件以後の著しい変化は、民衆の政治的関心の昂揚であると云われる。この点においてそれは過般の総選挙などとは比較にならぬ重要な意義をもっている。事件の突発はあらゆる談話を無用にした。しかし突発した事件の結果はあらゆる談話の動機となつた。このような談話は輿論として表現され、かくて政治的関心の昂揚は公衆の発達を齎したであろうか。寧ろ反対に公衆は解消されつつあるように見える。

報道や言論の自由が甚だしく制限され、公共性をもたぬ流言蜚語ひびごが蔓延し、民衆の政治的関心というものがそのような流言蜚語によつて刺戟されており、そして彼等の意見が輿論として表現される公共の場所をもたないとき、公衆は解消する。

公衆は解消されて集団としては「群衆」に還る。群衆は一層自然的な集団であつて、自然的な力に縛られている。彼等を結合するのは知的な公共的な判断でなく、恐怖憤慨等の情緒衝動であり、また群衆は晴雨寒暖等の物理的環境に依存する。バイイは、パリの市長であつたとき、雨の

日を喜び、空の晴れるのを見て悲しんだとのことである。

尤も、公衆は歴史的範疇としては自由主義と結び附いたものであるとも考えられる。現代の社会においてはいわゆる公衆は「身体をもたぬ精神」であり、現実的な政治的力とはなり得ない、公衆に代つて階級的な物理的力を有する「大衆」というものが現れていると云われる。しかしながら大衆も単なる群衆でないならば、或る公衆性を有するのでなければならぬであろう。

談話の公共性が存しないとき、ジャーナリズムが本来の機能を發揮し得ないとき、公衆或いは大衆の公衆性は失われる。それは何を結果するであろうか。深く考えるべき問題である。

(三月三十一日)

## 新個人主義

この頃私の出会つた一団の青年は、新個人主義提唱の必要を大いに語つた。最近のファッションの全体主義の非合理性に対して個人主義、合理主義を昂揚すべき必要を痛感している者は恐らく少なくないと思われる。

實際、我が国の社会及び文化における諸弊害が個人の人格を重んぜず、個性の意義を認めないということに起因している場合は、想像以上に多いであろう。個人主義といえは単なる利己主義のように解され、人格の尊厳、個人の自由というが如きことは社会常識として十分徹底していない。封建的思想の残存物は考えられるよりも多く、近頃流行の統制主義などもそのような封建的なものの強化となつて現れる危険をもっている。かような事情において個人主義の本質及び価値の再認識の必要は確かに存在するのである。

しかしながら私は翻つて考える、人格の自由と尊厳は力説さるべきことであるにしても、現代人——それは我が国においては青年と云うのと同意味である——には、一体「人格」というものがあるのか、と。人間の人格的觀念が失われている。現代文化の混乱と、この混乱のうちにおける知性の実証主義とによつて、人間の人格的觀念は失われた。

誰も近頃の子供の早熟に驚くであろう。早熟は現代の一つの特徴である。しかも早熟な現代人は真に成熟する暇を有しないのである。現代文化の混乱、その動搖の速度は、我々に成熟する暇を与えない。成熟しない早熟からマンネリズムが生ずる。例えば今日の若い文学者においてそのようなマンネリズムを感じしめない者が幾人あるであろうか。また青年哲学者における弁証法的

マンネリズムを見よ。成熟することのない人間は必然的に無性格である。そのうえ今日の著作家たちは、昔の人の徳であつたような、後世とその判断に対する信仰をもっていない。

かくて堅持、固執、責任、不滅性等、従来的人格觀念の主要な要素が現代人にとつては失われている。このとき個人主義を主張することは無政府主義、虚無主義に陥る危険を含んでいる。それ故に新個人主義も新しい人間の觀念を確立すること以外のものであることができないであらう。

新個人主義も人間の觀念の新たなる確立という現代人の最深の希求の現れである。この希求は普遍的である。現代日本の教育や政治は何によつてこの希求に応えようとするのであるか。

(四月七日)

## 文化の公共性

先達て洋行から帰つた人に会つたら、日本の街を歩いて気附くことは、外国のように芸術家、科学者、哲学者などの彫像が建っていないことである、と話していた。外国から日本へ来た人の

うちにもこのことを不思議に感じる人もあるらしい。

尤も日本でも大学へ行けば学者の彫像が建っていないではないが、しかしそれは総長であるとか、学部の創設者であるとか、特に行政的功績のあつた人のものであるようだ。

私はあながち街の広場や公園の中に、彫像を建てることを勧めようとする者ではない。それは悪趣味に流れ易い。建てるのならよほど立派な彫刻でないと困る。それに日本の空気、光線等の条件が問題になることもある。しかし、いつか喧しく論ぜられたように文学者の社会的地位の向上ということが問題であるとしたならば、これなど、その一方策となり得るであろう。またその場合、彫像を建てるのが不都合であるならば、外国の例にあるように、街の名に文学者の名を附けるのもよいであろう。独歩通、四迷町、一葉広場など、なかなか面白いではないか。

もちろん銅像建立や町名改正などはどうでも好いことである。必要なことは、そんなことでもして日本の文学、その他の文化を民衆の面前に持ち出すことである。これによつて民衆に自国の文化に対する愛、文化貢献者に対する尊敬を絶えず喚起させることも好いし、もつと大切なことは、それによつて民衆に文化の公共性を意識させることである。

我が国には文化の公共性の意識が欠乏していた。永い間、風流、冥想、秘伝等の觀念が支配し

ていた。今日でも美術品の如きは個人に私有されて公開されないものが多い。作品の社会性については色々難しい議論がなされているが、最も簡単には文化の公共性の意識の問題であるとも云える。

公共性はあらゆる文化にとって本質的な規定であるとすれば、文化の公共性の意識は本質的な文化意識である。芸術家、科学者、哲学者の彫像を建てるというにしても、英雄崇拜の気風を養うためにでなく、それによっておのずから文化の公共性の意識を高めるために考えられることである。

図書館、美術館、その他、更に好い方法はいくらかもあるであろう。学制改革ばかりが、或いは文化統制ばかりが、文化政策ではない。本質的な文化意識の向上のために必要なことが他に多いのである。文化政策の貧困も既に久しいことではないか。

(四月十四日)

### 教員の道徳

東京市における小学校長視学等の賄賂事件は世人の記憶になお新たなことであるが、最近また



二三の風紀問題が起り、男女教員に対して相互の接近交際を制限乃至禁止する嚴重煩瑣な命令が発せられたと伝えられている。

男女間の道德の混乱は現代社会の一般的な事実である。それが特に教師の場合に取立てて喧しく云われるのは、酷に過ぎ、氣の毒なことだと思う。「弱き者よ、汝の名は教師なり」と歎ずる者も少なくないであろう。

もとより教師は人の師表となるべきものとすれば、その行為も模範的であることが望ましい。しかし模範的に行爲するといつても、現に道德の規準が存在しないとしたらどうであろう。今日の社会においては旧い道德は次第に毀れて未だ新しい道德が確定していないという状態である。このとき真に人の師表となり得る者は新しい道德を、思想的にも実践的にも、創造的に樹立する者でなければならぬ。「男女席を同じくせず」といったような封建的道德を復活させてみたところで、それが今日何等か指導的な意味を有し得るであろうか。

道德の混乱は必ずしも道德の頹廢と同じでない。我々は現在旧い道德を一見忠実に守っている者の間に寧ろ精神の失せた、人間性の褪せた形式主義、便宜主義、功利主義等の頹廢を見、道德の混乱と云われるものうちに却つて或る健康なものを感じることが稀でないのである。問題は

かような混乱の中から新しい道徳を建設することであつて、封建的道徳の強制的復活によつて、さなきだに師範学校の特殊教育のために禍されていると考えられる教員を一層因循姑息ならしめることではない。

昔は仁術と云われた医術も今では全く一個の職業となつてゐるやうに、教師も現在では単なる一個の職業となつてゐる。今日の教師にとつての矛盾は、社会からあらゆる機会に自己が一個の職業人に過ぎぬことを意識するように余儀なくされながら、同時に社会から人の師表となるべきことを要求されているということである。併し更に大きな矛盾は、人の師表となるべき教師にとつて道徳の規準が与えられていないということである。かような矛盾の根源が社会にあるとすれば、社会は教員に対して同情的であるべきであるが、他方教員も現代社会について認識を深めなければならぬ。これが今日の教員の第一の道徳である。

(四月二十一日)

### 漢字の効用

支那は文字の国であると云われる。こう云われる意味にはもちろん支那における文字の豊富、

修辭の發達等を稱揚する意味が含まれている。しかし他の反面には支那人は、ただ辭令に巧みで誠意が欠けているとか、行為が言葉に伴わないとか、などという非難の意味も含まれるのである。

日本人の作つた漢文や漢詩は支那人に遠く及ばないであろう。しかし漢字や漢文は莊重、簡潔、威嚴、等々の特色を有するという伝統的意見が存し、口語文の發達した今日においても、そのために漢文口調が用いられる。官庁の文書の如き、その例である。だが果たして口語文には莊重、簡潔、威嚴などが欠けているかどうか、疑問である。寧ろ反対に考えられる場合も少なくない。それに漢字や漢文口調は何となくそろそろしい感じを抱かせることがあるものである。自分のほんとの感情や意志を隠すためには漢字や漢文口調によるのが都合の好いことがある。官庁の文書も漢文口調では大衆に親しみがないから、口語文にするようにとの要求が起り、近年それが部分的に次第に實現されつつあつた。

現内閣は「**声明内閣**」とあだなされるほど屢々声明を出したが、私どもの氣附くことは、この内閣になつてから「**更始一新**」とか、「**抜本塞源**」とか、「**吏道振肅**」とか、「**秕政**」とか、「**庶政**」とか、色々むづかしい漢字が現れるようになったことである。近年国民教育の負担の軽減と實質

i 一三六事件で総辭職した内閣に代わり広田弘毅が組閣した。「**広田内閣の全貌と新日本の進路**」にその声明。

の向上のために漢字の制限が唱えられ、また実行されてきたのであるが、それがこの頃では逆転しつつあるように感ぜられる。それらのいかめしい言葉は何となくそらぞらしく感ぜられないまでも、大衆に親しみが無い。庶政の一新も、秕政の改革も、大衆とは無関係であるが如くであり、大衆の協力を俟たず上から政府や官吏がやるのだといった官僚イデオロギーが無意識的にその中に現れているようにさえ感ぜしめる。

あの二・二六事件当時の『兵に告ぐ』という一文を思い起してみよ。それはまことに平明な口語文であり、難解な漢字など使用されていない。この文章は人々に感銘を与えた。それには当時の民衆の心理的状况、ラヂオによる生きた言葉での放送等の原因もあつたであろうが、しかし何よりも、ほんとに兵隊に訴えようとする切実な要求がその基礎にあつたのである。

大衆の協力を訴えることなしには如何なる改革も行われ難い。現内閣の声明が、徒らにいかめしい漢字をならべて、何か大きなことが行われているかの如く思わせて、実は何も行われていないという「支那式」修辭に終らないことを望む。

(四月二十八日)

## 文学者の不遇

最近一二の目立つた事件をきっかけにして文学者の生活上の不遇が問題にされている。かような不遇はもとより今に始まらないであろう。しかし昔はそれが「天才の不遇」などと云われて、却つて若い人々のロマンチックな、英雄的な気持を唆るものであつたのに、この頃ではそのような事件に出会う毎に若い人々までが生活について考えるようになったところに、変化があり、問題の深刻さがある。

他人の作つた過去の作品について講義をして暮す学校の教師は、たとい十分優遇されていないと云つても、そのような作品を實際に生産する文学者に比しては生活の安定を与えられている。幾年文壇で働いても、そのために原稿料が上るのでもなく、年金が貰えるわけでもなく、そのうえ常に後から来る若い作家と自由競争をさせられているというのでは、文学者が生活の不遇を啣つことがあるのも当然であろう。

尤も、このように生産者が尊重されないということは、一般的に見れば、単に文学の世界のみではない。学問の世界にも同様のことがある。例えば、毎年学士院賞の受賞者は、文化科学の部

門では、その殆ど凡てが東洋に関する歴史的研究に限られているようである。この方面の研究も大切には相違ないが、現代の生きた問題に直接関係する文化科学や哲学における本来の生産的な仕事があまりに無視されている。学士院の存在が社会と全く没交渉になつてゐるのもそのためにほかならない。

更に広く眺めるならば、生産者の不遇は現代社会の一般的状态であることが知られるであらう。それは単に精神的文化の生産者の場合においてのみでなく、却つて何よりも農民や労働者の如き物質的生産に従事する者の場合において認められる。二つのことは決して無関係ではない。物質並びに文化の両方面において生産者尊重の倫理を確立することは今日の社会の急務でなければならぬ。

文学者の不遇が社会的原因にもとづくことは明らかである。しかし今日注意を要することは、自己の問題をただ社会に帰して、これを主体的に把握する勇氣が失われつつあるという傾向である。凡てを社会的に客觀的に見ることは今日の常識となつてゐる。これはもとより極めて重要なことであるが、そのために却つて俗物根性が次第に広く發生しつつあるといふことがなからうか。かかる俗物根性に対して英雄的精神の誕生が待望されるのである。そこに我々は生産者自身の倫

理を要求する。

(五月五日)

## 地方と文化

東北地方の災害は行政上の画一主義の弊を漸く認識させるに至り、東北庁の如きものの設置が問題になっているが、同様の問題は文化の方面にも色々あるのである。

我が国の文化は東京に集中している。芝居、音楽、美術、その他学校、出版、等々、殆どすべて東京に集中し、この都会と地方の都市との懸隔は甚だしい。封建的文化の残存物ならともかく、現代的文化に関しては東京が我が国唯一の都会であると云つてもよい有様である。それぞれの地方に特色のある文化が発達していないために、現代日本の文化は多様性に乏しく、豊富さを欠いている。

地方に文化が発達していないことは、我が国の文化が絶えず流行の暴威に委ねられている原因の一つである。各地方に独自の文化が存在しないから、東京の流行は何等の抵抗にも出会うことなしに地方を席卷する。内地を旅行して、一ヶ月遅れの、或いは一ヶ年遅れの東京の流行しか文

化的には経験し得ない場合、私は憂鬱になる。もしもそれぞれの地方に独自の文化が発達していたならば、我々の国民性に基づくかのように慨歎されている流行も、そんなに恐るべきものではないであらう。

また地方に文化が発達していないことは、我が国において新しい文化の成熟が困難にされている一つの原因である。新しいものが流行することは決して悪いことでない。しかし必要なことは、そのうちの何物かが真に成熟するということである。成熟するためには、特殊な伝統の故にその物にとって特別に足溜りとなり得るような場所が必要である。もし地方の都会に各々独自の文化があったならば、新しい流行にしても、或るものは或る地方で、他のものは他の地方で、それぞれ自己に適した土地を見出して成熟し得るのである。

更に地方に文化が発達していないことは、我が国に文化上の自由が少ない一つの原因である。流行の暴威が如何に甚だしく文化的自由を抑圧しているか。何処にも一様の文化しか存しないために、或る処で容れられないものは他の処でも容れられず、自分を自由に伸ばし得る文化的環境を見出すことができない。個性のある文化が作られないのもそのためである。

かくの如き弊害は日本における政治上の画一主義、教育上の画一主義等の結果である。今日世



界的画一主義に対して日本の独自性を自覚することが必要であるとすれば、我々はもつと手近に日本の内部における画一主義の打破について考えるべきではないか。

(五月十二日)

## 国語国字の問題

平生文相の漢字廃止論が議会において非難攻撃を蒙つた。文相はこれに対して漢字廃止は自己の個人的意見に過ぎぬと釈明して済ませたが、国語国字の問題は教育上文化上極めて重要な事柄である。それは我が国多年の問題であつて、従来も種々論ぜられてきたが、最近においてはまた標準語の確立、外来語の整理等、国語統制論が新たに現れているようである。

言語と社会とは密接な関係を有し、社会の変化するに伴つて言語も変化する。更に同じ社会の内部においても世代の相違に従つて言語も異なり、若い世代は自己の感覚、感情、意欲を表現するために古い世代とは異なる新しい言葉を用いる。このようなことは一般的真理に属するが、国語統制論者によつてとかく見逃されがちである。

今日我々の国語の改善、統一等が問題であるとすれば、それは単なる統制主義の立場からでな

く、文化生産の立場から解決さるべきことである。この点で伝統と創造との激しく格闘する場面につねに身をおいて制作に従事する文学者の如きから最も多くを期待しなければならぬ。明治時代において言文一致体を確立するに与つて大いに力のあつたのは文学者であつた。

国語国字の問題が我が国で特別に複雑な、そして困難な問題となつてゐるのは、嘗て本欄で論じたような日本文化の重層性という特殊な事情に基づいてゐる。我が国においては種々なる文化、支那文化、西洋文化などが並在し、それらは客観的に真の統一をなしてゐないに拘らず、主観的には何等矛盾として感ぜられてゐない。このようなことは言語文章の方面においても認められる。単なる便宜主義の立場から漢字廃止を唱えても無力であるのはそのためである。また外来語の統制を主張する者が、西洋の言葉をそれ自身は一つの外来語にほかならぬ漢語に訳して用いるだけで外来語の整理であるかのように思い誤るのも、同じ事情によるのである。

私はいわゆる文化の重層性を日本の特殊性である故にそのまま尊重せねばならぬと考える者ではない。我々の文化は客観的にも真に統一ある表現に達しなければならぬ。そこで国語国字の問題は、日本の場合特に将来の文化の統一的精神を何処に求めるかに関係してゐる。かようにしてその問題は一個の思想問題でもある。

言語の民族的純粋性はイタリアやドイツなどでも唱えられていることであるが、国語国字の問題が今日我が国において新たに問題になってきたのも、社会的に見て意義深いことである。

(五月十九日)

## 低調な世の中

尾久の殺人事件は近頃センセショナルな事件であった。議会に対する関心などは、この事件に対する興味に比しては殆ど何物でもないようであった。この殺人事件に何か変態的なものがあったとすれば、それに対する社会の興味にも更に変態的なものがなかったであろうか。

「センセイショナル」という語は今日の社会に最も特徴的な言葉の一つである。爆発、偶発、突発の事件は我々の生活の日常的な状態となっている。それらのものは多くの人々においては真実の欲求とさえなっており、彼等の心は突然の変化、つねに新たにされた刺戟によつてのほか樂しまされない。センセイショナルな事件は絶えず起り、どのような事件もなるべくセンセイショ

i 「阿部定」事件 (1936:5:18 阿部による情夫殺人) を指すのであろう。

ンを喚び起すような仕方では伝えられる。好奇心は新しい事件を求めて不安である。かような状態は一の病理学的な状態ではなからうか。

物に対する不安な好奇心のうちに隠されているのは自己自身の存在の不安である。今日かくもセンセーションが求められているということは、この社会の不安を語るものにほかならない。

センセーションを求める人々において失われたのは驚異の心である。彼等は今日の事件の何物に真に驚異を感じているであろうか。何物にも驚異しないということは虚無主義の心理であると云われてきた。しかるに、何物にも驚異しない心がなお絶えずセンセーションを求めているというところに、今日の虚無主義の低俗さがある。驚異の心が貞潔であるに反して、好奇心は反対である。好奇心は一つの物の側に留まることを欲せず、さきざきへ彷徨する。それは何処にもいて何処にもいない。好奇心は宿無しである。

「驚異こそ哲学者の感情である」とプラトンは云った。しかるに驚異の心の貞潔を失つてセンセーションを求める低俗さに墮した好奇心の結果は、たかだか懷疑主義に過ぎない。懷疑主義は実践的には功利主義、便宜主義となるのがつねである。少なくとも、現実に対して極めて妥協的であるというところに、今日の懷疑主義の低俗さがある。

我々の周囲には歴史に稀な、真に驚異すべき大事件、大変化が起つてゐる。しかるに、この世の中の低調さはどうであらうか。好奇心を最大の悪と見做した昔の宗教家や哲学者の人間心理の理解の深さが今更の如く思い出されるのである。

(五月二十六日)

## 制度と人

制度が變つても人が變らなければ、眞の改革は行われぬ。制度は人が作るものであつて、人が變らなければ制度も變らない。併しまた制度が人を作るのであつて、制度が變らなければ人も變らない。

どのような制度も、それが現存する限り、それを支持している人間がある。現在の制度は全体としてブルジョワに支持されているところまで云わなくても、現存する個々の制度には、それによつて生活し、それと利害を共にする人間が結び附いている。彼等はその制度の廃止や縮小を欲せず、却つて反対のことを願つてゐる。制度の改革はかような人的要素の問題を無視し得ない。

行政改革とか学制改革とか、制度の改革が最近の題目として唱えられている。ところが實際は、かかる制度そのものの改革については問題はなく、問題はむしろ制度に結び附いている人間である。制度の改革に関する智慧は欠けていないであろう、改革を困難にしているのは人的要素である。

先年拓務省を廃止しようとしたとき、その官吏の反対に会つて中止になつた。また先年高等師範学校を廃止しようとしたとき、その教師や卒業生の反対に会つて中止になつたのみでなく、新たに文理科大学の如きものを附け加えるという結果になつた。これらの例は極めて教訓的である。

かようにして制度の改革が唱えられても、調査会に次ぐに調査会を作るのみで改革は一向行われず、改革といつても母体はそのままにしておいて只新しい瘤を附け加えるだけのことに終るのがつねである。調査会を作ること自体がすでに瘤を一つ附け加えることであり、官吏その他の関係者のために只新しい地位を殖してやることに過ぎぬ場合が少なくない。

それだから根本的な行政改革が行われるためには、全部の官吏が一度自己の身分を奉還する必要があるとすら考えられる。官吏の身分奉還が庶政一新の前提であるという急進的な意見も生じ得るであらう。

しかしそこに現実的な問題がある。現在膨大な軍事費を予定した上で行政改革を行おうとすれば、それは官吏の生活を脅かす危険を含んでいる。そして現在他に新しい職業を求めることが困難であればあるほど、自己の犠牲において制度の改革を断行する勇氣は失われるであろう。かく今日の社会の行詰りが根本的な行政改革を要求すると共に、この行詰りがその実行を困難にしている。ここにも我々は資本主義社会の矛盾を見るのである。改革は根幹に触れねばならぬ。

(六月二日)

## 人民の声

旅行すれば人は多少は利口になるものだと言われている。併しこれは誰についても言われ得ることでない。馬鹿は旅行することによって一層馬鹿になるだけだ。社会学者テンニースは書いている、「旅行すれば、利口な者は益々利口になり、馬鹿は愈々馬鹿になる」。我々はこの言葉特に官吏の旅行について想い起す。

旅行者は短い期間の狭い見聞から概括論、一般論を立てたがる。何等かの報告の義務を負わさ

れている役人においてこの弊害は生じ易いであろう。殊になるべく上司の気に入るような報告を持って帰らねばならぬ者は、旅行してもその眼は塞がれているに等しい。出先の官憲によつて予め作られた行程に従い視察して廻つたとて、民間の实情が知られるであらうか。誰も自分の郷里の悪い方面を旅行者に見せることを好まない。まして自分の治績を吹聴することを利益とする地方の役人の案内によつて、その地方の現実が完全に知られ得るであらうか。年度末になると、その年の予算の残りを費い尽してしまうために、急に殖えるのが例となつてゐる出張旅行の如きは、全く論外だ。

後藤前内相は「行脚政治」を唱えた。併し官吏の行脚によつて民間の实情に即した政治が果たして行われるようになるかどうか、疑問である。旅行すれば、馬鹿は愈々馬鹿になるばかりでなく、利口な者も馬鹿に化する危険がある。官尊民卑の風のある国において、地方へ出掛けて閣下とか先生とか云われて歓迎されると、少々利口な人間も馬鹿になつてしまふ。始終地方へ行く講習会学者に見られるように、行脚官吏も低調になり易いであろう。

民間の实情を知るには、視察旅行だけでは足りない。人民をして自由に自己の实情を語らしめねばならぬ。医者には患者にその症状を訴えさせる。患者の話を聴き、それを自分の医学的知識で



分析して、医者 は病氣に對する治療法を見出すのである。政治に携わる者も医者と同様に先ず人民の声を聴くことが大切である。人民の聲が自由に自分に達するならば、そして自分が十分に社會に關する科学的知識を具えているならば、行脚に出掛ける必要もそれほどないのである。

言論の自由を抑圧し、人民に沈黙を強制しておきながら、どれほど視察や調査を行つても、眞に民間の実情に即した政治は行われ難いと云わねばならぬ。

(六月九日)

### 生産者の立場

パリの博覽會における日本館について、建築家と当局との間に意見の相違があると云われている。建築家が現代日本的な建築の設計をしたのに対し、当局はフジヤマを控えてゲイシャがサクラを眺めるといった風の建築を要求しているとのことである。私はこの場合専門建築家の意見に賛成したい。

なるほどフジヤマやゲイシャやサクラは日本の特性を現している。併しそれらによつて象徴されるものは現代日本の文化の現実とは距離がある。建築にしても、特に公共的建造物は現在殆ど

凡てが、西洋式でなければ西洋式の基礎の上に日本的なものを示すことに努めているのである。そして西洋人が実際に知りたがっているのも、かかる現代日本的なものである。

フジヤマやゲイシヤやサクラが象徴するようなものを西洋人が喜ぶのは、異国趣味としてであり、従つてディレッタントの立場においてである。私どもの外国滞在の経験から云つても、多くの西洋人は最早そのような異国趣味の域を脱して、寧ろ現代日本人が彼等と同様の文化に關してどれほどの力量を有し、且つそのうちにどのような特殊性を發揮し得るかを知らうと望んでゐる。東洋の諸民族の日本に対する関心もその点にかかつてゐることは、支那人留学生についても知り得るであらう。

聞くとところによると、國際文化振興会などに向つても、日本の社会や思想の現状を紹介してくれという諸外国からの注文がかなり多いそうである。然るに振興会あたりでは、過去の古典的な日本の紹介には熱心であるが、現代日本の文化の実情の紹介に対しては甚だ臆病に見えるのは、何故であるか。

我々も日本の過去の文化を尊重し、愛好する。併しそれが如何に美しいにせよ、ひとたび生産の立場に立つとき、我々はそこに留まり得ない。我々は最早それと同じものを、それに匹敵し得

る高さにおいて自ら作り得ぬであろう。現代の社会生活並びに文化的環境はそのことを不可能にしている。我々自身の文化生産にとつては現在の現実がその地盤であり、この上に立つてのみ将来に対して意義ある日本の文化を生産し得るのである。ひとは過去の文化を愛玩し、鑑賞し、解積しさえする。併しそれだけではディレッタントに終り易い。生産者の立場は一層困難で、一層真剣なものであることを知らねばならぬ。

この頃日本主義の宣伝に伴つて、過去の日本の文化のディレッタントが多数に生じつつある。日本主義は文化上では復古的ディレッタントチズムに化している。かかるディレッタントチズムが文化の新たなる生産の立場を圧迫しつつあるのは、日本の将来にとつて、これこそ真に憂えるべきことである。

(六月十六日)

## 明治の再認識

文教一新の立前から平生文相は、義務教育八年制の実施とか、芸術局の設置とか、いろいろ計画を立てているとのことであるが、さてその財源はと云うと、なかなか問題であろう。ただ現代

美術館の設立は、その基金の一部を民間からの寄附に求め得る性質のものである故に、これだけは平生文相の事業としてぜひ実現して貰いたいものである。

現代美術館の設立は国民の年来の希望である。このような希望が広く存在するということは、次の事実に基づくであろう。即ちそれは、

第一に、明治以後における日本の芸術がそれ以前の芸術と性質的に違った新しいものであるということ、

第二に、このような新しい芸術が我が国においてもはや一つの伝統となり得るまでになったということ、

第三に、今日の人々がこのような新しい伝統をすでに伝統として尊重し、その意味を新たに認識する必要を感ずるに至つたということ、  
を前提しているのである。

このような事實は、我々の眼を美術の世界から文学の世界へ向けるとき、容易に認められる。あの円本時代を一転期として明治大正文学の全集物の刊行が盛んになったが、その原因のうちには、国民が明治大正の文学を一つの伝統として、即ち「新しい古典」として尊重し、再認識し始

めたということが含まれるであろう。いわゆる愛国者は、我が国民はつねに西洋の新しいもののみを追うている、と云つて慨歎する。けれども事實はそうでなく、我が国民は彼等の考えるよりも遙に健全であり、この頃の日本主義が唱えられるに先立つて、民衆は明治大正の文化の一つの尊重すべき「伝統」として顧みることを知っていたのである。

近頃、明治時代のことは何でも悪く云うのが一種の流行となつている。併し国民の常識は、明治以来我が国の文学が、西洋文学との接触によつて、独自の、日本的な、新しい古典を作り出したことを知っており、この新しい伝統の意味を考え直す必要を感じているのである。

文学の場合には現代美術館に匹敵するようなものを各人が自分の家の中に手軽に作り得る便利がある。最近における『鷗外全集』『花袋全集』の刊行など、喜ばしいことである。森鷗外の如き、生前文壇からはデイレッタントと見做され、その真価は十分に認められなかつたのであるが、今後その偉大さが愈々分つてくる人であると思う。帝国美術院長になつたこともある鷗外が生きていたら、今日の美術界において何を考え、何を為したであろうか。ともかく彼は、我々の現代文学文庫の中で最高の位置を占める人となつた。

(六月二十三日)

## 思想のない政治

政治は面白くない——こう云つても、我が国では問題なしに当然のことのように考えられる。このように政治が面白くないという理由の一つには、我が国の政治に思想がないということがあつてある。

現内閣の成立根拠はいわゆる「時局認識」であつた筈だが、その時局認識の思想が如何なるものであるか、今もつて明らかになつていない。最近政府は種々の政策を挙げているにも拘らず、政治が依然として甚だ不透明で、鬱陶しく感ぜられるのも、そのような政策を指導する思想が明瞭でないためである。否、政策の思想性を故意に蔽ひ隠そうとしている場合も見られるのである。思想のない行動はその場かぎりの不徹底なものになり易いのは勿論、公共性を欠いたものになる。思想性は公共性の要素である。最も公共的であるべき性質の政治が公共性を欠いているというところに、国民が政治に対して興味を持たない理由がある。

尤も、どのような人間の行為もその人の信ずる神が何であるかを現すと云われるように、思想のない或いは故意に思想を避けようとしているように見える政治のうちにも思想が現れており、

従つてそれを思想的に批判することが大切である。その思想性を追求することなく、個々の政策にいわゆる是々非々主義をもつて対していると、思わぬ誤謬に捲き込まれることになる。これは文学者や美術家を始め、政治に素人である一般人の近頃特に警戒を要することであろう。

思想のない政治が無数の無性格な人間を作り出している。今日の人間が無性格であるのは思想を失つたためであり、そしてそれは思想のない政治のうちの一つの重要な原因をもっている。生活に思想はいらぬ、日本人は思想がなくても生きてゆかれるように云われていた。しかし現代人、特に現代青年の無性格は、もはや我々も思想なしには生きてゆかれぬことを示している。政治の思想性が今日特に問題でなければならぬ。

文学の思想性については従来繰り返し論ぜられてきた。思想のある文学を、ということとは今日の一般的要求となつている。然るに思想のある文学は、政治に思想がない限り、社会人の生活そのものに思想がない限り、生れてくることが困難である。文学についてのみ思想性を問題にしても、抽象的に留まらねばならぬ。

(六月三十日)

## 養生の説

我が国の昔の儒者や仏教家の著述には養生について書いたものが少なくない。益軒の『養生訓』、沢庵の『骨董録』【伊藤康安著「沢庵和尚の人と思想」】、等々、有名なものがある。それは勿論支那思想の影響によることであろうが、日本精神史にとつて注目し値する事実である。

特に興味深いのは、隱遁思想と養生思想とが極めて屢々結び附いていることである。世を遁れる者が養生に努めるといふことは一見矛盾のようである。しかし世を遁れることがそれ自体、人壽を全うし長命を楽しむために大切な手段であると考へ得るであろう。

ところで近頃、少壯乃至中堅と云われる人々の間にさえ、長生きせねばならぬ、養生をせねばならぬ、というような談話が交されているのを多く耳にするようになった。勿論、人生において、早く死ぬるのは負けであるに違いない。しかしこの頃の養生論にはもつと複雑な意味が含まれていると思われる。

社会の不安のために、地位も、財産も、その他何物も頼み得ないことが次第に感ぜられ、頼りになるのは結局自分の身体だけだという風に考へられるであろう。或いは現在の社会の風潮が自



分の志を遂げるに不利なのを見て、長生きして、あまり遠いことでない社会の変革の来るのを待つていようというような気持もあるであろう。また社会の動揺のために自分の思想の方向が決定されず、徒らに焦躁を重ねることに疲れて、社会の動向が明瞭になるまで、いまま少し待つことにしようという気持もあるであろう。

いづれにしても、近頃の養生思想には、一定の目的に向つての自己の現在の活動を成就するには歳月が必要であるとして衛生に留意するとうような積極的なものが乏しいと思われる。理想と確信とに燃ゆる者にはまた自己の身命を顧みないところがある。しかるに近頃の養生思想はたいてい人生及び社会に対する消極的な、更に敗北主義的な態度と結び附いている。隱遁思想との距離は遠くないであろう。我々はその養生思想のうちに東洋的な隱遁思想の復活の徴候を見ることができると。

最近政府は軍部の要望に基づいて国民の衛生保健を国策として掲げている。政治家はもつと心理学者でなければならぬ。養生思想は近頃決して乏しくはない。かような養生思想の發生の社会的原因の除去が却つて健全な衛生思想の發達の前提として必要なのである。(七月七日)

## 宗教の改革

この頃宗教界にはいろいろ醜悪な事件が現れて世間から輦ひんしやく感かんされている。そのような事件は既成教団の内部でも生じているのであるが、また新興宗教乃至邪教においても最近崩壊作用が行われているようである。いわゆる宗教復興も今や清算の時期に達したのであるだろうか。

注意を要するのは、かの新興宗教もその教説のインチキ性によつて没落し始めたのでなく、主として経済的問題から自壊作用を起しているということである。この点でそれは正統教団の内部で発生している事件と根本において性質を異にするものではない。

一体、現在の教団は世間の政治的経済的組織と同様のものになつてしまつているので、一擬似宗教が宗教株式会社として現れたということは、偶々その点を露骨に示したに過ぎないとすら極言し得るであらう。だから一部の人の云うように宗教家には社会的政治的関心が少ないなどとは単純に云えないので、反対に今日の宗教家は世間の政治家、企業家、経営家と全く同じになり、

i 1951 大本教不敬罪、天理教脱税容疑などの事件があり、1952 大本教本部を破壊し、9月ひとのみち、1953 月仏教青年同盟などへと弾圧が続く。

社会的政治的関心があり過ぎて困るのである。そのような宗教学家において、世間の政治家などに見られるのと同様の醜事実が現れたとしても、不思議はないので、偶々彼等がそのほかになお「宗教学家」であるために、特別に世間の注意を惹くに過ぎぬ。

もし宗教の復興が可能であるとすれば、それは教団の改革に始まらなければならない。教団の改革に触れないで宗教の復興を欲しても無駄である。然るに現在の教団は世間の政治的経済的組織と同じものとなっており、現在の全体の社会機構の内部においてその制約を受けているのであるから、教団の改革を欲する者は、現在の全社会組織の改革を欲するのだからなければならない。

勿論、宗教学は宗教学家として単なる社会改革家でなく何よりも宗教改革家であることが要求される。併し彼の宗教改革的意見は社会改革的帰結を含むようなものでなければならぬ。嘗てルターの宗教改革は封建制度に対して擡頭する新興ブルジョワジーに適合したものであった。宗教学は現在その教説に改革を加え、新時代に適する「新しい経典」を作るほどの勇氣と覚悟とを必要とする。かくて私の屢々云ってきた如く、「宗教改革」なくして宗教復興はあり得ないのである。

(七月十四日)

## 世界の認識

外国から日本へ来る観光客は近年頓に増加した。それは日本に対する外国の関心が増大した一つの兆しとして喜ばしいことである。彼等の落してゆく金が我が国の国際貸借の帳尻に相当の結果を現しているとすれば、それも結構なことである。

外人観光客の増加は喜ぶべきことに相違ないが、立場を変えて考えると、ただ喜んでばかりもいらぬことである。我々が彼等と同様に容易に外国見物に出掛け得ないということは、彼等の国民の富、所得における懸隔を示すものである。しかも彼等と我々といずれが多く世界を知る必要を有するかと云えば、地理的並びに歴史的事情から考えて、それは寧ろ我々であろう。

日本人の「島国根性」ということは永い間我々日本人の間で合言葉となっていた。この自己批判的な言葉のうちに本来に日本人の逞しい気宇が表現されていたのである。ところが近来「日本精神」という言葉が流行し始めてから、あのように屢々聞かれた島国根性という言葉が殆ど全く聞かれなくなつてしまった。しかもかかる日本精神主義者の思想や行動のうちに実は島国根性の要素が多く残存しはしないか、反省を要するのである。

現代の日本にとって世界は甚だ拡大された。けれどその世界は今日も我々にとってその多くの部分は觀念的存在に止まつてゐる。欧米人が交通によつて相互に知つてゐるような仕方では我々は實際に欧米を知つてゐるのでない。日本の教養ある階級においてすら隣国支那を實地に知つてゐる者は意外に少数である。その意味で日本は現在に至るまで比較的閉ざされた社会である。

かかる事情に相應して、従来日本における外国文化の移植の如きも觀念的な仕方で行われた。外国の風土、風俗、生活についての實際の知識を欠いた精神的文化の抽象的な輸入がなされてきた。そこから屢々外国に対する抽象的な崇拜が生じた。我が國民に古來外国崇拜の風ありと云われるのも、右の如き文化移入の仕方における抽象性に一つの理由を有するであらう。しかも他方この頃の外来思想の排撃もその抽象的なことにおいてそれと同等以上である。かくの如き抽象性から脱却するために多数の日本人が外国へ見物や見学に出掛けるようになることが望ましい。

それによつて今日の日本にとつて最も憂慮すべき國際的孤立の危險についての國民の認識が深められることは特に切實な必要である。それは「躍進日本」に対する外国の嫉視に過ぎぬかのように云つて自ら慰めてゐるべき問題ではないのである。

(七月二十一日)

## 「転向」の性格

転向という語も現代に特殊な語彙に属する。それは勿論、左から右への転向のみでなく、右から左への転向をも意味している。周知のジードの転向の如き、後の場合である。転向は日本のみの現象ではなからう。併しそれは日本的性格を示す特徴的な現象である。

嘗ていわゆるマルクス主義の華かなりし頃、多くの人々がそれへ転向した。また近年ファシズムが盛んになると共に、多数の者がこれへ転向している。左への転向にせよ、右への転向にせよ、甚だ安易に行われる。かりに日本にヒトラー的政治が出現するとしても、あのドイツで見られたような悲劇は多分起らないであろう。自由主義者もいつしか国粹主義に転向しているであろう。先程まで外国の最新学説の紹介に憂身をやつしていた学者が、今はもつと間に合わせの日本主義を唱え、それについて膨大な著述をさえるというのが現状である。人格とか道徳とかを喧しく言う教育界にかような現象が特に著しいということは矛盾であつて、注目すべきことである。左への転向の場合においても、我が国の知識人にはジードの如く良心の永い試練を経つつ転向した者は殆ど見当らない。

相反するものに直ちに転向し得るということは日本の性格である。私はこの性格を無形式の形式と呼ぶ。それは形あるもの、客観的なものに固執しない性格である。それは淡泊とも融通性とも云われ、日本人の現実主義的な強さを現している。併し他面それは日本人が主義的思想的には頼りのない人間であることを意味している。日本の歴史には科学や哲学の如き客観的文化が発達しなかつたと云われる事実の原因も、そこにある。かかる日本の性格は、日本の社会が狭いために自由に乏しいということ、日本における自由主義の発達が不十分であつたということ等にも関係がある。何にしても、そこに欠けているのはヒューマニズムである。主義者が検挙されると、官憲から転向を勧説されるといふが如き、如何にも日本らしい好きがあるが、その一面には思想並びに人格の尊重の觀念の欠乏を現している。

ところで転向という語が普通に左からの転向にその意味を奪われ、多くのいわゆる転向文学においてそれが客観的表現に齎されたということは重要な事実である。そこに伝統的な日本の性格とヒューマニズムとの相剋が自覚されねばならない。転向者の転向は日本の性格によることが多いであろうが、彼等はそこに安んじ得ないで、人格の徹底、科学的真理の尊重などというヒューマニズムの要求する良心の問題を負わされた。主体の新たなる鍛錬、新しい人間を作ることが必

要である。だが最近右へ右へと転向してゆく人々にかかる良心の問題が存するであらうか。

(七月二十八日)

### 開いた心

先年或る外国の新刊書を日本の学術雑誌に紹介してくれと頼まれたとき、私は、少なくとも哲学や社会科学或いは文化科学の方面においては、日本に果たして真の学術雑誌が存在するのかどうか、迷わねばならなかった。

なるほど学術に関する雑誌は多数存在する。それは有力な校友会の存在する数だけ存在する。言い換えると、日本のいわゆる学術雑誌は学界の雑誌というよりも校友会雑誌の性質をもっている。それは各大学の各科で個別的に発行され、その執筆者も殆どその卒業生に限られており――なぜなら他の大学、他の科の出身者がその教師に採用されることは極めて稀である――、その読者も主としてその同窓生を基礎としているという有様である。それは学閥の機関であつても、学派の機関であるのではない。学会と云つても学友会的性質のものであつて、真に学界に属



するとは云い難い。

学界は世界性を有するものでなければならぬ。世界とは本質的には範圍の広狭に關することではなく、開いたものの性質を有するもののである。閉じたものはその周辺をどれほど拡げてても開いたものとはならぬ。兩者の差異は量的でなく、性質的である。世界という言葉の意味する空間的な広さも、閉じたものに対して開いたもの有する根本的構造の一つの表現乃至象徴にほかならない。専門というものもかかる世界の中において真の意味を有し得るのである。

いま學術雜誌は単に一例であつて、同様のことは我が国の社会において到る処に見出される。我々は日本人の心の深さを疑わない。併しそこに欠けているのは開いた心である。開いた心は客觀的なものに向うことによつて成立する。この「客觀への轉向」ということが日本人に最も欠乏しているのではないかと思う。

近頃國策閣議の停頓は種々の理由によるであろうが、その重要な一つがまたかくの如き開いた心の欠乏に存する。各大臣がそのいわば専門の立場をめいめい尊重することは何等非難さるべきことでない。停頓はそこから來ているのではなく、日本の社会においてもつと日常的なことから來ている。従つてその責任は大臣だけにあるのではなく、各省の官吏の全体にある。政策を綜合的に

樹てるために無任所大臣を置くという説もあるが、真の専門家が存在しないところに真の綜合家が存在し得るであろうか。真の専門的立場は開いた心において成立するのである。（八月四日）

### 愉快な義務

オリンピックのベルリン大会に日本のジャーナリズムは熱狂している。武力による戦争が起つても、これ以上の熱狂は不可能であろうと思われる程度に。国際的にはスペインの内乱、対支外交等の如き、国内的には謂わゆる国策の樹立、軍事費の捻出等の如き問題は、いずれもオリンピック競技とその重要性を競い得ぬものの如くである。或いは人々は、それらの重大問題について考えるたびに襲われざるを得ない陰鬱な氣持を散ずるために、かくもスポーツに熱狂しているであろうか。

ベルリン大会で日本の代表選手が続々好成績を収めつつあることは、我々の感激するところである。そして次の大会が東京で催されることに決定したのは、とりわけ愉快なことだ。我が国民の誰も喜んでこの愉快な義務を負うであろう。それは確かに日本の獲得した権利であると共に日

本に課せられた義務でもある。この義務をその全体の拡がりにおいて考えることが大切である。

「一九三五・六年の危機のために」ということが、これまで日本の標語であった。然るにこれからは、「一九四〇年の平和のために」ということが我々の標語とならねばならぬ。次のオリンピック大会が不可能にならないように、世界平和の維持のために努力することが日本の第一の義務である。オリンピック競技こそ国際主義の真の精神を教えるものである。

次に、我々はオリンピックを単なるスポーツとしてのみ理解してはならぬ。今ベルリン大会が我々に齎しつつある感激の如何に多くの部分が科学の力に負っているかを考えてみよう。ラヂオ、電送写真、等々の驚歎すべき発達なくして現在のオリンピックの熱狂は可能であろうか。一九四〇年を目差して科学日本の一大飛躍を期することが、これまた我々の愉快的義務でなければならぬ。

更に、もしまだオリンピック大会の東京開催が日本を世界に紹介するに絶好の機会であるとするれば、その時までには為すべきことは限りなく多いであろう。博物館、美術館、図書館などの拡張乃至新設の如きは云うまでもない。しかし特に必要なものは健康日本である。健康日本を誇り得るに至ることは我々にとつて、スポーツの真の精神に合致した愉快的義務でなければならぬ。オ

リンピックに刺戟されて、スポーツが全く競技本位、記録本位、選手本位に陥ることのないように、今後特に戒心を要するのである。

オリンピックに伴い易いスポーツにおける貴族主義、英雄主義乃至天才主義の揚棄がオリンピックの新しい精神でなければならぬ。

(八月十一日)

### 「哲学のない日本」

「我日本、古より今に至るまで哲学無し」と、中江兆民は書いている。西周も同様の意見を述べたことがあると聞いている。日本に哲学がないと云えば、反対する者、憤慨する者も多いであろうが、それは哲学という概念の意味の相違によることである。

「哲学という概念を、西洋風にちゃんと作り上げて来て、さてそれに当てはまるような物を、これまでの日本に捜し求めた時、あまり立派な物を発見し得ないのは無理もない話である」と、生田長江は書いている。併し、この晩年一種の日本主義に転向した批評家も、次のことは認めねばならなかった。「従来日本に、偉大なる思想及び思想家がなかったというような、馬鹿なこと

を言う人間があれば、流石の私も聞き流しにしないつもりだけでも、我々の先祖に、偉大なる学問も学者もなかったぢやないかと言う者に対しては、残念ながら其の通りと、同ぜざるを得ないのである」。日本に哲学がないと云うのは、長江のいわゆる「学問」としての哲学に関しているのである。

同じように、日本の文学には思想がないと云われている。日本の文学に一般に思想がなかったのではない。むしろ思想という概念の意味が現代の日本人の常識にとつて變つてきているのである。従来日本の小説は情事小説のみであつて、恋愛小説はなかつたということ(中村武羅夫氏)も、日本の文学には思想がないというのと同様の意味において云われ得ることである。

日本に哲学がないと云えば、そのような哲学は日本には不要だと考えられるかも知れない。併し事實は現在全く反対になつて注目に注意しなければならぬ。

スペインの内乱を契機として愈々明瞭になつたヨーロッパの混乱は単にフランス、ロシヤ、ドイツ、イタリアというような国と国との争いとしてのみ見ることができぬ。それは階級と階級との争いの意味を含んでいる。しかもそれは特に思想戦争の意味をもっている。それは昔の宗教戦争に代る新しい思想戦争である。もしそうだとすれば、この世界的危機に、日本は如何なる思想、

如何なる哲学をもつて対しようとするのであるか。いわゆる日本の思想は如何にして國際的妥当性を有するのであるか。

日支親善、日英同盟の復活などと云つても、それは今日もはや単に国と国との問題に留まらず、階級の問題、更に特に思想の問題を含むことを考えねばならぬ。日本に哲学があるかという問いは、単に哲学者にのみ関わることでない。

(八月十八日)

## 派閥の醜争

先般九州帝大医学部附属病院において、重病の婦人患者手術中の一博士を数名の同僚が室外に拉致して暴行を加えたという事件が生じた。これは単に学内の不祥事件にとどまらない。人命を預かる医者としての責任があくまでも追及さるべきである。

この不祥事件は派閥の暗闘に基づくと伝えられているが、近年多くの官立並びに私立大学における騒動がこの種の暗闘に原因を有することに注目しなければならぬ。由来、学校騒動は日本の名物であると云われている。その学校騒動も、往年の思想問題に影響された学生ストライキ時代

には幾分明朗なところもあつたが、この頃の如く教授自身の間の暗闘が原因であつては如何にも陰気である。派閥の争いというような封建的なものが、最高の文化人と目せられる大学教授の間に存在するということは顰蹙すべきことである。

派閥の醜争は我が国の社会の諸方面において認められる。その弊害はもとより少なくないが、なかんづく遺憾なことは、かような争いのために社会から優秀な人物が失われるということである。派閥の対立するところでは、特色ある人物は斥けられ、両派のいずれからもあまり問題にならないような平凡な人間が用いられる。また一つの派閥に依頼する者は、その埒内から食み出して自由に自分を伸ばすことができず、人間も学問も小さくなつてしまう。今日我が国の社会の各方面において人物払底が歎ぜられているが、その重要な原因の一つは派閥関係にあると思う。

派閥は主義や思想の対立に基づくものでない。それは客観的な、公共的な原理に依る結合ではない。派閥の争いの盛んな我が国においては、却つて、真の意味での学派の対立の如きものは存在しない。反対者の立場というものが認められず、重んぜられず、また無力であること、我が国におけるが如きは稀であろう。流行というようなものによつて総てが一色に塗られてしまう。しかも、いわゆる全体主義の思想で塗りつぶされたように見える今日においても、派閥の分裂、暗

闘は依然として到る処に存在する。反対者の立場を認めて公けの場所を与えよ。これが派閥の弊をなくする道である。  
(八月二十五日)

### 英雄主義の待望

青年論だの、道徳論だの、ヒューマニズム論だのが相変らず論壇のトピックとなつている。一体それらを問題にすることによつて何が期待されているのであろうか。私はそこに英雄主義の待望を感じる。

何もかも衰弱している。不健全などという比ではない。不健全と云われるものは見方を変える。と健全だとも云うことができるが、衰弱しているものはどうにも弁護の余地のないものである。とりわけ思想の衰弱は甚だしい。思想の混乱などと云うのは、現在では誇張乃至虚栄に過ぎず、目立つて感ぜられるのは思想の衰弱である。

かような衰弱は局限された現実への追隨もしくは妥協から生じている。局限されたというのは、発展的に見られていないということである。そして悪いことには、かような追隨または妥協が現



実主義或いは客観主義の名において弁護されている。現実主義は一つの思想であるが、そのような追従または妥協はそうでなく、却つて現実主義の思想の衰弱から生じたものにほかならない。

不安の思想の衰弱が今日の不安であり、デカダンスの思想の衰弱が今日のデカダンスであり、ペシミズムの思想の衰弱が今日のペシミズムである。従つてそれらは何等人間性の高貴に値する不安でも、デカダンスでも、ペシミズムでもない。思想に生きる精神、抽象的なものに身を捧げ身を滅ぼす情熱が要求されている。泥沼に落ち込んだ現実主義からの主観性の昂揚が英雄主義の名において要求されている。思想という抽象的なもののために生きまた死ぬるということは非現実的だと云われるであろう。併し現在のあらゆるものの衰弱状態は、感覚的な現実性だけではどうにも救われないことを示している。思想が現実よりも具体的であることを知るのが弁証法の精神である。

政治の衰弱も著しいではないか。庶政一新とか国策の確立とか、いろいろ元気のよいことが云われてきたが、その庶政一新の国策が決定発表された今日において、誰もが痛切に感じているのは政治の衰弱である。政治の衰弱は政治の無思想に由来する。ここでも要求されているのは思想に生きまた死ぬるという英雄的精神である。

主観性の復権！現代の唯物論と現実主義にも拘らず、寧ろそれらの故に、主観性の昂揚が要望されている。それは現実が困難であればあるほど愈々要望されるのである。（九月一日）

## 素人の説

絵のことは分らんと云った人が美術学校の校長になった。それは多分謙遜から出た言葉であつたらう。絵のことは分らんと云った人が美術院改組に手を着けた<sup>i</sup>。だから問題は特定の個人に關しない。前文相川崎氏は文政については素人であつたが、今の文相平生氏も素人らしきがあると云うので却つて好感を持たれているようだ。

由來文政関係では特にそういう素人が多いことに注意すべきである。美術学校の校長が絵のことは分らんと云つても、それで通るのである。これが他の方面になると、大蔵大臣が、おれには租税のことは分らんと云い、司法大臣が、おれには民法のことは分らんと云つて、それで通るのであろうか。そこに少なくとも伝統的な文政輕視が認められる。ただ思想問題だけは別のようで、

i 松田源治による1935.5の改組、翌1936再改組。川崎卓吉文相は一ヶ月のみ、二二六事件後平生三郎文相。

おれには思想のことは分らんと公言する人はいないのが不思議である。思想のことは絵のことよりも容易なのであろうか。

素人の長所は屢々説かれている。専門家の限界が局限され易いに反して素人は大局に目を附けることができる。専門家が情実にとらわれるに反して素人はそれにとらわれない。専門家が臆病になりがちなのに反して素人は大胆に行動することができる。だから改革には素人が適任だ。確かにそんなところがある。今日の如く改革の要求される時代には各方面において大いに素人の意見を用いることが必要であらう。

併しそういう「素人」とは何であるか。もし素人という意味が或る事柄について元來無関心で、従つて全く無知であることならば、そのような素人の考えは用をなさない筈だ。また素人とは専門家の偏執を有しないものという意味であるならば、素人と云われる人が実は素人でない場合が少なくない。法科万能の我が国では、或る事柄について素人と称する人が何等素人でなく、却つて法律的な考え方にとらわれていることが多いのである。何でも法律的な頭で考えてゆくのでは素人の好きは現れない。特に法律的な頭は前例というものを甚だ重んずる。だから素人であつても思い切つた改革は行い難いのである。

ほとんどの素人は治める者に対して治められる者、命令する者に対して命令される者、教える者に対して教えられる者の中にある。後者は前者の行動について直接の利害と関心を持ち、しかも前者とは逆の立場、裏の側から物を見ることができ、つまり素人を重んずるとは大衆の考えを重んずることであり、素人であろうとする者は大衆の立場を代表する者でなければならぬ。そうすれば事に当るのは専門家であるのがよい。

(九月八日)

## 二律背反の問題

全国特高課長会議の結果内務省の邪教取締は強化されることになったが、一方文部省でも専門学者を動員して学問的に邪教批判を行うと云う。いわゆる邪教の蔓延の如何に深刻であるかを思わせる。

学問的に邪教を批判するとなると、邪教と正教、迷信と正信の区別、進んでは知識と信仰、科学と宗教の関係を学問的に明らかにすることが必要にならう。科学と宗教の問題は西洋においては重大なアンチノミーとして現れ、キリスト教神学並びに哲学の発展を規定している。我が国の

仏教は古來そのような二律背反を知らなかった。そこに東洋的智慧の特色が形作られ、その具体性があると共にまたその韜晦性とうかいが生じているのではないかと思う。

文部省の行おうとする邪教批判は宗教そのものの立場というよりも思想国策の立場に立つものである。そこに宗教と政治の問題がある。一方陸軍でも広義国防の見地から宗教家の動員を企て、仏教各宗の有力者をもつて組織される明和会と軍部との懇談会が先般開催された。宗教と政治の關係は愈々密接になりつつある。宗教と政治も西洋においては絶えず二律背反の問題として現れ、それがキリスト教の社会哲学の發展を規定している。我が国の仏教は同じような問題を殆ど有しなかつた。近頃日本仏教の特質として国家本位ということが頻りに唱えられるが、もしそうだとすれば、それは日本仏教が政治と宗教の問題をアンチノミーとして知らなかつたことを意味するのでなからうか。そこに日本仏教の現実主義の特色があると共にまたその現実主義が現実追隨に墮し易い理由があるのではないかと思う。

仏教は弁証法的だと云われている。ただその弁証法が科学とか政治とかという最もなまの現実に関わるものとの二律背反の問題に實際的にぶつつかつて戦つていないとすれば、その勝れた現実主義も、一方消極的には心境的なものになり易く、他方積極的には現実に対して批判的原理を

有せぬ現実追隨に陥り易いのである。例えば世間出世間というのはひとつの二律背反である。この二律背反に固執すれば抽象性に陥る。併し抽象性に身を滅ぼす危険を冒し得る者のみがほんとは弁証法的な具体性を獲得することができる。真の宗教家はかかる現実否定の冒険をした人である。現実主義の名のもとに主観性の冒険がなくなり、弁証法の名のもとに抽象性の冒険がなくなり、かくて現実への屈従のみが今日目立っているのは仏教界のみのことではないようである。

(九月十五日)

## 人文教育の矛盾

我が国の中等学校高等学校などで一般に課せられている漢文というものは、西洋諸国におけるギリシア・ラテンの古典に相応すると云われるであろう。それは人文教育と称せられるものである。教育における単なる実利主義、能率主義の立場からかような人文教育の不必要を唱える説には遽に賛成し難いが、しかし漢文乃至漢字と西洋古典との間には性質的な相違があり、我が国における人文教育上大いに反省を要するものがある。

先ずギリシア文化の如きは、そこに学問の理念が生れ、諸科学の淵源が存し、かかる古典を基礎とする人文教育は知識や科学に反対しないけれども、漢学的教養の結果は今日も屢々智育を軽視もしくは排斥する傾向を生じている。漢文で鍛えられた人間にはかかる人文教育の好きも確かに認められ得るが、科学に対して救い難い偏見を有する者が少なくないことも事実であろう。

次に漢文は人文教育と見られ得るにしても、その内容は支那古典の一特性としてヒューマニズムチックであるよりも遙かに著しく政治的イデオロギーを含んでいることに注意しなければならぬ。人文的教養と考えられる漢文は人々の心におのずから一定の政治的イデオロギーを深く浸潤させる。いわゆる治国平天下式イデオロギーであつて、我が国の政治家、官吏、軍人等の政治思想は今日もこの種のものに止まつているのが案外多いのではないかと思う。そしてそれが政治についての進んだ科学的見方の障礙しょうがいとなつている。

漢学的教養のかくの如き弊害の影響は今日の支那問題にまで及んでいはいはしないであらうか。それは特に支那についての、就中その政治的部面についての科学的考察を妨げている。政治家、官吏、軍人等の「支那通」の科学性が疑問である。今日の支那の外交をいつまでも「以夷制夷」とか「遠交近攻」とかと批評しているようでは、問題の解決は覚束ないのではないか。いずれの国

の外交に夷を以て夷を制すとか遠交近攻とかという要素を含まぬものがあるうか。問題の本質をもっと的確に捉えなければならぬ。日支親善と云つても、いつまでも治国平天下式イデオロギーを基にしているは無力に終らざるを得ないであろう。

これは単に対支外交にのみ関することではない。そこに我が国における人文教育について根本的に考え直さねばならぬ問題がある。

(九月二十二日)

## 知識と伝統

ひとのみち教団に対する弾圧が遂に開始された。全国百万と称する信者の大多数は知識階級であると云われている。この教団に限らず新興宗教の信者には知識階級の者が多いということは注目すべき事実である。

かような事実は、他面から見れば、伝統的宗教即ち仏教の如きが現在知識階級にとって魅力を有しないということを示している。仏教家自身このことを知っており、知識階級に対して積極的に働き掛けることを怠つたばかりでなく、それを避けていたときえ見受けられるのである。



知識階級が迷信乃至邪教に趨<sup>ま</sup>り易いということは、この階級が本来一個の階級でなく、いわゆる中間層として動揺的であるということに基づくと考えられる。併しそれはまた我が国における知識と伝統との特殊な状況に原因をもっている。仏教の如き伝統的宗教が知識階級に対して特別に困難な状態にあるのもそのためである。

我が国の知識階級にとつて「知識」とは主として西洋的知性であり、このものは未だ根強い伝統となつておらず、他方この国の古い伝統は彼等の知識に対してあまりに無力である。知識と伝統とは乖離して、その間に彼等は動揺し、真の精神的郷土をもたない。かような乖離の故に彼等の知識は脆く、そこに巧に乗じているのが新興擬似宗教であると見られるであらう。

迷信乃至邪教の流行はいわゆる「知性の敗北」からは説明されぬ。知性の敗北などと云い得るほどの知性の伝統は我が国には存しないのである。また迷信や邪教は自由主義者の説くような合理主義によつて救済することもできぬ。知識が歴史的でなく、伝統が知識的でないところに、今日我が国において迷信や邪教の蔓延する大きな原因がある。

知識と伝統との乖離をなくするには、何よりも伝統の科学的考察が必要である。知識が歴史的でないということ、即ち真の「歴史的意識」が発達していないということも、我が国の伝統もし

くは歴史に就いての真の科学的研究が抑圧されている結果である。今日ほど歴史が喧しく云われることはない。しかもまた今日ほど歴史の科学的考察が無視され乃至圧迫されていることの甚だしいこともないのである。この「歴史的」時代に歴史が存しないという有様である。この国における知識と伝統との乖離は保守的な態度によつては克服されない。伝統を毀すことを恐れない者のみが真に伝統を活かし得るのである。

(九月二十九日)

## 青年日本

青年は人生において最も抽象的な時期だ。その思考は純理的で、また理想的で、その感覚も感情も新鮮で主観的である。青年は理論のために身を破滅させることもできるし、学問や芸術のために実生活を犠牲にすることもできる。実生活から見れば理論は抽象的なものだし、日常生活の具体性に比しては学問や芸術、その他一般に歴史的と云われる行動は抽象的なものだ。

抽象的なものに生き得るということが青年の特徴であり、青年性とは抽象的なものに対する情熱のことである。この情熱を失うとき、ひとは老人になる。私は何も青年が感情に破滅すること

を望んでいるのではない。今日の青年に対し特に望ましいものは科学とか理論とかという抽象的なものに対する情熱である。彼等の現在の精神的状況にとって極めて顕著な現実主義が彼等からこの情熱をも奪い去ってはいはしないかを恐れる。

一体、抽象的になり得るといふことが人間の特性である。動物も神も抽象的にはなれないであろう。人間のみが主観主義的抽象性にも逆にまた客観主義的抽象性にも陥り得るのである。主観主義と客観主義とは決して遠く離れたものではない。科学のような客観的抽象的なものが発達しなかつた従来の東洋においては純粹な主観主義も発達しなかつた。

東洋思想から見れば西洋思想はいかにも抽象的だ。東洋人の生活及び文化の具体性は高く評価されて好いと思う。併し抽象的になるといふことは、神もしくは自然と等しくなることでないにしても、極めて人間らしいことであつて、西洋思想の一般的基調がヒューマニズムであり、伝統的な東洋の自然主義乃至実相観にヒューマニズムの要素が乏しいといふことも、そこに理由がある。西洋人の生活及び文化にとりわけ青年らしさが感ぜられるのも、そこに抽象的なものに対する情熱が動いているからである。

もとより抽象的なものはどこまでも超克さるべきものだ。だが先ず抽象的なものを徹底的に追

求した上で弁証法的に達せられる具体性でなければ真の具体性ではなからう。我々は東洋の人間として抽象的なものを最初から恐れ、斥ける性向を有するため、あまりに屢々無思想に、もしくは折衷主義的無理論に陥つてはいはしないか。「青年日本」は科学、理論、思想という抽象的なものに対する情熱から生れ得るのである。

(十月六日)

### 保健問題の深刻性

壮丁の体格、学生の健康の年々低下しつつあることが統計によつて示されている。これは今日最深の憂いである。この問題について関係各省が協力して衣食住の各方面に互り調査を遂げることになつたというのは、ともかく悦ぶべきことである。

この問題はどこまでも具体的に、広い視野において考察されることが必要であらう。青年の健康状態は国民全体の健康状態と関係があり、国民の健康状態はその生活状態と関係がある。従つて問題は国民の生活向上の問題にまで溯つて考えられねばならぬ。青年の保健問題もそのあらゆる面において「国民生活の安定」という今日最も深刻な問題に接しつらなっている。

現代青年の頹廢については屢々語られてきた。それは主として精神の頹廢の意味において語られてきたのである。しかし我々はそれが単に精神の頹廢でなく、また肉体の頹廢であることを知らねばならぬ。健全な肉体に健全な精神は宿るとすれば、肉体の頹廢から精神の頹廢が生じたのであろうか。頹廢は精神と肉体との別を知らない、そこに現代の頹廢の深刻性がある。頹廢において精神と肉体とを区別しなかつたところにニーチエの洞察が存した。

現代青年の現実主義についても屢々語られている。彼等における東洋的な明哲保身の思想の復活も指摘されている。しかし我々は次第に悪化してゆく彼等の健康状態においてそのような現実主義の限界を認めねばならぬ。彼等の現実主義にも拘らず彼等の頹廢は遙かに深刻である。逆に云えば、今日の青年について非難もしくは称讃される現実主義または東洋的智慧はそれほど彼等の身についたものでなく、考えられるよりも遙かに表面的であり、皮相的である。そこに我々は現代青年が依然として一つの新しい世代であり、彼等には新しいイデーが必要であることを知り得るのである。

近年いわゆる非常時にふさわしく総ての機関を動員して青年の訓練が行われている。しかしその指導方針がどれほど有力であつたか、年々悪化してゆく青年の健康の一事を考えてみても、甚

だ疑問になるであろう。肉体の頹廢と精神の頹廢とは分つことができぬ。社会に希望があれば人間も健康になる。自己の使命の確信があれば肉体の力も出てくるものである。いわゆる非常時意識が却つて青年の肉体の頹廢にとつてその原因となつてはいはしないかが危まれるのである。そこにまさに今日の保健問題の深刻性が潜んでいる。

(十月十三日)

## 古典と検閲問題

検閲のことがこの頃また喧しく云われている。映画に、出版に、ラヂオに、レコードに、絵画に、その他各種の興行物に、言い換えると文化のあらゆる方面に互つて検閲が強化され、論議を生じている。これは主として現代物に関することであるが、古典に就いても同様、種々問題があるのである。

日蓮聖人の遺文には、今日の国体觀念及び社会情勢から見て不穩当な点が尠くないというので、先にもその遺文集が数個所に互つて削除を命ぜられたことがあつたが、最近またまた、聖人の書を自叙伝風に編述した一書が検閲にひつかかり、問題を惹起している。日蓮といえば普通には最

も熱烈な愛国者と考えられ、且つ聖人の崇拜者には愛国主義者国家主義者と称するものが多いのであるが、その遺文がかように度々削除の厄に会うということは世間の常識に反することである。

尤も、聖人が現代の日蓮主義者と同じ型の愛国主義者国家主義者であつたかどうか、疑問である。その性格のみから云つても、宗教的人格日蓮は彼等の如く単純な人間でなく、日本人としては殆ど類のない複雑な深さがあつたように思われ、その点で私などもひそかに聖人を思慕している次第である。それはともかく、古典にして近年検閲に関する災害を蒙るものは日蓮の書に限らないので、調べてみればなかなか多いのである。

いつたい古典とは種々の解釈を容れ得るほど豊富な内容を含むものである。唯一通りの解釈しか許さないような書物は永続性を有しないと云つてもよいので、種々の時代において種々の立場から種々に解釈されて絶えず新しい意味が見出され、新しい影響を与え得るものにして永続性を有し得るのである。古典はその解釈の歴史を有し、この歴史は一般の思想史と歩調を一にして変化するのがつねである。

或る時代に重要とされなかつた個所が後の時代に重要とされ、或る立場から問題にならなかつたことが他の立場から問題にされるようになる。それ故にもしそれぞれの時代にそれぞれの立場

から不都合と考えるところを次第に削除してゆくとすれば、遂には原文の何物も残らないということになるであろう。今日不都合と見られる部分が後世の人には却つて甚だ貴重と考えられるに至るといふことはあり得ることである。従つて古典はどこまでも原形のままで伝えるということが文化に対する我々の義務でなければならない。

かくて一般に検閲に関して無制限な自由があるとは思わないが、検閲の強化が文化の破壊となるべき性質を有することは注意を要する。やがて「古典」となるべきものが現在作られていないと誰が保証し得るであろうか。

(十月二十七日)

## 故郷なき市民

市會議員の質の向上が東京にとって焦眉の必要であるとは、久しく云われていることである。都制が布かれて、市會議員が都會議員と名を変えようかどうか、この必要には変りがない。

智的に啓蒙された人間、政治的な関心を有する人間が最も多い筈の東京の如きにおいて、その市民の選出する議員の質が最も屢々問題になるということは、ちよつと解し難いことのようにであ



る。それには種々の原因があろうが、中にも、市民に愛市中心が乏しく、愛市中心が乏しいことは市民が自分の住む都市を故郷として感じないのに基づくということが、その原因の一つとして挙げられている。市民の多数は地方から移つて来た者であつて、その住居も常なく、東京に対し故郷の愛を抱いていないと云われるのである。

近代都市の住民は故郷を持たない。これは彼等がこの都市で生れたものでないということにのみ依るのではない、そこで生れた者にしても故郷の感情というべきものを持たないのである。故郷を持たぬということは近代的市民に本質的な意識に基づいている。なぜなら「故郷」と云われるものは多く封建的なものと結び附いた感情であるからである。山河、墳墓、祖先以来の定着地、また祖先以来互いに知り合つている人間の生活、かようなものが故郷の意識を形作つてゐる。それは根本において封建的な生活様式と結び附いたものであり、近代的な生活と共に破壊されてゆく性質のものである。

従つて近代的市民の愛市中心は故郷に対する愛の如きものとは異なる性質のものでなければならぬ。それ故にまたその選出する市会議員の質が良くないということは、都市生活者がこのような新しい社会意識を有せず、却つて封建的なものを多く残存せしめてゐるのを現すことになるので

ある。真の愛市中心の基礎となるような新しい社会意識が作られるためには、公園、クラブ、会館、運動場、図書館、消費組合等々の諸公共設備の発達が緊要なことであろう。

東京市民などが愛市中心に乏しいのは、彼等の中には市のことよりも国家全体のことに関心を有する者が多いためであるとも云われているが、併し愛市中心がもし「故郷」に対する愛の如きものであるとすれば、それは局限された、地方的利害を中心としたものとなるのであつて、かようなことが実は従来地方の政治、延いては国家全体の政治にいろいろ弊害をもたらしており、これは地方においても克服されねばならぬ封建的意識である。

(十一月三日)

## 現代教養の困難

近来、教養について色々論ぜられているが、それは単に議論の問題でなく、教養に対する要求は実際に活潑になつてきたようである。青年たち学生たちの間から、「何を読むべきか」という問が盛んに発せられるようになったことは、この頃の注目すべき傾向であると云われている。私はそこに我が国におけるヒューマニズムの問題が決して抽象論でない一証左を見る。

しかし現代において教養の問題もあらゆる他の問題に劣らず動揺し、困難な状態にある。「何を読むべきか」という問が活潑に発せられること自体、この動揺を示している。また最近、著名な社会評論家たちの恋愛事件が相次いで世間の注意を惹いたが、かような事件にしても、表面的な道徳的問題にとどまらず、現代教養の困難を語るものである。

教養といわれるのは単に専門的乃至職業的知識のことではなく、人間が真に人間らしくなるために必要な知識のことである。どのような専門家乃至職業人も先ず人間であり、また真の人間とならねばならぬ以上、教養は凡ての人に要求される。かくして教養の観念の根柢にはつねに人間の観念が含まれている。各時代において人間の観念が変化するに依じて教養の観念も変化し、そこから教養の方向も内容も変化するのである。

現代教養の動揺はそれ故にこの時代における人間の観念の動揺を示すものにほかならない。或いはこの根本的な意味における倫理の動揺が現代教養の困難の深い原因である。人間の観念が確立されなければ教養の観念も確立されない。或いは現代的教養の要求は謂わば無意識的に新しい人間の観念の確立に対する希求を現している。

例えば、最も「現代的」と云い得る教養は科学的教養である。しかるに従来の人文主義的な教

養論は、教養の中で科学に高い位置を認めず、寧ろこれを固有な意味における教養的なものから除外した。今日のいわゆる智育偏重の議論の如きもそのような教養論に基づき、その根柢にはそれに相応する人間の観念が存するのであつて、決して単なる知識論にとどまらない。ひとはそれに対し単に知識の意義を力説するのみでなく、寧ろそのような人間の観念そのものを根本的に批判することが必要である。

我々は実に、現代青年の教養に対する一般的な要求の中から、真に新しい人間の観念、従つてまた新しい倫理が確立されることを期待するものである。

(十一月十日)

## 取締政治

先夜自動車の中で私はふと考えた、一体この車内の電灯は何のために必要であらうかと。大抵の人は自動車の中では静かな気持を欲するであらう、私などただ電車やバスの騒々しさを避けるためにタクシーに乗るといふ場合が多い。静かな気持を欲する者にはこの電灯は邪魔になる、車内は暗い方が好いのである。

そこで私は、この電灯は車の運転上必要であるのかと、運転手に尋ねてみた。それは運転にとつても却つて妨害になる、車内の電灯が車の前面のガラスに反射するために幻覚を起すこともあるそうだ。併しそれを点じていないと二円の料料に処せられる。この電灯はただ全く乗客に対する取締のために必要なのである。運転手は斯う答えた。

取締！ それは我々の生活のあらゆる方面に立入つてゐる。それは外国人には考えられないような所にまで及んでいる。かかる取締は近來益々強化される傾向にあり、そのために民衆の生活は愈々窮屈なものになつてゐる。およそ我々は「生の悦び」の觀念を持つてゐるか、また持ち得るのであるか。

取締政治は国民の道徳心を向上させるものでなく、寧ろ反対である。取締の強化は人々に、法律にさえひつかからなければ何をしても好いというような觀念を植え附け易い。人間は、自由が認められている場合却つて、自分の責任を強く感じるものだ。我が国において社会の道徳的制裁が微弱であること、また公衆道徳というものが発達してゐないことなども、あまりに嚴重な取締政治が行われている結果であると考え得るであらう。

取締政治は人間性の明るい方面を見ないで暗い方面のみを見てゆく。それは民衆に対する封建

的な考え方であるが、官僚政治はとかくそのような傾向を有するのである。人間性に対する信頼に基づいて民衆を信頼するということが、現在我が国の政治に要求されるヒューマニズムの精神である。

指導政治と取締政治とは、外見が類似するにしても、實質は反対である。政治に真の指導精神が存しないとき、或いはその指導精神と称するものが大衆性を有せず、従つて真の指導性を有しないとき、政治は取締政治となる。真の指導政治は大衆性を有するものでなければならぬ。大衆性を有しない指導政治は何等指導政治でなく、いわゆる官僚的独善主義の如きものに過ぎない。

近年頻りに指導政治ということが云われているが、それが真の指導政治であつて、取締政治の粉飾でないことを要望する。

(十一月十七日)

### 統制と空想

現在、統制主義というのは、あらゆるものを一定の政治的目的に従属させる政治主義である。統制経済と云つても、純粹な経済的原理に依つて経済を統制することではなく、寧ろ政治的見地に

従つて経済を統制することであろう。それ故に統制主義は自然性を否定すると共に、自律性を否認することになる。

政治は最も實際的なものである。併しまた政治ほど空想的なものもない。統制主義が強化される場合、経済の如き現実的なものも、その自然性を失い、自律性を奪われ、そして謂わば空想的な基礎に立つことになる。空想的な基礎に立ちながらそれがとにかく維持されるのは、政治的權力に依る統制が強行されるためである。

現代における独裁政治は、自然性と自律性とを基礎とする自由主義を否認し、この立場からは空想的と見えるような基礎の上に統制主義を実行している。この政治的実験は従来殆ど不可能と思われたことが或る程度まで可能であることを示している。

我々は必ずしも統制主義に反対しないであろう。我々の悲しむのは却つて、この場合政治家にヴィジョンがないということである。統制主義者は善かれ悪かれ空想家である。不幸は、どのみち空想家たらざるを得ぬ彼等に幸福な空想がないということである。政治的ヴィジョンを有しない統制主義が近頃官僚政治と云われるものである。

馬場財政は三十億円という膨大な予算を編成した。我々はこの数字に驚きはしないであろう。

一度走り出したものは停ることができぬ、後戻りは絶対に不可能である。今や我が国家の経済も空想的な基礎に立ち始めた。統制は愈々強化されるのほかない。我々はこのことをも敢て歎かないであらう。

だが如何なる統制主義も空想的なものを永続させるわけにはゆかぬ。現実には空想的なものに代わられることによつて自己の没落を速める。現代の経済が空想的な基礎に立つに至つたということは、それに従来とは全く異なる新しい現実性が与えられねばならぬことを意味している。統制主義にはかかる新しい現実性を創造してゆくヴィジョンが必要である。ヴィジョンは単なる空想でなくて創造的であり、合理的な道によつて得られるものでないが本質は合理的なものである。

馬場蔵相はかようなヴィジョンを有するであらうか。政治家に何等のヴィジョンもなく、しかも彼等の政治の基礎とするものは次第に空想的なものになりつつあり、極めて実際的であるかの如く自任している者が実は単なる空想家であり、他方空想家らしく気取っている者がその実没落しつつある古い秩序に固執する現実家に過ぎないのではないか。  
(十二月二十四日)



## 原版後記

ここに集められた小論八十四章は、筆者が読売新聞夕刊「一日一題」に寄稿したものである。昨年三月以来、筆者は毎週火曜日のこの欄の執筆を担当してきたが、これらの文章は大抵その前夜または当日早朝に書かれた。今その順序に従って収めたのは、それが筆者の眼に映じた時代のクロニクルの意味を有すると考えるからである。これらの小論がその発表の場所によつて制約されていることは云うまでもない。しかし筆者は、一方一時的な現象を取上げながらその中により永続的な問題を考え、他方より一般的な思想を時事的な問題に関わらせて述べることに、許された範囲内で努力したつもりである。この書の読者は筆者が如何に深く日本を愛しているかを疑わないであろう。もしこの書において日本の現状に対する不満のみが目立っているとすれば、語るに値するのはただ幸福を準備するもの、もしくはこれを破壊するものであつて、幸福そのものではないからにほかならぬ。幸福そのものは沈黙の貞潔を求める。時代の現象の分析と批判とを通じて筆者が主として問題にしたのはモラルである。これらの小論の多くが人間性の問題を基礎と

した時評であるのはそのためである。ここに再び版にするに当り、これまで屢々書信を寄せて筆者を励ましてくれた既知及び未知の熱心な読者に心から挨拶する。

一九三六年十二月

## 現代の記録

- 序○ 歴史の弁証法○ ドイツ的偏向○ 非常時と民主性○ 知識は飢える○ 新生活運動○ 対外政治の優位(一九九) 婦人と学校○ 命令と指導○ 強力内閣○ 日本精神の限定○ 文政の一貫性○ 家族観の混乱○ 強国日本○ 対外文化の国内問題○ 世界の鏡○ 大衆の良識○ 大道庵<sup>テ</sup>有<sup>リ</sup>仁義○ 国民の立場○ 政治と説教○ 学生の風俗○ 単純化と綜合化○ 国民歌謡○ 精神家○ 大衆との距離○ 官僚デイレクタンティズム○ 政治と宗教○ 文化の権威○ 「新全体主義」○ 心の準備○ 世界教育会議○ 試験の矛盾○ 政党と文化運動○ 大なる覚悟○ 不運なオリンピック大会○ 文化工作の前提○ 事変と生活○ 想像力と政治○ 冷静と冷淡○ 宣伝と教育○ 忘れられた問題○ 真実は尊い○ 支那語の学修○ 世界の秩序○ 北支文化の一礎石○ 予言の一年○ 「黄禍」○ 長期戦の覚悟○ 官吏の再教育○ 革新と実験○ 理想の再生○ 宗派運動と全一運動○ 政治と道徳○ 外国理解の困難○ 叱られる知識階級○ 文化政策の水準○ 「政界」の解消○ 合理性と積極性○ 米国への関心○ 行動の哲学○ 科学思想の普及○ 遅れる政治○ 新文相への期待○ 革新の基準○ 国民への信頼○ 学生狩り論争○ 世界的日本人○ 統制の社会的意義○ 自然と人為○ 「長期建設」○ 革新の連繫○ 民間意見の重要性○ 研究機関への希望○ 職業と思想○ 統制と倫理○ 天災の教訓○ 淫祠邪教の蔓延○ 新しい神話○ 理論と行動○ 国民心理の解明○ 事変の進歩的意義○ 内鮮一体の強化○ 不安な文化○ 思想を越ゆるもの○ 日本文化の自主性○

## 序

この小論集は、曩さきに同じ書店から出版した『時代と道徳』に続くものであつて、前集と同様、筆者が毎週火曜日読売新聞夕刊「一日一題」欄に寄稿した八十四章の短文から成つてゐる。今その校正刷を読んでいると、私にはさまざまな記憶が甦よみがへつてくる。これまで日記というものをあまり書いていない私にとつてはこれらの文章が殆ど唯一の生活記録であり、また近年用事以外の手紙を次第に書くことの稀になつた私にとつてはこれらの文章がおのずから知人に対する書簡の代りともなつた。長い日記や手紙を書くことのできた古人の生活は羨望に値する。私としてはたといこのような形においても日記と書簡の代用物を遺すことのできたのをせめてもの慰めとするのほかに、これらの蕪雜な文章に対してなお愛着を覚えるのである。ひとはそこに私の見地から見た現代の記録を見出すであらう。

この集は二年の歳月を記録している。その間に世の中には大きな事件が次々に起り、政治も、経済も、文化も、思想も、風俗も、社会心理も、もはや元の俛ではない。その激しい変化にも拘

らず、ここに収められた文章のうちになお何か一貫したものがあるとすれば、それは私の性格的なものであろう。個々の議論としては現在訂正を要するものもないではないが、私は何よりも著者の性格的なものにここを留める読者にこの本を送ろうと思う。

一九三八年十二月

東京に於て

三木清

## 歴史の弁証法

日独協定【日独防共協定】の成立は、ともかく、今日においては思想のない政治はあり得ないということを実証した。それは政治を単なる事務、取引とさえ考えた従来の政治家に対して歴史が強制的に与えた重要な教訓である。

これまで日本主義者は、日本主義乃至日本精神はコンミュニズムはもちろん、ファッシズムでもない独自の思想であると主張してきた。更に彼等は、この日本精神をもつて東亜はもとより、全世界をさえ光被し得るとの雄大な抱負を述べてきた。然るに今や、彼等の主張も、彼等の抱負も、彼等自身によつてでないというのであれば、他の何者かによつて、ともかく、裏切られるに至つたのではなからうか。

日独協定の成立は、日本主義乃至日本精神と称するものがそれほど独自なものでないということ、少なくともファッシズムに対して独自性を主張し得る程のものでないということを示したように見える。日本精神が特殊性を有することは疑いなくとも、その普遍的な、国際的な、世

界史的な意味内容においてはファッシズムと別のものでないことが明らかになつたように思われる。ドイツとの提携はファッシズムとの握手でないというが如き詭弁を世界は真面目に信じないであろう。かくして今後は日本精神の独自性ということも単に对内政策上の意味に止まらねばならなくなる。この際我々は日本主義者のために、彼等の従来の主張や抱負に鑑みて、日本精神の独自性を対外的にも実証することをいよいよ希望せざるを得ないのである。

一國がコミュニニズムを採るかファッシズムを採るかは国内的問題であつて他國の關することでないというような自由主義的考え方は、もはや非現実的となつた。國民主義を標榜するファッシズムにしても、世界的ブロックを形成するというのが現代である。

ところで將來の歴史を作るものは果たしてファッシズムであるか、それともコミュニニズムであるか、もしくは或る「第三の思想」であるか。第三の思想といつても、抽象的に第三のものであり得ないのはもちろん、二者の折衷でもなく、却つて対立する二者の一つが自己を發展させることによつて新しいものに転態した形として現れるものであろう。それとも第三の思想は空想に止まるか。ファッシズムとコミュニニズムとの世界的な闘争は今後何を結果するであらうか。思想家も政治家も歴史の弁証法について大いなるヴィジョンをもたねばならぬ時代は來ているので

ある。

(一九三六年十二月一日)

## ドイツ的偏向

最近、東京の町の人の間に英語研究熱が起つていふことである。これは予定されるオリンピック大会東京開催の一産物である。日本主義の立場から外国語学習の有害無益を唱えて、英語教授を廃止した学校もあつたが、必要はすべてを決定するものだ。今度の日独協定の結果、ドイツ語の研究が案外盛んになるようなことがあるかも知れない。

さなくとも、この頃の政府の統制政策を見てみると、獨創性がなく、ドイツ模倣の傾向が著しいと批評する者がある。もしそれが事実であるとすれば、日本民族の名譽のために改めねばならぬことであろう。我が国の大学の学問などにおいてもドイツ的偏向が見られるとすれば、そこで教育されてくる官僚のドイツ模倣は考え得ることである。

近年、我が国の知識階級はファナティックな思想のほか歓迎しないという傾向がある。ファツシヨ的統制主義或いは獨裁思想もこれである。しかし元来、日本人がファナティックな国民であ



るかといえ、寧ろその反対であろう。知識人がフアナティックであるということは、日本にはまだほんとに知識の伝統が存しない兆しであるともいえる。殊にドイツ思想の影響はフアナティシズムに導き易い傾向をもっているのである。だがドイツ模倣的なフアナティシズムが果たして窮極において日本の民衆に共鳴され、納得されるかどうか、甚だ疑問である。

現実的であつて、フアナティックでない点において、日本人はドイツ人よりも寧ろイギリス人に似ている。もちろん日本人は単に實際的で常識的であるとはいえない。しかしアングロサクソン人にしても決して単に實際的で常識的であるのではない。彼等のうちには清教徒の精神がある。自由と平和とを求めて新大陸を開拓したのはその清教徒であつた。今度のエドワード八世陛下の御結婚に関する事件の如きも、實際的で常識的だというイギリス人についての一面の観念を打ち破つて、彼等が遙かに深い心を有する大国民であることを表示したものと見られるであろう。

我々はもとよりアングロサクソン人ではない。私は彼等と同様にドイツ人を尊敬する。けれども我々のドイツ的偏向については大いに反省しなければならぬ。我が国の知識人には、もつと弾力のある、従つて真に批評的な知性が必要だ。ダーウインのような人はドイツ人の間からは出て来ない。アングロサクソンの天才がこの時代に社会政治思想においてもはや何等新しいものをも

たらし得ないとは断言し得ないであろう。

(十二月八日)

## 非常時と民主性

尨大な予算、外交の行詰り、また支那の動乱、等、非常時の感はいよいよ深い。ところで非常時という言葉が現れて以来、我が国の政治において次第に著しいのは、民主的性質が失われたことである。

非常時と民主性とは一致しないか。一見それらは一致しないかのようなものである。だが非常時こそ大衆の協力を最も必要とする時であろう。その意味で非常時は最も民主的でなければならぬ時である。下からの挙国一致に基づかない非常時政治、真の国民外交でない非常時外交の如きは、非常時を克服しないで、却つて非常時をますます非常時たらしめる危険が多い。

非常時は権力を必要とする。従つて民主的であり得ないと云うであろう。しかし権威を有しない権力は暴力に等しい。権力の権威は大衆性を基礎として考えられる。権威を有しない如何なる権力も、結局において大衆に対抗し得ないことは、人口が国力の重要なものであると主張する者

の誰よりもよく知つてゐるべき筈である。

非常時は英雄を必要とする。従つて民主的であり得ないと云うであろう。だが眞の英雄は民主的なものである。その背後に大衆が控えていないような英雄は英雄でない。英雄と予言者とは異なつてゐる。予言者はその時代を超えて民主的でないであろう。哲学者は時に予言者であり得るとしても、政治家は政治家としては予言者に属することはできぬ。

ファッシズムは眞に民主的であり得ないにしても、ムソリーニやヒトラーは、たとい擬装的であるといわれるにせよ、ともかくそのファッシズムに或る民主性を装わさせてゐる。今日の我が国の政治を官僚ファッシズムと評する者もあるが、民主性を擬装する必要をさえ感じないところに、このものといわば英雄ファッシズムとの相違がある。あの「擬装的挙国一致」ということとて、さへ、今日もはや不必要とされつつあるように見える。

民主性の名のもとに単なる自由主義を考へてはならぬ。事実としても、理論としても、言論の無制限な自由というのが如きことは認められないであろう。問題は、単なる自由でなくて寧ろ権威である。だが大衆性を離れて権威は存しないのであつて、大衆の意志の現れるためには言論の自由が許されねばならぬ。

非常時は深化する。非常時と民主性とは矛盾するかの如き錯覚に陥らないことが肝要である。

(十二月十五日)

### 知識は飢える

或る本屋さんが来て話した。

第一の話。この秋東京で行われた図書館祭では、人を集めるために漫才や浪花節をやった。日本の「文化祭」はこの通りである。

第二の話。自分の所で出した書物が文部省や茗溪会けいめい〔東京師範同窓会〕から推薦されるのは有難いが、すると早速図書館からその書物の寄贈を申込みれて迷惑する。図書館には金がないのである。

第三の話。自分たちは『キング』【講談社刊大衆娯楽雑誌】は主として田舎で読まれるものと思っていた。ところがこの雑誌の関係者の話によると、その四割までが東京で売れているそうだ。これが知識人の最も多いといわれる東京の状態である。

かような例はいくらか殖すことができる。そこで先ず日本の文化政策とは如何なるものかと問

い、次に日本に知識階級ありやと問いたくなるであろう。高級綜合雑誌が好んで知識階級向きの問題を取り上げるのも、その重要な顧客が学生であり、日本の知識階級とは学生であるからだと思われている。その学生も卒業して就職し、家庭でも持つようになれば、一家一冊で皆が楽しめるという『キング』党になる者が多い。

我が国における知識の伝統はこのように浅く、知識は実社会の生活から游離している。弾力をもった批評的精神の欠乏もこれに関係している。勿論この際、本を読む暇も金もない一般人の生活状態も考えねばならぬ。

知識は人間に飢えている。人間に飢えた知識は勢い抽象的になる。日本人は抽象的な知識を好むという意見には賛成できぬ、知識が人間に飢えているのである。大衆の血をもつと吸い取らなければ、知識は具体的とならないであろう。

今日、例えば、純文学の読者は殆ど文学青年に、即ち自分でも小説を書いて「文壇」に出ようとする人々に限られるといわれている。文学はただ文壇の内部で回転する。これは結局からまわりである。我々は文学に飢えている、と文学青年は云う。だが実は文学が人間に飢えているのである。

近ごろ教養の問題が注意されたのは、このからまわりを止めることに幾分役立つであろう。しかしそれはあのように人間に飢えている知識を満足させ得るものでない。日本に知識階級ありやの反問がここでも飛び出して来る。今日の問題は「教養」よりも「啓蒙」であるといわれるであろう。知識は大衆の血を吸い、これによつて自己を変化しなければならぬ。大衆の生理的な飢えがなくなるまでその血を吸うことを待たねばならぬような知識は、実は、結局真に人間的となり得ぬものである。

(十二月二十二日)

## 新生活運動

今年は喪中で年始の挨拶を遠慮したが、それでも思い掛けない人からだいたい新年賀状を貰った。一般に年賀状の数は毎年増加しているとのことである。これはむろん、単に好景気不景気の反映というものでなく、民衆の或る一定の生活意識の発達の表現と見らるべきものである。そこに現れた生活意識が西洋的であるか日本的であるかというような議論は、今日では意味がなくなっている。

年始状にまじつて私は「えすぷり団」設立趣意書というものを受取った。この団体の實際、その主唱者等について私は何の知識も持たないが、宣言によると、真に人間的な新文化及び本格的な芸術の誕生のために、その土台となるべき生活並びに生活雰囲気の革新を行おうという青年芸術家の運動であるとのことだ。そのプログラムを見ると、住居、服装、料理、話術、礼儀、恋愛について現代の風俗を批評し、芸術家の生活、交際、対社会的行動について若干の方針を掲げている。

私は今このプログラムを問題にしようとは思わない。ともかく、芸術を志す青年の間から、現在わが国の「一般の悪風俗へ勇敢に挑戦」して新しい生活を建てようとする運動が現れてきたことに興味を感じるのである。明治大正の頃には日本の社会にも種々の新生活運動が活潑に行われた。芸術家に関係のあるものでも、あの青鞥派の運動など社会的影響が大きかったし、武者小路氏の新しい村の如きも新生活運動として世間に知られたものであった。今日新たにかような運動が起るといふことは、ヒューマニズムの擡頭とも関聯して意味のないことでない。新芸術運動が新生活運動と結び附いて現れねばならぬ理由は、芸術そのものの立場からいっても、十分に存在するのである。

新生活運動はもとより単に芸術家に関することではない。それは社会のあらゆる方面において必要である。現在、非常時の重圧のもとに、民衆の生活意志の萎縮、生活意識の矮小化が見られないでない。逞しい生活意志、新しい生活意識の昂揚は文化反動、文化危機と闘うためにも重要な意味をもっている。

この歴史的時代に日常生活の改善の如きは大した問題でないといわれるであろう。しかし政治運動のみが運動であるのではない。政治上、科学上、芸術上の大事件、大事業のみが「歴史的」であるのではない。我々の日常生活も歴史的なもの、創造的なものである。それはいわゆる歴史的な事件や事業の地盤であるばかりでなく、そのものが実に歴史であり、歴史を作つてゆくのである。

(一九三七年一月五日)

### 対外政治の優位

今度の議会において政党は外交問題を中心題目として取り上げ、広田内閣の対ソ対支外交等の失敗を糾問すると伝えられる。これはまことに当然のことと云わねばならぬ。現在の世界情勢に



において外交問題がますます重要性を加えて来たことは明らかである。

そのうえ、我々は、対外政治は国内政治を決定するという事実注目せねばならぬ。それは、例えば日独協定が直接に国内の思想政治に反映するというが如きことのみではない。いわゆる庶政一新のうちにも、増税案のうちにも、対外政策の決定的な意義が認められる。外交問題が優先的に論議さるべき理由は確かに存在する。

いまや我々は十九世紀の大歴史家ランケの卓見に敬意を表してもよいであろう。彼は「対外政治の優位」を考え、対外政治は国内政治を決定するということを歴史研究の原則とした。そしてこのランケは、どの歴史を書くこうとしても結局「世界史」になると云っている。

今日、各国にとって外交問題が重要性を増してきたということは、実にこの「世界」というものが拡大し、拡大すると共に強力になつてきたことを意味する。如何なる国もはや世界を無視し得ないことを知っている。しかしまた現在この世界を無視しようと欲する国が如何に多いであろうか。その力がいよいよ無視し難くなつたものを無理にでも無視せざるを得ない国があるということが世界の現状である。かような矛盾はまさに世界史そのものの矛盾である。

この矛盾からしても、対外政治の優位というものが表面的に理解されてはならぬことが知られ

るであろう。一国の対外政治は国内政治の失敗を隠蔽するために、もしくは転嫁するために行われることがある。我々は、今度の議会においても、外交問題の優先的論議によつて大衆課税、国民生活の安定の如き重要問題が看過されることのないように警戒しなければならぬ。しかし同時に対外政治の失敗がやがて一層強力に国内政治に転嫁されるに至るものであることを忘れてはならぬ。

国内問題の行詰りは対外的に打開されるのほかないと云われるであろう。国内政治が対外政治を決定するように見える。しかしながら注意を要することは、国内問題として現れるものの多くが今日もはや単に一国のみにおける問題でなく、実は世界的な、世界的規模における解決を要求する問題であるということである。従つてここにも対外政治の優位は依然として認められる。眞の対外政治は世界史の進歩の方向に沿うてのみ行われ得るのである。

(一月十二日)

## 婦人と学校

学齡に達した子供を持つ家庭には役所から就学通知書が届く頃である。そして特殊小学校では

入学考查が行われようとしている。役所から指定された以外のかような特殊小学校へ子供を入れようとする家庭ではマダムの心配が始まっている。

大学や専門学校の場合とはかく、中等学校や小学校の場合には、家庭では婦人が決定的な役割を演じている。殊に有閑の婦人はなかなか教育に熱心なようだ。これはもちろん悦ぶべきことである。しかしその反面には我が国の家庭では男子が子女の教育について殆ど全く無関心であるということも含まれているのであつて、これが先ず改善されねばならぬ。

有閑の婦人が教育に熱心であるのは結構なことであるが、熱心も方向を誤ると却つて害悪を生ずるのである。東京の小学校の如きにおいては彼女等が毎日のように学校へ押し掛ける。しかし彼女等の脳裡にあるのはクラスの全体の子供でなく、自分の子供だけであり、そして特に上級の学校へ入学させることである。彼女等の希望は、自分の子供を一般に「善い」学校へ、或いは有名な学校へ入れて貰うことだ。善い学校へ入れようとすることは一面我が国民の進歩的な性質を現すものであるが、他面それは実質の問題であるよりも有閑の婦人の虚栄心の問題であることが多い。子供の素質などはあまり考えられないのである。小学校教育がかかる有閑マダムの影響から独立な見識を具える必要があらう。

上級の学校に接続した特殊学校へ子供を入れたがるということには、将来の入学試験苦から救つてやりたいという母親の気持もある。これは同情し得ることであるが、しかし教育には環境の変化も大切なのであつて、同じ学校にばかりいることは子供の奮発心をなくし、新しい刺戟による自己発見の機会を失わせる等の弊害がある。都会の有閑婦人よ、自分の愛する亭主が恐らく多くは田舎出であり、生れた村の小学校で学んできたことを考えてみよ。優れた学校で下位にいるよりも少し劣つた学校で上位にいる方が子供のために善い。

現在、小学校にも優劣があるのは遺憾ながら事実である。しかし教育に熱心な家庭が皆、役所から指定されたとこの学校へでも子供を入れてその学校を真に善くすることに積極的に働き掛けるならば、それは万人の利益になる。それが愛市中心である。かような心掛けと、そして子供の素質に合つた学校へ入れるという心掛けとが一般にあれば、現在の入学試験苦の如きもよほど緩和されるであらう。

(一月十九日)

## 命令と指導

私の印象に残る宇垣氏は、嘗て私が一兵卒として姫路に入営していた頃、我等の師団長であった宇垣中将である。馬に跨つて練兵場に立つた堂々たる師団長閣下が今も眼に浮んでくる。

だが軍隊では宇垣閣下でも、政治家としては宇垣氏である。軍隊では寺内閣下でも、議會では寺内君と呼ばれる。民間の宴会、それも結婚披露か何かで、「閣下及び諸君！」と呼び掛けて挨拶されると席が急に冷くなるのを感じる。「閣下及び諸君！」では第一、語呂が悪い。招待した方でも客に甲乙があつてはならない筈である。ヨーロッパではドイツが特にこの敬称をやかましく云うようだが、我々日本人がそれを真似る必要もあるまい。

称呼のことはどうでもよいが、「閣下」と「君」との相違は、政治は単なる命令でないことを意味する。政治において国民は単に服従する者でなく、却つて協力する者である。真の拳国一致は単なる号令によつて実現され得るものでない。そこに「閣下政治家」の陥り易い誤謬がある。

政治に民主性を求めることは既成政党を認めることと同じでない。既成政党が果たして国民の意志を代表するか、疑問である。政治の民主性に対する要求は議會政治の単なる擁護と同じでないであろう。しかし政治は命令ではない、命令でなくて指導でなければならぬ。指導はつねに国

i 宇垣一成：181868-1956。このとき、広田弘毅内閣の総辞職後、組閣の大命が下つたが陸軍の反対で頓挫。

民の納得を必要とするのである。

今度の政変は議会における軍部と政党との対立から生じたといわれる。だがもし議会における弁論が単に大臣と若干の議員との間のものでなく、国民の前で国民に対して行われるものであるという考えがあつたならば、今度のようなことにはならなかつたであろう。議会はそれを通じて国民を指導する所でなければならぬ。

政治の民主性は自由主義とは同じでなく、命令政治でない指導政治こそ民主性を必要とする。今日のいわゆる全体主義は、国民から抽象された「国家」というものが何かあるかのような幻想に陥つてはいはしないか。要求されるのは民主性を有する指導政治である。

新たに期待される内閣は軍部政党等の摩擦をなくすべきものであるといわれている。しかし単に諸勢力の摩擦を防がうとするばかりの内閣が役に立たないことは、既に前三代の内閣によつて証明済みだ。我々は眞の指導的政治家を待望する。嘗て我等の師団長閣下であつた宇垣氏の組閣振りを先ず拝見しよう。

(二月二十六日)

## 強力内閣

近年政治上の合言葉として繰り返されるもの一つに「強力内閣」という言葉がある。誰もがみな強力内閣の出現を希望しているように見える。けれども今日の社会では一致して唱えられることもその意味が分裂しているというのが普通である。

現在、強力内閣の出来る可能性があるかどうか、すでに問題であろう。衆目の見るところ、宇垣大将はともかく強力内閣を作るに適任者であった。その宇垣大将が挫折した。今度の林大将は中途で組閣方針を変更したと伝えられるが、これも強力内閣からの一種の後退と見られるであろう。かような事實は、日本の政治的現実のうちに、その支配的勢力のうちに、強力内閣の成立すべき条件が未だ十分に備わっていないことを示している。

その出現の可能性は別問題としても、強力内閣なるものの意味が実は甚だ不明瞭なのである。野蛮人は文明人よりも強力であり得る。間違つた信念は正しい道理よりも強力であり得る。この非常時には何事も断行する力が必要だといわれるであろう。それに相違ないが、しかし間違つたことは断行されるよりもされぬ方が善いのである。強力そのものは質的規定を含まない。何につ

いて、如何なる方向において、強力であるかが問題である。

例えば外交の一元化は強力内閣でなければできないという。だが如何なる方向に一元化されるかが我々には問題だ。庶政一新は強力内閣を必要とする。しかし「庶政一新」という語は強力内閣という語と同様抽象的だ。或る者は二・二六事件以後現れた政治的動向の強化のために、他の者は反対にこの動向を抑止するために強力内閣を求めているとすれば、その意味は全く別のものである。また前の場合にもその行先は何処であるのか国民には示されていないし、後の場合にもそれを何処へ持つてゆこうとするのか明らかでない。

いずれにせよ大衆の支持をもたぬ内閣は真に強力であることができぬ。大衆を納得させるには公明な政治を行う必要がある。「不言実行」という言葉は強力を思わせるために慣用されるが、それが無策無方針と同意味であつたり、秘密政治の別名であつたり、要するに政治の公明性に反するものであり得ることは、我々のしばしば経験せるところである。単なる強力でなく、公明な政治が要求されているのだ。公明な政治は道理に基づかねばならぬ。道理ほど公明なものはない。しかるにただ強圧的であればあるほど強力であるかのように感ずるということは心理的にも生じ易い幻想である。

(二月二日)



## 日本精神の限定

林内閣が発表した五大政綱は、当然のことを当然言つたままで、問題はこれを諸般の政策において如何に具現するかにある、と政党方面では批評している。しかし仔細に点検すると、この政綱そのものにもやはり見遁せない特色がある。

国体明徴は従来の内閣とてもしばしば声明した重要政綱であるが、今度は進んで「祭政一致の精神の発揚」を高唱していることが注目される。これは従来ただ「日本精神の作興」といつていたものを限定したと見られることができ、いわゆる「我邦の独特なる立憲政治」に対する説明も、そこに求めらるべきものであろう。復古主義の色彩はいよいよ濃厚である。

立憲政治に関することは措くとしても、日本精神がかくの如く祭政一致の精神として限定されたということは、先ず宗教界に深刻な問題を投ずるであらう。祭政一致の思想は明らかに神道的である。従来も神道的日本主義の立場から仏教やキリスト教が排撃されたことは稀でないが、ここに更めて政府が日本精神を祭政一致の精神と解釈したということは、かくの如き排撃に公然の

理由と動機とを与えることになりはしないか。これまで仏教家やキリスト者は日本精神に対し何とか解釈を施して時世に順応乃至追隨してきたのであるが、今やその日本精神は政府の手で彼等の解釈の限度を越える程度において神道的に規定されるに至ったのではなからうか。

日本精神の作興自体は反対さるべきことではない。問題はつねにその日本精神を如何に考えるかということであつた。そしてそれは学者や思想家によつて、或いは儒教的に、或いは仏教的に、或いは復古的に、或いは發展的に、種々解釈されてきたのであるが、今や政治的にその唯一の方向が明示されることになつた。何人ももはや政治の優位に対して盲目であり得ないであらう。

我々は政治の優位を率直に承認しよう。しかし同時に我々是对内政治に対する対外政治の優位を考える。日本精神をかくの如く復古的に、余りに復古的に限定するということは、他の多くの点はここで問わないにしても、すでに余りに対内的な立場に囚われたものでないか。単に日本から日本を見るのではなく、世界のうちにおいて日本を見ることが外交には必要であるように、日本精神もこの立場から限定することが大切であらう。林首相が文部大臣と外務大臣とを兼撰しているということも、従来単に日本から日本を見る立場において考えられた独善的な日本精神論に対して、世界のうちにおいて日本を見る立場を強調する場合、意味を有し得るのである。しかるに

却つて反対の結果になつてゐるとすれば、それは日本精神の問題に止まらず、實に對外政治の問題にとつて注目すべきことである。

(二月九日)

## 文政の一貫性

現代の統制思想の特色は政治の計画性を重んずるところにある。議会主義の排斥される理由の一つも、それが政治の計画性にとつて不都合であるということにあるであらう。

勿論、計画そのものが情勢、とりわけ國際情勢の変化に応じて変化し、發展すべきことは当然である。これは外交や經濟などにおいて特に著しく、政策の柔軟性を必要ならしめる。自主的外交といつても、國際情勢の変化を無視することであつてはならず、國際的孤立に対する美名に過ぎないようでは困る。

今日わが国において最も計画的に実行されているのは軍備拡張である。反対に最も非計画的なものといへば、先ず文政に指を屈せねばならぬであらう。例えば学制改革の如き、いつも云われていて今に行われない。審議会とか調査会とかは入替り立替り作られるが、大臣の替るたびに

無駄になつてしまふ。平生前文相が計画した義務教育延長案の如きも、林内閣では撤回したと伝えられたかと思うと、再提出されることになつたといひ、その議會通過に対してどれほど熱意があるのか明らかでない。すでに数代の大臣を経てなお未解決の帝国美術院の問題等に至るまで、文政に一貫した方針のないことを示している。ところが教育及び文化に関する政策ほど、一貫性を必要とするものはない。しかもそれは經濟や外交などとは違つて世界情勢の変化から比較的獨立に計画され得るものなのである。

我が國の教育がかように一貫性を欠いているということは、教育に自主性が乏しく、容易に政治化され、政治の悪影響を受けるといふことの一つの原因である。その結果、教育についての實質的な改善は行われず、名目的なことばかりが喧しくいわれる。いわゆる思想問題の如き、教育を名目化して、非實質的ならしめていくことが多い。教育が政治に影響されるのは當然であるとすれば、逆に政治は教育であるといふ考えの徹底される必要がある。

文政に計画性が乏しいのは、由來文部大臣が伴食大臣といわれるような位置にあり、且つ彼等がたいいてい文政については素人であるといふことによるであらう。そこで文部大臣は現在の軍部大臣や司法大臣などの如く部内から出すが好いといふ意見も生じてくる。だがこの点には寧ろ全

般的に考え直さるべき問題がある。部内から大臣を出す結果は国家の政治が知らず識らず職業意識乃至職業思想に左右されるようになる危険が尠くない。またそれは政治の計画性に含まれねばならぬ政治の総合性を害し易いのである。

(二月十六日)

## 家族観の混乱

ファンク博士の日本紹介の映画「新しき土」では、日本の家族主義が勝つて西洋の個人主義が負けることになっている。日本の家族主義はよいとしても、西洋にだって今ごろ単純に個人主義を唱えている国はなからうではないか。西洋においても既にずっと以前から個人主義の弊害は指摘され、これを克服すべき思想が現れており、他方日本においても家族主義は種々の矛盾を現実を示しつつあるのである。

家族を重んずることと家族主義を守ることとは同じでない。家族主義は封建的なものである。家族主義の封建的性質を打破するものとして個人主義にも意味があった。しかし個人主義が家族そのものをも破壊してしまう危険を有するとすれば、これに反対するのは当然であるが、その際

家族を護ることは家族主義に還ることではなく、寧ろ家族に新しい社会性を持たせることでなければならぬ。家族主義的な日本の家族生活に欠けているのは社会性である。

この社会性という言葉を先ず簡単に社交性という言葉に置き換えてみるが好い。日本の家族生活には社交性が乏しいのである。一家族の内部において社交性が欠けているのみでなく、一の家族と他の家族との間の関係も多くはなお封建的儀礼的であつて、真に社交的でない。青年男女の墮落が家庭内並びに各家庭間における社交性の欠乏から生じているものが尠くないことはしばしば云われる通りである。

家族は一つの団体として社会的訓練の場所である。我が国民の生活に社会道徳が欠けているといわれるのも、個人主義の結果でなく、寧ろ家庭がなお多く家族主義的であつて、今日の社会に適した道徳的訓練を準備し得ないということに一つの原因がある。特に街の社交機関、カフェーや喫茶店の無秩序と頹廢との主なる理由はそこにある。家族主義的な家庭における我俣を社会へそのまま持ち込まれるのも困るし、またその窮屈を社会で存分晴らそうとされるのも迷惑である。

家族の社会性は強調されねばならぬが、しかしまた家族と「社会」とは同じでない。いわゆる新しい婦人の家族観には家族を社会と同じに見ることに於いて間違つてゐるものが多いのではな

いかと思う。それは家庭生活に対して個人主義と同様破壊的である。個人が社会的に規定されていることは事実であるが、個人をただ社会的にのみ見ることが正しくないように、家族も社会的に制約されていることは明らかであるにしても、家族が社会的結合として有する特殊性を無視することは許されない。いわゆる新しい結婚論、家族論には、今日の社会を家族主義で律しようとする考え方が陥っているのと同じ種類の誤謬に、反対の方向において、陥っているものが尠くないように思う。

家族観の混乱は現代の大きな不幸の一つである。

(二月二十三日)

## 強国日本

日本は世界の強国である。これは我々の大きな誇りだ。強国日本の我々には世界の大国民としての資格が必要である。明治大正の時代にはその資格について種々反省されたものだが、然るに近年躍進日本などと云われる反面、何事もけちくさくさくなるように思われるのは、どうしたことであらうか。

強国とは世界史の聯関の中における勢力を意味している。強国日本にとつて政治とは外交である。と云つてもよいほどなのであるが、このとき外務大臣の払底がますます激しく感ぜられるのは、強国の資格上まことに困つたことである。

思想や文化の方面においても、この頃は何でも「日本的」という限定詞を付けて考えることになつてゐるが、これもやめることができないものであろうか。ファッシズムはファッシズムであつて、イタリー主義とは呼ばれない。それは国民社会主義という世界的な名称をもつていて、ドイツ主義と呼ばなくても済む。かようなものである故にファッシズムは現在、善いにせよ惡いにせよ、一つの思想原理として世界的になつてゐるのである。それはわが国にも影響して日本主義を發生せしめた。日本主義は独特のものであるとしても、それがただ「日本主義」と呼ばれ得るのみで、世界的な名称で呼び換え得るような普遍的内容を有しないとすれば、それは逆に世界へ進出し得る思想とはならない。日本精神とか日本主義とかが「日本」という限定詞を除いて世界の諸国が理解でき、同意でき、模倣できる内容を有するとき、日本は思想上においても強国である。嘗て支那思想は日本へ来て日本的になつた。それが日本に移植されて日本の文化を發展せしめ得た限り、それは単に支那的でなく、少なくとも東洋的であつた。ところがそれが一旦日本的な



ものになると、逆に東洋へ進出し得るような性格を失うという傾向がなかつたであろうか。東洋的なもの、世界的なものが日本へ来て特殊化され、個別化されるのは当然である。しかし日本のものの世界性は真実に求められたことがあるであろうか。個別化されることは或る意味では完成されることである。けれども完成すると共に普遍性が乏しくなるということが日本の性格であるとすれば、考え直さねばならぬ。

今日、日支関係の行詰りを打開するには、先ず文化提携から始めねばならぬという意見も出ているが、それが可能になるためには「日本」という限定詞を附けないで済むような思想が日本に現れて来なければならぬ。

(三月二日)

### 対外文化の国内問題

某私立大学の関係者から聞いたところに依ると、この頃支那では日本の「大学」の評判があまり好くないということである。そのわけはこうだ。

最近支那の大学では、厳選方針を採っているということもあつて、十人に一人の割合でしか入

学できないような状態であるが、そのために学生の質は善くなっている。日本へ来る民国留学生にはこの自国の大学へ入ることのできないような頭腦の者が多く、しかも日本の某々私立大学においては殆ど無試験で彼等を入学させている。そして授業料を払つていさえすれば、無事に免状が貰えるのである。こうした結果、日本の「大学」の声価は次第に失墜している。

ついでに同じ人が話していたところに依ると、日本へ来る留学生の中でも優秀な者は支那の各省政府などから学資が出ており、外務省の対支文化事業部から補助を受けているような者はあまり優秀な学生でなく、かようなことから日本の評判は好くないということである。

もし右の如き事実があるとすれば、日本の対支文化政策上大いに反省を要するものがある。私立大学の或るものが単に授業料を目的として質を選ばずに支那人を入学させているのは、それが営利会社化している一つの証拠であるが、その経済状態のあまり好くないことを示している。いつも議会の季節になると、私立大学では政府の補助金の増額運動を行っている。近年日本文化の対外宣伝のために政府は莫大な金を使っていることを考えると、支那において日本の「大学」の評判を好くすることなど、日本文化の宣伝にとつて差当り最も大切なことである故に、その点から私立大学の補助金を増額する理由もあるわけである。外国は日本の外にあるものとはばかり考

えてはならない。外国は日本のうちにもある。それが今日の世界の状態なのであって、日本文化の対外宣伝などといっても外ばかり見て内を善くすることを考えなければ、その宣伝は片端から毀れてゆくのである。

尤も、私立大学自身の立場としては、政府の補助金ばかり狙うボロ会社の真似をして貰いたくないものだ。現在すでに一、二万円の補助金のために私立大学の独立性がずいぶん失われているのである。それとも私立大学精神などというものはやがて全く消え去るべき運命にあるのであるか。最近においても京都の同志社では御時世のために「新島精神」がなくされたというので問題を起しているようである。

(三月九日)

## 世界の鏡

社会は自分を見る鏡である。この鏡に自分を写してみることによつて我々は自分を知ることができる。同じように、世界の鏡に日本を写してみることによつて我々は自国を知ることができる

i 2月「勅語」誤読との右翼による攻撃、つづいて配属将校による教育要綱の書き換え要求。

のである。

最近ルックス・フィルム会社製作中の映画「吉原」が問題を起している。会社側ではその筋は決して侮目的のものでないと弁明しているのに対し、内務省では「問題は筋そのものよりも現代の日本が吉原や人力車によつて代表されることにある」と云つてゐる。ところが、もしこのように云うならば、あの「新しき土」にしても、現代の日本があれで代表されては困るという意見をいくらか出すことができるであらう。

西洋人が日本を訪ねて来ると、歌舞伎や能へ案内すると共に吉原へ案内する。それが殆ど公式になつてゐるとすれば、映画「吉原」に抗議するのは矛盾でないかとも云えるであらう。オリンピック東京大会を控えて改善すべきことはここにもある。

それのみでなく、日本主義者のうちには吉原讚美論者がなかなか多いことに注意しなければならぬ。

例えばこの方面で有名な紀平正美博士は、日本精神の本質は「つとめ」にあるとしてゐるが、その際博士は、私娼は西洋模倣の個人主義であり、公娼は日本固有の家族主義であると見ると共に、「つとめ」の論理の立場から郭を支持している。博士によると、公娼は単なる犠牲として社

会の暗黒面を現すのではなく、郭内における「つとめの身」として一定の積極性を現すものである。「今日此の精神によつて更に改造せらるるならば、社会制度としてこれほどよきものはないであろう」と博士は云う。「つとめ」のこの積極性こそ、実にまたあの爆弾三勇士の精神であると博士は附け加えて論じている。これが他ならぬ文部省の国民精神文化研究所の所員として思想善導の任に當つている紀平博士の「哲学的」見解なのである。

映画「吉原」に抗議する官憲はかような「毎日的」思想の国内における宣伝に対して矛盾を感じないのであろうか。

外国映画に写してみれば、誰も「吉原」に侮辱を感じる。幸か不幸か、思想は吉原の如く映画として形象化されることはできないが、今日、日本精神とか日本主義とかいつて宣伝されている思想の中には、世界の鏡に写してみると、日本人の誰もが「毎日的」と感じるかも知れないようなものが存しないのであるか、反省を要するのである。

(三月十六日)

## 大衆の良識

近代哲学の父デカルトの革命的な書物『方法論』が出版されてから三百年、ことしはその記念の年に当っている。今日においても散文の模範とせられるこの美しい書物は、単にフランス人のみでなく世界のあらゆる国民の教養の基礎となるべきものである。

当時の文化史を顧みるならば、この哲学的著作が自伝の形式をもつて書かれたというところにすでにヒューマニスト・デカルトが見られるであろう。更に彼はこの書物を当時の特権的教養階級の用語であつたラテン語をもつてでなく彼の国の一般市民の言葉をもつて書いた。これはその時代の学者の習慣に対して全く革新的なことであり、ここにもデカルトのヒューマニズムが認められる。彼の云うところに依れば、古人の書物をしか信じない人々よりも自分の純粹な自然の理性もしくは良識をしか用いない人々が一層よく彼の思想を判断することができる、と彼は考えた。すべての眞の改革者がそうであるように、彼はその哲学的革新を教養ある専門家にでなく、大衆の良識に訴えたのである。

教養人はとかく伝統に縛られ、専門家は専門的或いは職業的偏見に囚われがちである。教養や博識は彼等をして「良識」を失わしめ易い。彼等の埒内に留まり、彼等に氣に入ること求めてゐる限り、革新は困難である。それ故に眞の改革者は専門的職業人の教養よりも一般市民の良識

に信頼するのである。デカルトは、かような良識もしくは理性即ち「真と偽とをよく判断し識別する能力」は、世の中の物のうち最もよくすべての人間に分配されている、と記している。

職業的哲学者や哲学青年に気に入ることを考えて書く哲学者は真の改革者とはなり得ないであろう。文壇人や文学青年ばかりを相手にして書いていては、文学における真の革新は望まれないであろう。真の改革者であろうと欲する者は大衆に信頼すべきである。しかし信頼すべきは大衆の良識であつて、もとより一時の人気というが如きものではない。

これは単に文学や哲学のことに限らない。政治においても同様である。大衆の良識に信頼して改革を行う政治家こそ今日最も待望されているのである。

(三月二十三日)

### 大道廃<sup>レ</sup>有<sup>リ</sup>仁義<sup>一</sup>

キリスト教は如何にして日本精神と一致し得るかがしばしば問題になつてゐるが、この頃では国学者平田篤胤がキリスト教の影響のもとに日本神話を解釈した説を逆用して、日本精神とキリスト教との調和を唱える者さえ出ている。キリスト教神学者の仕事もいよいよ煩瑣哲学的になつ

てきたが、老子のいわゆる慧智出でて大偽ありの類とならねば幸いである。

先達て同志社大学においては、六十年の伝統を誇る建学精神新島イズムから日本主義へ教育方針を転換するに至つたのであるが、最近これに勢いを得た国粹派教授は同学の一教授三助教授の思想が新教育綱領に反するという理由をもつて、その罷免を総長に上申し、ために学校騒動の危機を孕むと伝えられている。

個人的な感情の纏れとか派閥の争いとかに日本主義が利用されることを余りにしばしば見聞している我々は、今度この問題についても、その実体を究めた上でないと、公正に判断できないわけである。日本主義を他の目的のために利用するのは日本主義に対する侮辱である。しかし仮りにこの事件が愛国心とか愛校心とかの道義心から発したものであるとしても、いったい何が日本精神に反することであるかは簡単に決定し得ることでない。我々は老子のいわゆる大道すたれて仁義ありということを近年絶えず痛感している次第である。

平田篤胤は『古道大意』の中で老子のこの言葉を引いて我が国の古道即ち真の日本精神が何であるかを説明している。平田によると、真の日本精神は老子のいう大道であつて仁義でない、それは事実の上に具わつて有るものであつて、教訓とか道徳とかというものではない。それを道徳



化したり教訓化したりすることは却つて眞の日本精神を失うことになるのである。平田の哲学には教えられるところが尠くないのであるが、この説など特に国粹主義者の猛省を促すに足るものであると思う。神ながらの道は事実であつていわゆる道徳ではない。今日それを徒らに規範化し煩瑣哲学化することによつて他人を貶しめ、世の中をとかく面倒にしたがる者に果たして眞の日本精神があるといえるであろうか。

教育の大道がすたれて教育は仁義化され、学問の大道がすたれて学問は道徳化される。近年喧しい「日本精神」はすでに末世の産物であり、末世の象徴であるのであろうか。（三月三十日）

## 国民の立場

国民の立場から考えると、今度の選挙は不可解なものである。すでに議会の解散そのものに不可解なところがあるのみでなく、この選挙が何を意味するかも不可解である。選挙は次第に意味の曖昧なものになつてゆく傾向がある。

常識によると選挙の結果は無産党が進出するであろうが、やはり民政党と政友会とで多数を占

めるものと考えられる。実際にこうなれば、政府はいつたいどうするのであるか。政党が肅正さなければ政府は再解散を行うという口吻である。肅正とは政府の意の俣に動くことであるか。もしそうであれば、政党存在の意味はない。政党は再解散を恐れて政府にただ聴従することになるであろうか。政党が解散を恐れる大きな理由が、選挙には金がかかるということにあるのは政府も承知している筈である。してみれば政府は政党を結局金の問題で嚇しているわけであろうか。

この解散は政党に対する懲罰の意味を有するといわれている。確かに政党には懲罰に値するところがあつたであろう。しかし選挙後において再び解散が行われることになるか。今度はそれらの議員を選出した国民に対する懲罰の意味を有することになるであろうか。しかも国民は政府のいわゆる新党が出来ない限り、かような懲罰を免れるためにどうすれば好いのであるか。政府は選挙後において新党が出来ることを期待しているといわれる。もしかようなことになれば、議員は選挙民を欺瞞したことになる、政党を墮落させるものは政府自身であるということにならないであろうか。

この際政府は策を弄すべきでない。林首相初めみずから立候補して新党を名乗るべきである。かような新党も作らないで選挙に臨むこと自体が選挙における国民の立場を無視したことであ

る。選挙によつて政党——いわゆる新党即ち政府党をも含めて——を懲らしめ得る立場にあるものは、政府でなくて国民である。政府は政党を懲らしめるといつても、もし政党が政府の意のままに動くならば、その政党が果たして国民の意志を代表しているかどうかなどは問題にしないのではないか。国民大衆を代表する政党は政府の欲しているような「新党」であり得るであらうか。

(四月六日)

## 政治と説教

政治が次第に説教に化してくる。思想が尽き、論理が窮まるとき、説教が始まるというのが世の常である。

林祭政一致内閣は組閣の当初から説教が好きであつた。議會解散の理由とされるものも説教であつたが、選挙に対して掲げられた政府の標語もすべて説教である。説教することが悪いというのではない。素樸な道徳的感情に訴えることによつて政治的意見の対立を蔽い隠そうとするよう

なことがあつてはならないのである。「滅私奉公の士」であるからとて意見が同じであるわけではなからう。むしろ私心ある者こそ容易に妥協し、追隨し、阿諛するのが普通である。

林首相は、来るべき選挙において「正しい人物が選出され、野に遺賢なからしめるように」希望している。これもまことに立派な説教である。ただ恨むらくは、国民に向つて説教するに先立ち政府みずから野に遺賢を尋ねて欠員中の大臣を補充し、国民に範を垂れなかつたということである。

歴史の実証するように、賢者というものは時の政府や権力者に尾を振つてついてゆくものではない。だから賢者はたいいてい野にあるものと決つているのである。野に遺賢なからしめようと欲する者は、反対者の声に聴いて政治を行う覚悟がなければならない。反対者の立場を強圧している限り、賢者はますます野に隠れることになってしまうのである。

反対者の眼はつねに鋭い。反対者の批判を怖れず、反対者から学ぶことを知つていいる者が眞の賢者であらう。ところが説教というものは反対者の立場の含む「認識」を抹殺するために用いられることが多いのである。反対者を沈黙させるために説教するのでなく、私を滅して反対者の立場を認めることこそ、今日の政治に必要な道德である。説教を認識に取換えることが政治の進歩

である。

野に遺賢なからしめるといふ古典的な政治道徳は、大衆の政治意識が低かった時代のものである。それを今日の言葉に翻訳すれば、大衆の声に聴いて政治を行うということになる。大衆をして自由に語らしめる用意がつねにあるならば野に遺賢はない筈である。選挙の結果の発表日に当るといふ理由でメーデーを禁止した政府が野に遺賢なからしめるなどと言ひ得るであろうか。【前年は戒厳令下にあるとの理由で禁止、以降戦後まで禁止される。】

(四月十三日)

## 学生の風俗

風俗も時代に影響され、時代を反映するのは当然である。

昔は角帽に社会的価値があり、若い女性にとつても角帽は大きな魅力であつた。ところがその時代には却つて大学生の中にも角帽を被らない者がいた。殊に文科の学生には角帽も持たず、和服即ち最近の流行語でいふと日本的服装で登校する者が多く、私もその組であつた。しかるにこの頃の大学生はみな金ボタンの制服を着て角帽を被っているが、皮肉なもので、そういう現在で

は角帽も昔の価値や魅力を無くしてしまつてゐるのである。

近來、大学予科生に対して斬髮令を發し、長髮を禁ずる傾向が次第に生じて來た。これも非常時風景の一つであらう。私どもが高等学校へ入つた時分には、今や諸君は一人前の人間になつたのだから何事も自治の精神でやつてゆかねばならぬ、と教師からも先輩からも教えられたものであつた。髮を長くすることは勿論自由であつた。その時代でも中学生には長髮が禁じられていたが、この頃大学予科生に対して斬髮令が發せられてゐるのを見ると、学生の格が一段階下げられたように思われる。これは頭髮だけの問題でない、研究の自由も生活の自由も大学においてさへ次第に縮小されて來たのである。

日本の大学で制服制帽が定められてゐるということは、この国においては学生が特別待遇されてゐるということとも関係がある。以前は「軍人学生優待」という札が諸所に見られたものだ。その頃は軍事専門家の勢力は今日の如くでなかつたが、彼等の勢力が絶大になつた今日では学生の特別待遇の意味も變つて、あの「学生未成年者お断り」という札が貼られるようになったのである。

社會が變つてもイデオロギーは直ぐこれに應じて變るものでない。今日の学生の中にもなお特

権階級意識をもっている者が尠くなく、それに影響を与えているものに制服制帽がある。学生だからというので特別待遇されるのはあまり善くないことで、そのために彼等の社会的訓練が欠けて来ることもあるのであるが、現在の学校は学生を軍人同様なるべく社会から分離しようとしているように見える。斬髪令もその一つの現れである。いつたい我が国では綜合雜誌などにおいても「学生論」が盛んであるが、これも学生の特別待遇の一種である。それは社会的にはインテリゲンチヤが如何に乏しいかを、そして政治的にはデモクラシーが如何に發達していないかを示すものであつて、幸福なことだとはいえない。

(四月二十日)

### 單純化と綜合化

物価騰貴が次第に深刻な問題になつてきた。これに驚いて政府では物価対策委員会を設置することになつたという。物価騰貴はしかし孤立した問題でない。増税はインフレーションと、インフレーションは物価騰貴と、そして物価騰貴は再び増税と、なにもかも互いに關聯している。だから問題は綜合的に解決されねばならず、ただ綜合的に解決されるのほかない。

ところで近年政府の遣り方を見ると、こちらで火の手が上ったというので機関を一つ作り、あちらで火の手が上ったというのでまた機関を一つ増すという有様だ。これが非常時の光景であろうか。現に企画庁を始め、林内閣によつて新設される予定の機関も一、二に止まらないようである。何処に全体を締め括る力があるのか分らない。この頃の機関の増設は却つて全体的な「計画」の、従つて眞の政策の無いことの現れであり、改革の統一的な「思想」の無いことの証拠である。庶政一新とはただやたらに官吏を殖やすことであるといふような印象を国民に与えていたといわれるのも無理はないであろう。増設は誰にも容易にできることである。庶政一新の実力とはむしろ単純化への能力を意味するであろう。庶政一新の掛け声以来の業績を一度清算してみても然るべき時期である。

問題はなにもかも関聯している。すべては総合的に解決されるのほかないとすれば、種々雑多な機関を統一することが要求されている。統一するとは或る意味で単純化することである。複雑であつては統制の機関となり得ず、却つて自分自身の統制される必要が生じてくる。もとより統制は単なる単純化でなくて同時に総合的であることが要求されている。

林内閣と共に広義国防は狭義国防へ移行したという。もちろん国防第一主義がやめになつたわ



けではないであろう。広義国防は本来総合的なものである。そのうちには国民生活の安定も含まれているし、外交の調整も含まれねばならない。従つて広義国防の観念は、その外観においては極端な国防第一主義であるかの如く見えるにしても、實質においてはむしろ国防と国民生活の安定等々との間の調和が総合的に企てられねばならぬわけである。狭義国防への「後退」といわれるものこそ、却つてそれ以上に極端な国防第一主義となり、政治の綜合性を破壊する危険を有し得ることに注意しなければならぬ。

機関の單純化と政策の綜合化——この原則を忘れて庶政一新はあり得ない筈である。

(五月四日)

## 国民歌謡

ドイツ人の好きなものが二つある、ギリシアと音楽とがそれだ。今日のナチスもこの二つのものを巧に利用している。ヒトラーはギリシア人を引合いに出すことを忘れない。永遠の文化を作り得るのはアーリア人のみで、アーリア人のうち最も純粹なもの、ヘレニズムの眞の相続人はド

イツ人であるという。ドイツ人の天才を認めても好い音楽はもつと盛んに利用されている。ナチスが政權を掌握した一九三三年の選挙戦はまるで音楽の洪水であつた。ヒトラーは極めて劇場的な雄弁家であるが、彼の演説は各瞬間にオーケストラの協力を求めている。突撃隊の唱歌なしにはヒトラー主義とは何物でもないといわれるほどである。

ナチス張りの文化統制への歩武を進めつつあるように見える我が国においても、この頃、国民歌謡というものが作られ、ラヂオを通じて宣伝されたが、これは一向普及するに至らないようである。いつも巷に氾濫しているのは『あゝそれなのに』といった種類の歌で、日本には文化統制が行われていると考へてこの国へ来た外国人は、それらの流行歌を日本の国民歌謡と誤解するかも知れない。国民歌謡とは何よりも国民に愛される歌謡であり、音楽として優れたものでなければならぬのであつて、単に国民主義的イデオロギーを盛つたものではない。流行歌の撲滅のために小学校における音楽教育の向上をはかるというのは立派な意見であるが、それがほんとに実現すれば今日のいわゆる国民歌謡も一緒に撲滅されてしまふであらう。

流行歌が頹廢的であるとはよくいわれることである。しかし頹廢的であるのは近年の流行歌に限らないので、一部の人がこれこそ国民歌謡であるというかも知れない浪花節や詩吟などの調子

の基礎にも何か頽廢的なものがあるように感じられる。軍歌においてさえセンチメンタルな哀調が著しいことはいつか川端康成氏も指摘していた通りである。文句さえ勇壮活潑であれば好いというわけではなく、音楽そのものの、従つてまた感情の性質が問題なのである。

日本文化の根柢に或る頽廢的な感情が横たわつてゐるのは注意すべきことで、その原因としては封建的なものの残存その他種々のことを挙げ得るであろうが、文化の年齢ということも考えてみなければならぬ。日本文化はヨーロッパ諸国の文化に比して遙かに古い文化なのである。これが若返るには外国文化と接触する必要があるのであつて、この頃の青年の西洋音楽愛好などもその意味で健全な傾向として歓迎すべきことである。かような教養の基礎の上に日本主義的イデオロギーとは別に眞の国民歌謡が生れるであらう。

(五月十一日)

## 精神家

林首相は非常な精神家である。誰もそれを疑わないであらう。林首相は口を開けば必ず誠心誠意国政に当るといい、また他に対して誠心誠意国事に尽すべきことを説く。とりわけ文部大臣に

は精神家が求められ、また近く設置される筈の文教審議会委員にも同様に精神家が求められている。精神家に対する需要は絶対的であると見える。

さすが日本は東海の君子国といわれるだけあつて、精神家にはつねに事欠かないのである。しかるにかように無数の精神家の存在するところでは、精神家を探すことが却つて困難であるというパラドックスが生じる。現に、俗間の噂に依れば、自薦他薦の文部大臣候補者が、言い換えると最上級の「精神家」が、総選挙前には六十幾人とかあり、そして現在では八十幾人とかに殖えたとのことであるが、それにも拘らず一向文部大臣が決定しないところを見ると、精神家の中で精神家を探すことの困難が思われるのである。

ポール・ヴァレリイは、政治とは擬制（フィクション）であると云つてゐる。擬制というのはおよそ精神家とは反対のものである。政治は擬制として何よりも技術でなければならぬが、精神家は技術を軽蔑するということを特色としてゐる。技術はディレッタントイズムに対立する。しかるに政治領域のうち思想や教育に関することほどディレッタントの手で害われ易いものはない。現に無数の文部大臣候補者が存在するということは、誰もが思想の問題だけはわかると自信する悪しきディレッタントイズムを示している。精神家は本質的に主観主義者として自信家であ

ることを特色とするのである。

擬制である政治をして支配せしめるためには大衆の心理を掴むことが必要であろう。しかるに精神家は最もしばしば独善家であり、大衆の心理を理解しないのがつねである。まさに、精神家、精神を知らず、といわねばならぬ。そのうえ、大衆が彼から離れば離れるほどますます「精神的」になるというのが精神家の特色である。そのとき彼は自分の自信を失うまいとしていよいよ独善的になつて来る。

政治に対して懐疑的なヴァレリイは云つた、「あらゆる政治は利害関係を有する者の大部分の無関心を基礎としている、この無関心なしには政治は可能でない」と。今日の内閣が存在し続けているのは大衆の無関心に基づくのであろうか。だが大衆はまさに政治に利害関係を有する者としていつまでも無関心ではいられないであろう。それとも精神家的政治家はすべての国民が物質的生活のことなどは全く問題にしない純粹な精神家になることを要求しているのであろうか。

(五月十八日)

## 大衆との距離

統制の目的は統一であり、統一は強化を意味する。これはもちろん統制の理想的な定義で、実際においては統制は強化とは反対に萎縮を結果することが多い。統制は自然に生ずる統一でなく、外部から強制される統一である故である。外部からの強制によつて萎縮が生じないためには、統制される側の方が自由主義的訓練を経なければならぬのであつて、この訓練の不足している場合統制が萎縮を齎すのみであることは現に我々の目撃する通りである。かくてわが国においては統制と自由主義的訓練とが共に必要であるというデイレンマが存在する。

外部から強制される統一によつて国民が萎縮しないためには、統制する側においてはつきりした指導精神を持つてゐることが必要であるのはいうまでもない。しかし単に思想があるというのみでなく、その思想が国民に十分納得できるものであることが必要である。それが自分に納得できるものであるならば、外部からの強制も単に外部のものとは感ぜられず、却つて自分が自分自身に与える統制と考えられ、その場合統制はもはや統制でなく大衆の積極的な意志を意味するのであつて、かくてこそ初めて統制は強化となり得るのである。

自分等がこんなに真劍にやつてゐるのに国民がついて来ないというのは怪しからん、というような言葉をしばしば聞かされるのであるが、それは国民が真劍でないからではない。今の時代に誰が真劍にならないことができよう。誰もみな真劍になりたいのである。それなのに真劍でないように見えるのは、大衆が納得し感激し得るような指導精神も政策も与えられていないからである。林内閣の一枚看板といわれる文教審議会の委員の顔触れを見ても、あまりに古典的な存在で大衆には何の感興も生じないではないか。

政府の超然主義乃至独善主義に対する政党の批評は正しいであろう。しかし国民が政党に満足しないのは、革新を標榜する政府から「現状維持」派と呼ばれる政党も、政権を得ればこの「革新的」な政府と全く同様のことをするであろうと考えるからである。批評のための批評は十九世紀のものである。それは自由主義と多元論とを前提する。自由主義と共に批評の機能も変化し、批評は創造的な批評にならねばならぬ。言い換えると、政党は政府に対する批評と一緒に積極的な政策を掲げて起たねばならぬ。

統制も批評も自己の限界が何処にあるかを考えないということが今日の政治の憂鬱の原因である。そしてその限界は大衆との距離にある。

(五月二十五日)

## 官僚デイレツタンティズム

民間の諸会社への官吏の売り込みに対する非難は既に久しいものであるにも拘らず、近年官僚政治の擡頭と共にますます増加の傾向にある。それは我が国になお広く残存する「役得」の思想の延長とも見られ得るであろう。

かような売り込みは、勿論、古手官吏のためであるばかりでなく、資本家も自己の利益の立場からそれに応じているのである。そしてこの頃のように経済統制が喧しくなつてくると、民間会社に古手官吏が入つてゐるといふことは、統制にとつて便宜であるとも考えられるが、また反対に彼等が資本家のために国家の統制に対する防壁の役をなすということも考えられる。いずれにしても彼等を通じて資本家と官僚との狎なれ合いがこつそり生じ易いことは想像し得ることである。

しかしそのような官吏が技術家である場合はまだしも弊害は尠い。彼等の地位を羨望して、内務省あたりの古手官吏があらゆる名の団体を組織し、地方の婦人や青年などから金を集め、自分



がその団体の理事等に納まろうとする傾向があるとすれば、困ったものである。

更に注目すべきことは、近頃各省で文化宣伝に関する事業が行われると共に、或る人が「官僚ディレッタンティズム」と呼んでいるような現象が生じていることである。例えば、政府の映画事業である。これは軍部でも、文部、鉄道、外務等の諸省でも行っている。軍部では民間の映画会社を使つてただ監督するということが多いそうであるが、他の諸省では官吏がみずから事に当り、彼等のディレッタンティズムによつて害されることが少なくないといわれている。その結果、民衆にはちつとも面白くない写真が出来るだけでなく、「国辱的」といわれるようなものさえ作られることになる。

かようなことは政府自身の仕事の場合のみのことではない。文化統制とか思想統制とかの声と共に次々に生れた半官半民——形式上はそうでないにしても実質的にはそうであるものをも含めて——の諸団体の仕事にも同様の官僚ディレッタンティズムの弊害が見られるようである。たびたび問題を起した国辱映画の如きはその現れの一つに過ぎないのであつて、同様のことは世間にあまり知られていないことのうちにも多いであらう。

文化統制を行おうという場合にしても、民間の文化人を動かすのでなければ何事も成就されな

いのであつて、独善は禁物である。

(六月六日)

## 政治と宗教

新内閣は各方面から一般に好感をもつて迎えられているが、仏教界の期待もなかなか大きいようである。近衛首相は伝教大師奉讃会会長等の地位にあり、また西本願寺、真宗高田派本山とも関係があり、特に大谷尊由氏の入閣は仏教界最初のこととして祝われている。

前内閣の標榜した祭政一致は神道的色彩が強く、ために何となく圧迫を感じていた仏教界であるから、この新内閣の成立を歓迎するのも当然であろう。尤も、近衛内閣が仏教のために実際に何を為し得るかは、問題である。第一、この内閣も永久に続くわけではなからうし、またこの内閣が今日の時代思潮をどれだけ転換させることができるかも、疑問である。

仏教の振興は何よりも仏教家自身の責任でなければならぬ筈であるが、近年とかく政治に依頼するという風が見られる。かくの如き宗教の政治への従属は、宗教家が排斥するところの精神の物質への従属を示すものではなからうか。

林前文相が祭政一致を唱えると祭政一致の研究会を起して、いかに仏教をこの思想と妥協させるかに苦心し、聖徳太子の御名において仏教と国体との調和を考えた仏教界は、安井新文相の楠公精神において更に別の新しい問題を与えられるであらう。

宗教に対する我々の不満は、信仰を説く宗教そのものが近年甚だしく無信念になつていゝうことであり、この無信念は政治への宗教の制限のない妥協となつて現れてゐる。

今日の独裁政治が宗教にとつて有利なものでないことは、ソビエトの宗教に対する態度は固より、ナチスの教会政策においても明瞭である。しかも宗教が政治的に統制され得るものでないことは、それらの国における宗教と教会との現状が示してゐる。日本宗教のうち最も平民的な日蓮や親鸞などの生涯の歴史にしても、宗教が政治的統制に対して決して単に妥協的であつてはならぬことを教えてゐるであらう。

仏教は、今日、政治と宗教との関係について根本的に考へるべき位置に置かれてゐる。この問題についての深い反省のうちに宗教が新たに生きる道がある。しかるに仏教思想界には誰一人この重要な問題について徹底的に考へようとする人を見出されないのである。

(六月八日)

## 文化の権威

文士といえ、以前は、世間から変物扱いされるのが普通であつた。この頃の文士にはそのよ  
うな変物が次第に見当らなくなつた。単に文学者のみでない、学者、美術家、ジャーナリスト等、  
すべての文化人について同じことがいえるであらう。

昔の文化人が世間的に変物であつたということは、彼等の思想や行動が非社会的であつた為で  
あると批評される。確かに彼等は非社会的であつたであらうが、その反面また彼等には自分の従  
事する仕事の権威についての自覚も強かつた。ジャーナリストにしても「無冠の帝王」といつた  
誇りをもつていたのである。我が国には古来芸術至上主義というような思想は存しなかつたけれ  
ども、文化の権威についての自覚は十分にあつた。

近年文化の社会性が強調されているのは固より正当なことであり、それと共に文化人の間にい  
わゆる変物が少なくなつたのも結構なことである。しかし同時に文化人の誇りというものが失わ  
れ、文化の権威についての自覚が稀薄になつたということがないであらうか。政治家や官吏の手  
先になつて働くことに矛盾を感じず、自分のもつてゐるのは実は全くの小吏根性であるにも拘ら

ず、それが文化の社会性であるとしても考えているように見える学者や芸術家が多くなりつつあるのは悲しむべきことである。

かような傾向に反抗する為に再び芸術至上主義の如きものを唱える者も見られるが、それは間違いであつて、主張され維持さるべきものは文化の権威である。文化の擁護も、単に文化の政治的自由の点からのみでなく、文化の権威の点から考えられねばならぬ。

教育の方面では人格教育ということが喧しくいわれ、安井文相も教育の方針は人間を作ることだと述べている。それは固よりその通りであるうが、しかし今日教育家の間には小吏根性が浸潤し、文部省あたりの意志通りならまだしも、その意志以上にさえ極端なことをして忠勤振ろうとするような無性格な者が多くなつた教育界において、果たして人格教育ができるであらうか。以前には教育家にもなかなか変物がいたが、そのような人が却つて立派な人間を作つたのである。教育家も自分の仕事の権威について考えねばならぬ。すべて文化的な仕事の価値は十年や廿年で決定されるものではない。

樽の中の哲人ディオゲネスとアレクサンドロス大王との話は、この社会的政治的時代においてもなお顧みられるに足る教訓を含んでいるのである。文化人の気魄は文化の権威についての自覚

から生れる。

(六月十五日)

### 「新全体主義」

自由主義の鬪將といわれた鳩山一郎氏が今度外遊することになった。氏の外遊は個人的心境に依るものであろうが、しかしその個人的心境のうちに時世がおのずから反映していないということは不可能である。

自由主義政党であつた筈の民政党では今度「新全体主義」というものを標榜するに至つた。そのいわゆる「新」が何を意味し、いかなる点でそれが全体主義と異なるのであるか不明であるが、他に追隨して後から全体主義を唱え始めると見られることを嫌つて「新」という字を頭につけたに過ぎないと考えて恐らく間違いないであろう。

文壇や論壇では昨年あたりからいわゆる日本的なものについて盛んに論ぜられたのであるが、偶然的の符合というか、ちょうど近衛内閣が成立する頃からその議論も下火になつてきた。日本的なものについての議論が祭政一致を声明した林内閣の時代に起り、そしてこの内閣の退却と運命

を共にしたように見えるのは、皮肉のようでもあるが、全く偶然であるともいわれないであろう。

近衛内閣は古典的な林内閣とは異なり頗る現代的な声明をもつて現れたのであるが、この内閣はいわゆる日本主義が、現代的な言葉で表すと、実は全体主義に他ならないという一事を示すために現れたようなものである。極めて明瞭であるように見えて実は甚だ曖昧であつた日本主義という古典語は、今後恐らく次第に遠退いて、全体主義という現代語が一層前面に出てくるであろう。いづれにしても意味は同じである。かくして日本も要するに世界の一環としての日本にほかならず、日本固有のものというものが論者のいうほど重要でないことがいよいよ明らかになるであろう。

ところが日本では今なおあらゆる外国品はハイカラでスマートなものとして好奇心をひいていくように、この全体主義という言葉も或る人々にはかなり魅力をもっているのである。しかるにこの全体主義というものが実質的には何であるか、それが大衆にはあまり有難いものではないということを誰の眼にも明らかにするのは、多分現内閣の後に来るものであろう。それが物の順序である。

しかし日本では、外国のファッシズムに追随しての全体主義と見られることを避けるために、

新全体主義とでもいわれるかもしれないが、新とはこの場合ただ後から現れたという意味であつて、性質上根本的に異なるのではない。全体主義を超克した真の「日本的なもの」が出て世界をリードするようなことが当分ありそうにもないことは、日本を真に愛する者にとつて淋しいことである。

(六月二十二日)

## 心の準備

国民的感激の裡に成功したオリンピック大会東京招致も、その後の進展はあまり<sup>ほかほか</sup>捗々しくなく、ファンをしていろいろ氣を揉ませているようである。

愚図ついていた競技場問題がやつと解決をみて、神宮外苑競技場を拡張して使用することに決定したが、外苑評議員会の委員中にはこの拡張に就き、境内において不適當と認められる行為に対し国体明徴の建前から種々の条件を附すべし、という「日本精神」の立場における強硬意見を唱える者があり、成行きによつては大会に影響するところ少なくない有様だと伝えられている。即ち例えばオリンピック・ベルとか聖火の如き外国流のものは日本の国体にふさわしいものに改



めよ等々の議論が起つてゐるとのことである。

然るにもかかる議論を徹底させてゆくならば、競技種目の中でも外国流のものは凡て排して我が国固有のものに変更せねばならぬことになり、かくて大会開催も結局不可能になつてしまわねばならぬ。オリンピックというような西洋的なものを日本に招致したことがそもそも不都合なことだと云わねばならなくなるであろう。困つた話であるが、かかる議論がなかなか存在するところから考えると、いよいよ大会となつても遠来の客に対して不愉快を感じさせるような事柄がいろいろ生じて来はしないかと心配されるのである。

かくの如き国粹論者はよろしく明治天皇の御精神を、ひいては明治の時代精神そのものを顧みるべきである。五箇条の御誓文等を拝誦してみるべきである。明治の時代精神はまことに博大な、進取的なものであつた。偏狭な国粹主義は先ず明治神宮外苑からこそ追い払われねばならぬであらう。

オリンピック大会を迎えるにあつては単に物の準備だけでは足りない。心の準備が大切である。この心の準備というのは国際的精神の向上にほかならない。もしも競技の、文化の国際性の觀念が虚妄であるならば、オリンピック大会開催の如きは畢竟無意味であり、無駄でなければならぬ。

らぬ。

オリンピック大会のことは別にしても、近来喧しくいわれている国民体位の向上については、その精神がまた問題にされねばならない。単に準戦時体制——この語もあの非常時という謂わば日本固有の語がこの頃国際的意義を有する語に変つた例の一つと見られ得るものである——という見地からでは国民体位の眞の向上は期待されないのであつて、その根本には却つてもつと大きなヒューマニスティックな精神が流れていなければならないのである。

(六月二十九日)

## 世界教育会議

東京帝大で開催される筈の世界教育会議も近づいてきた。この会議については、もし満洲国が参加するのなら自分たちは出席しないという支那代表者の横槍も出たが、それも結局満洲国参加ということに決定したようである。そしてそれは当然のことであつた。

胡適氏らが満洲国の参加を拒否したのは、教育会議を徒らに政治化するものであつて、正しく

i 1937.8.2 ~ 7 開催。『第七回世界教育会議論文集』全3巻。

ない。なにもかも政治的に、余りに政治的になつてゐる今日、教育會議の如きは政治と無關係に行われるところに却つて意味があり、現在の世界の重苦しい政治的狀態の中へ一陣の涼風を送り得るの感もせられるのである。

しかし世界教育會議が政治に無關係でなければならぬということは、そこで政治が論じられてはならぬということではない。ただそこでは政治の見地から論じられることなく、教育の見地から論じられることが大切である。今日、世界各国の教育は著しく政治に従属している。かかる政治の教育に対する影響が検討され、そこから教育本来の精神において現実の政治に対する批判が行われなければならない。政治と教育との關係の如き、現下の情勢から見ても、世界教育會議の最も重要な論題であるべきであり、殊にその中のハーマン・ジョルダン委員會の如きはその精神からいつてもこれを問題にすべきであると思う。

教育はもとより政治から完全に自由であり得ないであらう。教育が政治に制約されるのは当然であるにしても、政治と教育の精神とは必ずしも一致しない。政治は人間の本能や衝動に訴へることがつねに余りに多い、それ故に教育が政治に従属的になると、教育の意味は否定されてしまふ危険がある。政治に対する批判的力としての教育の意味が認識されねばならぬ、政治の力に対

する教育の独自の力への信頼が今日の教育家から喪失しつつあるのではなからうか。

世界聯合教育会の主要な目的は「教育事業において国際的協調をなし、国際的善意を涵養し、且つ世界的平和を助長する」ことに存するが、現在の情勢はその会議を世界の全く片隅の出来事にしてしまおうとしている。かかる時代にも拘らず我々は東京におけるこの会議が有効に進行することを期待する。世界各国の教育家が相会することは相互の理解を深めることによつて国際親善に資し得ることは勿論、各人が自国の特色を正しく自覚する機会にもなるのである。日本に西洋模倣の弊があつたとすれば、それは日本人が余りに西洋人に接触したためでなく、反対にその接触の機会が余りに少かつたためである。国際会議開催の意義は我が国において特別に大きいといわねばならぬ。

(七月二十日)

### 試験の矛盾

安井文相は中等学校の入学試験地獄緩和策として、筆記試験はなるべく一科目に限つて行うという断案を下し、各地方長官宛にその通牒が発せられた。東京府の如きでは、来年度の入学試験

は算術と読方との二科目とすでに決定してあつたので、この通牒を如何に取扱うかについて更めて協議しているとのことである。

入学試験一科目制は安井氏のいわば専売特許であつて、氏が大阪府知事時代に管内各中等学校において国史一科目制を断行したことは有名である。この一科目制に対しては当時すでに教育界でも一般社会でも種々の批評が加えられたのであるが、今それを全国的に行おうというには自己の専売特許であるという名目以上に何か確信があるのであるうか。

簡単にいえば、今日のような状態で入学試験が行われる限り、一科目であろうが、二科目であろうが、三科目乃至四科目であろうが、結果は同じである。準備教育はそのために廃せられないであろうし、児童の負担はそれによつて減じはしないであろう。試験を一科目にすれば、それ及び落を決定し得るような答案の差異が殆どなくなり、従つて口頭試問などの方面に必要以上に重点がおかれ、その間に情実なども介入し易いのである。また科目数を減ずれば減ずるほど、今日試験準備によつて甚だしく支配されている小学校では、その教育がますます偏頗なものになつてくるであろう。

入学試験の弊害をなくするには、現在の学校の内容を改善することが急務である。試験に落第

した者も、大抵どこかの学校へ結局は片附いていることから見て、中等学校の数は、私立までも合わせると、全体としてそんなに不足していない筈である。従つてすべての学校を皆が入りたがるような善い学校にして、どこかに偏することのないようにすれば好いわけである。その際に私立学校に対し、一方營利主義を押しえると共に、他方積極的に補助を行い、公立のものゝ優劣なきまで質の向上を図ることが大切である。

次に画一主義を打破して各学校をして自由にその特色を發揮せしめ、その特色に応じて選択されるようなものにしなければならぬ。もちろん、これには各家庭が子供の特徴を理解してその性質に合った学校を選択するということが、ただ公立だからというので、とりわけ「有名」だからというので有難がるようなことがなくなるといふことが前提されている。現在の如く学校そのものの内容が、入学試験と同じく画一主義のもので甲乙丙と採点され得るような状態では、試験地獄は緩和され得ない。

(七月二十七日)

## 政党と文化運動

皇紀二千六百年を過ぎして新日本文化の建設を企てると称する日本文化中央聯盟では、文部省の補助金も決定したので、去る八日結成式を行い、やがて新秋には盛大な発会式を挙げる予定であるといわれている。この聯盟の意図するような文化統制が真実の日本文化の発達に対して如何なる関係にあるかについては、既にしばしば論じたことであるから、ここに繰り返さないであらう。この種の文化運動は実は政治運動に他ならないのである。

ここで注意したいと思うことは、近年次第に盛んになってきたこの種の文化運動の主唱者もしくは指導者がたいてい退職官吏或いは貴族であつて、政党人は殆ど関与していないという事実である。我々はそこに現代日本の政治の動向とその特質とを明瞭に認めることができるであらう。

ドイツもしくはロシアの例を挙げるまでもなく、現代の政治運動において文化運動は極めて重要な役割を演じている。しかるに日本の政党はかかる事実に無頓着であり、文化運動に対して甚だ無関心である。そこに、その今日の実質はともかくとして自由主義を伝統とする政党の弱点があるといえるであらう。文化人の匂いのする人間は政党人の間に非常に少ない。しかしそれは現在文化運動を起している退職官吏や貴族においても全く同様である。従つて問題は文化運動についての認識の相違であり、そしてその点からいっても既成政党は日本の政治の指導力となり得な

いのである。

かような政党も先般大学生に働き掛けようと考えたのであるが、それも要するに選挙の時に投票を掻き集めようという目的以上のものを有したとは思えない。選挙の地盤と投票の獲得のことばかり気にしているようでは、政党の更生など到底期待できないであろう。

自由主義の伝統に育った政友会や民政党はともかく、社会大衆党の如きにおいても文化運動が軽視されているように見えるのは不審であり、遺憾なことである。文化運動の現代政治運動に与つて有する意義については、この党の指導者たちには十分な認識がなければならぬ筈である。もし日本の文化運動が退職官吏や貴族の手によつて指導されることを欲しないならば、彼等の運動の目的に同意しないのであるならば、今日、社会大衆党は自己の文化運動を活潑に展開すべきであらう。

(八月十日)

## 大なる覚悟

i 1933 社会民衆党と農労大衆党が合併、反ファシズム・反共無産政党を名乗る。1937 選挙で議席 37 をうる。日中戦争が始まると戦争を支持し、全体主義政党へ変質した。



我方の不拡大方針にも拘らず、支那側の無反省に依り事変は遂に拡大するに至つた。今や日本は未曾有の非常時に際会している。我々は真に挙国一致の実を挙げ、時艱じかんの克服に当らなければならぬ。もとより挙国一致は附和雷同と同じでない。我々はつねに冷静な且つ真摯な態度をもつて時局に対処しなければならぬ。

かの日露戦争当時、今の西園寺公が政友会議員総会において「挙国一致と附和雷同」の異なる所以を論じ、妄りに政府に盲従しつあつた議会に対して警告したことは記録に値する事実となつてゐる。即ち公は、今日の要は各々その立場に依り分に応じて真面目に行動することにあると説き、当時の政府の施設を端的に評し、例えば「銀行救済問題の如き如何なる感触を国民に与えたか、これは軽々に看過すべきではない」と論じ、徒らに戦勝せんしょうに酔うてその職責しやくさくを忽せゆるがにすべからざる所以を喝破したのである。

ここに銀行救済問題というのは時の政府者が一部金融資本家と結託して「財界の信用維持」の名のもとに六百万円という巨額を責任支出の違憲処分によつて大阪の第百三十銀行に貸与したと新聞の論調そのまま。<sup>i</sup>「後現地では不拡大で調停しつつ、近衛内閣は三個師団の増派を発表と方針は揺れる。

いう事件であつた。

我々は絶えず歴史から学ばなければならぬ。もちろん日露戦争当時と今日とでは諸般の事情は大いに違つてゐるであらう。しかし違つてゐるとすれば、どう違つてゐるかを具さに觀察することは、時局に対する認識を深め覚悟を固める上に大切であらう。

我々は当時における第三百三十銀行事件、旭川第七師団兵營建築費に関する不正事件等を想起することを好まない。しかし西園寺公のかの警告は教訓的である、挙国一致と附和雷同とを混同することのないようにすることが肝要である。近く再び臨時議會が召集され、劃期的な諸法案が提出されようとしている。「挙国一致」という美しい名に隠れて政党がその職能と立場とを抛棄することのないように希望されるのである。

今や国民は、或いは国防献金に、或いは出征兵士の家族救護に、非常な熱誠を示している。政府から説かれる前に、求められる前に、国民は愛国の純情と奉公の赤誠とをもつて時局に処してゐるのである。政府も政党もその責任はいよいよ重いついねねばならぬ。国民も固より大なる覚悟を要する。挙国一致の内容についても深い思慮がなければならず、銃後の護りの意味も決して単一であり得ない。各人が時局に対する正確な認識をもち、聡明に、冷静に、真摯に、自己の職

責を尽し、持久力を養うことが大切である。

(八月十七日)

### 不運なオリンピック大会

日支事変拡大のためにオリンピック東京大会における馬術競技に選手を送り得ないと陸軍が声明して以来、この大会の開催そのものまでが一部で問題にされるようになった。これに対し副島伯等は、国際信義の立場から飽くまで東京大会を遂行せねばならぬと主張しているようである。

根本に遡つて考えれば、もちろん、多大の犠牲を払つてまでオリンピック大会を日本に招致せねばならぬ必要があつたかどうか、疑問であつたであろう。しかしあの招致運動の当時における、そしていよいよ東京開催が決定した際における、あの熱狂振りを我々は忘れはしないであろう。何事にも熱し易く冷め易いという国民の弱点を現すようなことになつてはならぬ。

一旦東京開催を引受けた以上、副島伯等の主張する如く、全責任をもつてこれを遂行することが国際信義の立場からいつて当然である。特に日支事変の勃発以来、国際的に極めてデリケートな関係におかれている日本としてはその覚悟がますます大切なわけである。近年、日本を外国に

認識させる必要があるとして、そのために種々の機関も設置され、多くの費用を使つてきたのであるとすれば、その必要が今日においてこそ増している場合、オリンピック大会を返上するといふが如きことは、これまでのそのような努力を無にすることにもなるであろう。

そのうゑ、オリンピック大会は単にそのみのことではなく、皇紀二千六百年を目差して、どんな国際大会をも日本に招致しようといった風があり、すでに東京開催の決定しているものも一二に止まらないのであるが、それらの国際大会の上に及ぼす影響についても考慮しなければならぬ。

国民体位の向上は国防上の見地からもその重要性が大いに強調されている。もとより我々はオリンピック大会が国民体位の向上にとつて直接の効果を有するとは考えないが、しかし大会はスポーツに対する国民の関心と理解とを高めることに役立ち、間接にせよ国民保健の問題に資し得るものである。

オリンピック大会の東京開催が決定した当時、私は本欄において、一九四〇年まで世界の平和が維持されるように努力することは、この大会を引受けた日本にとつて喜ばしい義務でなければならぬと述べたのであるが、今や支那側の無反省のために日支事変の拡大を見るに至つたことは甚だ遺憾である。まことに不運なオリンピック大会である。しかし日本としては飽くまでも、戦

争に強い者は平和的事業においても強力であるということを示さなければならぬ  
と思う。  
(八月三十一日)

## 文化工作の前提

先般の議会において近衛首相は一議員の質問に答えて、对支文化工作の必要を述べた。私はこの首相の意見に賛同し、かつ重要性を認めるものである。

現在戦闘が継続中であるのに、何の文化工作の必要があろう、と云う者もあるかも知れない。しかしこの戦闘の目的が支那を滅ぼしてしまふことにあるのではなく、却つて日支の提携を新たに建てることにあるからには、戦闘における一步前進は同時に文化工作における一步前進でなければならぬといえる。

文化工作の根本問題は如何なる思想を基礎として日支の提携を実現するかということである。その場合、先ず抗日思想を絶滅しなければならぬと云われるであろう。まさにその通りであるが、しかしそれは寧ろ戦闘の目的であつて、文化工作はそれに止まることができぬ。文化工作を進め

るには、一旦自分を支那の立場において抗日思想の意味を考え、彼の立場をも包括し得るような博大な思想をもつことが必要である。従来のように日支親善という言葉を抽象的に繰り返すのではなく、具体的な内容を有する積極的な思想を用意することが問題なのである。

支那の抗日思想に対するに日本が敵支思想をもって臨むだけでは足りないのは云うまでもなからう。戦闘のためには敵支思想も必要なことは明らかであるが、絶えずそれ以上のものをもつことを忘れないのでなければ、終局の目的である日支親善は実現されない。

国民精神総動員の主要な目的が国民をして堅忍持久の覚悟を堅めしめることになければならぬことは、かの議会における聖旨奉体東亜安定に関する決議案によつても示されている。そしてそのためには、もとより単に国民をして敵支思想の血を沸かしめるに止まることなく、如何なる思想に基づいて東亜の安定が企図されるのであるかを国民に十分理解せしめなければならぬ。今日国民の心の裡には、今次の支那事変が解決したとして、さてその後は何が来るかということに対する深憂が横たわっていることを知らねばならぬ。

我々が国民精神総動員に望むところは明朗な指導性である。それが国民をして思想的に徒らに窮屈を感じしめるようなものであつては、外に向つて東亜安定の文化工作の発展を期することも

不可能であろう。精神運動というものはとかく遣り過ぎになりがちなものである。今次の支那事変こそ日本の思想が単に「日本的なもの」に止まり得ないことを最も明瞭に要求しているのである。

(九月十四日)

## 事変と生活

支那事変は文化の諸方面に種々の影響を及ぼしつつあるが、直接には大衆の生活に変化を与えつつある。必要は人間を賢明にする。この頃いわれてゐる生活の合理化もそれである。

従来西洋カブレの、非日本的なものとせられてきたことがこの機会に次第に進出しつつあるのは生活の合理化の方向を考える上において注目すべきことである。例えば、託児所、共同炊事などが追々現実的になりつつあるという。これらのことから知られるように、婦人の労働戦線は拡大しつつあり、そのことが日常生活全般に最も大きな変化を及ぼす結果になるのである。

もとより生活の合理化は単にいわゆる西洋化であり得ない。現に舶来品が来なくなると、これに代るものを日本で作ることが必要になり、また在来の日本的なものをもってこれに代らしめる

ことが必要になる。かようなことは西洋的なものの日本化、日本的なものの西洋化の機会になる。そしてそれが実は日本の文化の恐らく唯一の健全な発展方向であつた筈である。

この頃いわれる生活の合理化は物価騰貴その他によつて大衆に強要されつつあるものである。それは政府のいわゆる「消費節約」の現れにほかならない。實質は同じことでも、消費節約という消極的なスローガンと生活の合理化という積極性のあるスローガンとは国民に与える心理的影響において差異がある。この点、官吏の智慧は遂に婦人雑誌の記者に及ばなかつた。政治も大衆的心理を捉えねばならぬ。そしてまた消費節約は生活の合理化を伴わなければ意味がないので、頻りに消費節約を唱えている政府も、この際積極的に生活の合理化を指導すべきである。消費節約は旧い禁欲主義的道德の範囲に止まつていてはならない。必要は発明の母である。この機会に生活の合理化の仕方がいろいろ発見され、日常生活の根柢から新しい日本が作られてゆくようにしなければならぬ。

尤も、この生活の合理化がいわゆる消費節約、従つて物価騰貴、物資欠乏等によつて強いられているものであるとすれば、必要は人間を賢明にするといつても、そこには限度のあることで、右のような経済的事情が一定の限度を越える場合には、消費節約はもはや如何なる生活の合理化



としても現れ得ず、却つて生活の非合理化を強要し、道徳的にも頹廢を生ずるに至るのは必然である。この点、政治家はもとより、生活の合理化の主唱者たちも深く考えなければならぬ。

(九月二十八日)

## 想像力と政治

北支における日本の軍事行動は大いに進展して、その後の明朗化のための政治工作もまた進捗しつつあると報道されている。軍事行動の後に来るものが軍事行動と同様に、或いはむしろそれ以上に重大であることは云うまでもない。

ところで外国新聞の一記者は、日本は北支を占領しても政治的成功を収め得ない、なぜなら日本人にはイマジネーション(想像力)が欠けているから、と評している。我々はもちろんこの記者の言をそのまま受取り難い。軍事的に成功した日本は政治的にも成功しなければならず、また成功し得るものと信ずる。しかしそれにしても彼が日本の国民的性格を評したところはいわゆる他山の石として我々の反省を要求し得るものがあると思う。

想像力に乏しいということは従来日本人の一つの弱点である。日本の文学を見ても、豊かな想像力を示したものは極めて稀である。想像といえは単なる空想と同じように考えて排斥され、その知的な性質、その構想的な働きの意義は理解されないのがつねである。現実的であるということは日本人の著しい特徴であり、日本人ほど現実的なものはないとさえ云うことができる。それは大きな長所には相違ないが、長所は同時に欠点であり得ることを考えねばならぬ。

想像力は他人の心理を理解するために必要である。それはまた思考の地平を広くするためにも必要である。更にそれは創造的に構想するためにも必要である。そしてかような能力は政治にとつて必要なものである。例えば、日本人は外交が得意でないと云われることにしても、想像力が乏しいために他の国民の心理の理解が行届かなかつたり、また国際世界というものがつねに生々と頭の中に浮ばなかつたりすることに依るのではなからうか。世界というものは全体として現実的に経験し得るものでなく、想像力が働かなければ生きたものとして捉えられないものである。

近代社会の組織は次第にフィクション（擬制的）なものになつてゐる。土地のような現物に比して貨幣は擬制的なものであるが、社会の組織にかように擬制的なところが多くなつてゆく場合、政治にとつても想像力がいよいよ必要になつてくるのである。政治は肉弾戦とは違つた性質

のものである。

武力においてすぐれた日本は政治的才能においても今後大いに新しいものを發揮して、イマジネーションがないという批評を打ち破らなければならぬ。

(十月十二日)

## 冷静と冷淡

今度の事変に対して一般に知識階級が、特に学生が、冷淡だという批評を折々聞かされる。我々は決してそうだとばかりは考えない。「冷淡」と「冷静」とは区別されることが必要である。しかしまたこの区別は紙一重のものであるということに注意しなければならぬ。冷静であることは他の人からは冷淡であるかのように見られるということがあるのみでなく、自分は冷静であるつもりでも知らず識らず冷淡に変わっているということもあり得る。一体、知識階級は冷淡であるのか、冷静であるのか。これは各人がよく考えてみなければならぬことである。

事変が始まったからといって、さあ戦争文学だ、さあ愛国哲学だ、といって騒ぎ廻る者ばかりでは困るであらう。かようなことでは我が国の文化の眞の進歩はあり得ない。今度の事変は、政

府でもしばしば云っている如く、決して突然に、また偶然に始まったことではないのである。しかしインテリゲンチヤはこれに対して用意されていたであろうか。

或る人は私に問うていつた、古来日本人には時間の持続の觀念があるのであろうか、と。これは確かに我が国の全文化にとつて重要な問題であり、また銘々が自分自身において考えてみなければならぬ問題である。持続の觀念がないならば、人格の堅持も、思想の操守もあり得ない。すべては単に瞬間的なことになる。個性は失われ、文化もその時々の流れのままに動揺して、大きな組織は作られない。支配するのは流行だけである。持続の觀念がないならば眞の冷静ということもあり得ないであろう。

支那事変は昨日今日に始まったことではなく、また国民の堅忍持久を要求している。更に重要な事変の後に来るものである。持続の觀念がないということは日本の文化の特色であるにしても、それは今度のような大事件にあつては、これに対する認識の仕方においても行動の仕方においても弱点を現し易いのである。

この事変が我が国の文化に対して大きな影響を及ぼすであろうということは想像するに難くない。かような大事件に際してなお冷静であることが必要であるとすれば、それは何よりも今後

に来るものに対して自己を十分に準備するためでなければならぬ。その準備に努めない者は冷静であるといつても実は冷淡であるのである。前線において流されつつある兵士の貴い血を思えば、冷静という口実のもとに冷淡であることは許されない筈である。

(十月十九日)

## 宣伝と教育

今は宣伝の時代である。目下戦争中の日本や支那が宣伝の必要を感じているのみでなく、殆ど全世界が宣伝に熱中している。すでに宣伝戦の激しさはあの世界大戦当時を凌ぎつつある。このことは第二次世界大戦の来るのを告げるものであろうか。少なくとも宣伝だけを見れば、第二次世界大戦はもう始まっている。

宣伝はむろん外国に対する宣伝に限られない。対外宣伝と共に国内宣伝が行われる。宣伝の主要な目的は統制にある。それ故に政治が独裁の形態をとるに従つてその必要は一層大きいであろう。統制の必要であるように宣伝も必要であり、統制が悪いことではないように宣伝も悪いことではない。

しかし危険なことは、宣伝と教育とが混同されるということである。宣伝は恰もそれが宣伝でないかのように行われる場合最も有効であるところから、宣伝は教育或いは啓蒙の外観を粧いたがるものである。啓蒙と称して実は宣伝を行っている場合が多く、また今日のような統制時代になると、従来の教育機関がいつの間にか宣伝機関に変質してゆくということも生じる。

けれども教育と宣伝とは同じでない。両者は種々の点において異なっているが、とりわけ重要な区別は、教育はその目的の一部としても、その全体の効果としても、批判的精神を養わせるというところにある。この点において教育と宣伝とは相反している。宣伝は統制を実現するために批判的精神の活動を抑止しようとするからである。両者を区別して考えることは、宣伝が教育或いは啓蒙を粧うて行われる時代においては特に大切である。

宣伝と教育とは相反する作用をなすものである故にこそ両者は共に必要なのである。国民をただ宣伝に乗り易いものにしてしまうことは危険である。一つの宣伝に乗り易いものは他の逆の宣伝にも乗り易いものである。一国の教育家が悉く宣伝家になってしまえば国は危いであろう。

この宣伝時代においても教育の本質と独自の意義とは強調されねばならぬ。宣伝は国民の健全な常識を破壊しがちである。日本人が宣伝下手であるということもその限り憂えるに足りないで

あろう。宣伝時代においては国民は特に自己教育によつて健全な常識を保つことが大切である。戦争を終局の勝利と成功とに導くものは国民の健全な常識である。

(十一月六日)

### 忘れられた問題

戦争はあらゆるものを自己に従属させる。戦争においては何よりも先ず勝たねばならず、凡てはこの一事に集中される。かような集中において他の問題は忘れられるであらう。

支那事変の始まる以前、解決しなければならぬ多くの問題が存在したことは、誰も容易に想起し得る。国民体位の向上、国民生活の安定等々から、オリンピック大会等々の如きに至るまで、問題は山積していたのである。事変の勃発はそれらの問題をすべて忘れさせてしまつたかのように見えた。しかし忘れられた問題は存在しない問題ではない。問題の存在する限り、一時は忘れられていても、やがて現れて来るであらう。皇軍の目覚ましい成功によつて戦局が著しく進展すると共に、そのような問題を再び考えねばならぬ時が来たかのように見える。

一時延期を伝えられた保健社会省の設置が現実の問題となつてきたのは、その一つの例である。

實際、保健政策や社会政策の必要は事変と共に消失したわけではなく、寧ろ増大したともいえるであろう。官吏の任用令や身分保障の改変が最近の問題になつてきたのも、他の一つの例である。この問題も既に事変前に盛んに論ぜられたものである。かくして一時忘れられたかの如き多くの問題がやがて、しかも新しい姿において、次々に現れてくるであろう。

我々は支那事変が日本の発展にとつて有する大きな意義を認識しなければならぬ。それと同時に事変前にあのように喧しくいわれた問題が全く存在しなくなつたかのように見える錯覚に陥つてはならぬ。事変と共に国内改革の必要は消滅したのでなく、却つてやがて倍加された力をもつて迫ってくるであろう。この現実に対して何人も安易な気持でいることを許されない。

思想の問題にしても、今日ではただ単に民族主義乃至国民主義と世界主義といつたような形で論争されている。問題がそれだけのものであれば解決はそんなに困難なことではない。しかし、例えばナチ主義は単なる国民主義でなくて「国民社会主義」という公称をもつている。問題は単に国民主義であるのではなく、また社会主義であり、更に国民主義と社会主義との結合である。国民主義と社会主義とは現実に結び附くことができるか。「国民社会主義」というのは現実においては矛盾した概念ではないか。或いはそれは一層多く国民主義的であるのか、一層本質的に社



会主義的であるのか。これらに類する問題がやがて我が国においても真剣に考えられねばならなくなるであろう。問題は存在しないのではない、忘れられているのである。(十一月二十三日)

### 眞実は尊い

新聞紙の伝えるところに依ると、ソビエトの肅清工作は外交界にまで及んだようである。一般に独裁国については実情が知り難いのであるが、殊にソビエトの真相はなかなか分らない。従つて今度の肅清工作に対しても軽々しく判断することは控えねばならぬが、それはソビエトの外交が或る行詰りに出合い、転換を必要とするに至つたことを示すで見られている。

かような行詰りの原因についてもいろいろ云われている。例えば、駐支大使召還が報道されたとき、それは大使が支那の実力を誤測していたことが日本軍の迅速な進出によつて暴露したためであるという風にいわれた。この説にどれほど根拠があるか分らないし、更にそれが駐支大使召還の最大の理由であるかどうかは疑わしい。ただこの説は独裁国においては眞実は伝えられ難いという一般的事情を予想して成立っている点で興味がある。

独裁者の前では誰も彼の氣に入りそうなこと、彼の思想に都合の好きそうなことを云いたがるし、また云うように強制されている。独裁国においては一定のイデオロギーが不動のものとして前提され、その見地からのみ物を見ることが許されている。その觀察が事実には合わない場合においても、変化されるのは思想でなく、却つて事実に対して暴力が加えられる。これも事の真偽は分らず、説の当否も確かでないが、今度の事変において支那が日本の実力の認識を誤つたのは日本に対するソビエト的な認識の仕方が支那において普遍化していたためであると云う者がある。

しかし問題はソビエトでもマルクス主義でもない。重要なのはかように真実が伝えられず、真実が知られないということ。独裁国の陥り易い欠点であるという一般の命題である。

ともかくソビエト外交の行詰りや日本に対する支那の認識不足を右のように解釈しようと欲する者は、そこに独裁国においては真実を知るに困難であるという一般的前提があり、そして真実を知ることには何にもまして尊いという一般的結論があるということを考えねばならぬ。しかるに今日においてはかような一般的理論を引出して、特にこれを自分自身に当て嵌めて考えてみるという合理的態度が多くの場合失われている。ジードの『ソビエト紀行』における批評はソビエトに反省を与えなかつたが、それを利用するファッシストも同じ批評が或いは遙かに多くの程度に

において自分自身に対しても妥当しはしないかを顧みることを全く忘れていたのである。自分はつねに例外だと考える者に眞実は知られない。

(十一月三十日)

## 支那語の学修

支那語を中等学校の正科に入れよという意見が盛んになってきた。今度北支から来朝した文化使節などもそれをいつているようである。たしかに支那語の普及は日支親善の一つの基礎として必要なことである。

由来支那人は語学に堪能であるらしい。西洋人は、日本人と支那人とを区別するのに、英語なりフランス語なりを流暢に話すかどうかを一つの標準としている。そこで日本の留学生は、外国語が達者に話せるのは亡国の民の兆しであるなどと負け惜しみをいつたりするのである。日本の中等学校の正科として支那語を教えるよりも支那の国民に日本語を学んで貰った方が近道であるかも知れない。尤も、それだからといって、日本人が支那語を習う必要がなくなるわけではない。わが国の中等学校では古くから漢文が正科として課せられているのであるが、その漢文を支那

音で教えるのが好いということは、すでに以前から若干の支那学者によつて唱えられていることであり、私も嘗て本欄においてそのことに触れたことがある。今日、支那語の学修の必要が叫ばれるようになったとき、更めてそのことを考えてみる必要がある。古典的な漢文と時文とは同じでないにしても、そのことは支那語の学修にも十分に役立つようになし得ることである。

いつたい日本では昔から漢文が書かれ、漢詩が作られてきたのであるが、いざそれを読む段になると、せつかく平仄を合せて作つた漢詩にしても支那音でなく、返り点を附けて日本流に読んでいる。これでは立派な漢文や漢詩を書くことを学ぶのも難しい筈である。またもし日本流に読むのならば、最初から日本流に書き下しておればよかつたわけで、そうすれば土井晩翠流の新体詩など、明治を待たないでずっと早くから日本において発達しており、今日詩といわれるもの日本文学史における地位も変つていたであらう。

日本人が漢文を書きながら日本流に読んだというところに、日本文化において占める支那文化の地位が窺われるとともに、日本文化そのものの性質が察せられるようである。悪くいえば、日本人は我が強いので、そのために語学を学ぶことも下手であるといえるし、善くいえば、そこに

i 「時文」中国の現代文語文。

日本人が亡国の民とはならない強さがあるともいえるであろう。

しかし今日では支那語が我々にとつて有する意義も変つてきた。そこにまた日本の文化そのものが變つてゆかねばならぬ理由も考えられるのである。

(十二月七日)

## 世界の秩序

南京陥落後において日本に差当り与えられた問題は、蒋介石政権を如何に取扱うかということであつた。しかるにこの問題はそれだけで孤立したものでなく、全支那の、延いては東洋の全秩序を如何に構想するかということに關係している。

支那事変は東洋に新しい秩序を齎さねばならぬであろう。それは単に暴支贖懲というのが如きことに尽きるものでなく、東洋の新しい秩序が元來の問題であつたのである。このことは今日ではもはや誰の眼にも明らかである。かようにして南京陥落は「東洋歴史の新しいページ」として迎へられた。戦争の目的は単に蒋介石政権を倒すというのが如きことに尽きるのでなく、東洋の新しい

i 1927年 中国国民党の内の蒋介石派が南京を首都に政権を樹立、実質的な中央政権と見なされていた。

い秩序を建てることに存するであろう。

この新しい秩序については既に種々構想されている。だがその際考えねばならぬことは、東洋の秩序の構想は世界の秩序の構想なしには不可能であるということである。

国際関係は現在日本にとつていよいよ微妙なものになつているといわれる。我々はイギリスを恐れぬであろうし、ソビエトを恐れぬであろう。しかしまた我々はイギリスを侮つてはならないであろうし、ソビエトを侮つてはならないであろう。問題は世界の秩序を如何に構想するかということである。世界の秩序の構想なしにはイギリスに対することもできないであろうし、ソビエトに対することもできないであろう。世界の秩序を構想することは東洋の秩序を構想するためにも必要である。

世界は新しい秩序に向つて動いている。支那事変もその運動の一つの現れであるといふことができる。この事変の主体たる日本は、東洋に新しい秩序を齎せうとする日本は、世界の新しい秩序について構想を有しなればならぬ。この新しい秩序の構想において持つ国と持たざる国というが如き原理で果たして十分であるか否か。

支那事変は東洋の片隅における事件に止まらないであろう。「東洋歴史の新しいページ」はや

がて「世界歴史の新しいページ」となり得る可能性をもっている。現存する世界の秩序はいずれにしても崩壊すべき運命にある。しかし如何にしてか、また如何なる新しい秩序に向つてか。世界歴史の問題が単にいわゆる大英帝国の没落というが如きことに止まり得ないのは、東洋歴史の問題が単に蒋介石政権の没落というが如きことに止まり得ないのと同様である。

(十二月二十一日)

## 北支文化の一礎石

外務省文化事業部では軍部の協力を得て、わが伝染病研究所にも比すべき一大衛生施設を明春早々北京に設置することに決定したようである。まことに機宜を得た計画であると思ふ。

支那といえば、南京虫と一緒に、コレラ、ペスト、天然痘、発疹チフスなどの伝染病がすぐ聯想される有様であり、そのうえ今度の事変のためにかような疾病の危険が特に大きくなっている場合、伝染病を中心とする研究機関が北支に設置されることは、甚だ喜ばしいことであるといわ

i 1936年、関東軍防疫部発足。1938年、18の師団防疫給水部発足。1939年平房に一大施設(含人体実験)完成。

ねばならぬ。

現在支那には医者が少なく、そしていまだに西洋医学よりもいわゆる漢方を信ずる者の方が多  
いのであるが、この際日本の力によつて近代医学の価値が支那の大衆に理解されるようになるこ  
とは、支那の文化の発達のために望ましいことである。そしてそれと共に、西洋にも劣らな  
いと称せられる日本の医学の力が支那において發揮されるに至ることは、日本文化のためにも好  
ましいことに相違ない。

更にこの衛生機関の設置は、大きく見れば、今後における北支文化工作に対して一般の方針を  
示唆すべきものであると思う。

即ち先ず、北支文化工作は支那の民衆に直接必要なものから、真に彼等の利益のために行われ  
ねばならぬ。経済上並びに政治上の問題に直接に關係を有しないようなことが、少し永い目でみ  
れば、却つて経済上にも政治上にも大きな効果を及ぼすのである。目先の利益ばかりを考ふるよ  
うな態度は一擲してかかることが大切である。そしてこれは単に文化工作の上のことばかりでな  
く、実は、経済上並びに政治上の問題についてもやはり同じことなのである。我が国の政策には  
この点において反省すべきものが多いのであつて、多少遠大な計画を持ち出すと、単に大風呂敷



を拡げるようにいわれて排斥されてしまう傾向があつたのである。

次に北支文化工作においては、今度計画された衛生施設から考えられるように、日本的とか東洋的とか西洋的とかといったような名目に囚われないで、現在の世界文化において最も価値のあり且つ支那の大衆の文化的向上にとつて最も必要なものを彼等の中へ持ち込むことに努力しなければならぬ。東洋流の漢方医学では伝染病撲滅に対して効果を挙げる事ができないのである。大陸に発展しようという日本人には大陸的氣宇が必要である。

(十二月二十八日)

## 予言の一年

「予言の一年」というのは、嘗てウエルズが、その一年間に書いたジャーナリスチックな論文を集めて出版した本に附けた名前である。この新年初めて書庫に入った時ふとこの本が眼にとまり、私はそのうまい名前に興味を感じたのである。

予言の一年！私はこの年、西紀一九三八年を、ジャーナリズムの立場において、かように呼ぶことができそうに思う。尤も、そのように呼ぶこと自体がすでに一つの予言に属しているので

はあるが。

支那はどうなる？ ヨーロッパはどうなる？ 日英関係は？ そして日本の経済は？ 等々について、支那事変以来特に多くの予言的議論がなされてきた。かような予言的議論は今年において止まないのみでなく、恐らく更に甚だしく拡大するであろう。

今年が初めて予言の年であるのではない、我々は既にかなり久しく予言の時代にあるといつて好いであろう。数年前までは左翼の人々が資本主義の没落その他について様々な予言をしていた。それに代つて最近ではまた右翼の人々が他の方向において種々の予言に熱中しているのである。

予言は現代の社会心理にふさわしく、その産物である。社会のうちに大きな変化、動揺、不安が存在した場合、つねに予言は求められ、そして予言は生れたからである。この時代において人は予言的なもののほか喜ばない。人は科学では満足せず、科学ですら予言的になることを要求し、また予言が科学に代るのである。

我々は予言を全く無価値とは考えないであろう。すべての行動は何等か予言的なものを必要とするということが出来る。予言は神話となり、動揺と不安とのうちにある人心を統一して一つの方向に動かすことができるであろう。予言は同様の社会心理から出てくる流言蜚語の如きものに

比して或る積極性を有するだけ価値を有するともいい得るのである。

しかしまた、この時代において予言と科学とを区別し、科学の意義を忘れないことが肝要である。予言は科学によつて統制されねばならず、科学はまた時には預言の解熱剤として用いらねばならぬ。特に警戒を要することは、科学者が時代の風潮に感染して予言者のになり、科学の名において予言を行っているということである。大切なことは反対に、かような予言の時代においてこそ、科学者はいよいよ冷静になり、批判的態度を持つということであらねばならぬ。科学の政論化が科学者をいつのまにか予言者に変えているということに注意すべきであらう。

(一九三八年一月四日)

### 「黄禍」

西洋ではこの頃また黄禍ということが云われているらしい。支那事變の發展と共に、日本は白人を東洋から駆逐する意志であるとか、南洋方面にまで野心を有するとか、その他さまざまの荒唐無稽なことが宣伝されて、黄禍論の復活となつたのである。

黄禍といふことは元來ひとつの神話である。この神話は、十三、四世紀における蒙古人の東歐への侵入の記憶に淵源を有するのであるが、日清戦争における日本の勝利以後ヨーロッパで喧しく云われるようになった。この神話の宣伝者として有名なのはドイツ皇帝ヴィルヘルム二世であつて、一八九五年彼の構想に成る「ヨーロッパ諸民族よ、汝等の最も神聖な財を防衛せよ」という絵によつて、黄禍といふことが一般に口にせられるようになった。

黄禍論は人種的な觀念、社会学者のいわゆる集合表象に訴えようとするものであるが、それは決して単に人種的な思想ではない。あのカイゼルの黄禍論にしても、実は、当時極東に向けられていたドイツの帝国主義的野心が日本の擡頭によつて脅かされたことから生じた幻想であつたといひ得るであらう。そして十九世紀末には黄禍論の張本人であつたドイツは、現在においては、ヒトラーの政治論も人種論を基礎としてゐるにも拘らず、日本と防共協定を結んでゐるのである。歴史を動かすものが単に人種というが如きものでないことは、これによつても明らかである。

いわゆる黄禍の内容も現実の政治情勢の変化に応じて変化してゐる。日清戦争や日露戦争の頃にはそれは日本の脅威を意味し、やがて一転してそれは支那人や日本人のアングロサクソンの国

及びその植民地への移住に対する排斥の声となり、更に一転してそれは白人の支配に対するすべての有色人種の民族解放運動に向けられるに至り、そして今日ではまた再転して日本の脅威を意味することになったのである。

黄禍論者にとつて最も恐しいことは、何といつても日本と支那との提携である筈である。ところが現在においては、支那が欧米に向つて日本の脅威を宣伝し、その黄禍論に油を注いでいる状態であるということに注意しなければならぬ。またすべての黄禍論は黄色人種と白色人種との文明の相違を誇張するのであるが、これは欧米人の東洋文化についての理解の欠乏に基づくことが多いであらう。無益な黄禍論を無くするには、世界史に関するいわゆるヨーロッパ主義の偏見を除くと共に、日本の意図する日支提携の真意を支那はもとより全世界に対して率直公明に理解させることが必要である。

(一月十三日)

## 長期戦の覚悟

いよいよ長期戦の覚悟を固めねばならぬ場合になった。それはもちろん新しいことではなく、

事変の当初からすでに予想されていたことである。今更あらためて悲壮な気持になることはない。この悲壯がるということはわが国民の陥りやすい欠点であつて、長期戦の覚悟にとつては寧ろ無益であろう。何事につけても我々は悲壯がり過ぎるということがありはしないか。徒らに悲壯がることなく、却つて常に心のうちに余裕を持つていてこそ長期戦に堪え得るのである。

長期戦の覚悟として必要なのは強靱性である。長期戦となれば勢い局面は複雑化し、思い掛けないことの起つてくる可能性も殖えるわけであるが、これに処してゆくには強靱な精神が必要である。強いばかりではいけない、しなやかさがなければならぬ。一本調子というだけでは足りない、打つ手をいくつも用意しておくことが大事である。

長期戦となるに従つて、文化というものが戦争にとつて如何に重要な意義をもっているかが分つてくるであろう。あの歐洲大戦の時、いつもは柔弱な文化人として嘲笑されていたフランス人が如何に強靱に戦つたかを我々は想い起すであろう。文化人は弱いといわれる。確かにそのようなところがあるであろう。文は決して剛直そのものではないからである。しかし文化は人間の心に弾力を与え、しなやかにする。しなやかさをもたないような文化は存しない。そして長期戦はこのしなやかさが大切である。野蛮人は長期戦には向かないのである。今度の事変は、或る意

味では日本人がその素質、伝統、教養において如何なる程度の文化人であるかが試煉されることであるといえるであろう。戦争と文化との関係は、単に軍需科学や軍需工業の方面においてのみ考えらるべきでなく、更に深く人間の文化、人間の身に附いた文化の方面においても考えられなければならぬ。

国民精神総動員にしても、一本調子であることは避くべきであろう。国民を緊張させることは確かに大切であるが、同時に国民の心からしなやかさやゆとりを奪い去ってしまうようなことになつてはならない。余りに一本調子であつては大局を見誤るといふことも生ずる。人間は久しく単調に堪え得るものでない。また人間の心は何処を押しても鳴るのである。ただ一つの所ばかりを押しているのでは、全体としては却つて緊張していかないことになるであろう。(二月十八日)

## 官吏の再教育

官吏制度の改正とともに官吏再教育の必要が主張されている。社会の進歩の線に沿うて官吏を再教育しなければならぬという説はもちろん正しい。ただその際、再教育の意味をしっかりと考え

てかからないと、その手段方法を誤り、所期の目的は達せられない。

教育ということは人間の単に一定の時期のこと、何か特別のことであるのではない。我々の生活のすべてが我々にとつて教育の意味をもつことができ、立派な人物はそのことをつねに実践しているのである。自分の仕事に責任を感じ、これを善くやつてゆこうとする意志のある者は、そのために必要な調査、研究、読書等を怠らない筈である。従つて逆に考えると、官吏再教育の必要が生じたのは、この頃議会で論ぜられているように官吏が自分の仕事に対して責任を重んじない傾向があるということに關係している。ただ年功で昇進し得るので、失敗を避けることだけを心掛けて積極的に仕事をしようとはしない氣風が存在するために、勉強などする者が少なくなつてゐることから、官吏再教育の必要が唱えられるようになったのである。

教育ということはおよそ独善とは反対のことである。独善的であつては、他人から教育されることも、他人を教育することもできない。従つてまた逆にいえば、官吏の再教育は既に喧しくいわれているような官僚独善の弊が存在するところから必要になつてきたことである。

かくして官吏の無責任とか独善とかといわれるものに官吏再教育の必要の生じた原因があるとすれば、先ずこれらの原因を除去することが大切であつて、さもなければ再教育を行うことも無



意味であり、またもしこれらの原因が除去されるならば、形式的に再教育を行う必要もなくなるであろう。官吏の再教育そのものも現在では官僚的形式的になる惧れがあり、そうなつては何等効果がない。

再教育のために大学の講義を官吏に強制的に聴かせるというようなことは、すでにその形式化の第一歩ではなからうか。高等学校、専門学校等の教授の再教育のための内地留学と称せられるものが果たして実績を挙げているかどうかを考へてみるが好い。再教育が実は慰勞の一種になつてしまふ危険もあるのである。学校だけが教育の場所であるかのように考へることがすでに形式主義である。役所に豊富な文庫でも備へて、官吏に読書の習慣を養はせることなども好からう。形式に流れない教育方法の欠乏が今日の日本の社会において一般に痛感せられるのである。

(二月六日)

## 革新と実験

どのような革新も実験の意味をもつてゐる。しかし社会における実験は自然科学における実験

とは性質が違ふことに注意しなければならぬ。

自然科学者は、自分の研究室で、機械を使って実験する。彼の実験が失敗したとしても、他の人間に迷惑を及ぼすことは無く、或いは極めて少なく、また幾度でも彼は同様の実験を繰り返すことができる。実験が成功すれば、彼の抱いていた理論は証明を得て、広汎な自然現象に対しつねに妥当するものとして示される。理論は実験において検証されることを要求している。

しかるに社会現象については、これと同じ仕方でも実験を行うことは不可能である。何等かの革新的な理論は未だ実験を経ない理論であり、革新そのものがこの場合その実験である。革新的な理論の正しさは革新の実行によつて証明されるのほかないと云うことができる。けれども若しこの実験が失敗すれば、それによつて多数の人間が迷惑を蒙ることになる。その上この実験は繰り返すことができない。なぜなら、一度実験が失敗すれば、その失敗のために以前とは異なる新しい状態が作り出されることになるから。すべてが一回的であつて同じことが繰り返されない歴史においては、実験はつねに冒険である。

あらゆることが証明されたのち初めて革新に取り掛けるといふことはできない。革新的なものはおもなところがあるから革新的なのである。今世紀において世界の諸国で行われた革命は

まことに大きな実験であるが、その結果を確実に判断し得るまでには至っていないであろう。我々はそれから学ばねばならぬにしても、それを直ちに我々の国で模倣しようということは一つの実験以上に出ない。しかも歴史においては実験は繰り返され得ないものである故に、この実験自身にも多くの創意を要するのである。公式主義的模倣は許されない。

社会における実験は冒険であることを免れないとすれば、この実験には勇氣を要することは勿論であるが、その冒険的などころを知性の働きによつて出来るだけ少なくするという用意もまた大切である。この実験においては多数の人間が賭けられているのであるから。かような実験家の最大の道徳は責任を重んずることである。すべての政治家にとつて思慮は責任感から出てくる。しかも彼の実験は大衆の協力がなければ決して成功しないのであるから、自分の実験しようという理論、つまり革新の指導原理を積極的に掲げて大衆の支持を得るに努めることが要求されている。

(二月八日)

## 理想の再生

先般行われた警視庁のいわゆる不良学生狩に対して最も多く拍手を送ったのは学生を子供に持つ親たちであろう。私は彼等の心理に同情することができる。しかしこの機会に彼等にもまた反省すべきものがあることを忘れてはならぬ。

その子弟を学校に出す家庭に教育の理想というものがあるであろうか。あの学生の赤化が頻りに伝えられた時以来、親たちは自分の子供に対する理想的な要求を全く棄ててしまったように見える。赤化さえしなければ、たいいのことは見逃しても好いといった風が彼等の気持に浸潤したのである。子供が読書や研究に熱心であればむしろ赤化はしないかという危惧を感じた。赤化の前に家庭は自信を無くし、理想を失ってしまったのである。子供が偉くなるというような漠然とした理想さえ失われ、ただ「間違い」のないことのみが願はれた。赤化が殆ど見られなくなった今日においても、家庭は同様に理想のない、自信のない状態を続けており、そしてそれがおのずから現代学生の心理に影響しているのである。

学校もまた同じである。頻々たる赤化事件以後、学校もまた自信を無くし、理想を失ってしまった。学校においてもただ「無難な」学生を作ることのみ力が注がれた。今日の学校のうちに果たして理想が再生したかどうか、私は知らない。それは或いは理想を説いているのであろう。

しかし若し学生が、そのような学校も実践的本質においては營利主義のものであることを承知していたら、どうであろう。今日の学生には物の裏を考えてみないような単純な人間は甚だ稀である。

家庭も学校もすでに十年以上も「無難な」学生を作ること努めてきたのであるが、その無難というものが如何なるものであつたかが、現在「非常時」にあたつて明瞭にならざるを得なくなつたのである。それが今度のいわゆる不良学生狩の大きな教訓である。数千人に達するという等の多くは決して不良でなく、むしろ無難な青年であろう。私は彼等が身を滅してしまつたということをあまり聞かない。彼等は享樂の追求においても理想主義者でなくて現実主義者である。しかし無難な学生が非常時にふさわしい学生でないという一点については、私は当局の見解に賛成する。

私は現代学生の身についた現実主義を一概に排斥するものではない。しかし今日最も必要なことは、その現実主義の中からの理想の再生である。学生の氣風の革新にとって根本的な問題は、享樂機關の駆逐でも取締の強化でもない。現実主義の極から理想が再生して來ることである。しかもこれは決して単に学生のみのことではない。

(二月二十二日)

## 宗派運動と全一運動

支那における文化工作に参加せよという主張と関聯して、このごろ仏教界においては全一運動というものが提唱されている。それは、宗派間の分離乃至相剋を克服して全教団が一体となつて活動せよという説である。全一運動と命名したのは誰であるにせよ、それが時代の思潮の反映であることは明瞭である。全一運動は今日、政党を始め、到る処において叫ばれている。全一運動はまさに時代のスローガンである。

事変前の仏教界においては反対に、宗派運動が發展しつつあるように見えた。法然とか、道元とか、伝教とか、各宗派の教祖讃仰が唱道され、これを中心として各教団が独自の宗派的な運動を行うという風が濃厚であつた。それは明治以後のいわゆる通仏教の思想に対する反動を意味した。しかるに事變の發展と共にそれに対する更に反動として全一運動が提唱されるようになったのである。この全一運動の指導精神は如何なるものであるか。それは再びあの通仏教の思想であることができないであらう。通仏教の思想は今日においてはもはや過去のものである。それは、

同じ時代に唱えられた万教帰一の思想と同様、その時代の啓蒙思想、従つて合理主義、自由主義を基礎としている。我々はもはや單純にかような思想に還えることはできぬ。教祖中心主義の宗派運動はかような思想に対立するものとして十分に意義を有したのである。今日全一運動が必要であるとすれば、その指導精神となるべき新しい統一的な思想が要求されている。その思想は仏教界に果たして存在するのであるか。

全一運動の根柢は政治的必要があると云われるであろう。その通りであるにしても、政治の理論は直ちに宗教の理論となることはできぬ。政治の後から躓いてゆくだけでは文化の意義はない。宗教は宗教自身の思想を有しなければならぬ。すべての宗派宗団を一つに結合せしめ得る宗教思想とは如何なるものであるか。それを政治から借りてくるにしても、政治上の全一運動の思想が如何にして仏教の思想と合致し得るかについて吟味を要するであろう。

いずれにしても全一運動が展開されるためには教団組織の根本的な改革が必要である。この改革に対する用意は十分であるのか。国内における教団の改革、国民の不信心には全く眼を閉じて、支那においてのみ全一運動を行い、大衆の獲得に成功し得ると信ずることは不可能である。支那における文化工作を思想の貧困のために蹉跌せしめてはならぬ。

(三月五日)

## 政治と道徳

ナチスのヴァイン進軍の報を聞いたとき、私の記憶には、十年あまり前ミュンヘンからヴァインを訪ねた時のこの都の光景が浮んできた。その後オーストリアにはいろいろな政治的変化があった。しかし私のいつも想い起したのは、あの、まののびたドイツ語を話し、たるんだ表情をした、すべてに悠長なものごしのヴァインの街の人間である。

ドイツからこの都会に入った者は、特に著しく、ここにはあらゆる精神的緊張が欠けていることを感ぜねばならなかつたであろう。精神のこの弛緩は無道徳を示していた。それは不道徳と同じでなく、頹廢と同じでない頹廢である。かような無道徳なヴァインを見たとき、その頃すでに存在した独逸合邦の政治的思想はともかく、オーストリアが到底このまま独立してゆくことは不可能であると感じねばならなかつた。

外国からの旅行者にとつて住み心地の好いのは、ヨーロッパではパリとヴァインであるということ、殆ど定評になつていようだ。もし東洋でそのような土地を挙げるとすれば、私はまず



北京を考えることができようと思う。もちろん住み心地の好いという意味は、これら三都会においてそれぞれ異なっている。ヴィーンの住み心地の好きは何人からもその緊張を取り去る無道徳に依るといえたであろう。

オーストリアにおける政治的変化がヴィーンの人間にどのような道徳を新たに与えたか、私は知らない。ナチスはもちろんあの無道徳を共産主義の影響に帰しているのであるが、しかしそれは単に政治的原因からのみ考えられることではない。むしろ逆に、風俗が、道徳が、政治を決定する方面がある。我々は今ナチスのヴィーン進軍を耳にして、そのことの当否はどうであるにせよ、国民の人間の道徳の状態が一国の運命に重大な関係を有することを考えざるを得ない。

ナチス政権下においてあの道徳的頹廢は克服されるであろうか。いずれにしても政治が人間的道徳を再建し得るためには政治そのものが道徳的でなければならぬ。現代の政治的行動主義の道徳性について深く考えてみるべき場合である。

東洋においては古来、政治が道徳の名において行われるという伝統がある。これは美しい伝統であるが、それだけにまた、道徳が失われるとき政治も同時に失われることになる。現在、我が国の政治の道徳は如何なるものであろうか。国民の道徳的現実は何なる状態にあるであらうか。

国民のモラルの現実に的確な理解をもつて結び附いた政治の必要が考えられるのである。

(三月十五日)

## 外国理解の困難

盟邦イタリアからの国民使節の来朝は我が国の朝野を挙げて歓迎するところである。我々は光榮ある歴史を有するイタリアに対してここに更めて敬意を表したいと思う。

これは日伊両国の相互理解を深めるうえに絶好の機会である。支那事変に関し日本の立場を欧米人に理解させるために我が国はすでに国民使節たちを送った。その多くはこのごろ追々帰朝したようである。それらの国民使節派遣の効果について我々国民は遺憾ながらなお審かにしないのであるが、その成績がどうであつたにせよ、今度のイタリア使節の来朝はそのことに幾倍して日本をほんとうに理解して貰うに好都合なことではなければならぬ。日本の政治的立場を説明するためには使節を出すことも必要であろうが、外国人をして我々の文化に親しく接触させることは親善の増進にとつて更に有意義なことである。相互の親善は公式的なことよりも日常的なことから進め

られることが多いということに注意しなければならぬ。

それにしても外国の文化を理解することは決して容易なことでない。イタリア使節一行のうちには「里別田稗太郎」という漢字の名を有するピエトロ・リヴェッタ伯の如き日本通の人もいるのであるが、そのリヴェッタ伯は、富士という語をH U Z Iなる日本式ローマ字書きにしたのを批評して、それは以前のようにF U J Iと綴るべきであつて、この日本式綴り方には感心できないと話したとのことである。これは車中の漫談に過ぎないにしても、如何に外国を理解することが困難であるかを示して、甚だ教訓的である。

日本語のローマ字綴り方については久しく種々の意見があつたのを、政府で統一して今の日本式ローマ字に定めたのであつて、これは日本が日本語独自の見地において作つたものである。外国人の立場からいえば、彼等の生国の異なるに従つて種々に発音されるであろうが、その凡てに一致するような綴り方が存在しないとすれば、日本語独自の立場を採るのが当然であろう。盟邦イタリアに適した綴り方をして、盟邦ドイツには適しないのである。我々はイタリア使節にこの日本の立場をよく理解して貰ねばならぬ。

ローマ字のことは一瑣事であるかも知れないが、我が国においてもリヴェッタ伯の批評に類す

る立場から外国の文化を批評し排撃して、ひとり得意になつてゐる場合が尠くないのではないか。深く省るべきことである。

(三月二十二日)

### 叱られる知識階級

知識階級が叱られている。彼等はいつまでも「進歩的」というような觀念にとらわれて現実を直視し得ないといつて叱られている。知識階級を叱ることが一種の流行にさえなりつつある。

尤も、知識階級が叱られるのは今に始まらない。嘗ての左翼時代にも彼等を叱ることが流行した。今日再び彼等はいろいろな言葉で叱られているのであるが、その意味は詮ずるところ、以前に「日和見的」といつて叱られたのと同じであると思う。

この時代において知識階級がかようにいつも叱られてゐるとすれば、日和見的ということは何かインテリゲンチヤに普通の特質であるであらうか。實際、インテリゲンチヤは行動家、とりわけ政治的行動家の眼には日和見的と映ずるようなところを持つてゐる。知識階級は今日においても現実を見ており、思想的にも考へてゐると私は信ずる。しかし彼等の知性が物を客観的に、従

つて距離において見るものである限り、行動家からは何か日和見的と考えられるようなものがあり、また彼等も単なる行動のプログラムのようなものでは決して思想的に満足させられないであろう。

インテリゲンチヤを叱ることを好む者は誰よりもインテリゲンチヤ自身である。最も行動的な人は今日却つて彼等を賞めている。出征した知識階級が如何に有能に戦っているかは、その部隊長らによつて証言されているではないか。日和見的に見えるインテリゲンチヤにしても、いざとなれば勇敢に行動し得るのである。

知識階級が日和見的であるということはもちろん単なる日和見主義であつてはならぬであらう。それは寧ろ物を距離において見るといふ知性の本質から来るものであり、従つて非常時にも「平時の如く」といふ精神となつて現るべきものである。しかし今日こそ知識階級をも満足させ、彼等をも熱情的に引摺つてゆくような思想が生れなければならない。単に行動のプログラム即ちいわゆる国策の平面において知識階級を叱るばかりでなく、それを包んで超えたような真の思想を作り出さなければならぬ。それ故に知性が十九世紀的な批評的立場から新世紀的な創造的立場に移ることが必要であり、この知性そのものの転換こそ、いわゆる主義の転向よりも更に根本的

に重要なことである。今日やたらに知識階級を叱っている者に果たしてかような知性そのものの転換が行われているであろうか。

(三月二十九日)

## 文化政策の水準

嘗て床次内相の時代であつたかに、国民精神を作興するについて浪花節の奨励を考えたことがある。当時の輿論はこれを時代錯誤として笑つたように記憶している。私は必ずしも浪花節の奨励に反対するものではない。しかしそれが笑われたのは、政府がその文化政策において国民の文化的水準を余りに低く見たことに依るのである。

文化政策にとつて重要なことは国民の文化的水準を的確に秤量するということである。教育する者は教育される者の知識の程度を正しく認識して掛らなければならぬ。しかるに我が国の文化政策においてつねに感ぜられる欠点は、それが大衆の文化的水準を余りに低く見ているということではなからうか。

この認識不足のために文化を向上させる筈の文化政策が却つて文化を低下させることになつた

り、主唱者の努力にも拘らず一向効果が挙がらぬことになったりしている。しかもこの認識不足は、我が国においてはいわば「自然的な悪」である。我が国のように近代的文化が急速に発達した処では、年齢の差は教養の差を性質的に区劃し、老人が青年の文化的雰囲気を理解するということは、彼が特別の文化人でない限り、まず不可能に属している。文化上の革新には特に青年の力が与らねばならぬ所以である。

例えば、青年は音楽において大抵洋楽を好むように、映画においても大抵洋画ファンである。この頃彼等の憂鬱の一つは、輸入禁止によつて洋画が追々見られなくなつてきたということであろう。私はあまり映画を観ないし、格別の洋画ファンでもないが、映画を単に娯楽と考えることには反対であり、洋画の輸入は洋書の輸入と同じように取扱われても好かりそうに思う。洋画の輸入禁止が邦画の発達にとつて好機会になるということも考えられ、それはまた最も望ましいことに相違ないが、それならそれで補助金その他の方法によつて洋画ファンを惹きつけるような優秀な邦画の製作をもつと積極的に奨励しては如何であろう。これなど文化政策の水準を少し高いところに置けば、その必要が早速考えられることである。

国民の文化的水準を低く考え過ぎるといふことは上からの統制の陥り易い欠点である。国民精

神総動員に関する従来の運動の如きも、国民の智的水準を低く見過ぎているために効果が乏しかったということがないであろうか。

(四月十二日)

### 「政界」の解消

輿論は新党を待望している。新党の誕生が強力な革新の前提であるといわれている。

かような新党は勿論その名に値する実を具えていなければならぬ。既成政党の変形に過ぎないものに新党の名を藉すことは誰も躊躇するであろう。従来の新党運動に付き物であつた策士の策動の如きものはこの際許容されないであろう。新党の組織はもはや単にいわゆる「政界」内部の出来事であり得ない。

嘗て文壇の解消が唱えられ、今日それは殆ど常識になつてゐる。作家の文学活動は文壇のみを対象としてはならぬと一般に考えられるようになった。これは玄人に対する素人大衆の発言権の獲得を意味している。

ちようにそのように政界と称する在来の玄人政治家の集団も解消されねばならないし、また解



消さるべき運命にある。国民はもはや玄人臭い政治家に多くの関心も期待も持っていない。近衛公に対する国民の間の人気の如きも、公の素人らしい好きに依るところがあると云える。

いわゆる政党解消運動にしても、無政党運動であるのでなく、むしろ政界解消運動であるべきである。政治上の取引の場所と見られるような政界は解消され、すべての政治活動が素人である国民大衆の中に現れなければならぬ。新党運動は政党運動としてよりも国民運動として出立し展開されねばならぬという今日一部の真面目な主張にも理由があるであろう。政党は本来素人の政治意識と結び附いたものであったが、政権を取ることが唯一の関心事となることによつて、大衆とは離れた「政界」を形成するに至つたのである。

種々の形態、種々の方向における現代の独裁政治は、政治家とは指導者であるという重要な觀念を普及させた。しかし政治の指導性の名は濫用され易い。指導者とは政界を目標とする者でなく、国民の中へ降りて来てこれを率いる者のことである。また彼は単に号令する者でなく寧ろ教育家でなければならぬ。しかも眞の教育家は彼が教育する者からまた教育されることを知つているように、眞の指導者は素人から指導されないまでも示唆されることによつて彼等を眞に指導することを知つてゐる。

あらゆる方面において革新は素人を背景として出てくるものであり、また素人を力として行われるものである。スコラ学派に対する新科学、アカデミズムに対する新芸術、すべてそうであった。革新を妨げる者があるとすれば玄人であるのがつねである。

(四月十九日)

### 合理性と積極性

消費節約や貯蓄奨励、国民精神総動員もいよいよ心のみでなく物を対象とするようになった。これは当然のことである。しかるに物が重要な問題になつて来ると共に、従来この動員の指導思想が陥りがちであつた単なる精神主義に対しても反省を加えねばならなくなつて来る。また心は非合理的なものによつて動かすことができるとしても、物は極めて合理的であるのに注意することが肝要である。

江戸つ子は宵越しの金を使わないというように、日本人には金銭の問題に関して合理的であることを喜ばない気風が残っている。金銭について合理的であることは唯物主義であるかのように響感される。同じ都会人でも、贅沢な消費の中心の如く思われているパリの人間、殊にその婦人

は貯蓄心をもつて有名である。消費節約や貯蓄を行うためには合理的精神を養うことが大切である。しかるに心の問題については非合理主義を鼓吹しながら物の問題についてのみ合理的にさせようというのは不可能を求めると近いであろう。

消費節約とか貯蓄とかという言葉は消極的なことに思われるのが普通である。大いに稼いで大いに使うというのが積極的であろう。日本人は生活に対して消極的であるといわれているが、それが我々の永続的な国民性であるかどうかは疑問であり、殊に大陸に発展しようというのなら何事にも大いに積極的でなければならぬ筈である。しかるに消費節約や貯蓄というようなものに積極性を持たせるのは生活の合理化にほかならない。

今日の如く消費節約や貯蓄の必要が起らなかったとしても、我々の生活には合理化されるべきものが尠くないと思う。問題はパーマネントの禁止というようなことにあるのではない。現代の風俗の全体、生活の全体が一定の理想に基づいて組織的に合理化されることが大切なのであって、それには経済学者の頭のみでなく、芸術家の感覚や哲学者の智慧が必要である。消費節約や貯蓄奨励はこのように積極的に一定の文化理念をもった新生活運動或いは新文化運動として指導されねばならない。今日の政治家や官僚に果たしてこの用意があるか。

すべて消極的なことは非合理的になり易い。言論統制の如きも、ただ弾圧を事とするような消極的手段ではとかく非合理的になる。合理的になることによつて消極から積極へ転ずることがあらゆる方面において要求されている。

(四月二十六日)

## 米 国 へ の 関 心

パネー号事件【Paner 号を日本の海軍機が撃沈した】も円満に解決し、当時我が国民の送つた慰問金  
がアメリカ大使の発意によつて日米親善の史跡保存等のために使われることになった。事変の中  
の微笑ましいエピソードである。パネー号事件の際における同情の発露は日米親善に対する我が  
国民の熱意を示すものである。また先般アメリカの或るエージェントを通じて日本の現代作家の  
作品が彼の地に紹介されるようになったことも悦ばしい。

かような出来事は別にして、この頃我が国のインテリゲンチヤの間においてアメリカに対する  
関心が本格的に高まってくるのが認められるようである。これは注目するに足る現象である。

黒船の渡来このかた日本とアメリカとは密接な関係をつづけてきた。我が国民の実生活はヨ一

ロッパのいずれの国からよりもアメリカから多く影響を受けている。しかるに文化の方面ではこれまで日本のインテリゲンチヤはアメリカをとかく軽んずる傾向があつた。このアメリカニズム嫌悪は我が国に残存している封建的なものに基づくことが多かつたであらう。

世界の新しい文化を期待させるものとして一時ソビエトとアメリカとを挙げるのが常識になつた時においても、インテリゲンチヤの関心はソビエトに集中されて、アメリカはそれほど深く顧みられなかつた。今日、日本の世界的使命について語られるようになったが、世界的大国民であらうと欲する者は世界から学ぶことを知らねばならぬ。

我々がアメリカから学ぶべきものは多いであらう。そのプラグマチズムの哲学は廿世紀の思想として大きな意義をもっている。アメリカニズムを軽薄だという者は、ピューリタニズムの流をひく理想主義がアメリカに存在することを忘れている。とりわけ最近ヨーロッパから追放された世界的学者の多くがアメリカに集つてゐるが、彼等がこの新しい環境において何を作り出すかを我々は注目せねばならぬであらう。

日本のインテリゲンチヤのアメリカに対する関心が増してきたことは我々の文化の新世代を語るものである。それは映画や野球に表徴される文化が今や全く日本人の身についてきたことを意

味しているが、それと同時にアメリカに対する関心が精神的に本格化してきたところに重要な意義がある。

論壇の巨人田中王堂氏が逝いてから六星霜、この五月九日は七回忌に当たっている。氏はアメリカ思想の最も好い理解者であった。最近文化人のアメリカに対する関心が次第に高まるにつれて氏の業績の新しさが思われるのである。

(五月三日)

## 行動の哲学

先日或る人が訪ねて来て、日本精神について、これがオーソドックス（正統）であるというような本を知らないかと問われて、実は困ってしまったのである。さようなものはまだ出ていないのではないかと思う。

客が帰ってから私は考えた。日本精神については近年無数に書かれている。日本固有のものは何かということについても繰り返し論じられてきた。ただその多くは日本精神とか日本の特殊性とかについて解釈を与えているのみである。しかるに解釈の哲学と行動の哲学とは異ならねばな

らぬ。「哲学者は世界をただ種々に解釈してきただけだ、世界を変化することが問題であろうに」という言葉の意味を、この場合深く考えてみる必要がある。

解釈の哲学は過去から作られる。ひとは過去を考察することによって日本的なものに種々の解釈を与えている。しかしかような解釈の哲学が行動の哲学と異なることは、日本の特殊性についてあれほど頻りに語られているにも拘らず、今日現実に行動されていることは、例えばナチス・ドイツの模倣に過ぎないものが極めて多いではないかという批評が絶えず出ているところからも知られるであろう。

最近我々がしばしば耳にするようになったのは、「革新」という言葉が濫用されているという国民の声である。何でもただ革新とさえいえば好いように考えられ、それがどのような目標に向つて、誰のために行われようとしているのか明らかでない。革新という美名のもとに一部の人間、一部の階級の利益が求められるというようなことがあつてはならない。かように革新の意味が曖昧になり、革新の基準が必要になつていくように思われるのも、行動の哲学が明瞭でないからである。

行動の哲学はつねに現在から出発する。過去の解釈はこれにとって一つの材料となるに過ぎぬ。

日本精神といつてもこの場合、現在この国に生活している国民大衆が現実を持つてゐる意識がそれなのである。彼等の感覚や意欲を一つの理想に向つて組織することが大切である。例えば現代文学について殆ど知らない国文学者が、今日の青年の心理について何も理解しない老人が、日本精神を説いたところで、それが行動の哲学となり得るであろうか。行動の哲学とは大衆によつて納得され、情熱をもつて愛される思想である。

今日、日本は極めて重大な行動に向つて踏み出している。このとき解釈の哲学のみはびこつて行動の哲学がないとすれば、危いといわねばならぬ。

(五月十日)

### 科学思想の普及

メートル法の普及実行はかねて懸案となつていたのであるが、戦時体制に対応して規格を早急に統一する必要から、今回国家総動員法の一部施行を機として陸海軍の要望に依り軍需品及び軍需施設に關し猶予期間を繰上げてメートル法が強制的に断行されることになつた。

顧みれば、メートル法論議もすでに久しい。その実行に反対する意見は絶えなかつたのである



が、支那事變の勃発を機として、時代の思想の風潮に乗つて、それが俄然再び擡頭し、尺貫法に戻せとか、メートル法と尺貫法とを併用せよとかという議論が事新たに行われるようになり、或る地方においては折角これまで児童にメートル法を教え込んできた小学校教員たちを混乱させつつあつたとのことである。

しかし時代は動く。保守と反動とを踏みにじつて時代は動いてゆく。事變はメートル法の普及実行を急激に促進したのである。これは一つの例であり、同じような事實はあらゆる方面においていくらかも観察することができるであらう。事實は思想に先んずる。思想が事實に遅れてはならない。

航研機「世紀の翼」は世界記録を破つて堂々たる成功を収めた。これは我が全日本の感激である。科学日本の力について国民は新たな認識と自信とを得たであらう。これこそ国民精神総動員に資し得るまことに適切な快挙であつたといえるであらう。これは従来行われてきた種々のイデオロギー的企てに数倍、否な数百倍、数千倍する効果をもっている。一飛行機のうちに發揮されたのはまさに日本精神であり、誰がそれを日本精神でないと云い得るであらう。

時代は動く。航研機の成功のうちに我々は新しい日本精神、を、或いは日本精神の新しい表現

を見る。この日本精神の新しい形式は非常時にとつて無関係なのでなく、反対に、断じて必要なものであり、東洋平和の基礎ともなり得るものである。日本精神は「世紀の翼」に乗らなければならぬ。

この際政府は国民精神総動員において科学思想の普及に努力しなければならぬと思う。物資の節約などといっても、科学思想の普及なくしてはその徹底的効果を期待し得ないのである。あの歐洲大戦のときドイツがあれほどまで戦い得たのは国民の間に科学思想が普及していた為であることは、ここに更めて云うまでもない。

(五月十七日)

### 遅れる政治

徐州陥落によつて日本の軍事行動は一段と進んだ。これに対して日本の政治は、内政において、外交において、遅れているということがありはしないであろうか。政治が軍事行動に遅れるようなことがあつてはならない。

有能な人間は無難な人間ではない、誉められもするが誹られもするのが常である。そこで無難

な人間、どこからも非難の出ないような人間を採ろうとすれば、平凡な、積極的に悪いところもない代り積極的に善いところもない人間が選ばれることになる。それは官界、教育界等、各方面において見られる一般的な現象である。この頃「大正型」という言葉が使われているが、大正型とは私に言わせるとかように無難なことばかり求める傾向のことである。

政治も孤立した事実ではない。今日の政治のつまらなさも、ただ無難ことを求めるのに起因することが多いようである。そしてこの傾向は今日いわゆる国内相剋を避ける必要からさらに助長されている。しかも現在の如く極端に反動的な傾向の存在する場合、これに引摺られて政治は益々つまらなくならざるを得ない。例えば最近北支へ派遣された文化使節は、一新聞の評論子をして旧い文化国へ送るにふさわしい旧い顔触れだと皮肉らしめたようなものであるが、それも無難を求めた結果であろう。支那の知識階級は日本の文化の現状について日本人と同じように詳しく、恐らく日本の一部官僚諸氏よりも一層詳しく知っているのだ。この事実を忘れないことが対支文化工作のすべての場合に必要である。

無用の国内相剋が避けられねばならぬことは云うまでもない。しかしあらゆる場合に摩擦を避けようとすることは何等の革新も行わないことである。今日、一方において無難を求める大正型

政治が依然として濃厚であると共に、他方において東洋型大言壮語の復興が見られるのも困つたものである。實際、現代のような「政治的」時代にあつてはとかく大言壮語が喜ばれるのであるが、しかしかような「東洋的」大言壮語によつて日本の大衆はもはや踊らないであらう。大言壮語は決して昭和型ではあり得ない。今の日本が要求しているのは眞の勇氣を有し責任感を有する政治家である。

国内相剋は近代的な方法をもつて止揚されねばならぬ。即ちそれは輿論の形成に依らねばならぬ。そしてこれがまた革新の基礎でもある。眞の政治家は大衆の中から輿論を形成することを知つている。輿論の形成を怠つていゝならば、日本の政治は重大な危機に會することになるかも知れない。

(五月二十四日)

### 新文相への期待

荒木大将によつて伴食ならざる文部大臣が出来た。これは、その銓衡事情がどうであつたにせよ、ともかく歓迎すべきことである。新文相に対する国民の期待もその意味において大きいであ

ろう。

荒木大將は「精神家」をもつて知られている。地位と金とに執着する者の多い世の中で正真正銘の精神家であることは難事であるが、幸いに新文相が精神家として国民に印象づけているとすれば、文教上頼もしいことと云つて好い。ただ精神家の陥り易い単なる「精神主義」に陥らないように望まれるのである。国民精神総動員の如きも、最近、当初の精神主義を超えて物の問題の重要性を認識せざるを得なくなっている場合である。

親任式の翌日、高等学校専門学校校長會議に早速出席した新文相は、「七十年の伝統何するものぞ」と叫んだと伝えられる。その革新の意気は尊敬に値する。ただしかし七十年の伝統を打破するということは二百年前三百年前の伝統に還るといふが如き復古主義であつてはならない筈である。その令息をイギリスに留学させて教育した荒木大將は、そのような偏狭な国粹主義者であり得ない、と我々は信ずる。この文相が日本の教育界思想界に対しても同様に「善きパパ」であることを希望したのである。

この間或る新聞で、鳩山一郎氏は、氏の先般の外遊は氏の父君の遺志に依るものであり、今その遺志を實行して多大の利益を得たことに対して父君に深く感謝していた。その文章の中で氏は、

氏の外遊当時、日本の議会において官立大学の教授の多数が赤化しているかのような発言がなされ、それが外国に伝えられて日本に不利な印象を与えているのを経験したということを義憤を感じつつ書いていた。スターリンの名を挙げただけで一議員を除名した議会であり、多数の帝国大学教授が赤化していると云つても失言の取消を要求する者の一人もない議会である。しかも鳩山氏自身、あの滝川教授事件当時の文相であつたことを考えてみると、政治家というものが案外弱い者であることが分るように思われる。この弱さは何に基づくのであろうか。人間の強さ弱さについては先日にも本欄で正宗白鳥氏が書いていた。現在の日本の求めているのは真の勇気を有する政治家である。

新大臣は「大物」であるといわれているが、大物は大物らしく大局の認識に立脚して、国家百年の計に属する教育を、一時の流行や興奮に委ねることなく、おおらかに指導してゆくように期待されているのである。

(五月三十一日)

## 革新の基準

革新という言葉の濫用が一部において感ぜられている。何でもが無雑作に革新といわれて、革新の基準は何処にあるのが次第に曖昧になりつつある。革新といつても「またか」と国民が考えるようになっては憂えるべきことである。

革新の名目で徒らに役所を拡張しようとしたり、革新を看板にして何か仕事を売り込もうとしたりする者が存在しないか。かような者があるとすれば、彼等こそ最も時局認識に欠けていると云わねばならぬ。この非常時には一銭でも国費を無駄に使わないという覚悟がなければ、革新などできるものではない。手弁当で働こうという者が続々と出てくるようになったとき初めて眞の革新は行われるであろう。

このような誠意の問題は別にして、更に重要なのは、何が革新の客観的な基準であるかということである。

これまで西洋崇拜、欧米依存の傾向が余りに甚だしかつたのに対して、日本の、東洋の独自性を主張することは、革新的であると考えられる。かように主として民族的な立場を重視するものを、私は革新の空間的な見方と名付けよう。従来 of の思想にこの空間的な見方が欠けていたとすれば、これを強調するのは革新の一つの基準と考えることができる。

しかしながら革新の空間的な見方と共に時間的な見方がなければならぬ。言い換えると、我々は世界史の如何なる時期に立っているのかを省みることが必要である。この世界史的な問題は資本主義の問題に集中する。資本主義の諸弊害を如何に克服するかがこの場合革新の基準である。

最近の歴史において革新という言葉が盛んに用いられるようになったのは、あの二・二六事件以来のことであるが、そのとき革新の要点は資本主義に向けられていた。それだからこの風潮を迎えて、資本主義政党といわれたものでさえもが資本主義の是正を唱えるに至つたのを我々は記憶している。この事実の想起されることが必要であろう。

今日、革新ということはただ空間的な見方に求められて時間的な見方が次第に忘れられつつあるのでなければ幸いである。すべての統制が革新的であるとは云えない。統制にも種々の統制がある。革新の時間的な基準は支那事変の発展と共にいよいよ問題になってくるであらうし、この点において日本独特の原理と方法とが生れるとき日本主義は世界史的な思想となり得るのである。

(六月七日)



## 国民への信頼

政府では今後経済界の実状について国民に知らせて協力を求めることになったと云われている。今からでも遅くはない、当局がその点に気附くに至つたのは結構なことである。

協力するためには認識が必要である。覚悟を定めるためには認識がなければならぬ。認識とは真実を知ることである。上から押付けられたことを観念的に繰り返しているというのはほんとの時局認識ではない。時局の実状を知ることが時局認識なのである。真実ほど貴いものはない、真実を知ることによつて初めて何を為すべきかが決まってくる。しかるに従来時局認識というものが単に観念的なものになつていたところが尠くないように思われる。

国民に実状を知らせることは国民を信頼することである。この意味での国民に対する信頼が今まで乏しかったということがないであろうか。人を信じて委すことができないのは日本人の一つの欠点であると云われているが、日本の政治にもこれに類する欠陥があつたように思う。

戦争は或る意味では最もデモクラチックなものである。下から力が盛り上つてくるということが大切である。そのためには先ず国民に対する信頼がなければならぬ。信頼しないで、信頼して

打明けないでいて協力を要求しても、十分の効果を挙げ得ないであろう。そして国民を信頼することがまた国民から信頼される所以でもある。かような信頼の關係が如何に大切であるかは、戰鬥に従事している將校には最もよく理解されている筈である。

政府が国民に信頼して実情を知らせるということは、種々の流言蜚語とそれから生ずる社会不安との源泉を絶つという意味においても重要である。事實は隠そうとしても隠しきれぬものではなく、無理に隠そうとすれば流言蜚語を生じ、そのために人心は不安になり、不安な人心は更に新しい流言蜚語を作り出すのである。

すでに国民を信頼した政府はいま一步を進めて然るべきであろう。即ち国民をして現実の事態について論議を行わしめ、これを指導しつつ輿論を形成することに努めなければならぬ。国民を信頼して言論を許し、その中から輿論を作つてゆくということは、今後における種々の場合、特に事変に結末をつける場合に必要であろうと思う。輿論を作ることが国民の腹を作るといふことなのである。

(六月十四日)

## 学生狩り論争

早稲田署管内の「学生狩り」がきっかけとなつて、学生の抗議、警視庁及び学校当局の見解の発表があり、一種の論争が行われている。我々から見れば、この論争は、過般の政友会総裁問題と同様、この非常時局に似つかぬ一風景である。或いはかかる風景が諸所に展開されるところに、現在日本が非常時にある一つの証拠が見られるようである。

学生の行動にやたらに干渉するということは、あの思想事件の頻発以来、警察において馴致された風潮である。これに対して学校当局は、その頃黙過して来たのみでなく、自己自身も次第に警察化したのである。教育の警察化は今日に至るまで存続している傾向であり、そのために我が国の教育は甚だしく正常性を失っている。

学生のうちに時局認識に欠けている者の存在することは、警視庁あたりで云っている通りであろう。しかしそれに就いては為政者の側にも責任があるのであつて、時局の真相を知らせないでいて、ただ観念的に時局認識を説いたところで、学生に自覚を促すことは不可能である。

この際学校当局は、またもし警察が何等かの教育的責任を感じずるならば警察も、教育の積極化

を図るべきである。教育は単なる取締りではない。喫茶店や麻雀クラブから学生を追払つたにしても、下宿屋でごろごろしているというようなものでは困るであろう。教育を積極化するためには先ず学生に対して正直に時局の真相を知らせることが肝要である。

次にこの際学生の行動に自由を認めて、彼等の間に支那問題研究会、国際情勢研究会、時局懇談会などといった会が作られ、学生自身の自由な研究と討議とを通じて、時局に対する認識と思想とを獲得するようにならねばならぬ。単に「自粛自戒」といった消極的態度では足りない。会合は自発的なものであつて御用団体風のものであつてはならぬ。何かの会合を持つとすれば、すぐに疑いの眼で見えて禁圧するという傾向はよくない。学校の警察化の弊を一掃して学生を十分に信頼し、今日の歴史の要求する認識と思想とを真剣に探索するという風潮を広く学生の間へ喚び起こすことが大切であり、それには現在殆ど禁止同様の状態にある集会の自由を与えることが必要である。

今日インテリゲンチヤを満足させるような思想がないと云うに止まっていますはならぬ。あちらでもこちらでも思想探求の風潮が澎湃として起つて来るならば、その中におのずから指導的思想が形をとつて現れて来るのである。

(六月二十一日)

## 世界的日本人

荒木文相は世界的日本人を作れと訓示した。学生主事諸氏に果たしてその意味が徹底したかどうか、疑わしい。文部省の吏僚諸氏にも、学校の校長諸先生にも、文相の趣旨が理解されるかどうか、心細い。それほど現在の日本の教育は世界的人間を作ることから離れているのである。文相のいう意味がどうであるにしても、それを自分の見識で独創的に解釈して実践に移すような役人や教師が果たして幾許存在するか、疑問である。それほど現在の日本の教育は貧困を極めてるのである。

支那事変は世界的日本人の必要を感じしめるに至った。或いは支那事変は如何に日本に世界的人間が欠乏しているかを知らしめるに至った。世界的人間の必要は今後ますます大きくなるであろう。教育の根本的革新が要求されている。ところで近年教育界においても革新が叫ばれているが、その革新なるものは世界的日本人を作るのとは逆の方向において考えられてはいはないか。欧化時代として現に盛んに非難されている明治時代には却って世界的日本人が存在した。世界的

日本人は世界的思想を有するものでなければならぬ。

もとより今日、大アジア主義の如きものも唱えられている。しかしそれは、日本という一つの円の拡大としてアジアを考えようとするのであつて、更に高い次元から日本を考えようとするものではない。日本から世界を見るに止まらず、また世界から日本を見ることが大切である。単に「世界的日本人」になるというのでなく、「日本の世界人」になることが必要なのである。

これまで「大陸的人間」というものは、豪放とか豪胆とかという情意的方面からのみ考えられて、その知性においては寧ろ甚だ局限された人間であるのがつねであつた。今日、従来のいわゆる支那通に科学的な支那学者が代らねばならぬように、世界的日本人として現るべきものは何よりもその知性において世界的な人間でなければならぬ。

国粹主義的傾向につれて、インテリゲンチヤはコスモポリタンであるとして非難されていたのであるが、世界的日本人の必要が知られるに従つて、そのインテリゲンチヤが日本にとつて重要な意義を有することが次第に分つてくるであらう。しかし日本のインテリゲンチヤはこれまで内地を離れることを嫌う傾向が甚だしかつた。この傾向をなくして優秀なインテリゲンチヤが大陸へ出掛けることが今後真の日支提携の基礎となるのである。

(六月二十八日)

## 統制の社会的意義

街ではいま中元の売出しが行われている。百貨店を覗いてみると、国民精神総動員と書いた幕と並んで、中元大売出しと記した多くの幕が賑かに張られている。国民精神総動員とは物を買わないことであり、中元の贈答など一切廃止のことと考えていた者は、その光景に或る矛盾を感じるであろう。政府の消費節約の宣伝も、中元という社会的慣習の前には無力であるかのようである。贈答は制限されたにしても、中元そのものは、金のある人間によっていわゆる買溜めに利用される危険さえあるように見える。

私は商人の立場を無視して中元の売出しに反対しようというのではない。それは客に対する商人のサーヴィスの意味をもっているであろう。尤も、凡てこのことが今日においては国民精神総動員の名において行われる傾向があるのは、警戒すべきである。私が云いたいのは、個人の生活は、その消費の面においても、社会的に規定されているということである。それは中元というような社会的慣習に影響されている。社会学者ゾンバルトは人間の種々の贅沢が資本主義と密接

に關係していることを歴史的に明らかにしているが、個人の消費生活は社会の經濟制度に制約されるところが尠くないのである。

消費統制といつても、あれを廃めよ、これを廃めよという風に、個々の思い附きを述べるだけでは効果が乏しいであろう。消費統制は生活の合理化となつて積極的意義を見出さなければならず、そのためには全体の社会生活の根本に立入つて組織的に革新が行われなければならぬ。

經濟統制の拡大と強化とにつれて、經濟警察の制度が設けられるとのことである。これは社会の現状から見て極めて必要なことに相違ない。けれども既に人々の指摘している如く、それが弱い者いじめにならないように注意することが最も大切であつて、そのためには經濟警察の任に當る者が現在の社会的經濟的機構について根本的な知識を有することが必要である。もしこの知識に基づいて取締りが徹底してゆくならば、現在の社会の欠陥もこれによつて矯正されるに至るであらう。かくしてこそ統制は革新的意義を獲得することができるのであり、そのことが期待されているのである。

(七月五日)



## 自然と人為

先日文学界の同人で都会と農村という問題について話し合ったとき、日本にはまだほんとの都会文学は出ていないのではないかと話であった。都会人といわれる者も大抵農村出身であり、自分がそうでないにしてもせいぜい親の代に農村から都会に移ってきたに過ぎない。そこで、それらの都会人の中には、一方都会の好いものがまだ十分身についておらず、他方農村の好いものも多く失っているというような中途半端な人間が尠くないように思われる。現在の日本の文化においてこの種の過渡的な性質をいろいろの方面で見出すことができる。

この過渡的な文化から何処へ行くかが問題である。農村的なものはすべて封建的なものであるとすれば、問題は簡単である。そして農村的なものは資本主義的なものへ必ず移ってゆくとすれば、問題は簡単である。封建的なものは克服されねばならないであろうし、資本主義は農村の好いものを破壊せずにはおかないであろうから。文化の発達によつて農村の好いものが失われないためには、資本主義の問題を完全に解決することが必要である。

i 「三木清関連資料第5輯」収録文学界座談会「文化と自然」

日本には昔から西洋においてのように周囲に城壁をめぐらした都会というものがなく、農村と都会とは融合的に発達してきた。これはたしかに日本文化の好いところであつたと云えるであろう。その世界観においても日本人は、自然と人為、自然と文化の間に鋭い対立を考えないで、自然を愛し自然に親しんで生活するというのが特色であつた。

しかしこの特色も現在においては破壊されている。先達ての関西の水害【阪神大水害】の如きも、自然を粗末にした報いであると云われている。このように自然に対する伝統的な態度が失われる一方、なお残存している自然に対する親和感から自然の好意に頼り過ぎ、自然に対して科学と技術をもつて対するという態度がまだ十分発達していない。そこに過渡的な文化というものの欠陥が現れ、先達てのような水禍を生ずるのである。

かような過渡的な文化の欠陥を克服し、しかも伝統的な、自然と文化、都会と農村の融合という好いものを生かしてゆくことが大切である。そしてこれは資本主義を超えた高次の文化の理念を実現することによって初めて可能になる。資本主義の問題を完全に解決することなしには、日本固有の美しいものも保存されず発達させられないのである。

(七月十二日)

## 「長期建設」

板垣陸相は「長期戦は長期建設である」と云った。これはなかなか名言であると思う。そしてこれは支那に関してのみでなく、日本に就いても云われ得ることである。支那において長期建設を行うには、日本の主体的条件が整えられねばならず、そのためには日本においても長期建設が行われることが必要である。しかもこの建設が革新を意味しなければならぬことは、日本においても支那においても同じである。

荒木文相は「五年十年という長期に亙つて下駄履きでやつてゆけるか」と云った。これもなかなか味のある言葉であると思う。いったい、近頃名言はすべて武將の口から出るというのは、如何なる理由に依るのであろうか。皮革その他の物資の欠乏は優秀な代用品の生産によつて補われねばならず、そしてそのことは同時に建設的な意味を有することができる。優秀な代用品が作られる場合、それは戦後においても利用されるであらうし、またそれは日本の産業として外国へも輸出され得るであらうし、更にそれは科学理論の革新の契機ともなり得るであらうから。

長期戦が長期建設であるならば何よりも文化が必要である。武力だけでは建設はできない。代

用品の発見や発明は科学の力に俟たねばならぬ。しかも長期建設には、とりわけ建設が革新を意味する場合、単に科学のみでなく、思想が、その他一切の文化が必要である。思想及び文化の方面においても長期の建設即ち革新が行われねばならぬ。

長期建設には文化が必要であるといつても、時局を閑却した文化主義に意味があるというのではない。却つて私の繰り返していたいのは、この時代が日本に課している最も重大な問題と何等かの仕方で真剣に取組むのでなければ、文化そのものの立場から考えても、今日いかなる永続的価値ある文化も生産され得ないということである。これはあらゆる文化人の銘記すべきことであらう。

由来、日本には文化主義とか文化至上主義とかというものはなかつたと云われる。その代りに文化を風流とかあそびとかと考える伝統は強いのである。これは過去の日本において自然に対する技術的並びに科学的文化の発達しなかつたこととも関係があるであらう。この時局において文化主義の如きものは清算されるにしても、他方文化を風流とかあそびとかと考えるのに類する心理が依然として残存しているとすれば、これは更に困るであらう。長期建設の唱えられる今日、何が知識階級に革新の気魄を失わせているか、深く反省されねばならぬ。

(七月十九日)

## 革新の連繫

この頃の新聞で一等面白いのは本紙の「読者眼」のような投書欄である。そこだけが現在多少とも輿論を反映しているらしく思われる。

この欄に繰り返して現れる読者の意見は、今日革新を論ずる者にみずから革新するところがなまいとことである。国民に向つて節約や貯金を説く者が果たして国家の金を無駄に使わないように心掛けているかといった意見である。革新は先ず自分から始めよというのが国民の声である。

これは単に道徳的な要求として意義を有するのみではない。革新はすべて繋がり合い、一つの革新は他の革新を前提とするように結び附いている故に、そのことが要求されるのである。革新は全面的に計画的に行われなければならぬ。

今度荒木文相は大学の総長や学部長の官選を提唱した。この提唱の当否はここで論じないが、現在の大学に革新の必要なことは我々も認める。文部省が大学の革新を主張することは間違っていない。だがその際忘れてならぬことは、文部省自身の革新の必要である。文部省そのものが明

朗でないことは久しく評判されていることである。文部省がその俣であつて大学教授の身分がそれに左右されることになれば、文相の意図するような派閥の打破はできないであらう。革新は大学と文部省と連繫的である。

文相の一投石によつて大学教授たちの間に大きな波紋が生じているとのことである。それは確かに大学の本質に関する重要な問題である。ただ私がここで問いたいのは、その問題に対して熱心な教授たちは、例えば先般行われたいわゆる学生狩りの問題に対して同様の熱心さを示したであらうか。学生も大学の一部であり、学生の問題は大学の問題である。しかるに学生の教育と指導の本質に関するこの重要な問題は警察にまかせて知らぬ顔をしていた教授たちが、ひとたび自分の身分に関わる危険のあることになる、俄然熱心になるのは如何なることであらうか。学生の問題と教授の問題とが連繫していることは、今や教授諸氏にも多分理解されるに至つたであらう。革新は同じ思想によつて行われるのである。

今日の大学の不幸は、大学自身の革新についてさえ、これを指導する力を有しないことにある。指導性はもはや大学を離れてしまったようである。革新の連繫を考えてゆくならば、大学の革新の如きも社会全般の革新なしには不可能であることが分るであらう。

(八月二日)

## 民間意見の重要性

外務省文化事業部では対外文化宣伝の方法を変化し、従来の歌舞伎、活花、茶の湯、能などのいわゆる日本的なものの紹介から転換して、今後は広く「現代日本」の全文化を対象に非常にふさわしい文化外交を行う方針を決定し、その手始めとして航研機の記録映画を宣伝に採用することになったようである。

この転換はもちろん正しく、結構なことである。ただ一つ、我々は当局のその点に気附くことが余りに遅かったのを遺憾に思う。

すでに数年前、対外文化宣伝の必要が頻りに唱えられ、国際文化振興会などが出来た当時、専らいわゆる日本固有のものを海外に紹介しようとする傾向に対して、現在の日本の生きた文化を紹介すべきであるというのが民間の意見であり、私の如きも本欄において一再ならずその点に触れたのである。しかるにその意見は全く顧みられないのみか、非国家的思想に基づくかのようにさえ考えられたのであるが、数年後の今日やっとその意見通りになるに至ったというのは皮肉で

ある。

しかも新聞紙の伝えるところに依ると、外務省文化事業部をこのように転向させたのは、目下我が国に滞在勉強中の各国政府の交換学生であるというのも、従来の日本の外交振りを思わせるものがある。「日本へ来て何を学ぼうと欲するか」との質問に対して、彼等は口をそろえて、「古典日本には関心がない、知りたいのは明治維新以後における現代日本の文化である」と答えたといわれている。実際、これまで海外への宣伝に努力してきたようなものは、今日の日本自身の大衆にとつても殆ど関係のないものである。かような宣伝に対しては国内の大衆も熱意をもつことができず、しかるに文化外交の如きものはいわゆる国民外交として、大衆の支持がなければ成功し得ないのである。序ながら、これら凡てのことは現在の支那における文化工作に対しても反省を要求することである。

もとより私は古典日本の重要性を否定するものではない。注意したいのは、日本の古典を今日の立場から如何に撰取するかが、我々自身の文化の問題として完全に解決されることが、その外国への宣伝にとつて前提であるということである。

右の対外文化宣伝の場合は、民間意見の尊重すべきことが明らかになった一つの例に過ぎない。



輿論に聴くことが自主的外交にとって必要であることも明瞭であろう。民間で云われていることを取り上げるのは官吏の権威に関わるといったような気持が少しでもあつてはならぬ。

(八月九日)

### 研究機関への希望

今度東亜研究所が出来ることになった。大陸政策とか東洋の新秩序の建設とかといつても、肝腎の調査が不十分であつたり、理論がなかつたりするのでは問題にならぬ。この際東亜研究所の設立を見るに至つたのは喜ばしいことである。

支那事変以来、この種の支那問題やアジア問題の調査研究の機関が、公けのもの、半ば公けのもの、私的のもの等、俄にわかに多く出来たように聞いている。勿論いくら多く出来ても結構なわけであるが、それらの機関相互の間の連絡、提携、更に進んで統合について考えることも必要ではないかと思う。そのことは調査や研究を完全にするために必要であるばかりでなく、それらの機関が現在何よりも政策的な問題の研究に従事しているらしい事情から考えて、国策の統一を図るた

めにも必要である。割拠主義は到る処において見られる弊風であるが、それは調査研究の機関にあつては特に避くべきことである。割拠主義は秘密主義、独善主義等、種々の弊害を生ずるのである。

政策の研究が現在の急務であることは認められる。けれども余りに政策的になると、調査研究の客観性が失われることになる。大陸の諸問題については性急な政策論に熱中する者が殊に多い今日、必要なは却つて冷静な、科学的な、理論的な研究である。理論的な研究は直ぐに結果の現れるものではない。しかし効果を急ぐということは従来日本の多くの研究機関に見られた弊風であつて、そのために結局大きな効果が得られない場合が多いのである。結果を急いで基礎的な研究を怠ることのないようにするのが肝要である。学問の意義がもつと一般に理解されるようにならねばならぬ。

もう一つ希望したいことは、研究機関において研究された結果がなるべく多くの人の眼に触れるように発表されることである。それがその機関に対する国民の関心をつなぐ所以であると共に、広く批評を求めることは研究の進歩にとって大切なことである。いつたい、日本の官庁には「秘」と称する文書が多過ぎる。我々の普通に読んでゐる外国書が官庁で翻訳されると「秘」という印

の捺した文書になつてゐることが屢々ある、と聞くのである。官僚的秘主義は研究所の場合特にその目的を達する所以でない。

序に言つて置くならば、国民の誰でもが自由に出入し得る東亜図書館の如きものが設けられることは、大陸に対する国民的な関心と理解とを深める上に必要であらう。 (八月十六日)

## 職業と思想

人間の思想は多かれ少なかれ職業に左右されるものである。外交官には外交官流の、司法官には司法官流の思想がある。社会のいろいろな葛藤についても、職業と思想との関聯から考えると説明されることが意外に多いのではないかと思う。

昔支那に諸子百家というものがあつて盛んに論争したことはよく知られている。漢書芸文志は百家の学を九の流派に区別し、そのもとをいずれも周の王宮に求めている。例えば儒家者流は司徒の官から出たものであらうと云い、道家者流は史官から、陰陽家者流は羲和の官即ち天文を掌る人から、法家者流は理官即ち治獄の官から出たものであらうと云つて説明している。かような

説明は歴史的事実としてそのまま受取れないにしても、官吏の種類に依じてそのイデオロギーが異なるということ、職掌と思想との間には一定の関聯があるということを考えてものと見れば面白い。

学問や思想の分化が社会的実践的生活における職掌の分化に従つて生ずるということは西洋の歴史においても見られることである。これによつて学問は専門化するのであつて、外交官が外交官流の、軍人が軍人流の思想をもつというのは勿論善いことである。けれどもその結果めいめいの考え方が一面的になつて物を全体的に見ることが不可能になるということも、そこから生ずる。そのうえ悪い意味における職業意識というものが加われれば、その弊害は大きいであろう。今日官僚出身でない政治家、その省出身でない大臣、職業的政治家でない政治家が必要とされるようになって来たのも、そのためである。しかし単に政治家や大臣のみではない、すべての官吏が自分の職掌的乃至職業的イデオロギーを超えて考えるようになることが今日特に必要ではないかと思ふ。それが真の意味における全体主義的な見方というものであろう。自分の思想が職業に制約されていることに対する反省は誰にも大切である。

ところで九流百家の学のうちひとり儒教が現在にいたるまで大きな生命をもっていることに就

いては種々の理由を挙げ得るであろうが、その最も重要なものは儒教の根柢にあるヒューマニズムであると思う。ヒューマニズムはもとより職業的イデオロギーを超えたものである。しかるに今日いわゆる全体主義の思想にはヒューマニズムが欠けているのであつて、この点考へ直すべきものが多い。また対支文化工作において儒教を基礎とすることは現に行われていることであるが、そのヒューマニズムの要素をもつと発展させてゆくことを考へなければ、単なる反動に墮する恐れがある。

(八月二十三日)

## 統制と倫理

先般池田蔵相は木造建築の統制に関して、統制のための統制になつてはならぬと語つた。この非常時に家屋を新築するのは悪いということとは倫理の問題であつて、経済上その必要が認められない場合法律的に統制することは避くべきであるというのである。

統制のための統制が善くないことは明らかである。統制の不当な行き過ぎは慎まねばならぬ。しかし統制と倫理とは決して無関係ではないであらう。今日もし統制の行き過ぎがあるとなれば、

それはまず役人が統制を「仕事」にすることを依ると云われている。統制のための統制は「仕事」のための統制である。従つてそこにまず役人の倫理が問題になるであろう。

一般的にいつて、統制の行き過ぎは、統制が倫理化されると共に、倫理がその性質上潔癖になり易く、瑣末主義に陥り易いところから生じがちである。直接に経済に関係する事柄以外においては特に統制の行き過ぎが生じ易いのも、そこでは倫理化が一層行われ易いためである。

しかも今日の状態は経済と倫理とを二元的に考えることを不可能にしている。経済統制は精神動員として行われつつある。それ故に統制のための統制の弊に陥らないようにするには、統制の倫理の明瞭に示されることが必要である。経済から抽象して倫理を説くことがなくならねばならないし、その倫理が経済の発達を抑止するようなものにならないことが肝要である。一般に統制の倫理の何であるかが確立されねばならぬ。

経済と倫理とを二元的に考えることは自由主義時代の思想に過ぎないであろう。現代においては政治と経済とを二元的に考えることができない如く、倫理と経済とを二元的に考えることもできない。しかしまた政治が経済を支配するといつても、政治は経済の法則を無視することができぬように、経済が倫理化されるにしても、倫理は経済の法則を無視することができぬ。

事変が終つても自由主義の經濟に戻らないことは云うまでもない。そうであるならば、統制は今日戦争遂行のために必要であると云う以上に、統制の倫理の如何なるものであるかが思想的に、原則的に明瞭にされねばならぬ。それは統制の行き過ぎ、經濟から抽象された倫理の過重の弊に陥らないために必要である。

(八月三十日)

## 天災の教訓

ことしは天災が多いようである。尤も今頃には毎年颶風の襲来を受けるのであるが、ことしはそれが特に深く人心に印象されるのは事変中だからであろう。飛行機の襲来に備える訓練は近年毎に行われている。しかるにこの防空演習に対するほどの熱意を政府も国民も天災の防止に示しているであろうか。しかも自然の災害に対する予防と戦争の災害に対する予防とは決して無関係ではないのである。

この間の暴風雨には、東京では水道の水が出なくなる、ラヂオの効力が最も發揮せらるべき時にラヂオが聴かれなくなる、場所によつては数日間電灯がつかなかった。かようなことでは、も

し万一空襲を受けたとしたら如何であろうか。天災に対する防備を完全にすることとは戦時の防備を完全にするためにも必要である。このことから考えて、毎年多額の費用をかけて行われる防空演習が形式的でなく最も実質的なものになることを切望せざるを得ない。陸軍や海軍のみでなく、都市そのものに、国民の各戸に、実質的な防備力が具わるようにすることが大切である。それには科学的な技術的な設備に対する配慮がもつとなされなければならない。

暴風雨があればきまつて鉄道が不通になるが、東京市の一地域の如きも、毎年数回きまつて水浸しになる。年々歳々同じことを繰り返して殆ど改善されないのである。かようなことは諦めが好いという日本人の性質にも関係するであろうが、ただ諦めて済ますことのできぬ問題である。毎年天災のために蒙る莫大な損害を考えるならば、一時の間に合せでない徹底的な施設が計画的に行われて然るべきである。

そして根本においては国民の科学的精神の養成に努めることが、天災の防備に対してのみでなく、戦時の防備に対しても肝要であろう。諦めが好いということは日本人の一つの美質に相違ないが、そのために科学的精神が欠乏するようないことがあつてはならぬ。天災は諦めて済むとしても、戦時にはそれで済むであろうか。科学的な考え方は人心の不安を無くすることができる。飛



行機の襲撃の一つの目的は人心を不安に陥れることにあるといわれているが、その場合の不安を少なくするためにも国民が科学的な考え方をかねて養っておくことが大切であろう。(九月六日)

### 淫祠邪教の蔓延

最近また淫祠邪教の蔓延が問題になっている。警視庁特高部の発表に依ると、事変このかた疑似宗教は雨後の筍の如く簇生して事変前の十倍以上になり、おもて立つたものだけでも二百六十五を数え、そのほかに祈祷師、巫女の類は数千人に上り、調査も満足にできないような状態であつて、その影響下にある民衆は夥しく多数であろうといわれている。それらの疑似宗教は一般国民が無批判であるのにつけ込んで時局を喰い物にし、延いては反戦思想の温床ともなる危険性をさえ有するといわれている。

かような淫祠邪教は左右両翼の思想とは違つて神憑り的な大衆性を有するだけその蔓延が憂慮されているのである。殊にそれらの最近の活動が主として応召家族を目標としているのは注目すべきことであり、これに対する対策の急務であることを思わせる。

そのような対策として先ず必要なのは、国民の生活、とりわけ応召家族の生活に不安のないようにすることであろう。およそ邪教というものは現世の物質的利益を約束するものであり、そのために邪教と呼ばれているのであるから、邪教に入るのを防ぐためには大衆の物質的生活について十分考慮することが肝要である。

次に事変下における邪教の蔓延は国民精神総動員の運動が大衆の中に深く入っていないことを示すものであつて、この運動の方針及び方法について最も真剣に反省せらるべきことを要求しているのである。

しかしながら今日邪教の蔓延する心理には、生活の問題、思想の問題以外、もつと人間的なものがあるであろう。戦争は人間的なものを抑圧し、そしてそれは已むを得ぬことであるが、他面それだけまた人々をして深く人間的なものを求めさせるのである。単なる政治思想によつて人間は救われることもできないし、またほんとに強くなることもできない。この人間心理を理解することが大切であつて、そこに宗教があり、哲学があり、文学があるのである。戦時においても宗教や哲学や文学は固有の任務を有している。

然るに今日の如く宗教がそのような本来の面目を忘れて徒らに政治的になつては、邪教が

その機に蔓延するのは自然であろう。嘗てあれほど喧しく邪教撲滅を叫んだ宗教が、現在そのことについて殆ど語らないのは不思議である。ただ政治的になることのみが真に国家のために尽す所以ではない。これは宗教に限らず、文学も哲学も今日深く考えてみなければならぬことである。

(九月二十日)

## 新しい神話

ローゼンベルクは『廿世紀の神話』を書いて、ナチス・ドイツの聖典となっている。今もし日本にかような廿世紀の神話が可能であるとすれば、その主題は「大陸」とか「東洋」とかといわれるものである。

しかし今日果たして大陸とか東洋とかというものは我々の「廿世紀の神話」として形成されているであろうか。それは確かに一部の人間にとっては既に久しく神話の意味を有していたであろう。けれども一般の国民にとっては必ずしもそうではないように思われる。そこに、もし欲するならば、思想家や文学者の大きな仕事が残されていると云えるであろう。

今の日本には新しい文学が要求されている。そしてそれは普通に「戦争文学」の種類と考えられている。そのような戦争文学の作品は既にいくつか戦線から送られて来たし、またそのような作品を書くために多数の文士や評論家が戦線へ派遣された。それはもちろん凡て結構なことである。戦っている日本に戦争文学が求められ、また作られるというのは当然のことである。しかし今日最も要求されているのは単にいわゆる戦争文学でなく、むしろ新しい神話であり、戦争文学そのものも自分のうちに新しい神話を含まねばならぬと考えられるであろう。今度の事変の目的は東洋に新しい秩序を建設することにあるとすれば、戦争文学も単にいわゆる戦争文学に止まらないで、その中に「東洋」の神話が形成されなければならないであろう。そう考えるならば、不幸にして今度漢口に従軍することのできなかつた作家も歎くには当らないので、彼等にも極めて大きな課題が与えられているのである。

今日の日本に必要なのは神話でなくて、思想であると云われるであろう。確かにその通りである。神話と雖も今日においては思想的根柢なしには存在することが不可能である。神話とは思想の一つの存在形態をいうのであって、思想が客体的認識としてでなく主体的形象として存在する形態である。そして今日東洋というのは世界史的な行動の主体として呼び掛けられるものであつ

て、客観的原理としては東洋的なものは固より世界的なものでなければならぬ。即ち東洋という概念はそれ自身のうちに或る神話的なものを含んでいる。

支那事変が世界的意義を有すべきものであるとすれば、東洋に新しい神話が生れねばならぬ。一つ of 思想が神話として大衆の中に拡がり、その行動の力とならなければならぬと云い得るのである。

(十月四日)

## 理論と行動

最近私は東京、京都、大阪において多くの青年インテリゲンチヤと親しく話す機会をもつた。そのときまつて出た質問は、今度の事変の目的は東洋に新文化を建設することにあると云われているが、その新しい文化の原理はどのようなものであるか、それが積極的に示されなければ、インテリゲンチヤに向つて能動的になるように説いたところで無駄ではないかというのである。

この議論は一応尤もである。新しい世界観とか新しい文化とかと既に以前から繰り返し叫ばれているにも拘らず、それが体系として具体的に展開されたものに我々は未だ出会わない。なるほ

ど新聞雑誌の上では「劃期的」とか「獨創的」とか「体系的」とかと批評される書物も毎月いくつか出ているが、果たして辞令以上の意味を有するであろうか。体系的という言葉は我が国では教科書的に手際よく纏まっているというほどの意味に用いられるようである。劃期的とか獨創的とかと称する思想が毎年或いは毎月いくつか出るといふことはそれらが劃期的でも獨創的でもないことを示しているのであつて、何が劃期的であり獨創的であるかは長い歴史が決定することである。

言い換えると、要求されている新しい世界観、新しい文化の原理は完成した体系としては未だ現れていないのである。哲学はミネルバの梟であるとヘーゲルが云つたように、完成した思想体系は一つの時代の終りに近づいて初めて出てくるものである。今日はまさに新しい時代の端初に立っているとすれば、完成した思想体系が未だ存在しないのは寧ろ当然であるといわれるであらう。

それ故に懐疑的で消極的なインテリゲンチヤの現在想起すべきことはいわゆる理論と実践との弁証法であつて、理論は行動の發展につれて一步一步形成されてゆかねばならぬといふことである。抽象的な可能性において理論を考えている限り、我々は懐疑に止まるか現実の歴史に關係の

ない形式的な構成に終るのほかないであろう。完成した体系を求めること自体が現在では非歴史的なことであるとも云える。先ず必要なのは新文化の形成の意欲においてインテリゲンチヤが協同するということである。

そして今日の日本が東洋に新文化を建設するという極めて大きな使命を有することを考える場合、政府当局はこのインテリゲンチヤの活動に自由を与えるという度量を積極的に示さねばならぬであろう。禁圧政策によつては新しい文化の創造という大事業は到底考えられないのである。

(十月十一日)

## 国民心理の解明

子供雑誌が子供に与える大きな影響を考えて「健全明朗な子供雑誌」を作るべく内務省では絵本を含めての全子供雑誌の統制に乗り出すことになつたと伝えられている。特にその方針の一つとして、チャンコロなどと支那人を侮辱するような文句は一切禁じ、むしろ日本人と支那人とが手を握つて新東亜を建設する日支提携を積極的に強調するように努めさせるとのことは、確かに

適切な指導と云い得るであらう。

我々は支那と戦いながら根本において支那人を憎んでいない。そこに今度の事変の特殊性がある。一部の者から非難されたように国民が事変に対して冷淡であるかの如く見えたのも、かような国民の心理に基づくのであつて、この国民心理のうちにおのずから今度の事変の特殊性が現れていると云うこともできるであらう。この特殊性の意義を積極的に闡明することをしないで、却つてこの事変を他の戦争と同じように考え、ただ子供の喜びそうな面を取上げるとするのは、事変が終極的に目差すように将来日支提携して活動すべき人間の教育にとつて有害なことではなればならぬ。

問題は必ずしも子供雑誌にのみ関係していない。政府でも事変の当初にいわれた「暴支膺懲」の如きスローガンが国民にアツピールすることの少なかつたのを考えて、近く事変処理の方針を新たに示すことになつたと云われている。ところで暴支膺懲の如き標語が国民の心を捉え得なかつたのは、我々は支那と戦いながら根本において支那人を憎んでいないという国民心理を十分に理解せず、この国民心理のうちにおのずから表現されている今度の事変の特殊な意義を国民の前に積極的に闡明することを怠つた為である。



もとより国民自身も自己の心理に含まれる意義を必ずしも明確に把握していたわけではない。そこに彼等が従来消極的であるといわれた理由があった。しかし国民は無意識的にせよ正しいものを持つていたのである。彼等の心理の意義を解明してこれを思想的に把握させることが大切である。それが真に国民を教育する所以である。教育は彼等の持つていないものを与えることができぬ。教育とは人が無意識的に持つているものの意義を明確に認識させることにほかならない。子供に対して親支教育を行うといつても新しい理論的基礎がなければならぬ。理論の必要は事変の進展と共にいよいよ増して来た。

(十月二十五日)

### 事変の進歩的意義

漢口陥落と共に事変は新段階に入った。これまでは国民にとつて、広東攻略とか漢口占領とかというように、事変の目標が具体的に、また集中的に、眼前に与えられていた。しかるにこれからは同じではないであろう。そこに国民指導の地位にある者の最も深く考えねばならぬことがあ

i 武漢三鎮・広東陥落でも蒋介石政権（相手としない相手）と講和ができず、十二月には進攻作戦を打ち切る。

る。

今や必要なことは、事変の積極的意義を国民の間に国民自身の信念になるまで浸潤させることである。とりわけこの事変の進歩的意義を掴み出し、国民のうちに夢を、新しい神話を、高い理想を植え付けなければならぬ。従来一般に云われてきたことは事変の大いさに値すべく余りに低調で消極的なことが多かった。

事態は確かに変化しつつある。最近次第に広く語られるようになった「東亜協同体」の思想の如き、事変の意義を一步積極的に把握したものと見ることが出来る。しかしこの思想も従来ありふれたブロック経済の思想の如きものに止まることなく、新しい理論的基礎が与えられねばならぬ。日本が世界的に進歩的な役割を演ずることなしにはこの事変の發展的解決は不可能なのであつて、そのことの根本的に理解されることが肝要である。事変の進歩的意義の闡明は今や要求されている国民再組織の思想的前提であり、且つそれは同時に日支提携のために支那人に呼び掛ける思想の根柢でなければならぬ。

事変の進歩的意義を理解する者は偏狭な思想ほど今日有害なものはないことを知るであらう。しかるに現在なおこの事変の積極的意義を理解していないが如き偏狭な思想の存在することは遺

憾である。例えば最近仏教家によって問題にされている国定教科書からの「釈迦」の削除の如き、また台湾総督府の某官吏が聖徳太子十七条憲法を歪曲して、その第二条にいう「三宝」の「宝」は「法」であり「仏法僧」は「儒仏神」であるとし、明らかに排仏的思想を述べたが如き、偏狭な日本主義の弊を示すものであつて、東亜協同体の理想に背馳するものといふべきであろう。

心ある者をして自己を日本主義者と称することを躊躇させるようなものに日本主義をしてはならぬ。進んで協力しようとする人々を広く包容し得るような大思想なしには新秩序の建設は不可能である。

(十一月一日)

## 内鮮一体の強化

朝鮮総督府では半島統治の根柢をなす内鮮一体の大方針を在滿在支その他在外の半島人百卅万の上にも具現せしめるよう今春来外務省と協議を重ねていたが、有田外相は南総督の施政方針<sup>i</sup>を支持し、これを在外使臣に宣明して全半島人の人的地位の向上をはかることになつたといわれる。

i 国体明徴、鮮満一如、教学振作、農工併進、庶政刷新。皇国史観の押し付けと、固有の民族性の否定。

滿洲事変以後、とりわけ今次の事変以来、半島人の間に帝国臣民としての自覚が高まつてきたことは新聞紙上に現れた種々の事実によつても明らかであるが、この際鮮内に止まらないで外地においても半島人の人的地位の向上をはかり、内鮮一体の趣旨を徹底させようというのは適切なことである。

半島人の地位の向上は内鮮一体の基礎である。差別待遇が存在するようではその理想は実現されない。この点について在鮮内地人の指導は第一の必要であるが、更に滿洲や支那、その他の外地においても内地人の半島人に対する認識が新たにせられねばならぬ。まず内地人の側から半島人を差別待遇しているようでは、彼等が他の外国人はもとより、滿洲国人、支那人などからも、内地人と同様に待遇される筈はなからう。帝国臣民としての半島人の自覚を強化するには彼等を内地人と同様に待遇することが大切である。人を道徳的にしようとする者はその人をまず尊重することを忘れてはならぬ。

過日南総督の談話にもあつたように、日本が長期戦に対して持久力を有するのは何といつても食糧が十分にあるからであり、そしてそれは朝鮮における米の生産に負うところが尠くないのである。この一つの点だけから考えても、この機会に我々は朝鮮に対する認識を新たにする必要が

ある。

半島人の人的地位の向上は人道主義的な倫理の普及に俟たねばならぬであろう。しかし特に考へるべきことは、すべて人的地位の向上は経済的並びに政治的地位の向上に關係するのであつて、半島人の人的地位の向上をはかろうとする者は同時にその経済的並びに政治的地位の向上に就いても考慮することを怠つてはならないであらう。

支那事變このかた東亜の一体性が次第に強調せられるようになった。もとより日滿支一体ということと内鮮一体ということとはその一体性の意味において同じでない。けれども日滿支一体とか東亜協同体とかといつても、内鮮一体の実現が先決の前提であることは明らかである。すべてのことは手近なところから始めなければならぬ。

(十一月八日)

## 不安な文化

帝大総長官選問題がともかく片附いて結構なことであると思つていたところ、今度は河合教授の問題が起つてきた。河合教授の問題の不当について私はここで論じようとは思わない。私の

憂えるのは、河合教授の問題が何等かの仕方で片附いたにしても、問題はそれで終結するのでなく、同じような問題が次から次へと生じてくる危険を大学自身が絶えず感じているということである。

かくて一つの問題が済めば続いて他の問題が現れるという有様で、大学がつねに不安な状態におかれているということは、日本の文化にとつて甚だ困つたことではないかと思う。それでは教授も学生も落附いて勉強することができないであろう。問題は根本において一教授が如何に処置されるかということにあるのでなく、却つて大学がこのように始終不安な状態にさらされているということである。もし大学がそれで安定するものであるならば、或る教授が如何に処置されるかということが如きことは寧ろ小さな問題である。

大学がかように絶えず不安な状態におかれているのは如何なる理由に依るのであるか。その理由が實際的に突き止められて不安が根本的に取除かれることが必要であり、教授も落附いて研究に従事することができ、学生も安心して勉強することができるような状態が速かに来るようにしなければならぬ。そのためには原則的にいつて当局の思想政策や文化政策の基準の確立され、明示されることが要求されている。

問題は単に大学のみに関係していない。一般に政府の思想政策や文化政策の基準が明瞭でないところから、今日の文化はおよそ不安な状態におかれているのではなからうか。そのためにインテリゲンチヤに折角時局に協力しようという意志があつても勢い後込みせざるを得ないという事情が存在しないであらうか。善き意志を有しながらインテリゲンチヤが今なお消極的であることをやめない原因は何処にあるのであるか、当局はその原因について極めて具体的に検討してこれを除去することに努力すべきであらう。

過日の政府の声明にもあつたように支那事變の解決は新文化の創造によつて可能になるのであり、そのためにはインテリゲンチヤの協力が絶対に必要である。近来各方面において折角積極的に動き始めてきたインテリゲンチヤを再び後込みさせてしまうことのないように、当局の賢明にして確固たる処置が望ましいのである。

(十一月十五日)

### 思想を超ゆるもの

今の時代に思想が大切なことは云うまでもない。思想の必要はどれほど強調されてもなお足り

ないであろう。

然るに凡ての者が思想の重要性を確信するようになった今日、今度は逆に思想の限界を考えることが必要になって来る。今日一種の「思想的」時代が現れると共に思想の限界についての反省が失われたということがないであろうか。思想の虜になってしまふことが如何に人間を不幸にするかを、我々は例えば現在のスペインにおいて見ることが出来るであろう。思想が左右に分れて政治的に対立している場合、ひとは思想の限界を忘れて思想の虜になってしまひ易いのである。

かくて支那事変にしても、これを単純に「思想戦争」として規定することの危険を知らねばならぬ。この事変は確かに思想戦争の意味を含んでいる。しかしそれを思想戦争として規定することに急にして思想の限界を考えない場合、種々の危険があるであろう。人間を解放すべき思想が逆に人間にとって桎梏にならないように注意しなければならぬ。

人間が思想の虜になるというのは、思想の、従つて知性のためであるよりも、却つて感情の、従つて非思想的なものの力に依るのである。思想の限界を認識させるものは寧ろ知性であり、それ故に思想の限界を認識することはそれ自身思想的なことに属している。かくてまた真に思想を超ゆるものといわれ得るのは単に感情的なものであり得ないであろう。



思想を超越するものというのは個々の具体的な形である。発明された個々の機械、具体的な技術的形態は、抽象的な科学的理論を超越するものである。科学者と発明家との間には理論と形態との差異がある。詩学の規則に通じていても、それだけでは芸術家として生きた形象を作ることはできないであろう。もちろん技術的形態も科学的法則を基礎とし、その限りすべての形態は合理的なものである。しかし形態が作られるには理論以上に想像力もしくは構想力が働かねばならぬ。形は具体的なものとしてつねに総合的なものである。

今日の問題は、思想や主義であるよりも形態であるといふことができる。政治、経済、文化のすべての方面において新しい形を構想し得る自由な精神が要求されている。原則だけからは形は出て来ない。新時代の思想家にも政治家にも何等か芸術家的なところ、発明家的なところが必要である。理論の虜になつて具体的な形の構想が一層重要な問題であることを忘れてはならぬ。

(十一月二十二日)

## 日本文化の自主性

日独文化協定の成立は、従来文化的に深い関係にあつた両国にとつて慶賀すべきことである。これによつて我が国が文化の各方面において受ける利益も尠くないであろう。

一般的にいえば、日独文化協定の成立は文化に対する政治の優位の一つの例にほかならない。現代の特徴に属するかくの如き政治の優位を我々は承認しなければならぬ。しかしかように政治の力を承認すればするだけ、逆に文化が政治に影響すべき必要がいよいよ感ぜられる。もしそれが無力のものであるならば放置してもよい、それが有力なものであればあるだけ、それに対して文化の影響することが必要であり、そのためには文化が自主性を失わないことが大切である。

この際特に考えねばならぬことはドイツ文化に対する日本文化の自主性である。近年日本主義とか日本精神とかと頻りにいわれているにも拘らず、実際はドイツ模倣の傾向が著しかったのであるが、こんど日独文化協定の成立によつてその傾向が更に甚だしくなる惧れがないであらうか。かくては日本文化の自主性が奪われ、それと共に創造性が失われて「新文化の創造」などあり得ないであらう。

もとより我々はドイツ文化から学ばねばならぬ。しかしそれは飽くまでも自主的な立場においてでなければならぬ。自主的であることは創造的であるために必要であり、この自主性において

我々は単に今日のナチスの文化からのみでなく過去のドイツの全文化から学ぶことを忘れてはならない。

外交そのものからいっても、外交は多角的でなければならぬ。この多角性は現にドイツの外交に見られることであつて、一方日独文化協定を結んだドイツは同時に他方独仏不侵共同宣言<sup>1</sup>を行つた。しかるに今日我が国の外交は多角性を失ひ、強いて自分を窮屈にしているところがないであらうか。外交における自主性と多角性とは矛盾するものでなく、却つて真に自主的な外交にして初めて多角的であることができる。

文化の自主性についても同様である。日本文化は自主的であることによつて全世界の文化と多角的に交流しなければならぬ。

(十一月二十九日)

i ドイツ・フランス不可侵共同声明、調印は12月6日。英仏による対ナチ融和政策の一つ。

## 続現代の記録

- 倫理と政治 ○ 歳末の感想 ○ 理想と現実 ○ 文化人の使命 ○ 確信の問題 ○ 東亜協同体の現実性 ○  
全体主義と心理学 ○ 戦争の清掃作用 ○ 全体主義と責任 ○ 秘密の漏洩 ○ 景気と文化 ○ 職業觀念の  
変革 ○ 常識の効用 ○ 論理の峻厳 ○ 国民再組織の再吟味 ○ 品質の統制 ○ 政治的時期 ○ 不定な知  
識人 ○ 流言蜚語 ○ 時の問題 ○ 機構の単純化 ○ 良書の基準 ○ 音の統制 ○ 国語の改良 ○ 革新と  
伝統 ○ 選択の必要 ○ 人心一新の要 ○ 日本の自覚 ○ 思想と現実 ○ 思想の不信 ○ 国民運動の起点 ○  
統制の自働性 ○ 雰囲気の変化 ○ 鍛錬冬休 ○ 科学の普及 ○ 責任の道徳 ○ 知識人の表情 ○ 消極  
的個人主義 ○ 教育の実用化 ○ 重点主義 ○ 国民の持久力 ○ 「良業忠言」 ○ 革新と国民 ○ 新しい経  
済倫理 ○ 教育の不安 ○ 心に希望を ○ 思想の具体性 ○ 常識の変化 ○ 組織の持続性 ○ 取残される  
思想 ○ 検閲の責任 ○ 教育義務制案 ○ 民族性と政治 ○ 事実の宣伝 ○ 指導者の反省 ○ 帰還將兵の動  
向 ○ 政治の倫理 ○ 世界史の一瞬 ○ 科学の生活化 ○ 指導者の養成 ○ 敗者の教訓 ○ 新生活体制の基  
礎 ○ 東西の新秩序 ○ 信頼關係の確立 ○ 流行と權威 ○ 一元化の問題 ○ 大国民の自覚 ○ 彩票の倫理 ○  
住宅問題 ○ 協和と指導 ○ 文化政策の新しさ ○ 人材の不足 ○ 新体制と青年 ○

## 倫理と政治

いわゆる国民再組織に関する政府の方針も決定し、その新団体は「精神団体」として誕生することになったと伝えられている。国民再組織という以上、それは当然政治的意味のものである筈だと考えていた者は、既に或る失望を感じざるを得ないであろう。

もとより国民再組織が倫理運動であつてはならぬというのではない、却つてそれは本質的に倫理運動であることを要求されている。今日の政治は国民の倫理的力に俟つところが極めて多いのである。国民の倫理的力から遊離し、従つていわば単に政治のための政治になつていたものを新たに国民の倫理的力と結合することが今日の政治であるということができる。国民再組織の目的もまたそこに存在する。

しかしながら国民再組織を単なる倫理運動に止めようと考えることは甚だ不十分である。従来  
の国民精神総動員が失敗に終つたのは、それが単なる倫理運動であつて国民に政治的目標を与え  
なかつた為である。従来  
の国民精神総動員の限界を克服するために新たに生れる国民再組織はそ

の点に鑑みて国民に対して具体的な政治的目標を明示しなければならない。政治的目標のない倫理は修身教科書の倫理に過ぎず、それでは国民を強力に動かし得ないことは既に試験済みである。まして最近次第に国民の政治的意識の昂揚してくるのが感ぜられる場合、政治性を除外した運動は失敗に終るべき運命にあるであろう。

既に屢々我々は次のような声を聞く。事変以来国民はただ忠実に政府の命令に従って挙国一致を實行してきた、今更何の必要があつて国民再組織などというのであるか、と。確かに、単に倫理的な意味においては挙国一致は既に存在したのである。それがなお消極的で不十分であつたとすれば、国民に明確な目標をもつた政治的意識が与えられていなかった為である。このものを与えることによつて国民の倫理的力を倍加して集中的に昂揚させることが国民再組織の意義でなければならぬ。

国民再組織とは簡単にいえば国民の力を最大に發揮させるための運動である。そしてそれには何よりも先ず国民を信頼することが大切である。しかるに国民再組織を単に精神運動として規定することは、国民をなお信頼していないこと、国民の力を必要としながら国民の力を恐れていることではないかとの疑惑を生ぜしめないであろうか。

政治を離れた倫理でなく、倫理を離れた政治でもなく、政治と倫理との統一が国民再組織の原則でなければならぬ。

(一九三八年十二月十四日)

### 歳末の感想

この一年における文化界を回顧して最も考えさせられることは、やはり政治と文化の問題である。すべての文化人は、欲すると欲せざるとに拘らず、この問題に直面せざるを得なくなってきた。

我が国のインテリゲンチヤは果たしてこの政治と文化の問題に就いて解決を持つているのであろうか。単純な人間は別として、多くのインテリゲンチヤは今もこの問題に対する態度が決していないのではないかと思われる。或いは誘い出され、或いは後込みし、或いは諦め、或いは勇気づけられ、一進一退を繰り返しているというのが実際ではなからうか。政治と文化という退引ならぬ問題の前に立たされて、多数の者はなお足踏みしているというのが現状ではないであろうか。この一年を通じてみれば、我が国のインテリゲンチヤの態度にも多少の変化があった。一般的

i 再組織は、明けて1月近衛内閣は総辞職し、次の平沼内閣は、2月、国民精神総動員の強化を方針とする。

にいえばそこには消極から積極への変化が認められる。しかしながらその積極性が果たして政治と文化の問題に対する確信ある解決の上に立つたものであるかどうかといえは疑問である。寧ろ多くの者はこの問題に就いて根本的に考えてみることもしないで右往左往しているのではなからうか。

最近インテリゲンチヤは積極的になつたと云われるが、そのように積極的になることによつて、果たして日本の文化そのものが内容的に真に発展しつつあるのであらうか。外部に現れた作品は別にしても、インテリゲンチヤ自身はどのように積極的になることによつて、果たして自分の内心に充実を感じているのであらうか。

政治と文化の問題はもとより文化人へのみ関することではなく、政治家にとつても極めて重要な問題である。しかるに我が国の政治家は果たしてこの問題に対して何等か根本的な解決を持つていたのであらうか。否、この問題について真面目に考えてみようとす程「文化的な」政治家が果たして日本に存在するのであらうか。そこに見られるのは単なる便宜主義である。政治家の便宜主義によつて文化が左右されることは危険であると云わねばならぬ。

政治と文化の問題、これは今年においてなお未解決のままに残されて来年へ持ち越された重要



な問題の一つである。今年の文化界を顧みて最も賑かであったのは何といつても文化が政治に接触した部面であった。しかし外面的な賑かさは本質的な問題の存在を消滅せしめたのではない。

(十二月二十九日)

## 理想と現実

新内閣に対する一般の予想は、前の近衛内閣が理想にはしる傾向があつたのに対して、今度の内閣は現実的な政治を行うであろうということにあるらしい。

近衛内閣はたしかに理想主義的であつた。それは理想的、余りに理想的であるように見えた。しかし近衛内閣の欠陥は、それが理想主義的であつたところにあるというよりも、寧ろその理想主義に実行力が伴わなかつたところにある。余りに理想主義的であつたという譏りはあるにしても、これによつて近衛内閣は従来殆ど理想というものを持たなかつた日本の政治に新しい型を作り出したという意義はあつたであらう。政治にともかく理想を持たせようとしたところに、近衛前首相の青年らしき、明朗さがあつたのであり、そこにまた国民は何か清新なものを感じたので

ある。

尤も近衛内閣には断行力が乏しいという憾みがあつたのは事実である。この点において平沼内閣が現実的な政治を行うように期待されるのは好いことに相違ない。けれどもそれが余りに現実的になつて国民に何か陰鬱な感じを与えることのないように注意して貰いたい。国民に希望を持たせることは必要である。政治は理想を失うべきでなく、却つて理想を現実のうちに実現し得る行動性が期待されているのである。

今日の日本の政治が理想主義に傾くのは或る意味では必然的なことである。それは東亜の新秩序の形成において指導的地位に立つべき日本にとつて当然のことである。単に現実的な政治は国内に対してはともかく東亜の諸民族に対して呼び掛けることができぬ。今日の日本の政治は単に内に呼び掛けるのみでなく、更に外に呼び掛けるものでなければならぬということを理解すべきである。日本の政治が一定の理想を持たねばならぬこと、日本の政治が世界的意義を持たねばならぬことを示すものであつて、躍進日本に相応することである。

もちろん、ただ理想にはしることは戒めなければならぬ。この点において我々が平沼内閣に期待するところは大きい。現実主義的であることは必要なことであるが、ただその現実主義が国内

的見地にのみとらわれて、今日の日本の政治が国内のみでなく東亜の諸民族をつねに対象とするものであることの忘れられないことが大切である。

理想と現実、このいわば哲学的な問題を解決する新しい政治が新日本には要求されているのである。

(一九三九年一月十一日)

## 文化人の使命

さきには従軍作家があり、また有馬前農相によつて農民文学懇談会の如きも設けられたが、今度拓務省では更に大陸文学生産のために作家を動員しようとしている。このとき他方荒木文相は六帝大総長との懇談会において大学の新使命を説いて協力を要請した。かようにして時局と文化人との関係は愈々密接なものになりつつある。

日本の、延いては東亜の運命にかかわるこの重大時期において文化人が協力すべき義務のあることは言うまでもない。誰もこの義務を回避しないであろう。それだけまた文化人には信念と覚悟とが必要である。しかるにその時局的活動について既に国内においても現地においても種々の

批評が行われており、中には文化の權威に關するものもあるという非難を聞くことは遺憾である。文化人の時局への協力は文化の權威を失墜させるようなものであつてはならない、文化の權威の發揚することによつて初めて文化人は真に時局に協力し得るのである。

由來わが国の文化人についてはその社会的意識乃至政治的意識の欠乏が殆ど定評のように言われてきた。支那事變と共に彼等の間に政治的意識が俄に覺醒されるようになったのは甚だ結構なことであるが、併し俄作りのものにはとかく脆弱なところがあるものだ。その俄仕込みの政治的意識が文化の權威を失墜させることにならないように注意しなければならぬ。

特に時局に協力するということが文化人が安易な氣持になるといふことは警戒を要するであらう。安易な氣持からは如何なる眞の文化も生れ得ない。そこに批判とか懷疑とかといふもののある烈しさが必要とせられる理由があるのであつて、今日においてもこの烈しい精神が失われるべきでない。文化の權威を時局の力に委ねて安易な氣持になつてはならぬ。

今日わが国の文化が世界的なものにならねばならぬ場合、日本の文化が現在世界的水準から見ても如何なるものであるかについての厳正な認識が要求されている。自己批判は個人にとつても国家にとつても進歩の基礎であつて、ただいけば時局に便乗して自己批判を怠るようなことがあつ

てはならない。日本の対支行動が日本の民族的エゴイズムによるものでないという精神文化の方面においても活かされることが大切である。時局への協力の名において文化人の固有の使命に対する自覚が失われないように切望されるのである。

(一月十八日)

## 確信の問題

ある科学者の集まりで、もし各国の科学者が今後数年間にその研究を伏せておくことになつたら、その間に日本の科学者の仕事は西洋の科学者の仕事に勝つであろうかと尋ねたとき、「勝つ」とはつきり答えた者は一人も無かつた、ということやを或る科学者が書いていた。私はそれを読んで慄然としたのである。

問題は確信の問題である。そして私の惧れるのは、今日何等確信のない理想論の行われる傾向が甚だしくないかということである。

近年一部において「日本学」の建設が唱えられ、荒木文相も過日の帝大総長との懇談会においてそのことを述べたといわれる。わが国の独自の学問が発達するのは固より極めて望ましいこと

である。しかし日本の学者は自己の良心において真にそれに対する確信を有するのであるか。

支那事變の發展は日本の政治に一つの理想を与えたように見える。そしてそれに影響されて文化人の間においても理想論の流行が生じた。理想を説くのは固より善いことであり、今日特に必要なことでもある。しかしそのように理想を説く者に果たして確信があるのであるか。

これまで我が国の文化人には自信が足りなかつたといえるであろう。そのために日本に独自の文化の作られることが阻まれていたということもあつたであろう。確信は主観的なものであるから無意味であると私は考えない、主観的な確信も大いに必要である。我々は確信をもつて自分の仕事に従わなければならぬ。しかし今日理想を説いている文化人の多くは、ただ政治に追随して物を言っているのであつて自分自身には何の確信も持っていないということがないであろうか。確信を伴わない理想は理想とはいえないであろう。自己の無確信を蔽い隠すために、現実の不安から眼を背けるために、徒らに理想論に耽るというようなことであつてはならぬ。誠実であることなしに如何なる真の確信も生じないであろう。今日人々は如何なる過程を経て理想論に達したのであるか。

新文化の創造は大言壯語の楽天觀ではなく、真摯な文化人の地下室の仕事である。最も社会的

な仕事も孤独に堪え得る魂から生れるのである。時局に協力すると称して安易な気持になることが厳に戒められねばならぬ。

(二月八日)

### 東亞協同体の現実性

ハンス・フライヤーというドイツの社会学者は、ユートピアの歴史を論じた書物の中で、この世界と全く違つた世界は何処に存在するかということが、古来ユートピアを描いたすべての人々の前に横たわつていたと云つてゐる。彼等は彼等のユートピアを、空間的に遠い国に求めるか、時間的に遠い過去もしくは遠い未来に求めるかした。

しかるに交通が発達して世界の隅々が結び付けられた今日では、ユートピアを空間的に遠い処に求めることは無意味になつた。奇妙な人間や風習はたくさん見出されるにしても、單純に羨望すべきもの、努力に値するものは何処にも存在しないのである。またユートピアを遠い未来におくことは、如何にしてそこに達するかという問題を除外して空想に耽ることであり、そしてそれは遠い過去に理想郷を描くのと同じことである。

我々にとつて問題はつねに現在であり、現実である。また古來どのようなユートピアも現実から作られている。もしも牛が神々をもつていたら、牛は牛の姿にかたどつて神々を作つたであろうとクセノファネスは云つたが、すべてのユートピアはそれを考える人間の現実に従つて作られるものである。

我々の立つている現実とは、いわば多くの現実の交切点であり、ユートピアというものも我々の現実に交切する一つの、それ自身の現実にほかならない。ユートピアは到る處において現在のであり、あらゆる隅において始まつている、とフライヤーは云つてゐる。ユートピアの像に従つて現実を形成しようとする意志がユートピア的思考の全歴史のうちに生きており、その本来の動力をなしてきた。

このごろ東亜協同体の思想に対する批評が現れ、それが単なるユートピアに過ぎぬかの如く非難されている。東亜協同体はもとより單純に現実をいうのではなからう。それは一種のユートピアであるとも云い得るが、しかしこのユートピアと雖も全く非現実的なものであるのではない。

支那事変という一つの現実はいわば多くの現実の交切点であり、この事変を如何なる現実の方向に向つて形成してゆくかが根本的な問題である。仮にこの事変が主観的な意図においては帝国



主義戦争として始まったにしても、その現実の中から他の一つの現実の可能性が示されるに至つたのである。東亜協同体はユートピアであるにしても、現実のうちに交切する一つの現実の意味を有している。現実を固定的に見て、これと東亜協同体の思想とを比較して、その非現実性を論ずる者は、歴史的現実というものの意味を知らないものと云わねばならぬ。歴史的現実とは単に客観的なものでなく、そのうちには我々自身の現実形成の意志をも含む現実である。

(二月二十二日)

### 全体主義と心理学

いつのまにか全体主義という言葉が普及し、それが漠然と日本の指導原理であるかの如く考えられるようになった。この頃では日本主義そのものも全体主義に吸収されてしまいそうな傾向である。

全体主義という言葉は我が国では一般に極めて曖昧な意味に用いられている。シュパン流の普遍主義とナチスの全体主義との区別さえ十分に考えられていない。むしろその意味の明確に限定

されていないことが全体主義という言葉の流行の原因となっている。そのうえこの言葉の無難な使用には、我が国のインテリゲンチヤの政治的教養の欠乏、政治に関する思想上並びに実践上の訓練の不足が見られるように思われる。

最近、高等学校心理学教授要目改正案をめぐって起つてゐる紛争の如きも、かような欠陥を示す一つの例である。即ち文部省の督学官がゲシュタルト（形態）心理学と全体主義の思想を結び付け「国家のために」という理由で、高等学校の教授要目をゲシュタルト心理学の立場から改正しようとしたのに対して、九州帝大を除く全帝大及び官私大が一致結束して反対を唱へてゐると新聞は報じてゐる。

その間に伝えられる「陰謀」は別にしても、ゲシュタルト心理学が全体主義の政治思想とどれほど密接な関係を有するか、疑問である。ソビエトでもその唯物弁証法の立場からこの派の心理学を支持したことがあるのを我々は記憶している。そして現にゲシュタルト心理学の有力な代表者たちはユダヤ人であるという理由でナチスによって追放され、今はアメリカにゐるのである。機械論に反対して全体性を強調するというだけなら、この派の心理学に限らず現代の心理学の大部分がそうであつて、デイルタイの心理学、クリューガーの心理学などを始めヴントの心理学で

さえそうであるといひ得るであろう。科学上の全体性の思想が直ちに全体主義の政治思想になり得るものではない。

しかしまた我々は公平にいつてゲシュタルト心理学の大きな功績を認めねばならぬ。高等学校の心理学をそれだけにするのは偏頗といわねばならぬが、しかしそれを「ユダヤ的」であるという口実のもとに排斥するのは、真理を愛する科学者の態度とはいえない。官吏の「陰謀」はどこまでも糾弾さるべきであろうが、それをゲシュタルト心理学に対する政治的攻撃に転ずることはみずから陰謀を行うことである。

この事件に見られるのも科学の不当な政治化である。我々はこれを日本文化のために深く憂えるのである。

(三月八日)

### 戦争の清掃作用

戦争は清掃作用を行う。今度の事変も種々の方面において種々の意味における清掃作用を行っているが、その最も重要なものは封建的なものの清掃であろう。

事變の及ぼす清掃作用は我が国において封建的なものがなお最も多く残存していた方面において最も著しい。我々はそれを特に農村において、また婦人の生活において見る事ができる。多数の農民が今や産業、ことに軍需関係の産業に吸収されつつある。事變以来婦人の職業戦線は拡大され、銃後活動を通じて婦人の社会的地位は発展しつつある。かような変化はそれらの人々の生活に残存していた封建的なものを清掃することになり、その結果は彼等のイデオロギーにも変化を生ずることになる。すでに、多数の農村の子弟が大陸へ行つて近代的戦争を経験しつつあるという大きな事実は、彼等の考え方を封建的局限性から解放することに役立つであろう。

封建的なものの清掃は今度の事變がもたらす結果のうち重要なものであり、我々はそこにこの事變の有する進歩的意義の一つを認めることができる。明治以来近代化したといわれる日本の中にはなお想像以上に多くの封建的なものが残存していたのであるが、それが今度の事變を通じて清掃され、我が国が真に近代化されるに至るといふことは、この事變の最も大きな意義に属すると考えねばならぬであろう。

現在、事実として国民の生活のすべての方面において封建的なものが急速に清掃されつつあるのであるが、他方においては、特にイデオロギーの領域においては、却つて封建的なものが復活

させられつつあるということも事実である。しかしかような封建的イデオロギーの復活の努力は果たして成功するであろうか。大衆の生活は現実に変化しつつあり、変化した生活は必然に彼等の思想に影響せざるを得ないとすれば、封建主義は究極においてもはや大衆の思想とはなり得ないように思われる。

しかし今日、封建的なものの清掃と同時に資本主義文化の種々の弊害が拡大しつつあるのを我々は見ている。農村や家庭において保存されていたゲマインシャフト（共同社会）的生活の美しいものが破壊されてしまう危険は大きくなっている。封建的なものを破ると共に資本主義文化の諸弊害を越えて新しい制度を創造的に建設してゆくという目標のもとに革新を行うことが、今日我々の目撃しつつある社会生活の大きな変化に対して必要なことである。（三月二十二日）

### 全体主義と責任

近代における個人主義の根本は責任の観念であった。個人とは責任の主体のことであった。各人は自己に対してそのあらゆる行為に責任を有するものとせられた。個人の自由の問題も責任の

觀念から考えられたのであつて、もしも自己が自由でないならば我々は自己の行為に対して責任を負うことを要しないと考えられるところから個人が責任あるものであるためには自由でなければならぬと考えられたのである。

その商取引においても契約に責任を負い、責任をもつて契約を履行するということが自由主義の主要な道徳であつた。この責任において個人主義や自由主義は決して単に勝手気儘に振舞うということの意味しなかつたのである。

政治上の自由主義の根本もまた責任の觀念であつた。議會政治もその本質においては責任の政治であつた。個人主義、自由主義、デモクラシイの墮落は、すべて責任の觀念の喪失に係するといひ得るであらう。従つて今日いわゆる革新とは、道徳的には、責任の觀念の確立とその發展になければならぬ。

全体主義は個人主義、自由主義、デモクラシイを否定するものとして現れた。しかし全体主義は責任の觀念を廢止するものでなく、却つて責任の觀念を發展させるものでなければならぬ。個人主義や自由主義においては個人は単に個人に対して責任を有するものであつたとすれば、全体主義においては個人は自己に対してのみでなく全体に対して責任あるものと考えられねばなら

ぬ。デモクラシーを否定して全体主義が独裁の形をとつて現れたということも、デモクラシーにおいて政治が無責任になつたのを責任ある政治に変えようとした限りにおいて意義があつたのである。

今日我が国の全体主義的風潮の中において特に考えるべきものはこの責任の觀念である。そのことは、よく言われる如く自由主義が完全に発達しなかつた我が国においては、特に大切である。全体に名を藉りて個人の責任が回避され、悪い自由主義よりも一層無責任になるといふことがあつてはならぬ。ただ時流に従うといふのが全体主義ではない、それは個人が自己の責任を回避することではない。自己の責任の觀念を有する者は自主的でなければならぬ。ただその自主的といふことが社会と国家に対する自己の責任と結び付けることが要求されているのである。今日の全体主義的風潮の中において責任の道徳が確立され発展させられなければならぬ。(四月十九日)

## 秘密の漏洩

非常時には秘密というものが国家の利害に特に大きな關係を持つてくる。秘密にせねばならぬ

事柄が殖えるばかりでなく、秘密が守られねばならぬ必要も増してくるのである。各国はあらゆる手段に訴えて他国の秘密を探ろうとする。スパイ戦は戦争の重要な部分であるといひ得るほどである。

しかし秘密が守られねばならないのは単に対外的な関係においてのみではない。対内的にも非常時には秘密を守ることが全体の利益のために大切であつて、政府関係の諸会議、諸調査会、諸委員会等は特にその責任を有している。例えば政府の経済政策、就中物価統制の如き重要問題に關してなお秘密にしておくべき事柄が一部に早く漏洩するようなことがあるとすれば、それが投機に利用されるといふこともあり得るし、たといそのことがない場合においても、委員会の決定事項などが一部にのみ早く分るといふようなことがあれば、そこにおのずから感情も絡んできて、政府の期待する物価政策への全面的な協力に罅ひびが入るといふことにもなり易いであらう。統制の時代においては特に政府関係の諸機関が守るべき秘密を守り、その政策発表の方法についても一段と注意することが肝要である。

秘密が漏れるのは秘密を漏らす者があるからである。他の秘密を窃むスパイは、その行為自体は卑しむべきであるにしても、自分の国家の爲にする行為として弁護されることもできるが、自



分から秘密を漏らす者に至っては全く弁護の余地がない。

なんでも秘密にしたがる心理となんでも秘密を漏らしたがる心理とは、相反するようで実は一つのものであり、秘密の有する心理的魅力を示している。なんでも秘密にしたがる者はなんでも秘密を聞きたがる者であり、またなんでも秘密を漏らしたがる者である。社会的にいつても、なんでも秘密にしたがる社会には、なんでも秘密を聞きたがる者が多く、またなんでも秘密を漏らしたがる者が多い。この風をなくするには公明な場所即ち輿論の発達が必要であり、輿論の発達した社会においては却つてよく秘密が守られるものである。官庁などにおいても「極秘」をなるべく少なくするという気持があつて初めて秘密を守る風風が養われるのである。

秘密を守ることが倫理的に大切なことは分つていても、秘密そのものはつねにこれに反して心理的に誘惑する。この心理的誘惑に勝つて秘密を守るということは、何よりも教養の問題であると思う。守るべき秘密が守られるということは社会における教養の進歩の一つの重要な兆しである。

(四月二十六日)

## 景気と文化

この頃よく売れるのは決して本ばかりではないようだ。美術界にも思わぬ花が咲いて、名のあつた画家の作品など、天井知らずに暴騰を続けているとのことである。

由来、成金時代は新画時代というのが美術商の間の通念であるらしい。新画を狙うのは骨董界では初歩の入門時代のことなので、新画に人が集まってくる時代は俄かに富裕階級が生じたことを示している。ところが最近ではそのような新画に熱中する者が激増し、かくて例えば大阪美術倶楽部未曾有の新画専門の大売立がこの二ヶ月間に三回続いたという新記録が作られている。成金時代が来た兆しであろうか。

ともかく支那事変の当初と今日とでは注目すべき相違があることは事実である。事変の初めには戦争中に美術品漁りでもあるまいとの遠慮から予約された大売立は悉く中止されたそうで、大阪美術倶楽部などでも例年一千万円を超える売立額が昨年は四百万円を割るといふ寂しさであったのが、この頃になって、軍需景気が爆発したのであるうか、いわゆる新画時代の奇現象が現れているとのことである。この変化は美術界にのみ限られたことであろうか。

もちろん私はかような現象を一概に非難しようとは思わない。それによつて美術家たちが潤うことであれば、ともかく喜ぶべきことである。またそれが成金景気に依るものであるとしても、それは日本人の風流心とか美術愛好の国民性とかを現すものであり、文化的向上に対する希求がすべての人間において如何に深いものであるかを語っているであろう。

しかし文化的にいつても、そこにはまた大いに警戒すべきものがある。成金趣味の氾濫が美術界に悪影響を及ぼすということがないであろうか。文化は一種の贅沢であり、一国に経済的余裕がなければ文化は開花しないとしても、成金や成金趣味から真の文化の生れ得ないことは確かである。これは単に美術界のみのことではない。昔は貧乏なものと決つており貧乏を得意にした文学者の間にも一種の成金が生じつつあるといわれる今日、すべての文化人には新たな反省が要求されており、政府の文化政策においても考えるべき問題がある。

更に根本に溯つて、もし云われる通り新画時代が成金時代であるとするれば、成金は今日如何にして生じ得るのであるうか。統制、殊に物価統制が最も重要なことになっている場合、いわゆる新画景気は深く検討すべき問題を提供している。

(五月三日)

## 職業觀念の変革

先日、地方長官會議の席上、二三の知事から、殷賑産業の影響で下級官吏に転業者が続出していることが指摘され、速かにその対策を樹立すべきことが要望された。また同會議における訓示の中で荒木文相は、この頃喧しい小学校教員の不足の問題に論及した。これも軍需景氣の影響に依るものである。

實際、右のような事実、そしてそれに伴う官吏や教員の質の低下は、国家にとって重大な問題である。その対策として一般に考えられるのは待遇改善であり、それは先ず是非実行されねばならぬことである。

けれども他方、右のような事実が主として殷賑産業の影響に依るものであるとすれば、かくの如き影響を及ぼしつつある殷賑産業そのものにも根本的な検討を加え、その悪影響を除くことに努めなければならぬ。その影響は経済的なものであると共に道徳的なものである。これを現在のままに放置しておいては、下級の官吏や教員の待遇改善も、その効果を挙げ得ないであろう。

下級官吏や小学校教員の待遇は以前からあまり善くはなかつた。それにも拘らず成り手があつ

たというには、一つの理由として、そのような職業に結びついた身分的觀念が考えられるであろう。それらの職業は単に経済的觀念からでなく身分的觀念から、即ち官吏や教員は他の職業の者よりも身分的に尊敬されるものであるという觀念から、選択されたのである。

しかるに最近の社会的経済的情勢はかような職業觀念を改革しつつある。職業の身分的觀念が毀れて経済的乃至功利的觀念が次第に支配的になりつつある。かような変化はこの頃の学校卒業生の就職傾向のうちにも見られるであろう。職業の身分的觀念は封建的なものである。支那事変の影響の最大のものの一つとして私は封建的なものの清算ということを挙げたいのであるが、これもその一つの場合である。

封建的な職業觀念の破壊されることはそれ自身としては善いことである。しかしそれがただ功利的な職業觀念に代るのは困ったことであつて、この觀念を更に変革して新しい職業觀念、職業の社会的機能的觀念と人格的使命的觀念との統一が確立されねばならぬ。この変革はもとより現在の経済機構の改革と結び付いて可能である。

(五月十日)

## 常識の効用

革新といつても常識が必要である。こう云えば、常識で間に合わなくなつたからこそ革新が必要になつたのではないか、と反対されるかも知れない。しかしそう云つても、これまで我が国においては常識が求めている程度の革新でさえ行われているであらうか。

そればかりでなく、革新の基礎はやはり常識であると言ふことができる。いろいろの試み、いろいろの失敗の後にけつきよく常識へ戻つてくるということは、個人の生活においても社会の歴史においてもつねに見られることである。常識とはつまり長い間に鍛錬されてきた試験済みの知識であり思想である。常識を単に保守的なものとのみ考えることは当らない。実際に革新が必要になつて来た時代においては、革新の行われねばならぬということが今度は常識になつていゝのである。

非常時に失われ易いのは常識である。国民は非常識になつていないのに、革新を唱える者がとかく非常識になつていゝのである。何か新奇なことを云わなければ革新的でないかのようによ考え、そして実は従来の西洋模倣の風に知らず識らず従つて、そのような新奇なものをドイツなどの外

国から借りて来るといふが如きことは特に慎まなければならぬ。それが既にひとつの非常識である。革新家は自己の主観的な情熱に駆られてかような非常識になり易いものである。しかし非常識であつては革新は行われぬであらう。なぜなら常識は観念的に個人のうちにあるものでなく国民のうちにあるものであり、非常識であつては国民の協力を得ることができず、その協力なしには如何なる革新も成就されないから。常識を重んずるといふのは国民の力を重んずることである。

常識は或る客観性を持つている。それは實際生活において試験されてきたものであり、広く国民の間で支持されているものであり、それ自身組織的なものであるから。革新家が自分の意見を持つてゐるのは好いことであるが、その意見は絶えず常識と対質して作られたものであることが必要である。

すでに久しく我が国においては種々の革新的意見が現れてゐるに拘らず、未だ本質的な革新は何も行われていないとすれば、ここに一度常識に還つて考え直してみる必要があるのではなからうか。国民は革新を熱望しているのである、ただそれが非常識であることを好まないのである。常識の効用について反省しなければならぬ。

(五月十七日)

## 論理の峻厳

依然として闇相場が行われているという。依然として闇取引が盛んであるという。法律は遂に現実に先立つことができないうに見える。経済警察の眼をかすめて、次から次へ新しい手段により闇相場の取引が行われているという。

この事態はもはや法律と警察の力だけでは抑止することができないというので、国民の道徳的自覚の必要が新たに叫ばれるようになった。問題はそこで国民精神総動員に関係してくるであろう。闇取引が如何なる人々によつて最も盛んに行われているかを考えるならば、国民精神総動員は最も何処に向うべきであるかが明瞭になる筈である。

しかしいわゆる闇相場も、自由主義経済の原則からいえば、何等「闇相場」といふべきものではないことが注意されねばならぬ。それは自由主義の論理の必然的な帰結である。我々は現在の闇相場においてこの論理の峻厳さを今更の如く知らされるのである。単なる「心」によつてこの論理を破ることは不可能である。



もちろん国民の道徳的自覚に訴えることは必要である。しかし道徳にしても、それ自身斉合的な、組織的なもの、従って論理を含むものでなければ無力である。国民精神総動員に対して我々が思想性を求める理由もそこにあるのであって、単に個々の思い付だけでは今日の事態は救い難い。

一国の経済にゆとりのある間はその論理も苛烈さを示さないが、ゆとりが少なくなるに従って論理は愈々その峻厳さを現してくるものである。これは問題のインフレーションについても深く考えておくべきことであろう。

一つの論理に対抗し得るものは結局他の論理である。心とか心理とかいうものは固より大切ではあるが、このものもそれ自身論理的になるのでなければ、論理に対抗し得ない。求められているのは単なる心理でなくて新しい論理であり、この論理が主体化され心理化することである。今日必要なのは自由主義に対する統制であることは明らかであるが、この統制は自分自身新しい論理によって組織されるのでなければ、遂に自由主義の論理に対抗し得ないであろう。

論理の峻厳さが明瞭になり始めた今日において、論理を軽蔑し、すべてを「心」の問題として片付けようとする風があり、寧ろその風がインテリゲンチヤの間において甚だしくなりつつある

ことは、敗北主義の一種ではなからうか。闇相場の論理はこの際教訓的である。

(五月二十四日)

### 国民再組織の再吟味

改組後の国民精神総動員に対しては既にいろいろ批評が出ており、またいろいろ希望が述べられていくようである。何にしてもその運動が今日の日本において根幹的な重要性を有することは疑いなく、それを如何に成功させるかに多くのものが懸つてゐることは明らかである。

そこでは先ず依然として思想性が問題になつてゐる。思想性を問題にするのはインテリゲンチヤの偏執であるかのように言うのは、顧みて他を言うものであり、問題を回避することである。知識階級の動員は国民動員にとつて重要な意義を有するばかりでなく、思想性のない運動は国民に対して指導的であり得ず、国民の力を内部から盛り上らせることは不可能である。

肇国の精神といい、八紘一字の精神という、それを力説することは誰も異論がない。八紘一字の精神は日本民族の永遠の理想、永遠の使命をいつたものである。必要なのは、その永遠の理想

を歴史の現在の段階に相應して具体的に内容的に規定することである。永遠なものとは時間に於て示され、ただ歴史を通じて実現される。歴史的に時代的に規定された思想が求められているのであり、かような思想のみが現実思想といわれ得るのであつて、永遠なものをそれだけとして語ることは神秘主義になつてしまふのほかないであらう。

しかし問題は思想のみでなく、組織の問題である。そして国民精神総動員を時局の現在の段階において、またその今後の発展の見通しのもとに効果的に遂行してゆくためには、国民再組織の問題がどうしても取り上げられねばならぬ必要がある。

国民再組織は近衛内閣の時分に唱えられて実行されずに終つた問題である。そのとき閣僚であつた木戸現内相は平沼内閣になつてから、それを取止めるように言明したと覺えているが、時局のその後の發展は、国民精神総動員の完全な遂行という点からいつても、国民再組織の問題が今日再び熱心に再吟味さるべき必要を愈々明瞭にしてきたと思われるのである。

国民精神総動員と国民再組織とは元来不可分であるべき性質のものである。その一方を不問に付して他方を成功させようとする事は無理であるのではないか。国民再組織の問題を日本の現実に相應した独創的な仕方では解決することが今日の政治家に要求されている能力である。

(五月三十一日)

## 品質の統制

次第に広くスフ入りの品の使用が余儀なくされるようになって、そのような品物の質が悪くて困るという声が聞かれる。スフの如きものについてその品質の改良に最善の努力がなされねばならぬ。

しかるに斯ういふことが言われている。今日の状態においてはその品質の改良は望まれない。どんな物を作つても売れるのであるから、作る方では質を善くすることに努めない。例えばスフのようなものでも、綿や毛と競争しなければならぬ時には、品質の向上に一生懸命になるが、そのような競争がない時には、その努力をしないといふのである。

かかる状態においては品質の統制が必要である。物価の統制だけでは足りない、量的な統制のみでなく、質の上での統制が行われねばならぬ。物価の問題はもとより大切であるが、それに心を奪われて品質の統制を忘れてはならないのである。

しかるに量的な統制は外部の力によつて行ふことができるにしても、質の問題になると主として生産者自身の自覚に俟たねばならぬ事情にある。この自覚は従来の營利主義的な觀念の修正を基礎としなければならぬ。個人的な利潤本位の立場から公益の立場へ、考え方の變つてくることが要求されている。

需要が増して来ると品質が落ちるといふのが普遍的な状態である。これは物品にのみ限られない。文學書がよく売れるといわれると、凡作愚作が氾濫するようになる。それを讀まされた者は文學は詰らないと考へて顧みなくなり、やがて文學書は一般には売れなくなるかも知れない。文學のようなものの場合にはそれでも済むが、日常生活の必需品に至つてはそうはいかぬ。何でもあるもので我慢して求めねばならないのである。生産者の社会的良心と、經濟の社会的意味についての考へ方の發展が特別に望まれるわけである。

需要が殖えて品質が下るといふことは、精神的並びに物質的生産物のみでなく、人的そのものにもそのような傾向がありはしないかと心配されるのである。人間の需要が多くなるに従つて、各人が自己の向上發展に努力しないという傾向があつては困る。そのうへ悪貨が良貨を驅逐するという法則が現実に行われるとすれば、甚だ憂えるべきことである。ここでも品質の統制が必要

である。それは単に外部からの統制の問題でなく、内部からの統制の問題として、各人が良心を鋭くし、社会と国家に対する真の責任を自覚しなければならないのである。  
(六月七日)

### 政治的時期

本年度の物動計画も決定して、政府は国民の協力を求めている。国民は一人残らずこれに協力しなければならぬ。唯一人の油断から全体の不幸の生ずることがあり得るのを考えて、すべての国民は互いに他の模範となるように心掛けねばならない。

国民に対して指導的地位にある者にはもちろん確信がなければならぬ。指導者自身に確信が欠けているならば、国民は一体となつて動くものでなく、協力をためらつたり、なまけたりする者が生じ易いものである。指導者自身、その計画に対して絶対に確信を有するのでなければならぬ。

今日統制経済は経済に対する政治の優位のもとに立っている。統制経済を規定するものは政治である。だから政治的目標がはっきりしていなければ、経済的目標もはっきりしない。先ず政治的目標を明確にすることが経済的目標を明確にする所以である。

そこでまた国民の経済的協力を強固にするためには国民に政治的目標が何処にあるのかを理解させねばならぬ。これまで国民のうちに経済的協力をサボったり、躊躇したりするような者がなお存在したとすれば、政治的目標が「百億貯蓄」というように具体的に示されていなかったことに依るのではないかと思われるのである。

国民を経済的に協力させるためには、国民を政治的に協力させねばならない。政府の対欧州政策が決定したと云われても、国民には何のことだかサッパリ分らないような有様では、国民動員は真に徹底することができない。外交を先ず国民的外交とならしめねばならぬ。国民の政治的協力への道を塞いではいらないのである。

協力は政治的協力和経済的協力和二重のものであつて一つのものである。政治的協力の道を考えないで経済的協力を求めても完全であることができぬ。国民精神総動員と国民再組織の問題とは元来不可分のものであると我々が云つたのも、その意味である。具体的な政治的目標を示して国民の政治的協力を求めることは、あらゆる協力の前提であるという重要性を今日有している。

時局はまさに政治的時期に入っている。経済統制が強化されるようになればなるほど、我々はそのことを種々の意味においていよいよ強く感じるのである。

(六月十四日)

## 不定な知識人

この頃、いわゆる国策文学が下火になって、芸術至上主義的文学の傾向が現れているという。また長篇小説の流行がすたれ始めて短篇小説の復活が唱えられているともいう。かような変化は絶えず新しいものを求めるジャーナリズムの商業主義にも依るのであるが、単にそれだけであるとは考えられない。

もちろん国策文学の必要が外部においてなくなつたわけではなからう。その必要は益々増して来たときえ云える。それなのに既に国策文学の退潮が現れたとすれば、これまで国策文学に熱中された時においても国策とか政治とかが甚だ安易に、また安価に考えられていたことが今になって証明されたのではなからうか。

国策文学から芸術至上主義文学への変化は作家が内省的になつてきたためであるといわれている。政治とか国策とかが内省的になると共に消えてしまうようなものに過ぎないとすれば、日本にとつて心細いことと云わねばならぬ。人間の本質的な政治的存在性について深く考えてゆくな



らば、人間性の文学も政治的であることができ、かような文学にして政治に対して本質的な影響を与えることができる。政治性を有する文学というのは単に政治から規定された文学のことではなく、反対に政治に作用するような文学であつて好いわけである。

この頃文学界の変化は今日なお我が国のインテリゲンチヤが根本において不定な現象であつて、主体的に確立されたものでないことを示している。かような不定性の他の、逆の現れは、最近またインテリゲンチヤの間に次第に顕著になりつつある行動派ともいべきものの主張である。この一派の者も本質的に不定な現象に属している。時代の客観的な動きに対して適合し得なくなるに従つて彼等は益々焦躁し、あらゆる理論をもつて批評的であつて行動を妨害するもののように考える。理論を否定することが一種の敗北主義であることを彼等は知らないのである。

インテリゲンチヤの組織されることが必要である。この重大な時期において彼等が不定な現象であるのは、彼等が組織されていないためである。しかし彼等を外部の力によつて組織することを考へてはならない。インテリゲンチヤは内的にしか真に組織されないものである。彼等が自主的に内部から組織されることに対して一層積極的な活動を期待すべきである。（六月二十一日）

## 流言蜚語

依然として流言蜚語が絶えないように思われるのは甚だ遺憾である。流言蜚語は社会不安の原因であり、これに対する取締りを嚴重にすることが必要である。

インテリゲンチヤは物を合理的に考えてゆくもので、流言蜚語のような根柢のないものはインテリゲンチヤとはおよそ縁のないものと思われるのに、彼等がむしろ流言蜚語の元である場合が尠くないというのは困ったことである。それはインテリゲンチヤが今日次第に社会的に根柢のないものとなつていく一つの証拠であるのであろうか。勿論今日インテリゲンチヤの社会的存在意義が消滅したのではなく、減少したのではない。却つてそれは増大しさえしているのである。そこで真のインテリの後退は疑似インテリの跋扈となる危険がある。疑似インテリに踊らされねばならぬほどインテリが無信念、無思想になつて好いのであろうか。

流言蜚語はすべて不安の表現である。それを伝える者はもとより、それを作る者も自分が不安であるからそれを作るのである。流言蜚語は一定の社会的雰囲気の中で生れるものであるが、それを自分の個人的な目的のために利用する者が存在することによつて益々悪質のものとなるので

ある。言い換えると、流言蜚語は単純な不安の表現に止まるのでなく、それを作る者、或いはそれを伝える者の意識的な乃至無意識的な利己的意図と結び付いて不純にされているのが常である。

流言蜚語をなくするには、すべての意見が知的な公共的な表現をとるようになることが肝要であるのはいうまでもないであろう。殊に政治は謀略だというような考え方があつては流言蜚語はなくならないであろう。謀略は謀略によつて倒れる如く、一つの流言蜚語が自分に都合なように見えるために許しておく者は、みずから他の流言蜚語に害されることになるのである。どのような流言蜚語でも存在することは決して健全な状態とはいへぬ。

政治も、外交も、思想対策も、最早謀略では真の成功はあり得ない。それらはすべて国民の輿論を基礎にした公明なものでなければならぬ。国際的デマを粉碎して支那事変を真の成功に導くためには、日本の政治が謀略でなくて公明な原理に立っていることを実践的に知らせねばならず、またそのためには国民の積極的な協力の妨害となつていような流言蜚語の如きものを絶滅しなければならぬ。

(七月五日)

## 時の問題

物価の騰貴はなかなか止まないようである。物価問題は国民生活の安定にも関係する最も重大な問題である。

政府においては物価委員会を作り、その物価政策大綱が発表されてからでもよほど時を経たが、それがどのように具体化されたのか聞かないし、その間に一方、物価は遠慮なく騰つている。このようにして放任しておけば、統制は益々困難になるばかりである。一旦騰つた物価を引戻すということは殆ど不可能である。

すべて、時が大切である。とりわけ非常時においては時が大切である。非常時とは特別に時が大切であるような時期であるということが出来る。あらゆる時があらゆることにとつて同価値であるのではない。すでに自然は時を選ぶ。自然にも選ばれた時がある。この時に遅れてはならないのである。人間の行為においては更に一層時が問題であり、行為の価値は単にその内容によつてのみ決定されるのではなく、その半ば以上はそれが為される時によつて決定されるのである。

とりわけ政治においては時が重要であり、時がすべてであるとさえ言い得る。学者の研究室に

おいては、結果に達することが半年遅れようと二年遅れようと、あまり問題でないかも知れない。併し今日物価委員会の如きものは学者の研究室の如きものであることができない。政治にとつては時が問題である。調査や研究はもとより必要であるが、それは平生に用意しておくべきことであつたのである。従来、委員会とか調査会とかは、政府の責任のがれのために作られた場合が少なくかつた。そのようなことは今日もちろん許される筈がない。すべて困難な問題は一寸延ばしに延ばしておくというようなその日暮しの政治は最も無責任であるといわねばならぬ。

問題は時である。最近精動で学生の断髮等々を決定したが、あのようなことで支那事變の当初に断然実行させておれば、恐らく今日のような不平は起らずに済んだであらう。それを漸く今日になつて、誰が考えても他にもつと重要なことが明らかに存在する場合、実行させようとするから一層多く不満も生ずるのである。

時の問題はもちろん時の宜しきを得るといふことであり、従つてそれは場合によつては時を待つといふことである。徒らにあせるのもまた時を知らないものといわねばならぬ。(七月十二日)

## 機構の單純化

統制の進展につれて民間人の官庁との交渉も頻繁になつてくるようである。ところでその人々の話に依ると、或る一つの事柄について各省の間で、或いは各局乃至各課の間で、方針が一定していないために困るという。

殊にそのためにわざわざ地方から出て来たのに結局要領を得ないで迷惑することも尠くないと云うのである。かかることは今日の如く総てが急速に変化しつつある場合には已むを得ないにしても、なるべく無くしなければならぬのはいうまでもない。

かような不統一の重要な原因の一つは最近特に官僚機構が膨脹してきたことにある。この膨脹は統制の拡大強化と関聯している。しかるに機構が尠大なものになると共に、今度はそれを相互に連絡したり統制したりするための機関が必要になり、かくして機構は更に膨脹し、いわゆる尾大振らずという状態になる。この状態を改善しようとして新しい機関が作られると、今度はこれが更に一つの重荷になつて益々非能率的になるということが生ずるのである。

官庁の間の不統一は従来の繩張り意識が無くなるのでなければどうにもならないものである。

繩張り意識があるために、それを連絡したり調整したりする機関が必要になることがあり、折角その機関が出来ても、その機能を十分に發揮し得ないことになるのである。

近年官僚機構は膨脹するばかりである。しかるに非常時に必要なのは却つて機構の單純化ではないであらうか。非常時とは機構の單純化が必要であるような時期であるといひ得るであらう。

實際、例えば五相會議は非常時になつて必要になつてきた内閣制度の單純化の一方法である。進んでは國務大臣と事務長官との區別によつて大臣をもつと少数にすることも考えられるであらう。機構の單純化は責任の所在を明らかにして能率を挙げる方法である。

もちろん統制には機構の拡大を必要とする方面もあるであらうが、これとても、國民の自主的協同が強化されてくればその必要も減るのであつて、もし國民に協同の精神がないならば、いくら機構を拡大しても目的は達せられない。如何にして積極的な協同の精神を國民に植えつけるかが問題であり、それは固より機構の問題ではないのである。

(七月十九日)

## 良書の基準

あらゆる賑々しきにも拘らずどうにもならない文化の停頓を真面目な文化人は感じているようである。今は静観の時だといわれるのも、そのためである。それは必ずしも消極的な言葉でなく、むしろそこに逞しい文化意志が隠されているかも知れない。

文壇などにおいて老大家の活躍時代になったといわれるのも、同じ事実に対する皮肉として受取られる。老大家の活動が特に目立つほど文学の停滞が著しくなったのではなからうか。

ところで今文部省では国民の読書指導を積極化することである。即ち全国地方長官並びに各種団体に対して、爾じこん今文部省推薦図書はその推薦理由を付して各府県の公報その他の刊行物、各団体の機関誌等に毎月掲載するよう通達したといわれる。そのような良書推薦は既にラヂオによつても行われている。更に出版社に対しても良書の基準を示すことになったといわれ、かくて将来は劃然と良書と悪書とを二分して国民の読書指導に当る意図を有すると伝えられている。

それは悪書の横行が余りに甚だしいためであらうか。良書推薦は結構であるが、推薦された本はほんとに国民に親しまれていであらうか。どんな傑作でも学校の教科書になると面白くないように、文部省推薦などとレッテルを貼られると却つて読みたくなくなるといった心理もあるものである。



いつたい良書と悪書とを劃然と區別する基準は如何なるものであろうか。世の中に悪書はないというような極端な真理はこの際問題にならないにしても、良書の基準というものはなかなか難しい。出版当時には批評家に認められないで悪評を蒙つたものが、やがて立派な古典になつた例は稀でない。良書推薦は無論やつて好いことであるが、同時にその基準の困難についての自覚がなければならぬ。

すべて困難を知ることが大切である。学問の困難を知っている者は良い学者であり、文学の困難を知っている者は良い作家であり、批評の困難を知っている者は良い批評家である。良書の規格化はそのような困難を蔽い隠す虞れがある。殊に官庁の仕事である場合、ただ無難を求めて真の批評精神を失うことになり易い。

現在のように文化の停頓が感じられている時には、一面的な基準による良書普及の積極化は文化を益々固定化する危険さであるのである。それが真の創造的精神を阻害することにならぬよう細心の注意を要する。文化の停頓と感じられているものを克服してゆくことが今日の重大な問題である。

(七月二十六日)

## 音の統制

音の統制が行われるというのはよいことである。「隣のラヂオ」は以前からよく苦情の種であったが、それも今度公けに注意されることになるというのは結構である。

音の統制は近代都市における重要な問題の一つである。それは建築、交通機関、都市計画にも関係する大きな問題である。外国の都会に比較して騒音の多い我が国の都会がもつと静かな住み場所になるのは、身体上からも、精神上からも、必要なことである。

音の統制はもちろん音曲、音楽についても考えられるものである。そしてこの統制が今日では問題になっている。

映画、演劇、ラヂオ、レコードなどによって、新作の音曲、歌謡が氾濫する。特に支那事変以来、時局をあてこんだ音曲、歌謡が続々と作られている。そしてこれは国民精神作興の手段として、官辺からも歓迎助長されているようである。だがそれら多数の歌謡のうちに果たして幾許の傑作があるのであろうか。事変関係の歌で好いのは馬の歌だけだと云う者がある。ここにも確かに統制の必要があるのである。

真に求められているのは会社の商業主義のもとに作られる歌でなく、溢れる感激の発露であり芸術的に価値の高い作品である。もちろん傑作ばかりが現れることを望めるわけではない。しかし粗製濫造の愚作悪作の氾濫はその影響からいつて考えねばならぬことである。文学の如き場合には自分で作品を読まなければ影響されることもないが、外部から強制的に耳に入つて来る音楽の場合にはその影響が恐ろしいのである。

歌謡の取締りにおいては歌詞だけが問題であるのではなく、寧ろ重要なはその音楽の性質である。文句は無難であつても、その曲の低調愚劣なものがある。歌詞にのみ拘泥して音楽の本来の性質を忘れてはならない。それにしても我が国の音楽はどうしてこう哀調を帯びたものばかりなのであろうか。時局関係の歌謡にしてもその音楽の根本において哀調を帯びたものが尠くないのである。この哀調の特殊な哲学的意味について深く考えてみる必要がある。

古の聖人は音楽によつてその国の風俗人情を知り、そして国民教育における音楽の意義を重要視した。興亜日本にふさわしい希望と活動と理想とに国民を鼓舞するような新しい音楽が作られなければならない。

(八月二日)

## 国語の改良

国語国字の問題についていろいろ論じられている。それが今日の日本にとって重要な問題であることはいうまでもない。ローマ字論、カナ文字論、振仮名廃止論、等々説はいろいろあるが、問題は簡単でないようである。

困難は、言葉の問題が単に機械的な便宜主義で片付けられないところにある。言葉は人間の生活と有機的に結び付いたものである。国民の生活が変らなければ国語も変らず、国民の生活が変れば国語もおのずから変つてゆくのである。国民の生活から抽象して国語の問題を考えることはできないわけであるが、従来の国語改良論には案外そのような抽象論が多いのではなからうか。国語の改良は国民生活の改良と結び付けて考えられねばならぬ。

言葉は思想の表現である。これは極めて簡単な真理であるが、この簡単な真理も従来の国語改良論においては案外忘れられているのではないかと思う。思想が変らなければ言葉も変らず、思想が変れば言葉もおのずから変るのである。言葉の問題は単語の問題であるよりも文章の問題であり、その根柢には思想の問題がある。

明治時代における文語体から口語体への発達は自由主義とかデモクラシーとかの発達と関係して可能であった。新聞の論説が現在ののように言文一致体になったのも、普通選挙が唱えられた頃からであるとのことである。

早い話が、最近の政治の言葉に「秩序」とか「創造」とかというともかく新しい言葉が現れるようになったのは、前内閣における一種の思想的若さのためであり、平沼内閣になってからその言葉が古めかしくなったのも、この内閣の思想的年齢を示しているように思われる。

国語の改良には思想の進歩が必要である。国民思想を何処へもつてゆくかは国語の改良にとつても大きな関係がある。思想の方向を確立しないで国語改良の方向を決定することができない。思想の上ではデモクラチックな思想とは反対の方向をとりながら、国語だけをデモクラチックな方向に改良することは不可能である。

国語改良論者が単に言語学的問題に止まらず、生活及び思想問題に深く留意することを希望したい。

(八月九日)

## 革新と伝統

学徒隊案をめぐって文部省と大日本青年団との対立が伝えられている。

支那事変の発展は必然の勢をもつて旧い伝統を破壊してゆく。欲すると欲せざるとに拘らず革新は進行せざるを得ない。我々は今「青年団の危機」といわれるものに於てその一つの例を見るのである。

元来、青年団は、氏神の祭礼などを中心とした昔の若衆の組織から発達したものであった。それは元来自然発生的なもので、村や町における共同社会（ゲマインシャフト）的生活の一表現として、それぞれ特色のある伝統を有するものであった。尤もそれが大日本青年団に統一されていわれる「官製青年団」になると共に、既にそのような共同社会的要素は次第に消滅してゆく傾向にあったが、この傾向は今度の学徒隊編成によつて飛躍的に増大することになるであろう。

文部省は復古主義或いは伝統主義の本尊のようにならわっている。その文部省が伝統破壊的と見られるような学徒隊案を作るようになったのである。それは外国の模倣であり翻訳であるなどといつてもはじまらない。我々はそこに、世界が民族主義者の考えるのと違つて遙かに統一的に

動いていることを知り、またそこに、伝統主義に対しておかれている必然的な限界を見るのである。

青年団はもと共同社会的生活の一表現であつた。その共同社会が封建的なものである限り、それは変化しなければならず、また変化してきた。しかし今日の革新の目標は、近代的ゲゼルシャフト（集合社会）を超えた新しいゲマインシャフト（共同社会）を作ることであるとすれば、青年団の伝統のうちに存するような共同社会的要素が新しい仕方では生かされねばならないのである。

共同社会的生活の表現であつた盆踊りや村芝居などがなくなつて映画が農村青年の唯一の娯楽になつたり、全国一斉のラヂオ体操だけになつてしまふというのは歎かわしいことである。盆踊りや村芝居に新しい形式と内容を与え、地方の青年の生活に即した新しい舞踏会や劇団組織を作ることが大切な問題である。学徒隊の編成は盆踊りをラヂオ体操に変えてしまふという類のものになりはしないであらうか。

革新は必要であるのみでなく、必然である。しかし官僚的革新が抽象的なものになり易いことに注意しなければならぬ。共同社会的生活の伝統と革新との関係を正しく理解するならば、文部

省と青年団との一層高い目標からの和合の道は存在する筈である。

(八月十六日)

## 選択の必要

選択の必要は、読書の場合などにおいては恒にいわれている。濫読を避け、本を選択して精読せよということは、読書法における初歩的教訓である。また實際この教訓は守られて好いものである。

かように選択の必要を説く意味は、読書において自主的であれということでなければならぬ。どのような濫読家も世の中のすべての本を読むことができず、そこにおのずから選択が行われているわけであるが、かような選択には自主性がないから選択とはいわれないのである。自主的であつて初めて選択であり、自主的な人間は何事でも選択して行うのである。

ところでこの頃警視庁の騒音取締から考えることだが、読書の場合には絶えず選択の必要がいわれているにも拘らず、ラヂオの聴取についてはそのことが殆ど全くいわれていない。朝から晩までラヂオをかけつ放しにしている家さえよくあるのである。「プログラムは選択してお聴きを



願います」と、毎日放送する必要がなからいっても、人々が選択して聴取するようになることが希望されるわけである。ほんとに選択して聴くことになれば、この頃のラヂオのプログラムのうち果たしていくつ聴くべきものがあるであろうか。

一冊の本の人間は恐ろしいという諺がある。彼は恐るべき独断家であるからである。しかし徒らに多く濫読する人間は更に恐ろしい。彼には自己というものがなくなり、自己のない人間は恐ろしいのである。ところで毎日ラヂオを無選択に何でも聴いている人はどうであろうか。彼は濫読しながら結局一冊の本の人間と同じであり、最も恐るべきではないであろうか。かくして「自己のない独断家」という奇妙な「新しいタイプ」の人間が製造されているように思われる。

自主性がないから無選択に何でも聴く。そして何でも無選択に聴くことによつて益々自主性を失うことになる。選択の必要は自主性の必要である。我々は読むことにおいても聴くことにおいても驚くべく健啖であるといわれる。その健啖が自主性のないことの現れでないように望みたいのである。

自主性といえはまた直ちに自由主義だといつて非難されるかも知れないが、自主的な人にして自分の行為に責任をもち、誰もが信頼し得る人間であるのであつて、そのような人間が個人とし

ても社会としても最も必要なのである。善い国民とは国策の実現を助ける者である、しかしまた善い国民とは国策を作ることを助ける者のことである。

(八月二十三日)

### 人心一新の要

平沼首相は内閣総辞職<sup>i</sup>を執行するに際していつている。「此の非常時局を突破せんとするに當つては局面を転換し、人心を一新するを以て刻下の急務と信ずるものであります」と。

まことに人心を一新することは刻下の急務である。そのことは単に人が変わったというだけでは出来ない。新しい政治が必要なのである。我々が新内閣に期待するものは人心を一新し得る新しい政治である。

この新しい政治は先ず支那事變の処理、日本の世界政策、国内改革等に関して政府の方針を明瞭にして国民に知らせることにある。平沼内閣は「対欧策」の破綻の責を負うて辞職することになったのであるが、そのいわゆる「対欧策」の内容が如何なるものであるかは一般国民には明瞭

i 対ソビエトを念頭にドイツと軍事同盟の交渉中、更にノモンハンでは軍事衝突中、独ソ不可侵条約の衝撃で。

に知らされなかつたのである。国民もおおかた知つてゐるだろうとして曖昧にしておくといった態度が善くないのである。すべてかような曖昧な遣り方がこれまで政治を頗る不明朗にしていた。人心を一新するためには明朗な政治が必要であり、それにはすべての問題について政府の行おうとするところをはつきりと国民に知らせなければならぬ。

対欧策の修正も問題であろうが最も根本的なことは支那事變の処理である。この方策が明確に決定しさえすればおのずから他の外交政策も決定する筈である。支那事變はどうするのだ、これが国民の最も知りたがっていることである。戦争即ち長期建設であるというのは全く正しいが、しかし「長期建設」の名によつて事變処理の具体的な方策を曖昧にしておくというようなことがあつてはならない。

人心を一新するには何といつても国内改革の断行が必要である。これを行わなければ、支那事變の処理もできないし、自主的外交も不可能である。先ず手近なところで革新の実を示すということが人心を一新して東亜の新秩序建設に対して国民を邁進せしめる所以である。

独ソ不侵略条約の与えた最大の教訓は、困難な問題を避けて一寸延ばしに延ばしていても結局無駄であるのを知らせたことである。それは自主的である必要を教えたといわれるが、困難な問

題を回避してゆくようではもちろん自主的であることはできないであろう。時局の重大性は益々加わつてきた。自ら進んで困難な問題に正面からぶつつかつてゆく勇氣のある政治家が出て来なければ、政治に対する国民の信頼は獲得されないのである。

(八月三十日)

## 日本の自覚

ヨーロッパは遂に動乱に入った。それは日本にとって「神風」であるといわれている。これは確かにそうであるといわれ得る。だが環境の好転も主体がしっかりしていなければ役に立たぬ。こちらの態勢が調っていない場合、環境の変化は却つてただ内部の混乱を惹き起すのみである。

この際最も戒むべきことは環境の好転に有頂天になつて自分を忘れることである。これまで私は、「世界を見よ」と繰り返していつて来た。しかし今こそ私は、「日本を見よ」といwanなければならぬのである。かのことが必要であつたのと同じ理由によつて今このことが必要になつたのである。

支那事變の初め、これを日清、日露の戦役と同じように考えた人々があつた。その結果が如何

なるものであるかは既に理解することができた筈である。今日ヨーロッパの動乱を眺めてまた或る人々は嘗ての世界大戦時代における好況の再来を考えようとしている。しかしそれが如何に性質の異なるものであるかはやがて明らかになるであろう。

最も嚴肅な事實は、日本も既に以前から戦争しているということである。ヨーロッパの動乱で支那事変が何処かへ吹っ飛んでしまつたかのように考えることは、久しく希望を求めていた人々に起り易い幻想であるが、かかる幻想にとらえられないことが肝要である。世界的に見ても、今度の大動乱はソビエトの世界政策の成功を意味すると解釈することが可能でさえあるのだ。世界史の明日の立場から考えても、支那の問題は全ヨーロッパの問題に比して決して小さくないどころか、更に大きいのである。

実体のない好景気は恐るべきである。物資が不足し、労働力が不足している場合、その好景気は果たして実体のあるものであり得るであろうか。かような景気に浮かされて、これまで折角抑制されて来たインフレーションが急速に進行するようなことにでもなれば、国内体制は破壊されることになるであろう。今こそ国民の自粛自戒の最も大切な時が来たのである。

ヨーロッパの動乱のために好景気に見舞われようとしているアメリカにおいて、ルーズヴェル

ト大統領は、「米国民は戦争で苦しむ列国民の犠牲において利益を求めることは道徳上許し難い」といつている。かかる人道主義的感情は別にしても、今日我が国民はヨーロッパの動乱に心を奪われて日本の立場を忘れるようなことがあつてはならぬ。今こそ我々は他の人々に替つて「日本の自覚」の必要を説かねばならないのである。

(九月六日)

## 思想と現実

最近のヨーロッパ情勢を眺めて感じることは思想と現実との或る乖離である。

ドイツとソビエトとは思想的に全く対立し、氷炭相容れざるもののであつた。それが不侵略条約を結ぶに至つた。防共精神に貫かれたベルリン・ローマ枢軸として喧伝されたドイツとイタリアとの間も、その連繋がどれほど緊密なのか、今では疑われるようになってゐる。かようなことは単なるイデオロギーの上からは理解できず、現実の諸關係の認識に基づいて初めて理解され得ることである。それは思想だけから考えると「複雑怪奇」に見えるにしても、現実を分析してゆけばその理由がわかることである。

平沼前内閣の「道義外交」は破綻した。だがいわゆる道義外交は道義的であつたが故に破綻したのではない。破綻の原因はむしろ、抽象的にイデオロギーに固執して現実を正視することを忘れ、或いはイデオロギーの色眼鏡を通して現実を客観的に捉えることができなかつた所に存在する。もちろん思想は大切である。けれども思想のために現実があるのではなく、現実のために思想があるのである。思想は現実を正しく把握するためのものでなければならぬ。しかるに近年我が国においては余りに思想の問題に拘泥して、思想を現実に適応させる弾力性が欠けていたのではないかと思う。

世界は自由主義、全体主義、共産主義に三分して抗争しているといわれてきた。これはその通りである。だがその対立を抽象的に固定して考えることは間違つてゐる。偏見なしに見る場合、現実にかかる抽象的な思想的対立を超えて或る共通のものに向つて進みつつあるといえるであらう。思想は不当に政治化されることによつて抽象的に固定され、現実に遅れつつあつた。殊に今度のヨーロッパの戦争が拡大する場合、従来いわれた思想的対立に如何なる変化の生ずるかが世界的に重要である。思想を固定的に考えることはもはや非現実的なことになつてゐる。不当な政治化から思想を解放して、いま一度自由な眼で現実を見直すべき場合である。

ナチスの転向以来、我が国においても「現実政治」への転換が一部で唱えられている。だがもしその現実政治が俄に道義を無視して権謀術数に向うことであるならば、甚だ危険であるといわねばならぬ。道義はどこまでも大切である。ただそれは現実から遊離したものであつてはならないのである。そして現実政治は現実についての正確な認識を基礎とすべきものであつて、現実の認識の上につきり立つた上でのみ術数も或る意義を有し得るのである。

(九月十三日)

## 思想の不信

この頃の新聞雑誌において著しくなつたのは思想に対する不信である。それは最近ドイツやソビエト・ロシアの行動に、その主張していたイデオロギーと矛盾するものがあるかの如く考えられるようになって目立つて現れてきた現象である。

この思想の不信はもちろん今に始まつたことではない。ただ従来は政治の思想性そのものを力説していた政治の力に任せられて隠されていたのが、最近政治情勢の変化を機として表面に現れるようになったのである。



思想に対する不信は思想の歴史のうち古くから存在している一つの思想である。しかし現在、思想に対する不信は如何なる性質のものであるか、その特殊な性質を吟味することが必要であると思う。

今日、思想に対する不信は思想に対する不信ではない、むしろ政治に対する不信である。政治の不信をそのものとして直接に表明することが妨げられているために思想の不信として間接に表明されるのである。問題の思想というのは政治上のイデオロギーなのであるから。これは政治家として深く考えるべきことである。

また従来思想について真面目に考えたことがなく、ただ何かの必要のために思想の問題を論じていた者がその必要の失われたように考えて今日俄に思想に対する不信を語っているのである。自分の思想的無能力をこの際公然と告白しているようなものである。これまで威儀を正していた者が急に尻をまくつて居直るといつた恰好である。いつたいこのように尻をまくつて居直るのは何か痛快なところがあり、日本人には特にそれを喜ぶという風がある。かような居直りが喜ばれるということは思想の発展に対する大きな妨害の一つである。

思想に対する不信によつて現れてきた今日の現実主義こそ極めて危険なものであろう。それは

政治上の無方針どころか敗北主義でさえあり得る。それは生活上のデカダンスを現すものである。人間も世界も結局思想によつてのほか救われないのであつて、思想のない現実を考えることは結局非現実的なことである。しかし今日思想に対する信頼は政治に対する信頼が建設されることによつてのほか回復されないのである。

(十月四日)

### 国民運動の起点

前内閣の終り頃、排英運動がだいぶん盛んであつた。あれは官製のものであつたともいうが、少なくとも外形上は国民運動として展開されたものである。あの運動がかなり活潑になつたといふことは、わが国においても指導の仕方によつては国民運動の発展し得る可能性があることを示している。これは、排英運動の当否を別にして、重要な教訓であつた。

今日、国内改革のことも、支那事変処理のことも、国民運動と結び付かねばならぬということ、殆ど常識論になつてゐる。その国民運動も明確な方針さえ与えられれば十分に発展し得る見込のあることは、先般の排英運動において一応示されたことである。日本では国民運動は起り得

ないなどというのは、そのような政治の指導方針が確立していないことをいうにほかならない。阿部内閣はヨーロッパ問題には介入せず専ら支那事変処理に邁進することを声明した。いわゆる事変処理の具体的政策が如何なるものであるか、未だなお明瞭でないが、汪兆銘氏の純正国民党運動を支援するということは政府の方針としていただいたい決定しているようである。それならそれで、そこに国民運動の起点を求めてこれを発展させるということが今日適切なことではないかと思う。それは確かに国民運動の発足点となり得るものである。

汪兆銘運動の支持はわれわれの言葉に依れば東亜協同体の理論にその根拠を求めねばならぬ。東亜協同体運動こそ新しい国民運動の起点となるべきものであり、またなり得るものである。過般の排英運動の例に徴しても、政府の肚さえ決まれば、東亜協同体運動が国民運動として発展し得ることは明瞭である。国民精神総動員もかような国民運動と結び付いて初めてその意義を發揮し得る。支那における宣撫事業の如きも、この国民運動の一翼として国民的に展開されることになれば、その効果も大きいであろう。

東亜協同体論についてはいろいろ非難もあるが、すべての理論は実践と結び付いて発展するものであつて、東亜協同体論も国民運動にまで展開されるようになれば、理論的にも飛躍的に発展

し得るのである。そのみでなく、最近のヨーロッパの情勢は東亞協同体論の世界史的必勝性を証明しつつある。

どのような政府が出来ても、国民の力を自覚するのでなければ、時局を打開することはできぬ。国民を信頼することのできない政治家は最も惨めな存在である。

(十月十一日)

### 統制の自働性

統制は益々強化されてゆく。それは戦争遂行のために絶対に要求されていることである。しかし統制を単に戦争のために必要なものと考えerことは間違っている。統制は経済の新しい歴史的な形として捉えられねばならない。戦争はこの経済の新しい形への変化を促進する機会となつたのに過ぎぬ。

統制をただ戦争のために必要なものと説くことは、事変さえ済めば再び自由主義経済に戻るかのような幻想を抱かせることになる。事変が済んでも国防の必要は減じないという理由から統制の持続を説くことも不十分である。自由主義に代るべき経済の新しい形として統制の積極的意義

を国民に理解させることが大切なのである。

事変とか国防とかの必要からのみ統制を説くのは、国民に対して単に犠牲を要求することになる。統制の犠牲になる人々に対して、日本は今戦争をしているのだからそれ位の犠牲は当然だという風に当局はいつもいうのである。なるほど個人としては、社会のために自己を犠牲にするとは彼の道徳であるといえるであろう。けれども社会としては、個人に対して絶えず犠牲を要求するような社会は健全な社会とはいえない。統制によつて古い組織が壊されるために犠牲になる人々を救い上げることのできる新しい組織を同時に作ることに統制の仕事である。「食えなければ大陸へ行け」といったような無責任な放言をする官吏があるというのは、民衆の立場に身を置いて考えないことであるのみでなく、統制の眞の意義を理解しないものといわねばならぬ。

統制の目的は、経済の新しい体系を全体的に作り出して、この体系自身の有する力によつて自動的に統制が行われるようにすることにある。統制とは単に外部から圧力を加えることではない。体系に内在する自働的な統制力を発揮させるのでなければならぬ。外部からの権力はかような新しい形を作り出す過程において必要なものとして働くに過ぎない。統制が体系の力によつて自動的に行われるようになった場合、統制と自由との対立はなくなるであろう。

統制が単に官権的取締となつてゐるのは、そのような全体的な統制の構想がなくて、ただ彼方此方と火のついたところを消して行こうとする火消しの統制の然らしめることである。これでは国民が不安になるのも無理はない。新しい経済体制の基礎となるべき新しい経済倫理に対して国民を教育するという重要な仕事もまるで閑却されてゐるのではないか。

(十月二十五日)

### 雰囲気の変化

この頃我々の雰囲気に或る変化が感ぜられるようになってきた。ひとはそれを現状維持的気分と称し従来革新的気分に対する反動と見ている。政党の時代が再び来るかの如く考えたり、どんな統制をも感情的に嫌つたり、ただ何でも事變の速く片付くことを望んだりするような風潮がそれを示してゐるといわれる。

かような雰囲気の変化が一般国民の間においてさえ感ぜられるようになったのは注意すべきことである。それは確かに反動的な性質を具えている。しかしそこに何か積極的なものがあるであろうか。

近年においては種々のことが新しい形において現れるようになった。例えば頽廢の新しい形態といひ得るものがある。それは表面殆どなんら頽廢ではない。為すべきことは為され守るべきことは守られているように見える。けれども内面においては、そこには良心もなく情熱もなく、従つてなんら積極的なものがないのである。昔の頽廢においては外的には破綻があつたにしても、内的には人間的なもの、積極的なものがあつた。これに比して今の頽廢は一層危険である。

ちようどそのように、現在感ぜられる雰囲気はそれ自身としては積極的なものを有しない。それは久しく革新が叫ばれながら実際には少しも革新が行われなかつたり、統制といへばただ上からの官僚的統制であつたりした事に対する単なる反動に過ぎぬ。その消極性が現状維持的に見えるのであつて、そのために国民が現状維持派の味方であるかの如く考える事は錯覚であらう。併し誰でも多かれ少なかれ現状維持的な氣持を有するものだ。現在の雰囲気が現状維持派に利用される惧れもあるのである。革新を妨げるものは従來の所謂革新派であるともいえるであらう。

心理的雰囲気がどうであるにしても、現実においては革新の必要はいよいよ緊迫し、また事実としても革新は大いに進行しつつあるのだ。ここにおいて主觀的条件と客觀的情勢との間の乖離が著しくなつてきたというのが今日の状態でありこれが最も重大である。この乖離を除くことが

政治の進展にとつて要求されてゐる。しかしこれまでのように革新を唱えるのでは無意味であることも全く明瞭になつてきた。

阿部内閣は前内閣から「人心の一新」という任務を負わされた。しかるに人心の現状が右の如くであるとすれば、まことに憂慮すべきことである。国民の心理をしつかり掴んだ政治の転換が必要である。

(十一月一日)

## 鍛錬冬休

鍛錬冬休という言葉は、石黒前文部次官時代の鍛錬夏休という言葉につながるものである。その頃文部省では休むという觀念を排斥し学則を変更して爾後学校から夏休という言葉を抹殺しようという意気込みであつた。今鍛錬冬休が近づくにあつて、当局では実情に即してその再検討を行つてゐるとのことである。

實際、今年の第一回鍛錬夏休の結果をみると、種々の弊害もあつたのである。小学校ではその為病人を出したり、その時に入学試験準備をしたりすることがあつたし、私立学校の中には休



暇廃止に藉口して授業料を徴収したりする所もあつた。また大学理工科、実業専門、各種実業学校においては既に以前から休暇中に実習などをしていたのでから、鍛錬休暇といつても一律に考えることは無意味であるのみか有害でさえある。

休暇廃止によつて迷惑を蒙る者に教師がある。休暇は教師にとつて自己の教養と研究の時間であり、新しい講義に対する準備の時間である。それは教育のためにも大切なことである。真面目な教師であればあるほど休暇廃止を遺憾に思うであらう。

また生徒学生にとつては休暇は学校で学び得ぬことを学ぶ時期である。休暇廃止は学校のみが教育の場所であるかの如く考える間違つた觀念を知らず識らず前提しているのではなからうか。一般の農家や町家では休暇は子供が家事や家業の手伝をする時である。これは極めて重要な教育である。休暇が単に遊ぶ時であるというのはサラリーマン的觀念に過ぎぬ。家事や家業の手伝をする必要のない者は自分で計画を立てて読書したり研究したりするように仕向けるのが好い。休暇は自主的な勉強にとつて最も好都合な時である。学生生徒の自発性を養うことをしないで何事も命令的にやらせるということがこの頃の教育の精神であるらしいが、休暇廃止もその現れではないであらうか。

休むという觀念をなくするということは小吏的な道德感に發するものである。休むということ  
は自然の法則であり、それが道に従う事でさえある。休むという觀念は宗教的な意味をさえ含ん  
でいる。休むことと怠けることは同じでない。休むことから深い考えも出て来るのであり、た  
だ働くことからは精神的に奴隸的な思想しか生じないのである。休むことからはなかるか。

もちろん私は、經濟上或いは軍事上の緊急の必要から休暇廃止をしなければならぬというのな  
ら、必ずしも反対するものではない。それが小吏的な道德觀念に基づくとすれば、教育上弊害が  
多いことに注意しなければならぬ。

(十一月八日)

## 科学の普及

ノモンハン事件はいろいろな教訓を与えたといわれるが、中でも一致して認められているのは、  
それが今日の戦争における科学の重要性を現実にも示したということである。

近代戦は科学戦である。もとより精神も大切であるが、特に優秀な武器が必要である。その大  
切な精神も、それが道德的精神であるべきことはもとよりであるが、特に科学的精神が必要であ

る。

道具は立派に使用されることによつてその効果を顕すことができる。如何に優秀な武器が発明されても、操縦の仕方が拙劣であれば、その価値を発揮することができない。従つてすべての兵士が科学的知識を十分に具えているということが必要なのである。兵士の間には科学的知識が普及しているならば、彼等自身戦争に従事しているひまに種々の小発明、大発明をすらし得る可能性もある、先の歐洲大戦においてドイツはそのことを証明した。

かくて今日国防の見地からいつても科学の普及が最も大切なことは明らかである。国民の間には文化が普及していてこそ天才も生れ得るのであつて、大衆の間における科学的関心の発達は科学上の天才の出現の地盤である。科学が技術の基礎であることは言うまでもない。必要は発明の母であるとするれば、今日我が国において種々の物資が不足しているという状態も、技術の発達にとつて好機会であるとも考え得るであらう。もちろん必要からだけでは発明は生れないのであつて、そこには科学の発達と普及とが前提されている。

かように科学の必要な今日、政府は果たして科学の普及に対して十分の関心を持っているであらうか。国民の道徳的精神の涵養については極めて熱心であり、種々の方策が行われているので

あるが、それに比して国民の科学的精神の養成については如何であろう。前者に熱心であるあまり、後者は無視され、そのみか後者に逆行したことさえ行われているように見える。

今日の軍事上並びに経済上の必要は遂に政府をして科学動員を行わしめるに至った。しかし科学の発達は少数の科学者にのみ依存するものでなく、また決して一朝一夕の仕事でないとすれば、科学動員の行われるに至った今日においては、また特に科学の普及に対する諸方策が同様に熱心に遂行されることが必要である。この必要は科学者自身によつても十分に自覚されねばならぬ。

科学の普及はもちろん単に結果として与えられる「科学的知識」の普及に止まるのでなく、科学的知識の根源であるところの「科学的精神」の普及でなければならぬ。 (十一月十五日)

## 責任の道徳

政府で自分が声明した少数閣僚主義を抛棄して閣員の補充をすることにしたら、大臣病患者が輩出して識者は齟齬しているとのことである。いったいこの閣員補充の根本の理由が公明でない。来るべき議會を切抜けるためであるともいわれるが、そうだとすれば、道具に使われることを知

りつつ大臣になりたがる政党人の心が我々には理解しかねる。

この困難な時代に最も責任ある地位に就くというには、よほどの覚悟と確信が必要であろう。事変処理について、外交について、国内改革について、はつきりした見透しと政策とをもっているでなければ、容易に大臣など引受けられない筈である。ところがいつでも、官僚にも政党人にも、無数の大臣志願者が存在するというのは、果たしてこの時局を自己の責任において最後まで乗り切る覚悟と確信のある者が無数にいることを意味するのであろうか。

それならまことに頼もしいことであるが、事實はむしろ反対に、ただ大臣になりさえすれば好いので、後は出たとこ勝負でゆこうというのであれば、甚だ無責任なことと言わねばならぬ。もし万一にも、どうせ内閣の寿命は五ヶ月か十ヶ月なのだから、その間だけ何とか凌ぎさえすれば好いのだといったような気持があるとしたら、最後はどうなるのであるか。大臣は辞職することができて、国民は辞職することができないのである。

もとより私は政治家が善意を有することを必ずしも疑うものではない。しかしマックス・ウェーバーが言ったように政治家の道徳は単なる「心情の道徳」でなく「責任の道徳」でなければならぬ。即ち政治家は自己の行為の諸結果に対して責任を負うべきであり、そのためには彼は自己

の行為の将来における諸帰結について見透しをもって処してゆかねばならぬ。責任の道徳は認識を必要とするのである。

或いは言うかも知れぬ、今日のような状態において、例えば日本の財政経済がどうなつてゆくか、誰が知り得るであろう、と。事情は確かに複雑である。しかしそれが複雑であるということとは却つてそれを認識すべく我々を鼓舞する所以でなければならぬ。従来の経済学が用をなさなくなつたとすれば、それは却つて経済学者に新しい経済学建設の光榮を担い得る希望を与えることではなければならぬ。認識を抛棄することは人間性を抛棄することである。

新しい政治家、新しい学者、思想家等の出てくる条件は既に具わつて見えるように見えるに拘らず未だ現れないというのは何故であるか。そこにこそ日本の悩みの最も深い理由があるのでなければならぬ。

(十一月二十二日)

### 知識人の表情

この頃の文化界、思想や文学などの方面を見て誰もが感じているのは、問題がなくなつたとい

うことである。問題がなくなつたというのは基本的な考え方がなくなつたということである。だから批評も現象的とならざるを得ない。論争というものも殆ど見られなくなつた。一つの基本的な考え方に統一されたのでもなければ、互いに対立する基本的な考え方に分裂しているのでもない。だから批評も自づと追隨的とならざるを得ない。

問題がないというのは、問題が出尽したことであると考えられるであろう。語るべき事は既に語り尽されているかのように見える。問題は、それを綜合し、統一し、組織することにある、そこから更に新しい問題が出てくるであろう。だが、かような建設的な仕事は果たしてなされているであろうか。例えば思想の方面において喧しく論じられてきた日本主義、日本の固有成性、全体主義、三民主義等々について、人々は明瞭な觀念を与えられているであろうか。すべては矢張り曖昧に止まつているように思われる。そしてその曖昧さのうちに互いが一致しているような顔をしてゐる。この奇妙な一致の表情は極めて特徴的である。

もとより問題はなくなつていないどころか、新しい問題も出てきている筈である。だが、新しいものに対する驚異の心が失われているように見える。例えば青年が人に物を訊く場合、彼等は老人の如くである。自分に問題があつて訊くのでなく、たゞ何を言うか一つ聴いてみてやれとい

うので訊くのである。だから反対するのでもなく、賛成するのでもなく、要するにどうでも好いのである。極めて小さいものにも驚異を感じる心が青年性であるが、そうした青年性は青年からさえも失われているようである。

知識人のかような状態は、彼等が社会において指導する者であるという意識のなくなつたことを示しているであろう。知識階級が指導者であるということは、現実によつて否定されたように見える。しかし他方、知識人のそのような状態は、彼等がほんとに他から指導されてもいないことを示している。もし知識人以外の誰かに知識階級を指導するという意志があつたとすれば、今日の現実是否定的な結果を現しているのである。

ところで右にいつた奇妙な一致の表情、それを我々はただ知識人の顔においてのみ見るのであるか。

(十一月二十九日)

### 消極的個人主義

個人が社会に対して自分を主張するのが個人主義であるといわれる。しかし個人が社会から自



分を守ろうとするのも一種の個人主義であつて、消極的個人主義と呼ぶことができる。個人主義は西洋のものであるといわれるが、この消極的個人主義は東洋にもあり、殊に支那人の間では発達していた。

最近経済事情の激しい変化は種々の影響を示しつつあるが、中にもこの消極的個人主義を結果している。個人の買溜めなど、その著しい例である。消費者が買溜めするのは、それによつて社会の変化から自分を守ろうとするのである。東洋古来の消極的個人主義は隠逸の思想、無所有の思想となつたのであるが、それが現在では買溜めの思想などとなつて現れるところに時代の変遷を見るべきであろうか。

消極的個人主義は社会に働きかけて社会を変化しようとするのではなく、社会の変化に消極的に適応しようとするのであるから、買溜めは更に買溜めを生むというようになる。しかし人間は結局社会的動物である。多くの人の買溜めによつて社会の経済が破綻することになれば、買溜めする者もその影響を蒙らざるを得ない。環境に対する消極的な適応にはおのずから限度があるのであつて、却つて環境を変化することによつて環境に適応するところによって昔も今も人類の進歩があるのである。

しかし消極的個人主義は主観的で心理的であることを特徴としている。現在の買溜めの如きも物資の不足等に対する心理的不安から出ているものが多い。インフレーションに対する心理的不安が大衆の間に浸潤するということはインフレーションを速める結果にもなるのである。

だから今日必要な対策の一つは物資の不足等といわれるものの実情とその真の原因を国民に知らせることである。実情と原因を知らないで不安がっておれば、不安はいよいよ増すばかりである。心理的不安を客観的認識におきかえるところから環境を変化することによつて環境に適應するという人間本来の態度も出てくるのである。

従来支那人の消極的個人主義は政治を信頼することができなかつたために生じたといわれてきたが、今日我々の間に現れ始めた消極的個人主義が政府の物価政策等に対する信頼が国民にないために生じたのでなければ幸いである。強力な政治主体のない統制は却つて混乱の原因となることを考えねばならぬ。

(十二月六日)

## 教育の実用化

教育の実用化は最近の著しい傾向である。それは確かに必要なことであるに相違ない。けれど、それは飽くまでも根本的な意味においての実用化でなければならぬ。

教育の実用化はまず興亜講座の如きものの設置となつて現れたが、今度さらに、文部省では著名な実業家たちを動員して、産業報国講座というものを開設することになつたようである。

近年、大学の如きも自治的乃至自主的なところがなくなり、何でも文部省の指図で行われる風があるのであるが、この産業報国講座の如きはまさにそれである。そして学園の權威を誰も問題にするものがないという有様である。学校はもはや自分で学生を教育する能力がないと見られることに甘んじているのであろうか。教育の実用化が真に必要ななら、学校自身の手で実行すべきではないか。

いつたい産業報国講座で何を教えるのか知らないが、ラヂオ講演のようなものになつてしまつて、学生を退屈させるようなことがなければ仕合せである。賀屋元蔵相の学識をもつてしてなお、その大学における講義が失敗に終つたことを学生たちは語つている。もとより今日のアカデミーを不当に尊重することは正しくないが、またそれを不当に軽視することも間違つているのである。現在行われつつある意味における教育の実用化は、要するに人から使われて便利な人間を作る

ことになっていようである。それは人を使う人間、眞の指導者を作る教育とはなっていない。ところが今日必要なのは指導者の人物を作ることではなからうか。なるほど「人的資源」の不足が力説されている。けれども、人的資源の不足とは単に人に使われる人間の不足をいうのみでなく、実にまた眞に人を使い得る人間の不足を意味するのである。

我が国の教育は、これまで指導者の人物の教育を心がけなかった。今日の官僚政治の弊害もそこに由来しているのである。そしてその官僚が教育の実用化として行おうとしているものも、実は人から使われて便利な人間を作ることにはほかならないように思われる。

教育の実用化は、その本来の意味においては科学教育の徹底でなければならぬ。古い神学や形而上学から離れて、科学的精神を養成するところに教育の眞の実用化が存するのである。実用的教育と考えられる技術の教育も、科学を離れては根のないものである。

(十二月十三日)

## 重点主義

近頃しばしば重点主義ということがいわれている。この時局において、あれもこれもというこ

とが出来ぬ以上、重点主義はまことに当然のことである。

問題は、果たして重点主義が実行されているか否かということである。百億を超える膨大な予算を見るとき、青木蔵相の言明にも拘らず、実際に重点主義が行われているのかと、国民は疑うのである。殊に官僚的セクシヨナリズムの存在を考えると、その疑いが生ぜざるを得ない。セクシヨナリズムは、重点主義とは本質的に反対のものであるからである。

重点主義は政府にとつて必要であるのみでなく、国民にとつても大切である。今日における何よりも重点が、支那事變の処理にあることはいうまでもない。わが国が歐洲戦争に不介入の方針を宣明したのも、かような重点主義の現れである。ところがこのごろ、人が寄ると、すぐ米や炭の話に花が咲いて、恰も支那事變を忘れたかのようなのであるのは、まことに遺憾なことといわねばならぬ。国民の関心を重点主義に導いてゆき得るような政治が要求されるのである。

買溜めに対して嚴重な取締りをするということは、固より結構であるが、これも重点主義でなければならぬ。一般国民が政府の政策に対する不安のために、自衛上やつているような零細な買溜めに注目して、大口の買溜めや買占めのがすようなことがあつては、重点主義とはいひ難い。警官が戸別訪問をして、買溜めを調べるなどということは、重点主義の立場から、どうかと思わ

れるのである。かようなことによつて、昔、米を筆筒の中へ隠したというようなことが、再び行われることにでもなれば、国民の道徳心に対する影響は重大である。国民心理に留意すべきことを要求されている政府は特に国民の道徳心に着目しなければならぬ。

年末の街頭における酔っぱらひを、取締るといふことも賛成である。これは事変とは関わりなく、常にいわれてきた社会道徳上の問題である。しかしながら街頭の酔っぱらいにのみ注意して、大いに軍需景気に浴している人々の振舞いを見のがすようなことがあつては、重点主義とはいわれない。これは一方、統制の犠牲となつている人々もあることを考えれば、深刻な社会問題、思想問題の原因となり得る重大なことである。

重点主義はあらゆる方面において徹底されねばならない。政府のみでなく、国民もその生活において、重点主義を守らなければならぬ。

(十二月二十日)

## 国民の持久力

日本人の持久力はよく問題にされている。実際、日本人に耐久力が乏しく粘着力が少ないとい

う事實は、いろいろ挙げることができるであろう。しかし反対の例もあるのであって、文化上において、例えば水戸の大日本史、はなわほきいち 塙保己一の群書類従、或はまたいのう 稻生若水の庶物類纂、じゆうん 慈雲尊者の梵学津梁など、彪大な著述が現れている。

といった国民性というものは歴史的に作られるものであり政治的・経済的・社会的条件に依存するところが多い。それらの条件の異なるに従つて国民性も種々異なる形をとつて現れるのが普通である。

日本の国民に先天的に持久力があるかないかということは容易に決定し難い問題であるが、今日の日本に持久力が必要であるということは誰にも異論がない筈である。しかも国民に持久力を發揮させるには何よりもそれに適した政治的指導が行われなければならない。

ところが今日の実際の事情はどうであらうか。簡単な話が男子の断髪とか女子の電髪禁止とかは、一時的いぶん喧しく云われたものであるが、その結果はどうなっているであらうか。あの頃官庁においても次官あたりが率先して髪を切つたところがあるが、最近では、いつの間にか髪を伸ばしているものが多いということである。頭髪のことなど、実はどうでも好いことであるが為すことに持久性がないのは困ることである。

この例からも考えられるように国民の持久力を發揮させるには、瑣末なことを喧しくいうのを止めて重点に力を集中させねばならない。特に不合理なことを強要しようとしても駄目である。不合理なことは持続しようがないのである。一時の興奮から極端なことを云つても永続するものではない。それは現状維持ということでなく現状の改革も合理的な方向に合理的な方法で行われねばならぬということである。国民の納得し得る政治がなければ国民の間に持続力は生じない。もちろん今日の事態においては無理も必要であろう。しかしその無理を行うには国民が均等に犠牲を負担するということが必要なのであつて、それがつまり無理の社会的合理化なのである。

汪兆銘氏の政権の誕生が近いと伝えられるが、それは事変処理の重要な段階であるにしても要するに一段階に過ぎない。国民の持久力に対する試煉は今後において益々加わつてくるであろうが、この点について精動あたりでも反省すべきものが多いであろう。支那の立場と日本の立場とはおのずから出て来る国民の持久力に差異があるのは自然であつて、日本においては一層賢明な政治が必要なのである。

(一九四〇年一月十日)



## 「良葉忠言」

新内閣の為すべきことは客観的に決められている。だから誰が内閣を作っても同じ問題の解決に当らねばならぬわけで、ただその解決の能力があるかないかが重要な点である。

それでも新内閣に対して何か希望するとすれば、私は汪派の第一の理論家、周仏海氏の文章を想起するのである。それは本年一月一日の上海の或る新聞に載つたものであるが、他の人々の新年に寄せる言葉がおおむね形式的で空虚である中に、周仏海氏の文章は内容があつて光つていた。氏は「良葉は口に苦けれど病に利あり、忠言は耳に逆えど行に利あり」という支那の古い諺によつて「良葉忠言」と題して、友好的精神から日本に対し批評を加え、その改正を求めている。

和平を愛する多くの中国人は今も日本の誠意を疑っているが、その原因は日本に誠意がないということではなく、却つて全く日本の機構上、組織上、意見の統一上及び命令の執行上に欠陥があるということであると周仏海氏は述べ、三つの点を指摘している。

一、左右が一致せず。これは組織及び機構における横の関係をいうので、組織が煩雑で機関が重複しているということになる。甲の機関と乙の機関との意見が違い、いずれに従うべきかを知

らず、これがため日本全体の誠意が疑われるようになる。

二、上下が貫徹せず。これは同一機構内における縦の関係を指すので、上級機関の命令が下級機関に達すると決してそのまま実行されず、甚だしいのになると全く実行されないために、上級機関の誠意が打消されてしまうのである。

三、前後が連接せず。これは時間的関係をいうので、後任者は自分の功績を頭そうとして常に前任者の施設を全部ひっくりかえしてしまふ。そこで事務上に連繋がなく、誤解が発生することになるのである。

周仏海氏の右の忠言は、遺憾ながら、適切なものと認めざるを得ないように思う。第一の点は特に思想の不統一に基づいており、他の点は主として組織及び機構に関係している。しかもかような欠陥は、単に対支工作においてのみでなく、国内行政においても見られるのである。それは統制のことなどで民間人が官僚と接触する場合いつも経験していることである。

新内閣が考慮し糾正し改善すべきものがそこにある。新内閣にとつても当然第一の目標であるべき事変処理のためにも、また差し迫つて要求されている内政上の諸問題の解決のためにも、その実行が必要である。

(一月十七日)

## 革新と国民

このごろ内閣の更迭を機会に、革新派とか現状維持派とかということが、また喧しくいわれるようになった。いわゆる革新派からは、米内内閣は現状維持的色彩が強いという批評を受けているようだ。

革新派といい現状維持派という、それがいったい何を意味するのか、国民一般にはよくわからないのである。米内内閣はだいたい国民に好感をもたれているらしいが、そうかといって国民が現状維持的なのであろうか。現状維持と革新との対立は、国際的には、持てる者と持たざる者との対立を意味すると考えられているが、国内においても同じに考えてよいのであるか。国際的見地と国内的見地とは思想において異なつてよいのであるか。

外交の上では、革新派と現状維持派との区別は、親独親ソと親英親米との区別と見られているが、しからばその見地に關聯して内政問題に如何なるプログラムがあり、それに如何なる差異があるのであろうか。一般的にいつて、近年、外交問題だけを抽象して、その立場からのみ、ただ

形式的に、現状維持派とか革新派とかと區別するといふような傾向が強いのである。支那問題については理想的なことをいつても、その物差しで国内問題をどう考えているのか、明瞭でないことが多い。だから、どういふのが革新派で、どういふのが現状維持派であるのか、国民には符牒としてしかわからない。両者の主張が国民生活の實際にどういふ差異を生ずることになるのか、ならぬ具体的に説明されていないからである。

革新の必要であることはいふまでもないが、それを国民に理解させるには、外交問題だけを抽象するのでなく、国内問題を含めての具体的なプログラムを示すことが必要である。いわゆる革新派と現状維持派との競り合いも単に一部で行われていて、国民には何の関係もないものになっている。すべてが何か陰謀的に感ぜられるのも当然である。

政治は依然として国民と関係のないところで行われている。これは、現状維持派であろうと革新派であろうと、変りがない。しかもその国民と関係のないところで行われている政治の結果は、すべて国民にふりかかってくるのである。眞の革新とは何であるか。政治が国民の中に入ってゆくことである。そのことに努力しない限り、いわゆる革新派も革新的であるとして国民には受取られないのである。

(二月二十四日)

## 新しい経済倫理

新内閣になって精動の改組とその活動方針の更新がまた問題になっているようである。精動は最近やや持てあまし気味になっていたのではないかと思われるが、もちろん精動の必要が減じたわけではなく、むしろその逆である。

精動の新しい活動方針として、戦時経済道德の振興に主眼をおくべしとの意見が閣内にあると伝えられている。現在の国内問題の重点が経済問題であることを考えれば、それは全く正当な意見であるといわねばならぬ。闇相場や闇取引の横行は、国民の道德意識を毀損しつつある。インフレーションの浸潤が、道徳生活を腐蝕する危険も大きい。根本的にいえば、自由主義経済から統制経済への転換は、それに相応する新しい経済倫理の確立を要求しているのである。実際、統制に対する反感というものが、この新しい経済倫理の欠けているために生じている場合は多いであらう。

「戦争によって何人も利得すべからず」というのは、ヒトラー総統の言葉である。それはドイツ

ツの戦時経済道徳を現したものと見えるが、いつたい日本の戦時経済道徳は、如何なるものであろうか。その觀念が明瞭でなければ、精動で戦時経済道徳の振興に努力するといつても、これまで同様、効果は期待されないのである。これまでにおいても、節約せよとか、貯金せよとか、闇取引をするなとかと、十分しばしば叫ばれてきた筈である。その成績から考えて、今後単にそれを繰り返しても、無駄なことは明らかである。

新しい経済倫理は、経済に対して外部から加わってくるものであることができない。従来の慈善事業とか、社会事業とかのように、経済機構の根本には營利心というものを認めながら、ただそれから生ずる弊害を矯正するために、経済外の活動として、道徳が付け加わるといっているのであつてはならぬ。倫理は経済の内部になればならず、経済の倫理は同時に経済の論理であるべきである。しかもそれが倫理といわれるのは、経済そのものが純粹に物質的な過程でなくて、その中に人間が入っており、人間の主体的な自覚による自主的活動が、経済過程に対して重要な關係を有するためである。

新しい経済倫理は、経済の新しい形に即して説かれねばならぬ。経済機構をもとのままにしておいて、それを補足するために道徳にうつつた愨たえるというようなことでは、効果が挙らない。国民に対

して経済倫理の説教を始める前に、先ず新しい経済の全体的な見透しを描き出して示すことが必要である。

(二月三十一日)

## 教育の不安

新制度による入学試験は着手され内申書も既に提出済みとなつたようである。この学科試験廃止に対してはいろいろ反対があつたが、最近には、来年はまた学科試験が復活されるという噂さえ出た。そんなことは無論あるべき筈のものでない。入学試験の方法がたびたび変るといふことはこれまで小学校教育に不安を与えていたのである。新制度の欠陥がその実施によつて明らかになるにしても、ひたすらその矯正に努力して、改革の精神を徹底させる方向にどこまでも進まねばならぬ。

問題は内申書とか口頭試問とかにある。そしてそれらが不安に感ぜられているのは、根本に遡つて考えると、教育の自立性が喪失しているところにある。

だいいち、これまで上級の学校しかもいわゆる「善い」学校に幾人入学できるか、ということ

にのみ教員が頭を悩ましていたのは、小学校教育に自立性が欠けていた証拠である。内申書や口頭試験に疑惑がもたれているのも、生徒の親の地位や財産などによつてそれらが影響されはしないかと惧れられるためであつて、ここでも教育の自立性が問題になつていたのである。その他種々の場合に、教育の自立性の欠乏が教育の不安の原因となつてることが見出されるであらう。

現在、教育の不安として、入学試験などよりも一層重大なことは、教員の転職の増加と教員志望者の減少である。それは教員の不足のみでなく、その質の低下を必然的に結果するのであつて、これは第二の国民の養成上、まことに憂慮すべき事態である。

教員の転職の増加や教員志望者の減少は、主として経済上の問題に基づいてゐる、近頃問題を起した東京市における教員の家庭教授の如きも、恐らく同じ原因に由来するであらう。教育の自立性も経済上の問題と関係がなくはない。かくて教員の優遇方法について、真面目に考えねばならぬことは当然である。いつたいわが国のいわゆる自由職業的インテリゲンチヤは経済的に恵まれることが余りに少なく、そのために文化の向上が阻害されている場合は多いのであり、またそのために今日彼らの間に、金銭に対して甚だ卑屈であるという態度も生じているのである。

しかしながら右のような教育の不安は、単に経済上の問題でなく、また特に倫理上の、経済倫



理上の問題である。或る田舎では、農村の好況時代には安月給取りといつて教員を軽蔑し、そして一旦農業恐慌時代になると、あんなに沢山月給を取るといつて教員を叱責したという話を聞いたが、これは経済倫理の問題に触れている。

経済の新しい形に即して、新しい経済倫理を確立する必要は、今日の教育の不安を見ただけでも明瞭である。教員に向つてただ抽象的に倫理を説いても無駄である。教育の不安を除くために、国家経済の新しい形が現れねばならぬ。

(二月七日)

### 心に希望を

月収七十円以下のものに一定の条件のもとに、二円の手当を支給すると、政府で決定した。その二円が現在、木炭何貫目にあたり、大根何本にあたるなどといつて批評するものもあるが、たとい僅かにしても、有るは無いにまさるに相違ない。ともかく、二円は二円であるのである。

二円は二円であるというのは論理であるが、願くばこの論理が一貫することを期待したい。今月の二円が、来月は一元九十銭の値打しかなくなることのないように、言い換えると、このうえ

物価騰貴を来たすことのないようにすることが、肝要である。今月は七十円で買った物が、来月になると七十二円かかるというのでは、今度は二円以上の手当を出さねばならなくなってくる。

私はここで、経済学の常識を復習しようと欲するのではない。むしろ私は、人はパンのみにて生くるものにあらず、といいたいのである。而も物価が従来（ひか）の如く連続的に昂騰してゆけば、二円の錢も石に等しくならぬとも限らない。

この時に最も大切なことは、国民の心に希望を与えることである。二円の手当を支給することについては、我々も大いに必要を認めるものであるが、それと同時に忘れてならぬことは、心に希望を与えることであり、これは金銭で量ることのできぬ価値をもっている。心に希望さえあれば、人間はどんな苦難にも堪えてゆくことができるものであるから。

私はもちろん、単なる精神主義を説こうとするのではない。いわゆる精神主義が、その反面露骨な唯物主義でしかないことを、各人は自己の周囲において余りに屢々経験している筈である。闇相場が常識になろうとしている世の中に如何なる精神主義があり得るであろうか。

ここで私の注意したいのは、最近漸く顕著になりつつある経済主義的偏向である。経済の問題が、今日極めて緊要な問題であることは、いうまでもない。しかしそのことから、経済主義への

偏向が生ずることは危険である。むしろ現在大切な認識は、経済の問題も或る意味で政治の問題であり、政治の力に依らなければ、経済の改革も不可能であるということである。そのことを、何よりも閣相場が実証している。経済に対して、つねに政治の力の加わることが必要であるというのではない。新しい機構で経済が自動的に動き始めるようにするには、現在政治の力に俟つことが多いのである。

心に希望をもたらずものは、政治である。経済主義的偏向が目立つて現れつつあるとき、特にこのことをいっておかねばならぬ。

(二月二十一日)

### 思想の具体性

斎藤隆夫氏の問題<sup>1</sup>についていろいろ意見を聞くのであるが、いったいどう判断してよいのであるか。判断の基礎となるべきものが公表されていないので噂に拠るのほかに、ところが噂は噂する人の主観に彩られているのがつねであるから、困るのである。

i 222の衆議院における代表質問が反軍的と陸軍が憤慨し、演説の後半を削除される。

新聞に依ると、齋藤氏も今次の事変が聖戦であることを認めているようである。しかしそれだからといって、むろん直ちに齋藤氏が弁護さるべきわけではない。問題は言葉でなくてその具体的な内容如何にある。そしてその点で齋藤氏の除名を主張している人々も、彼等は如何なるものを持っているのであるか。われわれ国民はその具体的なものが聞きたいのである。自分で具体的なものを持たないでただ便乘的に強硬論を唱えているのでは、やがて同様の問題が繰り返されなるとは保証できないのである。

思想は元來具體的なものである。例えば政治について、經濟について、また文化について、具體的な意見があつて初めて思想である。その根柢に哲学というものを考えるにしても、その哲学は政治哲学や經濟哲学、また文化哲学を含むものとして初めて完全な哲学であることができる。

しかるに今日では思想というものが何かそれだけのものとして存在するかのように考える風が愈々盛んである。だから問題は単に言葉だけのことになる。われわれはそのような、言葉に過ぎぬ言葉を余りに多く詰め込まれていないであらうか。

思想が抽象的に存在するか否かの如く思うところから、思想の問題については誰もがひとかどの専門家として発言し得るかにように考える誤解が広く存在している。科学や技術に関することはも

とより、財政や経済に関することについては、専門家というものを不当に恐れる傾向が存在する一方、思想の問題になると今度は誰もが専門家の如く振舞いたがる傾向がある。そこでまたどんな問題をもいわゆる思想の問題として取り上げてくるという傾向が生じている。

思想戦というものも、今後のそれは単なる思想のみのもでなく現実の政治や経済と結び付き、その中に入つて行われねばならぬ。わが国において思想の統一がないという原因の一つも、思想というものが抽象的な場面で闘われているところにある。

斎藤事件の現在の姿は、抽象的な名目における一致が必ずしも具体的な内容における一致でないことを示したものである。従つてかような事件は今日わが国で思想といわれているものの性質に鑑みて、今後も起り得る可能性のあることを示したものに他ならぬ。 (二月二十八日)

## 常識の変化

非常時は常識が無力にされ、破壊される時である。これまでの常識では間に合わなくなるから、

i 齊藤隆夫は、この後衆議院議員を除名されるが、次期選挙では当選し復帰。

非常時といわれるのであろう。けれども常識の惰性はなかなか強く、現実が変化して、従来の常識がこれに対しては、もはや非常識となつていている場合においても、なお常識として通用しようとするものである。

常識は現実の生活の中から生れた知識であり、従つて何よりも現実の生活の変化が常識を変化させる。殊に最近の生活諸事情は、国民の常識を次第に著しく変化させつつある。例えば金と物との関係についての常識の変化である。金があつても物が買えないということを、国民の各自は、現実の生活において大なり小なり経験し、金よりも物を重要と考える風が作られつつある。

国民の常識はかように変化しつつあるのに、政府の政策を見るとその変化がないように思われるのは、指導的立場に立つものとして如何であらう。例えば、石炭の増産のために補助金や奨励金を出すということは、金よりも物を重要と考える新しい常識に対して、依然として古い常識の立場にとどまるのではなからうか。

補助金や奨励金を出しても、会社の懐ろ具合を良くするだけで、増産の成績は挙がらないという議論が的中しなければ幸いである。少なくともそれは、すべての経済活動は営利を唯一の目的とするものであるという、古い常識から出た政策であるといわれるであらう。

議会に対して国民が冷淡であるのも、国民の常識が変化しつつあるのに、議員も政府も一步も古い常識の範囲を出ない駄引に終始しているためである。「興亜議會」の面目は、いったい何処に見出されるのであるか。

指導者よりも被指導者が進んでいるという現象は、今日あらゆる方面において認められる。精動の現状などもその例ではないであろうか。指導者というものの常識を変化して、指導者が指導されるということにならなければ、真の指導者は出て来ないのである。

新しい常識を作つてゆくには、今日の状態が一時的なものでないということ、言い換えると、非常時がもはや非常時でなく、新しい常態となるべきものをそのうちに含んでいるということ、認識することが大切である。

しかるに常識は予見し得るものではない。予見し得るのは科学であり、思想である。それが今日必要なのである。それは新しい常識の成長のためにも必要である。

(三月六日)

## 組織の持続性

戦時内閣はなるべく変らなないのが善い。その他の組織にしても、戦時中はなるべく変らなないようにすべきである。内に一貫したものがあつて、外に向つても一貫して行動することができるのである。

ところが支那事変以来、国内における組織が余りにしばしば変化していかないであろうか。伝えられるところに依ると中央物価委員会も今度改組されるし、また国民精神総動員の組織も変更されることである。精動にしても、物価委員会にしても、従来 of 成績から見ても、改組の必要があることは確かである。

しかし他方から考えると、内閣が変わるたびに、それらの組織を何とか変えねばならぬかのように思うことは間違つてゐる。それは官僚的な考え方に属してゐる。官僚は、ひとつの地位に就くと、何か自分の仕事というものを示すために、前任者のやつて来たことを無理にでも変更したがるのがつねである。変更することが必ずしも悪いというのではない。しかし一旦変更する以上、自分のその地位を離れても、変更しないで済むような確固不動のものを作る覚悟で十分慎重に、見透しのあるものを作るのが大切なのである。

次に日本人の悪い癖として、一旦人を頼んだ以上、その人をどこまでも信用してやらせるとい



うことがなく、少しやらせてみて、うまくゆかないと、直ぐに取り代えるという風がある。他を信頼して永い目で見るということがないところから生ずる不利益は特に従来大陸の経営においてすでに十分に経験されていることである。精動の如きにしてもあんなに度々改組で脅かされているのでは落付いて一貫した活動を展開してゆくことができないであろう。もちろん、現在、精動や物価委員会などに改組の必要がないというのではない。その必要は大いにあるのである。しかしそれらが度々改組されねばならぬということは、従来単に間に合せのものを作つて来たことを示している。その無責任な態度の責任が追及されねばならぬ。内閣そのものにしても一時の凌ぎに作るという風がないであろうか。

日本は今、持続的な組織を必要としている。好い加減なことややつてゆけないことは日々益々明瞭になつている。崩れるものは早く崩すが善い。そしてそのあとに、一日も早く将来のある、発展性のある組織の基礎をおかねばならぬ。現在のように動揺つねならぬ状態においては国民の精神消耗の結果が恐ろしいのである。

(三月十三日)

## 取残される思想

いつかの近衛公の言葉を俟つまでもなく、今の日本の最も重要な問題が経済問題であることは明らかである。この問題は人々の毎日の生活に関係しているので、誰も無関心であることができない。しかるにかように経済問題が全面的に人々の前に立ち現れるに従つて、従来「思想」といわれてきたものが取残されてゆく傾向が見られはしないであろうか。

例えば現在、闇取引が横行しているというが、この現象の何処に「日本的」なものがあるであろうか。自由主義経済の建て前からいえば、闇相場は、それが必然的な現象であり、従つて「世界的」という意味のものなのである。いくら日本精神を説いても、一方において闇取引が普遍的に行われている限り、その思想は宙に浮いたものである。

以前から我々は現実的な意味における日本精神は現在の日本人の行動そのものうちにあるといつてきたのであるが、今日の経済現象の何処に日本の特殊性があるのかと問いたいのである。

もちろん我々は、日本主義の思想に反対するものではない。ただそれが従来そのままであつては、今の日本から取残されてしまうことになり、「思想」というものは満腹している時の贅沢物に過

ぎず、空腹になれば問題でないということになりはしないかと虞れられるのである。そうでないようにするためには、それは現在の社会的・経済的問題を解決し得るような具体的な内容をもつたものにならなければならぬ。

今日、思想が取残されてゆく傾向があるからといって、思想の必要がなくなったわけではなく、思想というものが新しい形で現れて来なければならぬことを示しているのである。

例えば、安藤正純氏が議会で三民主義について質問していたが、現在三民主義の問題はジャーナリズムの上では既に人気がなくなつてしまつていようであるにしても、今や支那に新中央政府が成立しようというとき、実はその現実的な重要性をもつてきたのであり、今後益々重要性を加えてくるであろう。しかし我々はこの問題について明確な認識を与えられているであろうか。

従来「思想」といわれていたものが取残されてゆくに從つて、今日の社会的・経済的現実の中から新しい「思想問題」が現れてくる傾向は高まりつつある。この問題を完全に解決し得る日本的思想にして世界的意義を有し得るのである。

(三月二十日)

## 検閲の責任

この頃検閲の問題が著述家や出版業者の新たな関心となつてゐる。従来公刊されてきた書物が時勢の変化によつて発禁になり、そのうえ著者が罪に問われるということは過去にも例があるが、最近また同様の追及を受けている者がある。ところが更に議會における問答に依つて、右翼的思想家として知られる某氏にも、目下類似の問題のあることが明らかになつた。

私はその人々の歴史観に必ずしも賛成するものではない。また私は研究の発表に無制限の自由があるなどと考えるものではない。そして何人も自分の意見を公にする以上、その社会的影響に對して責任を負うべきことは当然である。

尤も国民が健全な常識を持つておれば、どんな思想でも、とりわけそれが以前全く違つた社会情勢下において書かれたことを考えるとき、国民の判断はそれによつて迷わされることはないであらう。そして私は日本国民がそのような健全な常識を持つてゐるものと信じてゐる。

しかし多数の人間のうちには批判力のない者もあり得るとすれば、従来発行を許されていた書物が時勢の変化に伴つて禁止されることは当然であらうが、処分は発禁だけで足りるのではない

かと思われる。そのうえ著者や発行人の罪を問うということは酷に過ぎはしないであろうか。

もし彼らの責任を追及しなければならぬというのであれば、従来その発行を許可してきた検閲当局の責任もまた同じように追及されねばならぬことになりはしないか。著述家や出版業者を追及しながら官吏の責任は全く不問に付するのは片手落ではないか。法は公平であるべきであり、公平であつて権威があるのである。のみならずそれによつて、有為の学者、思想家等を徒らに葬ることは、人物経済の上からも甚だ遺憾なことといわねばならぬ。

更に考えるべきことは、時世の推移に従つて検閲の方針には変化があり得るとしても、もしそこに何らの基準もないとすれば、それはすべての著述家にただ時世のままに移り変ることを要求するに等しいであろう。かくては曲学阿世の徒のみ多くなり、その結果は却つて国民思想に悪影響を及ぼすことになりはしないか。検閲当局は、国家の悠久なる文化の向上に対する真の責任感から、常に確固たる基準を把持していることが望ましいのである。

(三月二十七日)

## 教育義務制案

i 津田左右吉の書の発禁と、出版法違反として著者と岩波書店社長が起訴されたことであろう。

教育の改革にとって大きな問題の一つは小学校教員の問題である。それは既に現在においても、経済界の影響にもとづく教員の転職の増加及び教員志願者の減少による教員の不足と質の低下となつて現れている。そしてその解決は教員の優遇という経済的問題を含んでいるのである。

しかし教員の問題は義務教育年限の延長とともに現れてくるであろう。即ちその年限が八年に延長されると、それに伴つて教員の質の向上が必要になり、従つて師範学校を専門学校程度に高めねばならぬことになつてゐる。そうなると勢い教員の初任給から上げねばならず、そこにまた経済的問題が出てくるのである。

教育費は従来市町村財政にとつて大きな負担になつており、ためにその国庫支弁の問題も起つてゐるのであるが、それが全部国庫支弁になるとしても、教員の俸給を上げることが勘定に入れると、国家の負担は甚だ重いであろう。

この場合、或る人が問題解決の方法として私に話したところには傾聴に値するものがあると思われる。その意見を簡単に紹介すると、専任の教員は大いに優遇するが、数を少なくし、その代りに一般国民のうち小学校で教え得るだけの学識と経験のある者を国家で登録しておいて、必要

に應じて、一定の期間、義務的に教育に従事させるといふのである。恰もすべての健康な男子が兵役の義務を有すると同じように、すべての優秀な国民は教育の義務を有することになる。それは現在のいわゆる義務教育制に対する教育義務制ともいうべきものである。

元來、教育に専門家は無い筈である。善い農民、善い商人、善い産業家等、すべての善い国民はみな立派な教育家であり得る筈である。国民教育はそれらの人の手で行われることによつて却つて實際に即した有益なものになるであらう。師範学校を出た者だけが教育家の資格があるといふのは形式主義の考え方に過ぎない。国民教育はむしろすべての善い国民によつて行われねばならぬ。

もちろん専門に教育のことを研究し、専門に教育に従事する者が不要であるといふのではない。ただそこにすべての善い国民が義務的に参加して、善い農民が農業を、善い商人が商業を教えるといふ風になれば、学校と社会との関係は密接になり、眞の国民教育が行われることになり、経済的問題も同時に解決されるのである。かような教育義務制によつて国民の教育に対する関心は高められるであらうし、またその機会を利用して国民再教育を実施することもできるのである。

(四月三日)

## 民族性と政治

改組還都というのは支那新中央政府の合言葉である。それは汪政権の新しい出発の第一歩を示している。

上海から南京へ来て、首都飯店に落ち着いた時、私は先ず還都という言葉の如何に実感に充ちたものであるかを知った。中山北路にあるこのホテルの一室から眺めると、紫金山が陽の光を浴びて紫に輝いている。菜の花が咲き、蛙の音が聞えて来る。池では女が洗濯をしており、釣をする人がある。京都か奈良の春が思い出される長閑さだ。旅人である私にさえ還都といった喜びが同感されるのである。

旅に出る前、私は支那の民族性というものについて、いろいろ聞き、またいろいろ読んできた。上海に来てからも、支那通と称する多くの日本人が、支那人のことをいろいろと話し、我々もつと彼等の心理を知らねばならぬと論じているのに出会った。その議論はもちろん間違っていないし、一般的にはもつと強調される必要があるであろう。それにも拘らず、私自身が知ったのは、



何処でも同じ人情であつた。そして今南京に来て、変らぬ自然に接して再び考えたのは、やはり変らぬ人情である。

支那人を利用し若くは支配するには、支那の民族性を知らねばならぬであらう。マキアヴェリ自身が示しているように、マキアヴェリズムにとつては彼等の心理というものの把握が必要である。併し支那人とほんとに提携してゆくには、却つて変らぬ人情を基礎にすることが一層大切なのではないかと考えられるのである。支那人の心理を捉えよという主張の根柢には、寧ろ支那人を利用し若くは支配しようという旧い觀念が知らず識らず前提されているのではないかと思われるところがある。

もちろん、それぞれの国民に民族性の差異があることは確かである。だがこの民族性というものは、決して単に自然的なものでなく、長い間の政治の結果である。そして今後日本と支那とが提携してゆくには、支那の民族性が新しい政治によつて変化されねばならぬ。しかしこの新しい政治は寧ろ変らぬ人情を基調としたものでなければならぬのではなからうか。

日支提携の発展のためには支那の民族性が変らねばならぬが、それとともに日本の民族性も変らねばならぬということは、支那に来てみて一層はつきりと感じることである。しかも日本の民

族性の改造にとつても日本の政治の改新が何よりも必要なことである。

(四月十日)

## 事実の宣伝

宣伝には事実の宣伝と思想の宣伝とが区別されるであらう。この二つの種類の宣伝があらゆる場合に相俟つて、宣伝はその力を發揮し得るのである。ところでこれまで支那に対する日本の宣伝は、主として思想の宣伝に力が注がれていたようである。しかるに支那に新中央政府が出来た今後において、特に必要なのは事実の宣伝ではないかと思う。もちろん事実の宣伝は思想の宣伝を伴うことによつて愈々効果的となるのである。

事実の宣伝には、言うまでもなく、宣伝の基礎となり得るような事実が先ず作られねばならぬ。それはその本質上、思想の宣伝のように抽象的でなく、具体的であることを要求されている。それは眼に見ることのできる実証的事実に關している。しかしながら、もし宣伝されるような事実が全面的に出来上つているとすれば、もはや事実の宣伝は不必要になる道理であるから、それが必要であるということは、そのような事実が未だ全般的には存在しないということ、また存在し

得ないような事情にあるということ、を意味するのである。従つて事実の宣伝にとつて必要なことは、先ず典型的な事実がいわば象徴的に作られるということであろう。言い換えると、例えば模範地区というようなものが作られて、その地域内において先ず理想的な事実の形の示されることが必要なのである。

事実の宣伝が必要であるからといって、その事実を一時に全面的に作り上げようとすれば却つて失敗に終るのである。なぜなら事実の宣伝が必要であるということは既に言つた如く、その事実が未だ全般的には存在し得ないような事情にあるということの意味するのであるから。かようにして事実の宣伝にとつて肝要なことは、限りある力を分散することなく一局部に集中して、模範的な事実を先ずいわば象徴的に作り上げるといふことである。この点において事実の宣伝は、思想の宣伝がつねに全面的でなければならぬのと異なつてゐるのである。

国内における宣伝についても全く同じであつて、そこには思想の宣伝と共に事実の宣伝が大切である。そしてこの場合にも従来思想の宣伝に偏してゐたのに対して、今や事実の宣伝に力が注がねばならず、そのためには国内改革の模範的な事実が先ずいわば象徴的に大衆の眼の前に示されなければならないのである。

(四月十七日)

## 指導者の反省

事変の初めの頃支那から戻つて来た人々が国民に緊張が足りないといつて憤慨することが多かつた。これに対して、それは寧ろ日本に余裕がある証拠だといつて弁護する者も少なくなかつたのである。

ところで、最近私は支那から帰つて日本の土を踏んだ途端、私自身やはり、もつと国民が緊張しなければならぬと強く感じた。日本はこれだよいかという氣持が起るのを、私は禁じ得なかつたのである。

去年あたりは、田舎の人が都会を見てその風潮を慨歎していたようであつた。しかるにこの頃では、逆に都会の者が見物に歩き廻る田舎の人に対して非難の眼を向けるという有様である。もちろん私は、慰安や享樂をあなたがち攻撃するものではない。それは活動の元氣を養うために或る程度必要なことである。根本の問題は国民の氣力如何である。

温泉場などの話を聞くと、事變の起つた最初の年は客が非常に少なかつたそうであるが、第二

年目、第三年目と次第に殖えて、昨今では全く悲鳴をあげるほどの景気だということである。いわゆるインフレもさることながら、国民の緊張が次第に弛緩していったと思われるふしも多いのである。

恐ろしいのは国民の無気力である。事変以来外面的には態勢は漸次整ってきたようであるが、その反面気力の衰えが感ぜられないであろうか。

革新はつねにいわれてきたにしても、それも要するに立身出世の方便に過ぎなかつたのではないか。愛国心でさえ内にこもつた真の情熱でなく、ただ他人に見せるためのものとなつていたということがないか。今日の状態を考へるとき、国民性そのものが問題であることを深く感じるのである。国民性の改造が最も根本的な問題であるように思う。

ところで今日の状態は何に由来するのであるか。その原因は遠く従来の指導者の長い間の思想方針が不十分であつたことに基づくのである。その思想方針を根本的に転換して新しく出直さなければ、この状態を改善することはできない。しかるに実際においては、今日国民を非難する者の多くは却つてただ従来の方針を押し進めることしか考へていないのではなからうか。指導者が真に己れを空しくして国民心理の現実を直視しつつ、深く反省しなければならぬ秋である。

(四月二十四日)

## 帰還將兵の動向

最近軍部では利潤統制に関する見解を発表して注目を惹いたが、今度支那派遣軍總司令部で天長の佳節を期し「派遣軍將兵に告ぐ」と題するパンフレットが全軍に配布されたということはまた重要である。それは事變の意義を明快に述べ、派遣軍將兵が同時に東亞新秩序の建設戰士たるべきことを示した劃期的な文章である。

特に注目を要するのは、その中の「交代帰還將兵に告ぐ」という一項であろう。即ちそこには「若しこの英靈を冒瀆するような国内の醜状、国民の無自覚あらば敢然として起ち皇運を扶翼し奉り聖戦の目的貫徹に向つて国内を導くの覚悟を必要とするは言を俟たない所である」といわれているのである。

戦後国内の諸事情の發展にとつて帰還將兵の動向が大きな関係をもっているということは、夙に事變の当初から一部の者が指摘してきたことであつた。ところで今、国内には「醜状」とおぼ

しきもの「無自覚」と感じられるものがないであろうか。とりわけ帰還將兵の眼をもつて見れば、慨嘆すべきもの、憤慨に値するものがないとはいわれないであろう。戦火の中で鍛えられ、大陸の経験で養われた精神によつて改革の期待せらるべきものは多いであろう。

ただししかしこの際希望したいのは、眼に触れる現象に囚われないで、その根本の原因であるところの実体を深く掴むということである。如何なる場合にも帰還者というものには表面の現象が強く印象されるといふのが自然の傾向であるからである。しかるに単に現象にのみ目を着けていては、改革といつても、無益な瑣末主義に陥り、重点を逸することになるのは、従来いわゆる革新において国民の余りに屢々経験してきたことである。

眞の改革には現象の背後にある実体を掴むことが必要である。そのためには印象に囚われ感情にはしることなく、忍耐をもつて冷静に現実を分析しなければならぬ。改革そのものが単に現象的であつてはならないからである。すべての改革にあたり、とかく偏狭で性急になり易いいわゆる島国根性を棄てて、大局的に持続的にやつてゆくということは、深く大陸を経験した者の何よりも考えるべきことであろう。「大陸の経験」でさえもが「島国的に」発現する虞れがあるのである。帰還將兵の動向は今後の日本にとつて極めて重大な関係にある。それは国内情勢が複雑になつ

てゆくに従つて愈々重要性を加えるであろう。諸氏の大陸の経験が正しく生かされることこそ最も大切なことである。

(五月一日)

## 政治の倫理

経済倫理という言葉が一つの新しい流行語となつてゐる。それは今度の地方長官会議などでも現れるほど一般化してきた。尤も言葉が流行しているからといって、実体が確立されているわけではなく、むしろ言葉の流行によつて実体に関する問題が蔽い隠されてしまふ危険さえあるのである。

新経済倫理の確立はたしかに必要である。だが先ずその内容について明確な觀念が与えられねばならぬ。もしそれが単なる倫理主義を意味するとしたなら、既に従来 of 精動あたりの成績から見て明らかであるように、経済倫理は無力である。新しい経済倫理は経済機構そのものの中にあつて、その改革と結び付いたものでなければならぬ。機構を変えないで置いて觀念だけを変えようとしても無駄である。



言うまでもなく経済機構には人間が伴っている。従つて人間の觀念を変えらるゝことは、機構を変え、その作用を發揮させる上に大切であり、経済倫理の強調される所以もそこにあるであらう。

だが人間についていえば、人間を動かすものは経済であるよりも政治である。人を動かさなければ物も動かさないということは最近の経済事情において益々明瞭になつてきたことであるが、その人を動かすことができないのは政治がないからである。今日の情勢は物の動員とともに人の動員を必要としている。しかもそれは単に経済的力としての人間を動かすことなく、政治的力としての人間を動かすことである。国民を政治的力として動かさなければ国民を経済的力として動かすこともできないということは、既に今日までの経験において十分に実証されてきたことである。

統制経済は少なくとも現在の段階においては政治が経済に対して指導的であるということの意味している。もし政治に指導力がないなら、経済倫理といつてみても人間を倫理的に動かすことはできない。経済の倫理は政治の倫理によつて裏打ちされることを要求するのである。

もちろん経済倫理は大切である。しかし国民に向つて経済倫理を説くことによつて、政治の責

任者が政治の倫理を忘れるようなことがあつてはならぬ。経済倫理という言葉は政治の責任を他に転嫁するために作り出されたものではなからう。政治倫理が定まつて経済倫理も定まる。国民には経済倫理のみが問題であつて、政治倫理は無関係であるなどという間違つた考えがあるべきではない。

(五月八日)

## 世界史の一瞬

歐洲戦争が本格化してくるに従つて、予言が益々活潑になつてきた。イタリアは参戦するか、アメリカは参戦するか。ドイツが勝つか、英仏が勝つか。ヨーロッパ文化の将来は如何になるか、世界の新秩序とは何であるか。これら大小種々の問題について、様々の見透しが述べられている。見透しはこの場合つねに予言的調子を帯びている。

ヨーロッパ戦争の発展について見透しを得るに努めることは、日本の将来にとって大切である。見透しは冷静な、客観的なものであつて見透しである。しかるに最近、その見透しと称するものが次第に熱を帯び、主観的となり、余りに性急になりつつあるのが感じられないであらうか。

嘗てマルクス主義が流行したとき、同じような性急な見透し、予言が流行した。資本主義の没落について、世界革命について、それが明日にでも迫っているかの如く、客観的見透しと称する實は主観的希望が予言者の口調で述べられた。この性急な見透しが、多くの有為な青年を犠牲にしたのである。

同じような性急な見方が支那事変についてもあつた。この事変の世界史的意義とか東亞の新秩序とかが、数ヶ月、数年のうちに実現され得るものであるかの如き見透しが一部で行われたのである。かような性急な考え方が無意味で、危険でさえあることは、事變の現在の段階に至つて最早十分に明瞭になつた筈である。しかるに今またヨーロッパ戦争について同様の見透しと称するものが、嘗てのマルクス主義流行時代におけると同じ性急さをもつて、今度は或る一部の人々の間に盛んに行われているのは、注意すべきことであろう。

世界史は急がない、というのはヘーゲルの言葉である。個人の一生とは違つて、世界史は十分に時間をもっているのであるから、急ぐ必要はないのである。十年、廿年は世界史にとつて一瞬に過ぎない。世界史の時間を個人の一生の時間で量つてはならぬ。

もとより我々はヘーゲル流の歴史觀の客観主義的誤謬に陥つてはならないであろう。世界史の

時間は個人の一生の時間とは単位を異にするにしても、それはやはり瞬間から瞬間へと歩むのである。「バスに乗り遅れない」ようにすることは大切である。性急な見透しによつて誤らないと共に、あらゆる場合に処し得る国内体制を速かに整えておくことが必要なのである。

(五月二十二日)

## 科学の生活化

ヨーロッパ戦争の勝利がいずれの側に恵まれるかはなお予断を許さぬにしても、ドイツの目覚ましい進撃振りは驚歎に値する。ナチズムを好むと好まざるとに拘らず、ドイツに味方すると否とに拘らずそこに学ぶべきものは多いであろう。

ドイツの成功の原因として先ず挙げられるのは、その武器の威力である。もちろん武器だけが問題であるのではない。その戦闘精神の旺盛がまたドイツ軍の成功の原因であるといわれている。だが旺盛な戦闘精神そのものも優秀な武器に負うところがあるのである。人間は彼自身としては必ずしも強いものではない。弱い人間も武器を身に着けるならば、猛獣に向つても勇敢に戦うこ

とができる。そのように、軍隊にしても精鋭な武器によつて自信ができ、勇気づけられるものがある。

武器は偶然に出てくるのではなく、科学の産物である。従つて武器を身に着けるといふことはつまり科学を身に着けるといふことにほかならぬ。ドイツの科学の威力は既に前の世界大戦において示されたのであるが、今次の歐洲戦争はそれを更に一層明瞭に示すに至つた。

ところで一国の科学の發達は単に少数の科学者の力に依るのでなく、国民全体に科学が普及することによつて達せられる。大衆の間に科学が普及して初めて優れた科学者も現れ得るのである。近代の軍隊の力もかような科学の普及の与るところが多いであらう。

ドイツの新武器は世界を刺戟し、我が国においても科学者が武器の研究に動員されるようになった。しかるにこの際考へるべきことは、軍事科学はただそれだけで發達し得るものでなく、科学のあらゆる方面の發達を前提することと共に、科学の發達は科学が国民の間に入り、その生活の中に融け込むことによつて可能であるといふことである。ドイツの科学の發達はドイツ人の日常生活のうちに家庭の台所の隅にいたるまで、科学が入つてゐることによるのである。

科学の生活化が必要である。近年我が国の小学校教育においては数学は生活に近づけられてか

なり面目を新たにしたいと認められるが、理科その他においてはまだその努力が足りないと思われる。科学を単に科学として孤立させるのではなく、人間生活のあらゆる方面に浸透させ、科学的精神の養成をもつて新日本建設の一基礎とすべきである。

(五月二十九日)

### 指導者の養成

国民学校案の実施については種々の問題があるが、中にも重要なのは教員の問題である。すべて制度は人を俟つてその機能を發揮することができ、いくら制度を変えても、その人を得なければ効用は現れず、却つて弊害を生ずることにさえなるのである。せつかく義務教育年限を延長し、教授内容を改正しても、それに適した教員がいなければ無意味である。国民学校案の実施にあつて、この新しい制度を有効に運用し得る教師は果たして十分にいるのであろうか。

教員の養成が先決問題である。先ず適格の教員を作つて、しかるのち国民学校案を実行に移すべきではないか。

言い換えると、師範教育の改善が先立たなければならぬ。そしてこれは経費その他の点からい

つても、国民学校案の実施よりも容易であろう。教師が元の俸で新しい制度を行おうとすれば、却つて弊害の起る恐れさえある。殊に新しい学校内容や教授法についてはなお多くの問題が残されているのであつて、これを仔細に検討する上からいつても師範学校の改革が先決問題であるべき筈である。

組織と共に人が変らなければならない。これは現にいわゆる新党組織の問題についてよくいわれていることであつて、既成政党の人々を寄せ集めて挙国党というものを作ろうとしても、根本的に新しいものは生れてこないで、むしろ弊害の現れてくる危険が多いというのと同じ關係にある。

挙国党は指導者の政党でなければならぬであらうが、一般に指導者の養成について我が国では永い間真面目に考えられなかつたのである。大学の如きも指導者の養成について深く考えることなく、サラリーマン養成の機関となり、それが今日の政治の貧困の一つの原因となつていのである。固よりいわゆる政治家や官僚のみが指導者であるのではない。教員の養成を後にして国民学校案を実施しようというのが如きことも、指導者養成に注意を払つていない一つの証拠である。

指導者は国民の間に到る処において作られなければならぬ。単にいわゆる政治家や官僚のみが

指導者であるかの如く考えて、国民の間に指導者を作ろうとしないのは指導者養成の精神に反することといわねばならぬ。挙国一致の政党組織が提唱されている今日、真の指導者養成について真剣に考えるべきである。

(六月五日)

## 敗者の教訓

ペタン將軍はフランスの敗因について、国民が犠牲の精神を失い、享樂的になつていたことを挙げた。一九一八年以後のフランスの状態を多少とも知っている者は、この指摘の道德的に過ぎることがないのを認めるであらう。

それにしてもフランスの敗北は、余りにだらしがなかつた。長期戦になれば必ず勝てるという前世界大戦の経験から生じた国民の常識が、彼らを支えて最後まで踏ん張るであらうと一般に予想されていた。しかるに実は国民がかような常識の上に安心して昼寝をしていたことが寧ろ彼らの今度の敗北の原因でなかつたであらうか。少なくともフランスの指導者たちがそのような常識に頼つて戦争を始めたところに誤算があつた。彼らは自己の国民がもはや元の国民の如くではな



いことを認識しなかつたのである。

政治家は自己の国民の現実を知らねばならぬ。その場合常識に頼ることは危険である。常識は本性上固定的なものであつて、現在を過去と同じに考え易く、変化する現実を正確に認識することを妨げるからである。これがヨーロッパの戦争における敗者の我々に与える重要な教訓の一つである。

最近わが国においてはドイツの勝利から教訓を受取るべきことが頻りに唱えられている。これは疑いもなく大切なことである。そこに我々の学ばねばならぬものは多いであろう。けれども勝者の教訓に従うということは、単なる模倣になりがちな自然の傾向をもっていることに注意しなければならぬ。徒らに勝者の栄光に眩惑されて、その模倣も根柢的なものに触れることなく、単に外面的、形式的に陥り易いのである。ただ到達せられた結果のみを真似て、それに至る過程から根本的に学ばないとすれば危険である。自己認識を忘れて、英雄や天才の形だけを模倣して破壊した例は、個人の生涯においても少なくない。勝者の教訓に比して敗者の教訓は、我々がこれに冷静に批判的に対し得るだけ、一層有益な場合が多いのである。

政治家は国民の現実を正確に認識しなければならぬ。もちろん彼は、仮に自己の取扱う材料が

満足なものでないにしても、敢くには当らない。最上の政治家は国民性を自己の目的に適するように改造することを知っている。国民性の改造が重要な仕事であることはヨーロッパの与える切実な教訓である。

(六月二十六日)

### 新生活体制の基礎

国民生活の新しい形式がいよいよ緊要な問題になつてきた。生活の刷新ということはもちろん事変の始まると共に唱えられたのであるが、従来は何といつても真剣味が欠けていた。我が国の経済にまだ余裕があつたためであらう。

しかしそれも米の問題が現れた頃から次第に真剣味を加えて、精動においても国民生活の刷新について真面目に考えるようになった。殊に最近、国際情勢の変化は物動の新編成を必要とするに至り、民需の抑制はますます強化され、贅沢品の製造販売の如きは禁止を見ることになった。今や物動と精動とが即応して進まねばならぬ事情が明らかになつたのである。

生活の刷新といつても単に外から強要されたものである場合、国民はただ消極的になるといふ

に止まるであろう。与えられた諸条件の変化に対して積極的に新しい生活を設計してゆくという新しい生活精神の現れることが肝要である。従来いわゆる生活の刷新は、ともすれば国民を萎縮させる傾向があつた。生活の不自由を生活の合理化によつて打開すべきことも説かれたが、単なる合理化は消極化となりがちである。国民生活の中に創造的精神が現れ、新しい生活様式が設計されねばならぬ。いわゆる新文化の創造は単に新しい芸術や哲学などの創造をのみいうのではなく、何よりも国民生活の新しい形式の創造を意味すべきである。

しかるに国民の新しい生活設計がなされ得るために先ず必要なことは、国家の経済が計画的になるということである。国民に向つて生活の刷新を説く者はつねにこの点を忘れてはならないであらう。

次に大切なのは組織である。新生活体制の組織なしには国民生活の刷新は十分な効果を挙げ得ないのである。この新生活体制は国民を単に形式的に束縛し、かくて国民を萎縮させるようなものであつてはならず、新しい生活精神によつて生かされたものでなければならぬ。それにはこの新生活体制が下からの創意的な政治的協力の方式としての国民再編成との聯関において考えられることが必要であらう。しかも国民再編成はまた経済再編成と不可分のものでなければならぬ。

新しい生活精神は新しい国民組織の中からのみ生れ得るのである。

伝えられるところの隣組制度の法制化にあつては右の点が考慮さるべきであると思う。

(七月三日)

## 東西の新秩序

阿部全権大使と新中央政府との間に日支国交調整会談が始まつた。あまりに長く待たされてきた国民は、その結果がそれだけ輝かしいものであることを期待している。

阿部大使の渡支以来、ヨーロッパの情勢には大きな変化があつた。今後更にも多くの変化が見られるであろう。歴史の歩みは一直線ではなく、ジグザクである。けれどもそれは決してただ気紛れでなく、根本の方向には或る定まつたものがある。日本としては世界史の必然的動向に立脚し、その時々々の情勢の変化に徒らに左右されることなく、東亜新秩序の建設に邁進しなければならぬ。機会主義的であつては、真に機会を利用することもできないであらう。

ドイツの勝利は、ヨーロッパにおける新秩序の形成を促進した。ドイツもまた新秩序について

考えざるを得ない状態になったように見える。去る五月十三日『フェルキツシャー・ベオバハター』に発表されたアルフレット・ローゼンベルクの「ヨーロッパ革命」という論文は、その意味において興味深いものがある（『中央公論』七月号訳載）。ローゼンベルクは従来、民族の血の神話とドイツ民族の絶対性を説いてきた人であるが、今や彼はヨーロッパ協同体を主張し、全体主義から協同主義へ転向するに至った。それはヨーロッパ戦争の始まると共にわれわれが予想したことである。現実の必要はのつぎならず思想の発展を促したのである。

ところで少なくとも思想だけについていえば、新秩序論、協同体論、全体主義を超えた協同主義は、ドイツに一步先んじてわが国においてこれまで既に唱えられているものである。日本の知識階級はそのことをいくらか自負し、新たに自信をもつても好いであろう。

尤もわが国では、思想についても外国から来たものでないと容易に信用しないという風が今もある。しかし一層重大なことは、思想があつても、それを実践に移し得る政治体制がないということであろう。日本には思想がないといわれているが、問題はそこにあるのではなく、むしろ政治体制の整わないために、思想がないといわれるような状態が生じているのである。それ故に新政治体制の樹立は、知識階級にとつても重要な意味をもっている。

ヨーロッパ協同体がドイツによつて実現されるか否かは問うところではない。日本としてはひたすら国内の政治体制を整えて東亜新秩序の建設に邁進し、世界に先駆けて世界を指導するといふ大きな抱負と覚悟がなければならぬ。

(七月十日)

### 信頼関係の確立

第二次近衛内閣はいよいよ成立を見た。近衛公はいわゆる新政治体制の中心人物として輿望を担う人である。新内閣の出現は新体制への前進を意味するものとして歓迎すべきことである。

新政治体制はもちろん新内閣の組織をもつて終るものではない。それとこれを混同してはならぬ。新内閣の成立は新体制への一段階でしかない。それは重要な一段階であるにしても、要するに一段階に過ぎぬということを忘れてはならぬ。新政治体制は、新しい政府、新しい政党、新しい国民組織という三つのものを包括し、その三位一体の上に初めて完成する。それら三つのものを互いに混同することなく区別すると共にそれらを有機的聯関において把握することが肝要である。

新内閣に対しては多くの希望が寄せられている。ここで私も一つ希望を述べることが許されるならば、私は特に政治における信頼関係の確立を挙げたいと思う。

新しい国民道徳の樹立は新政治体制の重要な任務の一つである。国民心理の問題といい、新經濟倫理の問題といい、国民性の改造の問題というものは、総てこれに關聯している。然るにかような新しい道徳は政治における信頼関係を基礎として成立する。信頼関係なしには如何なる眞の道徳もあり得ないであろう。

政治に対する国民の信頼の欠乏は従来しばしば指摘されてきた。買い溜め、売り惜み、闇取引等の原因もそこにあるといわれている。この際輿望を担うて起つた近衛公を首班とする新内閣に期待したいものは、何よりも政治に対する国民の信頼の回復であり、増進である。そのために必要なことが責任ある政治を行うことであるのは、常に論じられてきた通りである。

しかし信頼は相互的であるのを考えることが大切である。それは政府に対する国民の信頼であると共に、国民に対する政府の信頼でなければならぬ。そしてこの国民に対する信頼の欠乏もまた従来しばしば指摘されてきた事である。国民を愛し国民を信ずることによつて、国民を道徳的にする事ができる。人間は誰でも、他から信頼されていると思う時、道徳的に行為する責任を感

じるものである。いわゆる官僚統制の弊をなくするためには、先ず国民を信頼しなければならぬ。国民を信頼することによつて初めて国民の協力を期待することもできる。

新しい政治体制とはかくの如き信頼関係の表現であるものをいうのである。 (七月二十四日)

## 流行と権威

事変このかた、本の売行が非常に好いといわれている。これは喜ぶべきことに相違ないが、しかしその売行の様子をみると、読者の本に対する鑑識力乃至批判力が疑問であるといわれている。自分で識別し選択するということが少なくなつて、何か流行となつているもの、何か権威といわれているものに無造作に頼るといふことが多くなつた。鑑識力の低下は流行が力を得る原因であり、また流行は権威らしいものを作り出す原因になる。

流行と権威とが区別されねばならぬことは明らかである。権威あるものは真理でなければならぬが、流行は真理と虚偽との別なく行われ得るからである。流行と権威との区別はかように明瞭であるにも拘らず、人々に真偽の判別力が欠けており、流行に追隨する風が盛んな所では、何



でも流行するものが權威あるものであるかのような誤解を生じ易いのである。

我が国ほど權威というものの多いところはない、と或る人が言った。もしその通りであるとすれば、それが残存せる封建思想の現れでないかということ、そしてまたそれが流行によつて作られたものでないかということを考えてみなければならぬ。流行の波は容易に權威を作ることができ、しかしそれはまた容易に權威を運び去るであらう。流行は次から次へ多くの權威を作る、しかもそのことによつて流行は却つて眞の權威を蔽い隠してしまひ易いのである。

今日、我が国には權威が必要とされている。權威ある学問、權威ある思想、權威ある芸術、そして何よりも權威ある政治、——すべて權威あるものが要求されている。あらゆる方面における自由主義体制から新体制への移行には、新しい權威の確立がなければならぬ。或る意味において、新体制は自由主義に対して權威主義の立場に立つものである。しかしこの新しい權威主義は封建的な、自由主義以前の權威主義とは全く性質の異なるものでなければならぬ。權威に対する要求が封建主義の復活とならないように注意することが肝要である。

人々は、權威ある言葉、權威ある行動を切実に求めている。本が売れるということも、一面そのような要求の現れと見られ得るであらう。しかしそのために、我々は自己の鑑識力や批判力を

失つて流行に追隨し、単に流行によつて作られた權威というものに身を委ねることを慎むべきである。

新しい眞の權威は如何にして生れ得るか、——これが新体制の根本問題の一つである。

(七月三十一日)

## 一元化の問題

一元化という語は今日の合言葉の一つとなつてゐる。あらゆる方面の改革において一元化はたしかに必要である。統制の問題は或る意味では一元化の問題に帰着する。従つてその語が今日かように流行しているのも偶然ではないといえるであらう。

しかし現在種々の言葉が、その眞に何を意味するかを理解しないで、流行語として使われていることが多いのに注意しなければならぬ。それはただ流行することによつて既に自明のことの如く思われるようになり、何等その意味を追求しないという傾向が生じる。自分でその眞の内容を理解していない言葉を盛んに使用するということが今日の流行となつてゐる。尤も、これは今の

時代に自然の現象であつて、これによつて革新的雰囲氣が作られる。しかし革新は単に雰囲氣の問題でなく、実行の問題でなければならぬとすれば、いわゆる一元化についてもその意味を正しく把握すべきであり、そしてそれには多少の「哲学」が必要なのである。

一元化の問題は或る意味では単純化の問題である。分立することによつて複雑になつてゐるのを、統合することによつて単純にするというのが一元化である。しかるに従來の實際を見ると、既存の機関の一元化のために新しい機関が作られても、それがその機能を發揮し得ないで、却つてただ分立するものが一つ殖えるという結果になり、その關係がますます複雑になるといつた場合が稀れでない。これはその際既存の機関に対して徹底的な改廃が行われなからであり、そしてこれは既存の機関に属する人々に自己犠牲の精神が欠けているのに依るのである。機関の単純化は特に非常時に必要な能率化のために大切であり、そしてそれは非常時にふさわしい自己犠牲の精神があつて初めて実現されることができる。

機関の一元化は系統を明らかにし責任の所在を明らかにすることである。従つて少しでも責任回避の態度がある限り、一元化は徹底し得ない。従來頻りに一元化が叫ばれながら、事實は反対に、いわゆる屋上更に屋を重ね、機関のみが徒らに膨大になつたというのは、当事者に責任觀念

が稀薄であつたということにも関係があるであろう。

しかし單純化は劃一化ではない。真の一元化は却つてそのもとにあるものの機能或いは職能の分化を明瞭にすることによつて実現され得るのであり、それが單純化ということの真の意味である。機能の分化が徹底しないと、そこからセクシヨナリズムも生ずるのであり、かくて一元化も行われ難いのである。現実における職能の分化を無視した劃一的形式的一元化はものを無力にすることであり、統制において最も警戒すべきである。

(八月七日)

## 大国民の自覚

事の大小輕重を判別することは、あらゆる場合に必要であるが、道德の場合特に大切である。この場合、その判別には多少とも洗煉された感覚を要するだけ、一層各人の心掛けが大切なのである。

この頃交通機関の混雑は周知の事実であるが、この混雑を更に甚だしくしているものは乗客の無規律である。これは過日横須賀線での経験であるが、電車が駅に着く前既に座席は一つもなく

なっていて、あわてて乗り込んでも坐れないことは一目で明瞭であるにも拘らず、皆が我れ勝ちに乘ろうとして押し合い、悲鳴をあげる女があり、子供など押し潰されそうであった。そんなに競争して乗ってもそのために生ずる混雑の結果、全体の乗客が乗り終るに要する時間は決して短縮されはしないであろう。その時私の友人は蠢口をすられてしまった。誰かズボンのポケットに手を触れているような感じがしたが力一杯あとから押しつけてこられるので、手を後に廻してみることもできなかつたのである。

戦場において勇敢であつたり、防空訓練において規律正しかつたりすることだけが、愛国心でもなければ、国民道徳でもない。今日その言葉は流行しなくなつたようだが、従来社会道徳とか公德とかといわれていたものが守られることも、愛国心の立派な表現であり、国民道徳の大切な要素である。非常時に最も肝要な道徳は規律である。非常時は無秩序、無規律になり易い時であるのだから。銃後において戦線の兵士を忍ぶということも、軍隊においてのように規律を守るということでなければならぬ。

汽車や電車などの乗り降りにおいて規律正しくするというが如きことは小事であると考へてはならぬ。他人を押し退けて我れ勝ちに乗り込もうとする人間が、他の処で買溜め、買占め、闇取

引などに狂奔しない人間であるとは私には考えられないのである。いわゆる公德は「新国民道徳」といわれるものの最も重要な要素であるべきである。そして社会道徳が守られないのは、大国民としての自覚が欠けているからであると思う。新国民道徳とは大国民の自覚に基づいた道徳でなければならぬ。

「大東亜共栄圏」の建設を理想とする日本国民にとつて必要なのは何よりも大国民の自覚である。しかるに今日なお一方において社会道徳が欠如しているとともに、他方において徒らに小事に拘泥して喧しくいう瑣末主義が流行しているのは反省すべきことであろう。小さく見えることにも大きな意義を有するものがあり、大きく見えることにも小さな意義しか有しないものがあるということについて正しい認識をもつことが大国民に必要な教養である。

(八月十四日)

### 彩票の倫理

満洲へ来て最初に私の前に現れたのは彩票【宝くじ】の倫理の問題であつた。

今度満洲国では遊資吸収策として、頭彩十万円という一枚十円の特別裕民彩票を發行すること

なっている。これに対して熱河省協和会から反対の火の手が上がり、問題を起すに至った。反対の理由は、頭彩十万円というのは余りに民衆の射倖心を唆るもので、その結果は民衆を窮迫に陥れ、国策に悪影響を及ぼすというのである。民衆を窮迫に陥れるとは、農民や労働者が税金も納めないで購入することを恐れたものであろう。

これに対して経済部では、反対者は最近の金融状態を知らないのであつて、今後必要とあれば頭彩廿万円の彩票だつて出す肚だといつてゐるようだ。また協和会本部でも、反対者は親の心子知らずというもので、十円彩票消化の目標が有産階級にあることを忘れてゐるといつてゐる。

同様の問題は日本においても初め報国債券について起つたのであつて、それは国民の射倖心を唆り道徳上有害であるという反対論が出て、そのために純然たる富籤とは異なる現在の報国債券の形をとることになつたと記憶してゐる。

経済的な見地においては、一等十万円、更に廿万円というような彩票の発行も必要であると考えられるであろう。しかしまた倫理的な見地においては、それが民衆の射倖心を刺戟して有害であるという反対論にも理由があるように思われる。そこに経済の論理と倫理との間に一致しない

i 報国債券、無記名無利子で十年以内に償還、但し抽選であつたと割り増しを付けて償還される、と。

ものがある。そしてまさにこの乖離が彩票の倫理にとつて根本の問題なのである。一方彩票の問題を単に倫理的な見地から取り上げることが抽象的であるといわねばならぬが、他方経済の論理の帰結或いは寧ろ前提が反倫理的であるのは容認し難いといわねばならぬであらう。

彩票の倫理の問題は、経済の倫理と論理とが一致すべきことを意味している。この問題は、経済の新しい形を作つてゆくことによつてのほか根本的には解決され得ないのであつて、民衆の射倖心を唆るが如き彩票の発売を必要としないような経済の新しい体制を作ることが根本的に大切である。この目的に達する過程における現在の実証的な段階に相応する手段として彩票も倫理的に認められ得るのである。

新しい体制といつても、現実の状態を無視して作られ得るものではないのである。実証的に経済の各面の現実の段階に立脚するということは計画経済にとつても、寧ろ計画経済にとつてこそ肝要なのであつて、その点について実証的なところが欠けていることが今日の統制の弊害といわれるものの大きな原因ではあるまいか。統制は論理的であると同時に実証的でなければならぬ。

(八月二十日)



## 住宅問題

住宅の問題は人類と共に古いが、いわゆる住宅問題は近代的な問題であり、最も近代的な問題の一つである。それは日本でも重大な問題になっているが満洲国でも同様である。

この春支那を旅行して私の得た結論は支那の問題は日本に関する限り国内の問題と同じであり、ただ彼処では戦争の現地であるだけにそれが拡大されて見えるということであつた。今また満洲に来て私を感じたのは満洲の問題も多くは日本のそれと同じであり、ただ此処では新しい国であるだけにそれが拡大されて眼に映ずるということである。住宅問題はその一例である。

殊に新京の住宅難は甚だしいようだ。新京では約二万戸の住宅が不足しており、そのうち今年一万五千戸を建てる予定のところ、資材の関係で七千戸ほどしか建たないとのことである。官庁や会社に勤めている人で家のないのが多く六畳の室に三人起居しているというような有様である。一体、住宅は常に八パーセントくらい空家があつて円滑にゆくといわれているのである。

かような住宅払底は一面から考えると満洲国の急激な発展を示すもので、寧ろ喜ぶべき現象である。しかし折角意気込んで来ても住む家がなくては落ち着いて働くこともできないであらう。

腰を据えて仕事をさせるには先ず氣持のいい住宅を供給することが肝要である。新たに赴任して来ても家がないために家族を呼び寄せることができず、二重の生活を余儀なくされて経済的負担に苦しんでいる者もあるようである。

住宅問題は経済的問題であるばかりでなく、道德的問題でもある。狭い室に幾人も一緒に住んでいては勤め先から帰つても休息も読書もできず、また家族と別れて住んでいるのでは生活に潤いがなくなり、かくて勢い享楽街が繁昌することになる。享楽街の肅正は満洲国でも喧しくいわれているが、それには住宅問題の解決が差し当つて必要なのである。

もちろん当局はその解決に努力しており官舎や社宅が次第に建てられている。ところがその建築が劃一的で、いかにも殺風景であるのはまた考えるべきことである。イタリアからの訪問団がそれらの住宅を眺めて、あれは何の倉庫かと尋ねたという話がある。同じ資材を使つても工夫すればもつと風趣のある建築ができる筈だと思ふ。遠く母国を離れておれば感情もすさみ易いのであるから、せめて住宅は趣味豊かなものにするのが大切である。統制と劃一主義とを混同してはならない。

満洲国に来て見て私は今更の如く住宅問題の重要性を感じたのである。(新京にて、八月二十八日)

## 協和と指導

このごろ満洲国では協和と指導ということが更めて議論されているようだ。私はこちらでその問題について種々の方面の人から意見をきかされたものである。

由來、満洲国は五族協和をもつて発足している。ところが協和というのでは満人を甘やかすことになつて、うまくゆかない。協和などというのは日本人にありがちなセンチメンタリズムに過ぎず、協和でなくて指導でなければならぬというのである。

これはすこしまえ日本においても東亜協同体論について問題になつた点である。協同体論は日本民族の指導性を否定するものだというような非難の出たことがあつたのである。

もし協和ということがただ合議的に多数決にでもよつてやつてゆくということが如きことであるとするれば、それは明らかにそうした非難に値するであろう。今日そのような自由主義的な考え方が止揚されねばならぬことは当然である。東亜の新秩序は日本民族の指導のもとに建設されるべきものである。しかしながらそれは民族的エゴイズムであつてはならず、指導の目標はどこまでも民

族協和でなければならぬ。

そして指導において大切なのは指導する者が実際にその資格を具えているということである。ただ命令によつて服従させるというのでなく實力によつて信従させるというのでなければならぬ。しかも最も肝要なことは単にイデオロギーをもつて指導するというのでなく寧ろ実践を通じて指導してゆくということである。満洲においてほんとに民族協和に成功している日本人の例をみても、それは例えば農業の技術を自分にもつていてその土地の農民から信頼され、彼等を生活的に指導している人々なのである。抽象的なイデオロギーを詰め込んだ人間でなく技術を身につけた人間を、大陸は求めているのである。

指導というただ号令で人を動かすことであるかのように考えるのは外国の全体主義の悪い影響に過ぎないであろう。東洋古来の政治思想は一種の指導政治の思想であるが、しかしそれは修身齊家というように、指導者として立ち得る資格を先ず自分に養い、そして実生活に即して身近かなところから実践してゆくことを本質としていたのである。西洋に見られるが如き超越的な権威主義は東洋思想の伝統のうちにはなく、却つてここでは人性の自然に従うということを重ねじたのである。

西洋流の自由主義を止揚した協和と、西洋流の全体主義を止揚した指導とは、根本において一致するのである。

(九月四日)

## 文化政策の新しき

新体制も次第に具体化してゆく。永い間理論に過ぎなかつたものが愈々現実となることになつたのである。

ここに私は理論というものの大きな意義を考える。国民再組織とか新国民組織とかという名で理論として論じられてきた事は決して無駄ではなかつたのである。もちろん、実際に出来あがる新体制は従来理論として主張されていたものと完全には一致しないであらう。またそれが理論として唱えられていた間は観念的であるとして非難されるような性質のものであつたのも己むを得ない。しかしそのためにそれが無用でなかつたことは今にして明らかである。

新国民組織と共に要求されるのは新しい政治である。新しい政治は種々の方面から考えられるであらう。しかし政治の新しさにとつて今日最も考慮すべきものは文化政策である。外国の新し

い政治をみても文化政策には大いに力をいれているのであるが、我が国においては今特にそれが肝要であると思う。

元来、日本の政治は久しく文化政策に対する理解を欠きこれを無視乃至軽視してきたのである。文化政策というと単なる取締に墮したり一面的に思想対策に偏したりする傾向があつた。故にもし今日の新体制が文化政策に対して真に積極的であるならば政治に全く新しいものを加え、政治を魅力あるものにする事ができる。文化政策にとつて基本的な条件は、文化というものの豊富さを理解することである。この理解があつて初めて真の文化政策が行われ政治に明朗性と滋味とを与えることになる。文化政策の貧困は最も根本的には文化の豊富さについての無理解から来るのである。

日本の新体制に対しては満洲国の協和会なども大きな関心を示しているが、その満洲国では最近次第に文化政策の重要性が理解されてきたようだ。ことに私が深く興味を覚えたのは満洲国でも地方において満系に接触することの最も多い人々が文化政策の必要を最も痛切に感じているといふことである。この人々は例えば満系のための読物がないことをうつつたえている。実際、新京あたりの満人街などでも路傍で講談式のもの売っている所に洋車曳きがうづくまつて読み耽つて

いるのを見ると、その意見の適切であることがわかる。面白い読み物を通して日本の文化に接触させることは、抽象的な満洲建国精神論をきかせることよりも遥かに有益であろう。それは満洲の国民学校教師の日本視察旅行が大きな効果を収めていることから察知され得るのである。

新体制の新しさを文化政策に求めることは努力に値することである。

(九月十一日)

## 人材の不足

満洲国でも日本と同じに人材の不足が嘆ぜられている。元来全く新しい国家として建設され、新体制をもつて出発した満洲国においては、それに適した人が得難く、人材不足の嘆はおのずから大きいであろう。日本においても新体制となれば人物の払底が更に甚だしく感ぜられるに相違ない。

尤もいわゆる人物払底は、実際に人がないのではなく、あつても用いないところから生じているということもある。用いるべき人を用いないのは偏見に囚われているためである。偏見とは既成の意見をいう。かかる既成のものを除くことが新体制をして真に新体制たらしめる所以である。

もちろん人材が実際に不足していることも事実であろう。その原因は、嘗て本欄で指摘したこともあるように、従来の教育の欠陥、特にそれが指導者の養成に留意しなかつたことにある。この指導者教育は、満洲国においてのよう日本人が他の民族を指導すべき地位にあるのを考える場合、日本の大陸政策の上からも重要なことである。満系の人にはいわせると、人材の不足は日系のことであつて満系ではそうでないというのは、意味深長である。

ところで今満洲国を旅行して私の感じたことは、人材がないといわれるこの国においても地方へ行くと、なかなか立派な日本人がいるということである。彼等の多くは建国当時から或いはそれ以前から地方にいて真剣に民衆のために働き民衆から愛敬されている。彼等の地についた仕事を見ると、ほんとに頭がさがるのである。私は主として学校を見て歩いているが、その感想を率直に述べるならば、概して下級の学校の教員ほど善く、高等の学校の教師ほど駄目なような観がある。そして私のおそれるのは、かように地方にいて真剣に働いている人々の努力が、地方の実情に疎い中央の官吏の一片の命令で台無しにされてしまうようなことがありはしないかということである。実際、その例がなくもないのを聞くのである。

かようなことは満洲国のみでなく日本においてもあるのではあるまいか。中央の人間はもつと



地方の人材に注目し、彼等の仕事を尊重しなければならぬ。私など田舎で生れ田舎で育つた者でありながら、とかく地方を忘れがちであつたことを今更の如く感じるのである。

新体制においては中央の組織に重点をおくという意見が強いらしいが、それは統制の見地から必要であるにしても、地方の人材が真剣に築いてきたものに対して謙遜な態度をもつて臨み、これを命令一つで毀してしまうようなことのないことが望ましいのである。統制時代においても謙遜が徳であることには変りはないのである。

(九月十八日)

## 新体制と青年

新体制にとって青年は重要な意義を有している。革新は或る意味でつねに青年のものであるといい得るからである。青年層を掴み得るか否かが、今出来ようとしている新体制が成功するか否かの分れ目であるときささいい得るであらう。

満洲国に来て気が好いことは、その官吏の多くが若いことだ。若いだけに物わかりが速く、万事てきぱきしている。尤も満洲閣下というような言葉が出来るところをみると、貫禄の足

りない高官もいるのであろう。けれどもまた貫禄というものが年齢に関係しないことも、満洲国においてわかるのである。最初から新体制で出発したこの国の発展には青年の力が必要であつた。

むろん単なる年齢が問題ではない。世の中には青年らしくない青年があり、年をとつても青年らしい人間もいる。青年とは一つの世代を意味するとすれば、世代を形成するのは単なる年齢でなく、その年齢の人間が経験する社会的、文化的環境がそれに大きな関係を有するのである。

先達て私は海<sup>ハイラル</sup>拉爾から二百キロ許り奥のナラムトという白系露人の部落を見に行つたが、そのとき旗公署の人の話に、彼等のうち中堅層であるべき廿代の青年がいちばん駄目だということであつた。というのは、これらの青年は親たちのようにボルシェヴィキから実際に迫害された経験がないためにそれに対する敵愾心も乏しく、また彼等は親たちが逃げ廻っている間に大きくなつたために教育を受けておらず、教育がないために宣伝に乗り易いというのである。満洲国としては、彼等よりも現在国民学校で教育されつつある少年たちに期待しなければならぬという意見であつた。

この例からも知られる如く、青年といつても単に年齢が問題ではなく、その具体的な

歴史的性格が問題であるのである。いま日本の新体制において青年が重要な意義を有することは、疑いなくけれども、その青年層の現実の歴史的性格が如何なるものであるかを理解することは、彼等に対する指導にとつて極めて大切なことでなければならぬ。容易に煽動に乗る者が最も頼もしい青年であるとはいいい得ないであろう。他方如何なる煽動にも動かないような青年にも期待することはできないであろう。

新体制は青年の眞の指導者を見出さなければならぬ。それは今日の若い世代の歴史的現実を深く理解している人の間に見出される。そしてそれは誰よりも青年自身であるであろう。

(九月二十五日)

## コラム『東京だより』他

コラム『東京だより』：『大新京日報』1938.7～12

- 日滿支一般 ○ 文化発達の契機 ○ 自然と文化 ○ 大陸科学の建設 ○ 創造への転機 ○ 大陸的日本人 ○
- 再教育の必要 ○ 知性人の態度 ○ 日本主義の発展 ○ 文化の闘争 ○ 婦人の進出 ○ 日滿官吏の交流 ○
- 日本の場合 ○ 「廿世紀の思想」 ○

コラム『窓外』：『新愛知』夕刊1938.4～1941.10

- 報道と理論 ○ 法律の限界 ○ 国策の意義 ○ 思想の前提 ○ 平素の用意 ○ 人的資材活用 ○ 思想と制度 ○ 批評と創造 ○ 感情の処理 ○ 四箇年の経験 ○ 文化の力 ○

コラム『一朝一夕』：『名古屋新聞』夕刊1941.5～10

- 重点主義と均衡 ○ 統制下の個人 ○ 府県ブロックの反省 ○ 時間の新体制 ○ 流言蜚語の払拭 ○ 文化上の国土計画 ○ 生活正義の実現 ○ 日本人の複雑性 ○ 神経戦への用意 ○ 戦争の見方 ○

コラム『大池小波』：『都新聞』1941.11～1942.1

- 悲劇の問題 ○ 學術の協同と綜合 ○

コラム『銃眼』

- 日本とドイツ精神 ○ 教師の小吏根性 ○

## コラム『東京だより』

### 日満支一体

日満支一体ということが新しい日本の合言葉となつてゐる。それは今日においては最早や単なる空想でなく、却つて一つの現実を現している。それが単なる空想であつた間は日満支一体ということはただ美しい観念であることが出来た。然るにそれが一つの現実になつた今日、それは極めて深刻な意味における現実になつたのである。なぜなら、それは最も現実的な「問題」として現実になつたのであるから。

日本、満洲、支那は、経済上のブロックとして一体をなすというのみではない。それ等は思想及び文化方面においても相互に關係し、相互に作用し合い、今や一体として考察されねばならなくなつてゐる。そしてこの方面においては特に明らかに、いわゆる東洋の統一は今日まさに「問題」の統一を意味し、統一的に解決されねばならぬ問題として与えられてゐるのである。

試みに民族主義の問題をとつて見よう。日本の国内においては盛んに民族主義が唱えられてい  
る。然るにもし日本が民族主義をもつて支那における文化工作の原理にしようとするば、たちま忽ち矛  
盾に出会わざるを得ないであろう。なぜなら支那における三民主義はまさに民族主義を標榜して  
いるのであつて、日本と支那とが共に民族主義を持して動かない限り両国は永久に相争うのほか  
ないからである。日滿支一体の思想は単なる民族主義を超えた原理によつて東洋に新しい秩序が  
建設されることを要求している。支那事変は必然的に日本国内の思想に影響し、近年流行の民族  
主義思想の限界を認識させずには措かないであろう。すでに満洲国においては五族協和を理想と  
している。

尤も、日滿支一体の思想はまた抽象的な普遍主義であつてはならぬ。特殊性を無視して劃一的  
にやつてゆくということは日本人の潔癖といわれるものなどに関係して実践的にも陥り易い危険  
である。それぞれの民族の特殊性を尊重しつつ、それらを超えて統一する高い原理を把持するこ  
とが問題なのである。

日滿支の統一は現在の段階においては最も現実的な問題の統一であるということが常に記憶さ  
れねばならぬ。支那事変という大きな問題は日本に国内改革という大きな問題を同時に課してい

る。国内改革の問題はこの事変によつて消滅するものでもなければ、延期され得るものでもなく、却つて全く逆である。外地は内地の革新の推進力となるのであり、またならねばならぬ。国内改革なくして支那事変の如何なる解決も可能でない。しかも国内改革の指導精神は、一般的原理としては、支那における建設的工作の指導精神と同一でなければならぬ。対支文化工作の原則を探究するということは国内改革の原則を探究するということと同じである。両者を何か全く別のことであるかのように考えることは、抽象的な普遍主義が間違つている以上に間違つており、今日最も危険なことであると云わねばならぬ。

(一九三八年七月十八日)

### 文化発達の契機

一国の文化の発達にとつて他国の文化の影響が重要な関係を有することは歴史の示す事実である。孤立しては何物も発達し得ない。日本の文化も、古くは支那及びインドの文化から、近くは西洋の文化から影響されて発達して来たのである。

しかるに日本の場合特徴的なことは、日本と諸外国との間における文化の影響の關係が從來殆

ど全く一方的であつて、相互的でなかつたということである。即ちこれまで日本の文化は、東洋の範圍内においても、支那やインドの文化から影響されたが、逆に日本の文化がインドはもとより支那の文化に同様に影響したということはなかつた。影響は一方的であつて相互的でなく、真の意味における文化の交流が存しなかつたのである。そこに東洋文化の統一が西歐文化の統一と同じような意味において存在しなかつた一つの理由が見出される。

従来の歴史において日本が殆ど一方的に外国の文化から影響されるに止まつていたということは、地理的に、政治的に、種々の原因があるであらう。それは文化そのものの上から見ても、日本の文化に特殊な性格を与えている。日本の文化の重要な特色と考えられる純粹性ということも恐らくそれに基づくところが多い。日本の文化は純粹であつても型が小さいと云われるが、この後の点もまたそれに基づいている。

日本の文化が従来の制限を破つて大きなものに發展するためには、それが国外へ出てゆくことが必要である。外国の文化を自己のうちに流れ込ませて蒸溜するに止まらないで、逆に自己が外国の文化の中へ入つて戦うことが必要である。影響が一方的に終らないで真の意味における交流にまで發展する事が必要である。



そして今、日本はまさにその時期に達したのである。満洲や支那における日本の政治的進出は日本の文化が大陸へ伸びる機会を作ったのであるが、このことは文化そのものの立場から見ても、日本の文化に質的な変化と発展の機会となるのでなければならぬ。

日本の文化を大陸へ伸ばすに当って、元のままの形でこれを大陸へ移そうとしても成功しないであろう。日本の文化自身がその際大陸に適應するように質的な変化を遂げねばならず、しかもこの変化が質的な向上発展であることが要求されているのである。日本の文化が今日逆に支那の文化に影響を及ぼすようになって茲に東洋文化の統一が可能になるのであるが、そのことは決して単に所謂日本的なものの量的な空間的な拡大ということに止まり得るものでなく、却って質的に時間的に変化し発展した新しい日本文化の創造によつて初めて可能になるのである。大陸への進出は日本の文化にとつて重大な試煉であり、しかもそれは根本において新しい文化の創造の問題として過去の如何なる日本人でもなく実に我々の世代の責任に属するのである。(七月二十日)

## 自然と文化

さきほど関東に水害があつてから間もなく関西も同じように水禍に見舞われた。この時局にこの不幸を見たのはまことに遺憾なことである。自然の前に人間が如何に無力であるかが今更痛感されるのである。

しかし自然に屈服することに甘んずるのは文明人の恥辱である。文明とは人間による自然の征服と利用を意味している。人間は自然の環境に適応しつつ生活するのであるが、この適応は人間が自主的に自然に働き掛けてこれを变化するところに成立するものにして初めて文化と云われ得る。

この間も或る北海道の人が話していたことであるが、函館は天然の良港だというので港湾工事がとかく軽視され、そのために函館の發達が遅れてきた。このように日本人には自然に頼り過ぎる傾向がある。それは先般の水害においても感じられることである。自然に恵まれているといつても、自然に頼り過ぎると、却つて文化の發達は阻害されることになる。

自然に頼り過ぎるといふことは、広く考えると、日本人の自然觀や人生觀とも深い關係があるように思われる。由来日本人は自然と人間とを融合的に考えてきた。西洋人が自然と人間とを鋭く対立させ人間中心主義的な考え方をもつているに反して、東洋人は自然と人間とを調和的に見

る独特の自然主義的な考え方をもっている。

自然と人間とを対立的に見る西洋人は人間を抽象化することによって却つて唯物主義の弊に陥つた。しかしそれだけまた彼等は自然を支配するための科学や技術を発達させ、自然の脅威に対して人間生活を防衛する事に努力したのである。これに反して東洋人は自然と人間とを調和的に考えることによつて独特の精神主義を把持しているのであるが、しかしまたそのために自然に対する科学や技術において遅れて来たのである。

自然と人間との関係についての東洋的な具体的な見方はどこまでも生かして行かなければならぬ。しかし同時に近代の科学的な技術によつて自然の災害から人間生活を防衛するように心掛けることが大切である。人間は技術によつて自然を征服すると普通にいわれているが、技術の自然に対する関係は単なる征服ではないのである。自然はこれに服従するのでなければ征服されない、というのはベーコンの有名な言葉である。自然の征服は同時に自然への服従であり、自然の支配は同時に自然との協力である。ただ自然を搾取することは自然を利用する最上の方法ではない。自然に対する人間の技術は自然の支配を通じて自然への一層高い適応、一層高い調和を求めることである。技術は自然をしてその本性を發揮せしめ、自己を完成せしめる。しかもそれは人

間の本性に属する理性を發揮することによって可能にせられる。もし技術の発達が自然や人間を荒廢させることがあるとすれば、それは技術そのものの罪でなくて社会制度の罪である。

(七月二十一日)

## 大陸科学の建設

支那事変もすでに一年を過ぎた。事変はいわゆる第三期に入り、板垣陸相の云つたように「長期建設」が問題になっている。

この一年の間に日本においては支那に関する書物が多数に出版された。その中には翻訳もあり、旧刊の覆刻されたものもあるが、新たに書かれたものも尠くない。私はその方面の専門家ではないが、近来努めてそれらの書物に目を通し、更に若干の外国書をも読んで見た。その際私の感じたことは、これまで日本の支那通と呼ばれる人々の物の見方が非科学的なことである。それらの本は読み物としては相当に面白く、また種々様々の知識を与えてくれはするが全体として科学的に出来ていないようである。

中には科学的に書かれていると思われれるものもある。しかしそれらは如何にも獨創性に乏しいように感じられる。それらは根本的な見方において、或いは英米の、或いはソビエトの、或いはフランスの、支那研究に依存している。かくの如く獨創性に乏しいということは、単に私の感じであるだけでなく、専門の支那研究家に尋ねてみても、確にそうであるとのことである。支那問題についてさえ我々は遺憾ながら外国人の研究から最も多く学び得るという状態である。

日本は今大陸において未曾有の行動を起している。この行動はアジアに新しい秩序を建設すべき行動だとせられている。日本の行動はかくの如く世界史的使命を有するものとして全く獨創的な行動である。獨創的な行動には獨創的な認識が伴わねばならぬ。獨創的な認識なしに眞に獨創的な行動を成就することはできない。しかるに若し日本にいつまでも獨創的な支那認識が欠けているとしたならば如何であろうか。

獨創的な認識といつても、もとより単に主觀的なものであることを許されない。認識は認識として科学性を持たねばならぬ。単に主觀的な意見ならば、我々はあるあるほど持っているのである。今度の事変以来ひとつの著しい傾向は、新聞雑誌に現れる支那論の多くが政論的になったことであり、これは当然のことであるにしても、そのような政論乃至政策論の極めて陥り易い欠

点は、それが主観的なものとなり、自己の希望を現実とすりかえるということである。我々の必要とするのは客観的な科学的な支那研究である。

例えばイギリスがそのインド経営にあたって如何に周到なインド研究を遂げたかを我々は想起する。もとよりイギリスのインドに対する場合、それは植民地侵略であつた。日本は支那に対して何等侵略の意図を有するものでなく、共に携えて新しい秩序を東洋に建設しようとしているのである。この行動の獨創性は獨創的な認識を必要とするのであるが、それが認識である限り科学でなければならぬことは云うまでもない。

日本はいま新しい大陸科学を必要としている。それは少数の人間の力によつて建設され得るものでなく、多数の人間の協力を要求している。種々の点においてこの研究に便宜を有する在滿の諸君がこの新しい大陸科学の建設に関心を持たれることが切望されるのである。それは諸君の特別の義務でさえある。

(七月三十日)

## 創造への転機

国民の生活様式の変化が次第に目につくようになってきた。それは物資統制や物資節約の結果であり、また一面物価騰貴の影響でもある。戦争の作用が国民生活の内部に浸透し始めたのである。

この場合、吾々は戦争の作用に対してただ消極的に我慢することだけで満足すべきでない。この機会を捉えて吾々は進んで生活の合理化を計らなければならない。どんな人の生活にも、よく考えて見れば無駄のあるものである。この無駄が、吾々の生活にとつて負担となり、吾々の活動の能率を低下させていることが多い。節約が合理的に行われて全般の生活の合理化となる場合、吾々の活動の能率は増加することになる。節約を単に消極的な意味のものに止めておかないで、新しい合理的な生活様式の創造にまで発展させるようにしなければならぬ。

無駄があるところに美しさがあると云われるかも知れない。合理化は生活から美を奪つてしまふように見える。しかしながら贅沢を美と考えるのはブルジョワ的な観念であつて、このような観念こそ否定されねばならぬものである。新しい芸術が合理的なものの美しさを見出そうとしているように、新しい生活は合理的なものの中に美を発見しなければならぬ。それはもちろん単なる節約によつてできることでなく、節約が新しい生活様式の創造への転機になることによつ

て初めて可能である。

到るところ創造が要求されている。物資が欠乏したからといって、原始的な生活に還ることが問題であるのではない。もちろん文明といわれるものの中には余りに不自然で健全な生活を書いているものもあるのであつて、かような場合には原始的なもの、自然的なものに還るのが好いことである。しかし一層重要なことは、戦争のために欠乏した物資に代り得るものを新たに作り出すということである。さもなければ生活の貧困化が生ずるのみであつて、合理化は不可能であり、生活における新しい美を創造するということなど思いも及ばぬであらう。物資の欠乏も単なる「代用品」以上の新しい物資の発見と発明への契機となることが要求されているのである。

問題は物資にのみ限られていない。戦争の必要とする種々なる統制は、新しい経済秩序の、新しい社会秩序の創造への転機とならなければならぬ。事変さえ済めば元の秩序に還るかのように思つて、事変の間だけ何とか我慢しておれば好いと考えるのは、事実としても間違つており、理想とすることもできない。今度の事変の眞の解決の道は「長期建設」にあると云われている。而しかもこの場合建設とは古い秩序をそのまま持つてくることであることができぬ。建設はただ革新によつてのみ、即ち新しい秩序の創造によつてのみ可能であり、これによつてのみこの事変が負わ



された新アジアの建設という使命は達せられるのである。

戦争が破壊的であることは否定できない。破壊を創造への転機となし得るか否かによつて戦争の意義は定まるのであり、そこに吾々の責任が存しているのである。

(七月三十一日)

## 大陸的日本人

社会の転換期には新しいタイプの人間が生れねばならないし、また生れるであろう。変化する社会は新しいタイプの人間を必要とするし、また変化する社会の中からは新しいタイプの人間が生れて来るものである。

人間タイプの創造は文学の仕事である。過去の偉大な文学作品はつねに人間の新しいタイプを創造してきた。しかるにこの革新の叫ばれる時代において、日本の文学は果たして要求される新しい人間のタイプを創造しているであろうか。まさにこの点から見て、現在の文学はなお甚だ貧困であると云わねばならぬ。人間タイプの創造はまた哲学の仕事でもある。哲学もまたこの時代の求めている人間理想を構成しなければならぬ。今日いわゆる人間学は、元来、この社会の転

換期において崩壊しつつある旧い人間タイプに対して新しい人間理想を確立すべき任務を有するものである。しかるに我が国の講壇哲学の手にかかると、かような人間学も時代の要求とは何等関わりのないものにされてしまう。

新しいタイプの人間の創造はしかし単に文学や哲学のみの仕事ではない。それは実にこの転換期の社会に生きる凡ての人々の生活的な課題である。その時代に対して積極的に働き掛けようとする者は、自己の人間を变革し、自己を新しい人間として主体的に確立しなければならぬ。現代日本が必要とするのは大陸的人間だと云われている。しかし単なる大陸的人間が要求されているのではない。新しいタイプの大陸的人間が要求されているのである。

従来とても大陸に居住する日本人のすべてが大陸的人間であつたわけではない。彼等の中にはいわゆる出稼ぎ根性の人間が尠くなかつた。満洲の如き土地へ行くことを植民地へ出稼ぎにゆくことであるかのように考える者が多かつた。かような人間が大陸的でないことは云うまでもない。かような考え方は満洲国の成立以来清算さるべき筈であり、そこに満洲国成立の一つの意義があるのである。

従来の大陸的日本人にはその感情なり意志なりにおいてなかなか立派な人間があつた。ただ惜

いことには、彼等の多くはその知性において局限されており、科学や思想、その他文化的なものにおいて欠陥があつたようである。新しいタイプの大陸的人間は旧いタイプの大陸的人間の持つている立派なものを継がねばならぬことは勿論であるが、なおその上に特にその知性においてすぐれた人でなければならぬ。ともすれば失われ易い文化的意欲を強く持ち続け、つとめて思想的なものに接触して摂取することが肝要である。そして何よりも大切なことは、東洋における日本の世界史的使命についてつねに理論的な自覚を持つということである。

新しい建設に向つて進みつつある満洲国においてはすでに内地では見られないような新しいタイプの日本人が作られていると聞いて、我々は頼もしく思っている。来るべき新しい日本人のモデルになり得るような人間がそこから生れてくるのは望ましいことである。

(八月二日)

## 再教育の必要

この頃各方面で再教育の必要が唱えられている。これは今に始まることでなく、既に事変前においていわゆる革新の声が高まると共に官吏の再教育、教員の再教育などが叫ばれたことがある。

官吏や教員の再教育がどれほど真剣に考えられ、どれほど一般的に行われたかは疑問であるが、この頃の再教育論は多くの現実性をもっているようである。

再教育の必要は種々の社会的事情から生じている。傷痍軍人の優遇は今後の日本において大きな問題であるが、傷痍軍人に適する新しい職業のための再教育が要求されている。これは国家の事業としてぜひやらねばならぬことである。次に綿、皮革、金属等に対する統制の結果生じた失業者の転業の問題がある。その転業が果たしてどの程度に可能であるかは現在大きな問題であるが、いずれにしても転業の場合には再教育の必要が生じてくる。

更に最近実施されようとしているものに、いわゆる青白きインテリの再教育がある。東京市社会局では今度失業インテリゲンチヤのために職業輔導所を開設することになった。それは知識階級の失業者を集めて精神的にも技術的にも再教育を行い「国策型」に叩き直して満洲、北支、中支に送ろうというのである。これはまことに結構なことである。従来満洲や支那は内地の失業者の「落ちてゆく」処であるかのように考えられる傾向がないでなかった。

しかし今日では満洲や支那はもはや単に日本の過剰人口のはげ場ではない。「植民」という言葉さえ既に不適當になつてゐる。従つて今日、内地失業のインテリゲンチヤをそこへ送るにあた

つても、そのまま送るのでなく、再教育を行つて真に大陸の開拓者の資格を有する人間に鍛え直して送らなければならぬ。日本の大陸居住者から「落武者」の意識を駆逐し、新しい希望と抱負とを代りに注入することが大切である。

この再教育において技術は甚だ重要な意味をもっている。日本は最も優秀な技術を大陸へ持ち込まなければならぬ。これはつねに記憶すべきことである。イデオロギーだけを問題にして、ただ気焰を揚げているというのでは困るのである。イデオロギーよりも技術が先であることに注意しなければならぬ。もとより思想教育が重要でないというのではない。しかし思想のことにについては、その問題の困難を理解しないで、余りに簡単に考えることは却つて弊害を生ずる。何よりも忘れてならぬことは特にいわゆる「大陸向き」の思想というが如きものの存在しないことである。満洲や支那へ持ち込むべき思想は内地においても教育の必要がある思想でなければならぬ。

従つて思想上の再教育をいうならば、それは単に新に大陸へ行く人々のみでなく、現に大陸で働いている人々にも、また内地で働いている人々にも必要である。この思想、言い換えるとアジアに新しい秩序を齎すべき思想は如何なるものであろうか。一般的なことは分つていても、これ

を体系化するの容易なことではない。思想の問題についてはその困難を正しく自覚して、新しい探求の精神を活潑にすることが大切である。それが独断の傾向の流行している今日、凡ての人々にとって必要な思想上の再教育の第一の仕事である。

(八月二十二日)

### 知性人の態度

物を書くことが次第に難しくなってきたが、いつたいこの時代に我々はどのような心構えをもてば好いのか、と私は屢々質問されます。これに対する私の答えは簡単です。お互いに支那人に笑われないような物を書くのではないかと私はいつも答えます。

それはまた私が現在他の人の文章を評価する基準でもあるのです。それは簡単な基準ではありませんが、しかし近來新聞雑誌等に現れる文章の中には、支那人がこれを読めば軽蔑されそうなのが尠くないように思われます。まことに困ったことです。

事変前には非常に多くの支那人が我々の書くものを読んでいました。現在では減つたに相違ありませんが、それでもいくらかは読まれていることでしょうし、そしてその場合にはきつと以前

よりも注意深く読まれていることであろうと思います。否、そのことに関わりなく我々はいつでも支那人から軽蔑されないような物を書くことを心掛けねばなりません。

支那の読者を念頭において物を書くなどと云えば、我々を叱る愛国者もあることであろうと思います。けれども愛国心がこのような仕方でのみ現れるのは善いことではありません。今度の事變の目的は日支の間に究極的な親善の關係を確立することにある筈です。そしてこの事變の唯一の解決の道は「長期建設」にあるとも云われています。我々が協力すべき、また協力し得ることは実にこの長期建設の方面であつて、それには差当り支那人から軽蔑されないようにするという心構えが大切です。我々が日本の立場に立つて物をいうのはもとより当然のことですが、しかしそれは支那人を納得させ得るような議論でなければなりません。支那人に笑われるような物を書くことは決して「国策の線に沿う」所以ではありません。しかるに国策の線に沿うと称する人々が支那人から軽蔑されそうな文章を平気で書いてるのはどうしたことでしょう。

といった日本の著述家は読者を念頭において物を書かない風があるとされています。そのような態度が彼等を独善的にするのです。それは著述における官僚主義とも呼ぶことが出来るでしょう。読者を念頭において物を書く場合にも、これまでその読者は日本人だけに限られていまし

た。そのことが日本人の思想や芸術を狭いもの、小さいものにしていたということがあつたともいえるでしょう。しかし今後我々は少なくとも支那人を念頭において仕事をするようにしてゆかねばならぬと思います。それは日本文化の発展にとつて大切なことです。

支那人から軽蔑されないようにするという心構えは、単に物を書く上だけでなく、我々のすべての行為にとつて大切なことであります。荒木文相は「世界的日本人」になれと云いましたが、支那人をチャンコロ扱にしているようでは到底世界的日本人になることができません。他人を軽蔑することは自分を軽蔑することです。世界的日本人となるためには先ず支那人に笑われないようにしなければなりません。支那人をほんとの意味で愛することを学ぶのは、従来日本人の悪風とされている西洋崇拜を打破する上においても役立ち得ることであると思います。

(八月二十五日)

## 日本主義の発展

日本主義といわれる思想にとつて今日飛躍的な発展が必要になつてゐる。いつたい日本主義は



支那事變の前に現れたものであるが、すべての思想はその現れた当時の事情に制約されるものであるとすれば、支那事變と共に甚だしく事情の變つた今日、日本主義の思想にとつてもこれに相應する發展がなければならぬ筈である。

尤も或る意味では日本主義は今日においてその必要を増してきたとも云えるであらう。即ち事變の進行は我が国民の思想的統一が益々鞏固にされることを要求しているのであるが、その目的にはさしあたり日本主義が最も適切な思想であるように思われる。しかしひとたび対支工作という問題を考えるならば、従来のような日本主義では不十分であるように思われるのである。

この場合、日本の国内は日本主義でゆき、支那に対しては何か別の思想でゆくというような考え方も存在するのであるが、それは間違っている。今度の事變の意義は、思想の問題についてもかように二元的に考えることが不可能になつたところにあるのであつて、日滿支一体といわれる意味もそこになければならぬ。

日本主義はこれまで日本固有のものを強調することに努めてきた。そのことは従来の事情においては意味のないことではなかつたにしても、支那事變と共に事情は大いに變化してきた。日本固有のものを求めようとすれば勢い復古主義にならざるを得ない。なぜなら現代の日本の文化は

實質的に西洋の影響を著しく受けているからである。しかるにそのような復古主義は現在大陸に發展しようとする日本の進歩的な、乃至進取的な行動に対して矛盾を生じてくるであろう。

今日支那における思想工作として最も困難な点は支那の民族主義を如何にするかということである。これは現に中支などで思想工作に實際に従事している人々が語っていることである。支那の民族主義は既に事變の前から盛んであり、三民主義の中でもその民族主義の思想が特に力説されてきたのであるが、この傾向は事變と共に益々強化されている。事變がそのことを必然的ならしめているのである。この場合に日本主義がまた従来のように民族主義を力説しているのでは、日支提携は困難であろう。日本主義は単なる民族主義を超えたものにまで發展するのしなければ、今日の思想であり得ない。

日本とドイツとは事情が異なっている。ドイツの場合には国外に多数のドイツ人が土着的に存在しているから、民族の統一を唱えることはそれら国外のドイツ人に呼び掛けることになり、大ドイツの發展に役立ち得るにしても、日本の場合には民族主義をもつて呼び掛け得る人間を支那において有するわけではない。この差異に注意することが肝要である。

支那事變は一方日本の国内においては民族主義の益々強調せらるべき理由を作り出すと共に、

他方支那に対しては単なる民族主義に止まり得ない理由を作り出すに至った。この矛盾を如何に解決するかということに日本主義の自己止揚による自己発展の重要な契機が与えられているのである。

(九月二十八日)

## 文化の闘争

支那の文化には蠱惑性<sup>こわく</sup>とでもいうべきものがあるようである。永く支那に住んだ人は皆その不思議な魅力について語っている。支那の文化には人の心を蕩<sup>うた</sup>けさせ溺<sup>な</sup>れさせるような力があるようである。昔から度々他の民族の侵入を受けながら、それらの征服者を却<sup>かえ</sup>って自分に同化してしまつたといわれるのも、支那文化の有するそのような力に依るのである。これは今日本人の注意を要することである。

今後日本の文化は支那の文化と闘つてゆかねばならぬ。武力による戦争が終熄した後においても文化による闘争があるのである。この闘争は永い間継続するものであつて、この闘争において敗北するようなことがあれば武力の戦争における勝利も結局その意義を失うことになる。文化上

の闘争は平和な手段によつて行われるのであるが、それが闘争であることにおいては変りがない。支那の文化がもつている蠱惑性に対して日本の文化は如何なる力をもつて戦うべきであらうか。知性の力に依るのほかないと私は考える。

いつたい海に接することの多い国の文化は知的なところが多いように思われる。イギリスの文化とロシアの文化、フランスの文化とドイツの文化というように比較してみても、そのことが知られるように思う。西洋の知的文化が地中海の沿岸に初めて現れたということも偶然でない。そして日本の文化にはギリシアの文化に似た知的なところがあり、また特に支那の文化に対する日本の文化の特色はその知的なところにあると思われる。このごろでは日本においても非合理主義が盛んに唱えられているが、それは西洋思想の影響に依るのであつて、日本人は元來知的な民族である。

文化の闘争は文化の発展の契機になることができる。ギリシア人があのように立派な文化を作つたのは、ギリシア民族の優秀性にも基づくであらうが、それが当時の地中海沿岸に存在した種々の文化と闘いつつ益々自己の知的な性質を発達させていったためではないかと思う。實際、文化の闘争はそのうちにおける知性の発達に役立つものである。狭い範囲の人間だけなら、また同質

的な人間だけなら、氣分的に理解し合うこともできるのであるが、広い範囲の人間、異質的な人間に対して自分の力を示すためには知性の力、論理の力に依らねばならない。日本人は直観的であつて論理的でないと云われるけれども知性と直観、直観と論理を抽象的に分離することは間違つてゐる。ギリシア人においては知性も理論も直観的なものであつたものである。

今後日本の文化が支那の文化と闘つてゆくためには日本の文化の知的な性質が深く反省されなければならぬ。従来この点についての反省が欠けており、特に最近の非合理主義的傾向がこの点を益々曖昧にしているのは好くない。また日本の文化は支那の文化に対する闘争を自分の知的な要素の発展の契機にしてゆかねばならぬ。そしてかようにして東洋に知的な文化が発達することは支那の文化の今後の発展にとつても好い影響を与えることになるのである。(十月六日)

## 婦人の進出

支那事変が始まつてから現れた種々の社会的変化のうち著しいものの一つは婦人の進出である。この傾向は今後恐らく更に増大してゆくであろう。歐洲大戦はヨーロッパにおける婦人の社

会的進出に一時期を劃したと云われているが、現在我が国においても同様の事実が見られ、そしてそれは事変後の社会に重要な変化をもたらすに至るであろう。

かような婦人の進出にも種々のものがある。出征軍人の歓送、その家族の慰問等、まず直接に事変に関係したものがあつた。それらの誰の眼にも付く事実のほかに、今はあまり注意されていないが事変後においてその重大性が明瞭に認められてくるであろうと思われるような、職業と実生活とに關係した無数の事実がある。またいわゆる「大陸の花嫁」の如き婦人の滿洲への進出も今後益々重要な問題になつてくるであらう。

それらのことと共に、ここに一つ注意したいのは北京生活学校のことである。それは自由学園の女子卒業生によつて経営され、支那の若い娘を集めて日常生活に必要な知識と訓練とを与えているのであるが、この種の婦人の大陸への進出はこの頃の文士の漢口従軍にも決して劣らない意味をもつてゐる。それは小規模のものであるにしても、対支文化工作全般に対して種々の教訓を合んでゐるように思われる。

伝えられるところによると北京の生活学校はなお危険のある地域において活動してゐるとのことである。かように勇敢に立ち働くことができるのは、支那人を信頼してゐるからであると云え

るのであろう。實際、この支那人に対する信頼がすべての文化工作にとって前提でなければならぬ。そして支那人に信頼を持つためには彼等の好いところを理解することが必要であり、チャンネル式支那人観が訂正されなければならない。支那人を信頼することなしには、新しい東亜の建設という今次の事変の大きな目的は達成されないのである。

対支文化工作といつても、生活の問題が基礎である。この点において北京生活学校が支那人の日常生活を文化的に向上させることに努めているのは適切であると思う。対支文化工作が問題にされる場合、思想のことが喧しくいわれ過ぎるのが常である。思想の問題はもとより極めて重要ではあるが、ただそのことのみ喧しくいつて生活の問題を忘れるならば全く抽象的なものになってしまう。殊に支那人のように「生活派」とでも云い得るような人生観世界観をもっている民族に対しては、その点に注意することが大切である。対支文化工作の第一の問題は支那人の生活を善くしてやることでなければならぬ。文化と生活とを分離しないで生活即ち文化というように考えることが古来東洋の特色であるのであるが、近年思想問題が喧しくなつてくると共に、日本主義とか東洋精神とかという人々の間において却つて思想を生活から抽象して考えるようなことが生じてはいはないか、注意しなければならぬ。

北京生活学校が自分の力で活動しているのは全く組織の力である。婦人も組織されるならば社会的な力になることができる。北京生活学校は特に満洲にいる日本婦人の活動に対して種々の示唆を与えるであろうと思う。

(十月七日)

## 日満官吏の交流

このごろ内地においては各省官吏の交流ということが問題になつてゐる。そこには確に正しい思想があるであろう。今日の政治に必要なのは綜合性でありまた統一性である。しかも日本の従来の政治に最も欠けていたのはまさにこのものであつた。政治の綜合性と統一性との実現されるためには官吏が綜合的な知識と經驗とを有することが大切であり、単に自分の省の立場にのみ局限されず全体的な見地から必要な仕事が決まされ遂行されるようにならねばならぬ。それには各省官吏の交流は適切な方法であるといえるであろう。これまで予算の分捕りなどに見られたような各省の割拠主義が矯正されなければならぬ。

現代は或る意味において綜合の時代と称することができる。独裁政治にはもちろん種々の弊害



があるけれども、それは従来の自由主義の政治が陥っていた割拠主義を破つて政治の綜合性と統一性を實現し得るところに一つの意義を有するであろう。ひとり政治においてのみでなく、現代文化のあらゆる方面において綜合性と統一性が要求されている。新しい全体主義が必要とせられる理由はそこから考えられるであろう。

しかしながら現在の状態で各省官吏の交流が行われる場合、それは単に人事の融通の便宜のために、官吏の出世主義のために利用される危険がある。そのため一つの仕事に身を入れてやるということがなくなり易い。かような弊害は既に従来も著しく認められたものであるが、各省官吏の交流が行われることによつてその弊害が一層助長されることになり易いのである。その弊害をなくするためには官吏の頭を根本的に改造して掛からねばならぬ。人間の改造なしには制度の改革もほんとは行われないのである。

各省官吏の交流の問題はともかく、我々が實現を希望することは、在滿の日本人官吏と内地の官吏との交流である。これは各省の間に考えなくても、一つの省の内部においても考え得ることである。

日滿官吏の交流が行われるようになり、将来内地において重要な地位に就くべき官吏はぜひ一

度は満洲国で働かねばならぬということになれば、満洲国の側にしても有能な日本人官吏を得ることが極めて容易になるであろう。また主として満洲国で仕事を為すべき官吏も時に東京で働くということになれば文化的に遅れる心配はなくなるであろう。

いわゆる東亜協同体の建設が政治においても、経済においても、文化においても、今日の新しい理念になつてゐる。この理念の実現されるためには日滿支の間あらゆる活潑な交流が行われるようにならなければならない。そして差当り日滿官吏の交流が要求されている。日滿一体の政治が可能になり、日本の政治も満洲国の政治も孤立的、割拠的になることなく、つねに一つの全体的な立場に立つて総合的、統一的に行われるようになるためには、まず日滿官吏の交流が必要であると思う。

(十一月二十四日)

## 日本の場合

東亜の新秩序の建設が今事變の目的として掲げられている。この新秩序は次第に一般に東亜協同体と呼ばれるようになった。かような新秩序の実現されるためには凡てのものが根柢から新し

くならねばならぬのは当然である。

東亜協同体といつても固より東亜の諸民族がたゞいわば合議的に作り得るものではない。その建設において日本民族は指導的な地位に立っている。そのことは単に日本民族の権利であるのではなく、東亜の天地に未曾有の歴史的行動を起した日本民族の義務でもある。しかしながら東亜協同体の建設において指導的であるということと征服的であるということは決して同じではない。もし日本に征服の意図があれば、それは東亜協同体の理念と矛盾するのであつて、日本がみづから進んでかような理念を掲げることが不可能であろう。東亜協同体は云うまでもなく東亜の諸民族の共存共栄を目的としている。

日本の指導のもとに建設される東亜の新秩序には、日本自身も協同的にその中へ入つてゆかねばならぬものである故に、日本の政治も経済も文化もすべてこの東亜協同体という一つの新しい全体の立場から改造されることが要求されている。この新しい全体の見地に立つた国内改革を行わないで、東亜の新秩序を建設することは不可能であり、その建設において日本が指導的であることはできないであろう。東亜協同体の建設に支那の根本的な改造が必要であることは勿論である。しかし同様の改造が日本にとつては必要でないかの如き錯覚に陥らないように十分に

注意することが大切である。

このことは特に日本の文化について考えられねばならぬ。日本の文化が旧来のままに止まる限り東亜協同体の建設は成就されないのである。日本の文化も変化し発展してゆかなければならぬ。日本の保守主義によつては東亜協同体は建設されず、その保守主義はこの際日本の征服主義を意味するように誤解される危険をもっている。偏狭な日本主義を満洲や支那に押しつけるということは窮極において成功し得る可能性がないのみでなく、東亜協同体の精神に反することでもある。

日本には日本独自の文化がなければならぬように、満洲にも満洲独自の文化の発達するのが当然であり、また支那に対しては支那文化の独自性が認められなければならぬ。もとより満洲の文化や支那の文化が日本の文化の刺戟によつて発達するということは望ましいことであり、それによつて日本は指導的地位を占めるのであるが、この関係は文化の場合決して圧制的なものであることができぬ。ただ一色に塗りつぶすことは協同の本質ではないであろう。

東亜の新秩序の建設において指導者であることは日本の責任である。それは日本民族の光栄ある歴史的使命である。しかしそのことが日本の文化上における保守主義や压制主義を意味することにならないように留意することが我々にとつて特に大切である。

(十一月三十日)

## 「廿世紀の思想」

二十世紀の思想とは如何なるものであろうか。それは形式的に云えば「中間の思想」であり、また「第三の秩序」である、と私は考える。二十世紀の思想が中間の思想であり、また第三の秩序であるというのは如何なる意味であらうか。

近代社会は中世のカトリック主義、つまり教會的世界主義を破つて現れた国民主義と共に始まった。しかしこの国民主義は単なる特殊主義であつたのでなく、同時に自己のうちに世界的原理を胚胎していたのである。自由主義、個人主義、合理主義といわれるものがそれであつて、それが近代的世界の普遍的原理である。その普遍性に従つて近代社会の發展の過程において中世の教會的世界主義とは異なる一つの新しい世界主義が現れてきた。この近代的世界主義は諸民族のそれぞれの特殊性を認めないことによつて抽象的なものになつてゐる。否、この世界主義は、恰も個人主義の立場においては社会が抽象的なものであるように、同じ近代の原理の上に立つことによつて世界を抽象的なものにしたのであり、眞の世界主義ではないのである。

現代はまさにこの抽象的な近代的世界主義の破れる時代であるといえるであろう。しかしながら近代的世界主義を破つて新たに現るべきものは最早や単なる民族主義乃至国民主義であり得ない。民族主義とか国民主義とかは却つて中世的世界主義の破れた近代の初めに固有なものであつたのである。現代において民族主義もしくは国民主義の有する意義は近代の抽象的な世界主義に對する否定の契機になることであつて、落付くべきところは最早や民族主義や国民主義であることができぬ。それは勿論いわゆる世界主義でもない。それはいわば民族と世界との中間にあるもの、單なる民族主義でもなく單なる世界主義でもない第三の秩序である。今日東亞協同体というような新しい一つの全体の構想される重要な意義を我々はそこに認めることができるであろう。

東亞協同体の原理は近代的な個人主義や自由主義でなくて全体主義でなければならぬ。けれどもそれは民族を超えて形成される一つの新しい事として、これまでナチス流の全体主義が民族主義であつて非合理主義であつたのに對し、その原理は一層合理的なものであることが必要である。なぜなら民族と民族とを結び得る思想は、一民族の内部においては可能であるような秘教的なものでなくて合理的なものでなければならぬからである。それはローゼンベルクのいわゆる「二十世紀の神話」でなくてまさに「二十世紀の思想」でなければならぬ。二十世紀の思想は單なる合

理主義であり得ないと同様、単なる非合理主義でもなく、却つて第三の秩序のものであることを要求されている。

しかも東亜協同体というような第三の秩序は、近代の国民主義が同時に普遍的原理を胚胎して来たように、同時に自己のうちに新しい世界的原理を含んでいなければならない。さもなければ、それが世界史的意義を有することは不可能であると云わねばならぬ。

(十二月二日)

## コラム『窓外』

## 報道と理論

一時非常な人気であつたニュース映画も、この頃はそれほどでなくなつたようである。写真に制限があるためであるらしい。勿論ニュースに対する大衆の関心がなくなつたわけではなく、反対にこのような時代には出来るだけ多くのニュースを得たいというのが一般の心理である。

非常時においてはニュースに対する関心が大きくなるものであるが、そのために却つて理論的意識が弱くなる惧れがある。個々のニュースに気を取られ過ぎるのである。しかし自分に理論を持つていなければ、ニュースの意味も正確に理解されない筈だ。殊に報道が制限されている場合、この欠陥を補うものは理論である。報道の自由がない時には流言蜚語の如きものも生じ易いのであるが、その場合ニュースに対して判断を行い得るのは理論である。今日のような統制時代においては与えられたニュースに対して自分で更に統制を行つて理解することが必要になつていゝるが、この統制を行い得るものは理論である。



理論は経験に基づいて作られる。ニュースも経験の一形式ではあるが、しかし経験から理論を作るためには、永い間の経験を綜合して考察しなければならぬ。今日の現実を的確に把握しようと思えば、最近十年の歴史を精細に考查することが絶対に必要である。ところが現在、数百年前の日本については喧しく云われているにしても、最近十年の歴史を公平に反省することは忘れられていることが尠くない。

われわれの経験にはとりわけ思想的経験がある。最近十年の間に実に多くの問題、多くの批判が持ち出された。それらの問題や批判を無視して今日如何なる革新的な理論も考えられないであらう。

時代は百八十度転回したという。しかしそれらの問題が全く消滅したのではなく、それらの批判が全く無意味になつたのではない。理論や思想でさえもが単なるニュースの如く取扱われるということが、日本文化の弱点ではないか。

(一九三八年四月二十八日)

## 法律の限界

先般東京で行われたいわゆる学生狩りにひつかかった学生に対して、或る署長は、君たちは三流どころで、一流の不良は決してひつかかりはしない、と云つたという話を聞いた。私はこの言葉を捉えて、警察の無責任を詰なぐろうというのではない、寧ろその正直なことに感心したい位である。

最近物資統制の強化に伴つて経済警察が設けられることになつたが、これも三流どころをいじめることになつて、一流の不良は法律の網を脱するというようなことがないか、注意を要する。尤も、万一かようなことがあるにしても、我々は警察を咎めることはできない。その責めは現在の経済機構そのものにあるのである。

暴利を貪るとか、買溜めに狂奔するとか、物資に関することは法律で取締ることができるとしても、他の方面即ち精神そのものの取締りは法律ではどうすることもできぬ。

しかもこの精神の動員が根本なのであつて、今日買溜めをしたり暴利を貪つたりする不心得な人間が存在するということは、従来の国民精神総動員運動が精神の方面においても実は徹底していなかつたということを示すものである。精神の動員も従来その官僚主義的傾向に相応して法律

i 2月、三日間で三千四百ばかり。

的形式的であつたということがないであらうか。

国民を精神的思想的にほんとに動員するためには、先ず国民に支那事變の意義を極めて具体的に理解させなければならぬ。そして次に事變と閩聯して遂行せられざるを得なくなつてゐる革新の眞の意義について、国民に理解を与えなければならぬ。革新といわれるものが單なる變化でなく、如何にして国民の生活の發展の契機になり得るかが最も具體的に明らかにせられなければならぬ。かようにして国民に新しい希望を持たせることが大切なのであつて、希望さえあれば人間はどんな苦難にも喜んで堪え忍びうるのである。

(七月二十一日)

### 国策の意義

先日或る外交官がこんな話をしてゐた。西洋では他の国を国として攻撃することはやらないで、攻撃する場合にはその国の時の政府或いは特定の政治家を攻撃する、例えばイギリスを攻撃しないでチェンバレン内閣を攻撃する、フランスを攻撃しないで达拉ディエを攻撃するといった風である。

かようにして自分に都合の悪い内閣を倒し、気に入らない政治家を退かせて、その国の政策が転換されることを企てるのである。しかるに日本においてはチェンバレンを攻撃しないでイギリスが全体として悪いかのようにイギリスを攻撃する。これは外交上不利なことである。

もつとも日本も今日では支那に対しては変つてゐる。すなわち日本は支那の民衆を敵にするのではなく蒋介石政権を打倒するのであるといつてゐる。これは外交における一つの進歩と考えることができるであろう、同様の考え方がイギリスその他の国に対してもなされることが望ましいと思う。

ところで右の如く一つの国とその国の時の政府或いは特定の政治家の政策とを区別して考えるということは国内の政治の場合においても必要である。国策というものと或る政治家もしくはその時々々の政府の政策とは区別して考えられねばならぬ。国策というものはその時々々の政府の政策を越えて持続するものであり、すべての国民の信念にまでなつたものでなければならぬ。その時々々の政策は国策を実現するためのものであり、政府の政策が變つても国策は變らないということがあり得る。

この頃国策という言葉が濫用されてはしなないであらうか。政府の政策が何でも国策と呼ばれ、

従つて神聖化され、これを批評することはすべて国策に反することであるかのように考えられる傾向がありはしないであろうか。むしろ個々の政策に対して正しい批評を行うことが真に国策に協力する所以であると云われるであろう。政策の批評がなければ国策の確立も、発展も、その真の実現もないと云い得るであろう。

(八月十四日)

## 思想の前提

思想のことが喧しく云われるようになってから既に久しい。それはもちろん正当なことである。現代において思想の問題が重要であることに就いては誰にも異議がないであろう。しかしながら思想のことが喧しく云われれば云われるだけ一層注意しなければならぬのは、思想の前提である。

ここに思想の前提というものには先ず技術がある。技術は思想の力が發揮されるための前提である。どれほど国民が思想的に統一されたにしても、技術、とりわけ経済的な、生産的な技術に欠けたところがあるならば国は危いであろう。そのみでなく、技術は思想を獲得するための前

提である。正しい思想に到達するためには技術が論理的思考に対する訓練や科学的方法に対する習熟が必要である。しかるに今日、思想のことを喧しく云っている人々に果たしてかような技術が十分に具わっているであろうか。

更に思想の前提としての良心の問題がある。思想を語る者は良心的でなければならぬ。何等の良心もなく、ただ時世に従つて或いは右し或いは左する人間は眞の思想家でなく、「職業的思想家」の悪しきものである。

しかるに思想のことが喧しく云われる時代にはこのような「職業的思想家」の輩出する危険が多い。何人も自己の良心に従つて思想に就かねばならぬ。最後まで頼みになるのは良心的な思想である。現在の状態から考えて重要なのは、どのような思想を口にしていくかということよりも、その人が眞に良心的であるかどうかということである。

今後世の中がどのようなようになってゆくかを見透すことは容易でない。しかしどのような時代になるにしても、我々にとつて最後まで力となり得るのは技術と良心とである。技術家はつねに良心的に仕事することを要求されている、非良心的な技術家に対しては自然が直ちに復讐するであろう。しかるに技術よりも遙かに多く良心と結び付いているように見える思想においては却つて、

非良心的に振舞うことが可能であるということに注意しなければならぬ。

(九月十五日)

### 平素の用意

このごろ京都へ行つて私は再び先年の関西の暴風のことを想い起させられた。あるとき大きな樹木がたくさん倒されて町の美観を損じたのであるが、その被害が回復されていないのである。

都ホテルのヴェランダから眺めた景色は相変らず美しかったが、それでも大きな樹木が少なくなつたためにその美のこまやかさが減じ、何となく荒れた感じを受けたのである。樹木は三年や五年で大きくなるものではない。五十年前百年前の人の心尽しが今日の美となるのである。

またこの事変で馬が徴発されて行つたために農村では馬の不足が生じているとのことである。しかも馬は自動車などのように急に作ることができないのであつて、自然の生長を待たねばならぬ。自然は飛躍しないとすれば、平素の用意が肝要である。

しかし自動車などにしても、実は俄に作られるものでなく、長い間の人智の進歩の堆積の産物である。今度の事変のために生じた物資の不足に対して代用品の生産が奨励されているが、代用

品の発明にしても平素から科学が普及し発達しているのでなければ急に出来ないことである。歐洲大戦の頃ドイツにおいては物資欠乏が却つて化学工業の進歩の原因になつたと云われているが、それはもちろん平時からつねに科学が奨励されていたおかげである。自然の生長に飛躍がないように、文化も俄か造りでは出来ないのである。

かようにして今日においても文化が重要な関心事でなければならぬことは明らかである。今は戦争中であるから文化的活動が停顿するのも已むを得ないと云うが如きは、今度の事変が長期建設であるということの真義を解しないものと云わねばならぬ。

この事変が長期建設であるとすれば、現在も平時と同様文化に対する関心の高揚されることが大切である。生活における節約を奨励するのは好い、しかしそのために文化的な意欲まで抑圧してしまうことにならないように注意しなければならぬ。

(十月十五日)

### 人的資材活用

戦時体制下において我が国の経済は金の経済に対して物の経済が重要性を増してきた。しかる



に物資が重要な問題になつてくると、科学や技術の意義が更めて認識されねばならなくなり、ここに科学者とか技術家とかの人的資材の問題が生じてくる。

この時局において人的資材が重要であるのは、もとより科学者や技術家の場合に限られないであらう。政治、経済、文化のあらゆる方面において人的資材の必要が感ぜられているのである。或る者は我が国には人的資材が欠乏しているかのように云う。けれども我々はそうは信じない。我が国に欠けているのは人的資材そのものではなく、却つて人的資材の活用の法である。今日果たして物的資材の活用に熱心であるほど人的資材の活用に対して熱意が示されているであらうか。

人的資材の活用にとつて妨害となつてゐるものに文官任用令がある。文官任用令の改正は人的資材の活用のために要求されている。しかし人的資材の活用は単にそのような制度上の問題であるのみでなく、政治家や官吏のモラルの問題でもある。

ただ型にはまつた人間を求めるのでは人的資材は活用されないであらう。非常時は型破りの人間を必要とする。型破りの人間が必要とされるからこそ非常時なのである。ただ無難な人間を求めるのでは人的資材は活用されないであらう。非凡な人間は無難な人間でないというのが寧ろ普

通である。

由来潔癖は日本人の特性であるといわれているが、その潔癖が政治的に現れる場合特に偏狭になり易い。過去の過失を洗い立てたり、既に転向した者を「擬装転向」ではないかと疑ったりしては、人的資材を無駄にしてしまふばかりである。今日大切なのは、種々の人間を包容して、それぞれの道において活用する雅量である。

人的資材として最も重要であるのは云うまでもなく国民大衆である。国民大衆の力を活用するには国民大衆を信頼しなければならぬのであつて、国民の力を必要としながら国民の力の盛り上つてくるのをひそかに恐れるというような心理があつてはならない。

(一九三九年一月十二日)

## 思想と制度

人間の身に染み込んだ思想はなかなか除き難いものである。それは自分自身には思想として自覚されないような思想であるからだ。それは個人に属するというよりも身分とか職業とか、すべ

て制度と一つになった思想であるからである。

この議會でまた取り上げられた官僚独善ということのうちにも、かように官僚の身に染み込んだ思想がある。それは先般平沼首相の吏道刷新に関する訓示の中にさえ認められ得るものである。即ち官吏は「国民の模範」であるという思想の如きがそれである。

国民の模範であるもの、国民の模範となるべきものは、何も官吏に限らないであろう。国民にとつて模範であるものは到るところ国民の間に、国民の各層、あらゆる職業の人の間にある。我々は、理髮屋のうちにも、洗濯屋のうちにも、我々の模範とすべき人物を見出し得る。そしてまた国民の誰もが国民の模範となるよう努力しなければならぬのである。

それなのに、官吏だけが「国民の模範」であり得るかのやうなのは、官尊民卑の封建的思想を残存せしめているものといわねばならぬ。かようなことでは「総親和」【平沼内閣の標語】は完全であり得ないであろう。吏道の刷新は、官吏は国民の模範であるというやうな意識からでなく、もつとヒューマンな、人道的な気持から出立するのでなければ不可能である。

人間の身に染み込んだ思想、自分自身には思想として自覚されないやうな思想を除くには、ただ頭を変えようとするだけでは駄目で、制度から変えてゆくことが必要である。制度そのものが

一つの思想であり、思想の現れである。吏道の刷新は訓示だけでは出来ないので、官吏制度の改革に依らねばならぬ。

そして問題は官吏にのみ関しない。国民精神総動員といつても、何か精神を注入しようとするだけでは無力であつて、社会の諸制度の改革、国民の再編制を俟つて初めて効果的に行われ得るのである。

(三月十三日)

## 批評と創造

言葉も時代によつて変るものだ。支那事変の影響のもとにいろいろの言葉が新たに流行するようになったが、「創造」という言葉もその一つである。

以前唯物論の流行した時代には、この創造という言葉は観念論に属するもののように見られて嫌悪された。或る時私が「文化の創造」と書いたらそれは創造でなく「生産」だといつて攻撃されたのを覚えてゐる。とにかくその頃は創造という言葉はあまり見られず、流行したのはかえつて「批判」という言葉であつた。

しかるに最近では反対に創造という言葉が流行して、批判とか批評とかは一概に嫌悪されるようになった。そこに時世の変遷を認めることができるであろう。

もちろん今日創造が強調されるのは適切なことであり、必要なことである。しかし批評と創造とを抽象的に分離して、批評を無用と考えることは間違っている。全く無前提なところから物を作ることは不可能である以上、現存するものに対する批評は創造にとつて欠くことができず、創造はつねに批評と結び付かねばならぬ。

もつとも少し注意してみると、この批評嫌悪時代にも一種の批評は、しかも強烈に存在するのである。即ち民衆は自粛、つまり自己批評を要求され、その私生活に至るまで、不断に批評を受けている。ただ反対に、民衆を批評する側は、自己に対する批評を封じ、自己批評に乏しく独善的になつてゐる。

かようにして批評が一方的であることは、単に批評されるのみの民衆の間に虚無的な気持を起させる危険がある。そして虚無的な人々の内部に鬱積するのほかない批評は、非創造的な、ただ批評のための批評となりやすい。他方、自己に対する批評を拒否する独善的な態度においても真の創造は不可能である。批評精神が旺盛であることは社会の健全性を示すもので、批評が一方的

でなく相互的になり、かくして官民相率いて新しい国策を創造することが必要な場合である。批評と創造との関係が全面的に具体的に把握されねばならない。(八月二十二日)

### 感情の処理

浅間丸事件<sup>i</sup>は我が国民の感情を甚だしく刺戟した。法理論はどうであろうと、この事件に憤慨しない者はないであろう。それは国家の威信に関する問題である。

我々は今、あの去年の天津事件当時の国民の反英感情の昂揚を想起するのである。当時の興奮した感情は、その後どうなっていたであろうか。それは適切に正當に処理されてきたであろうか。激昂した感情が鎮まると共に、大多数の者の脳裡から対英問題は消え失せてしまつてはいなかつたであろうか。今日に至るまで継続されている天津会談に対して、人々は当時と同様の関心をもつていないではないか、と恐れられるのである。

我が国民は熱し易く冷め易いといわれている。もしそれが我々の性質であるとすれば、容易に

i 千葉県沖でイギリス軍艦が臨検し、ドイツ人を引致。交渉後、軍籍は乗せないことで合意し、一部は解放。

熱しもしないが容易に冷めもしないイギリス人を相手にするには不適當であるであらう。イギリスに対するには、現に支那事變に処すると同様、何よりも持久力が必要である。支那においては千年が一年である、とイギリスの哲学者バートランド・ラッセルがいつている。支那人は決して急がない、そしてイギリス人も同様である。

個人の生活において感情の処理の仕方が大切であることは誰も知っている。人生論は感情処理の方法論であるといつてもいいくらいである。しかるにこれは個人が自己に対する、また他人に対する場合のみの問題ではない。国民が他の国に対する場合においても、如何に感情を処理するかは重要な問題である。

感情を正しく処理するためには知性が働かねばならぬ。対英問題にしても、一時の興奮にのみ身を委ねることなく、先ず日本の現実を直視し、国際情勢の見透しの上に、東亞新秩序の建設にとつてさしあつての必要の立場から、今の興奮した感情を適切に処理してゆかねばならぬ。ただ徒らに感情的になると却つて自主性を失い、他から利用される危険があるのである。

(一九四〇年二月四日)

## 四箇年の経験

支那事変もやがて四周年になる。その間に我々は実に多くのことを経験してきた。過去の如何なる時代においても、同じ期間にこれほど多くのことを経験したことはないであろう。

四箇年の経験というものは無視し得ない重みをもっている。そこに現在の政治のむつかしさもある。例えば政府で何か言う、或は何かをする、すると国民はすぐにこの四箇年の経験に基づいてこれを判断し、これを評価するようになっていく。それだから政府としても、このように経験を積んできた国民が納得し得るようなこと、過去の経験から考えて合理的なことをやってゆかねばならなくなっているのである。

感情的な興奮は永続するものではない。新しいことも慣れるに従つて刺戟がなくなる。そうして誰かが反省的になる。これは善いことであるが同時に危険なことでもある。いろいろなことを経験して反省的になった者は、どのようなことにも興味がもてなくなり熱中することができなくなる惧れがある。そういうことにならないように深く警戒することが肝要である。

そこで大切なことはこの四箇年の経験を積極的に活かすということである。経験の重みに圧倒



されてしまうと消極的になる。経験に圧倒されないためには、思想とか理論とかいうものを持たねばならぬ。もとより単なる理想論、抽象論が役に立たないことは、これまた四箇年の経験によつて教えられたことであろう。この経験に基づいて、経験の中から思想なり理論なりを引き出してくるということが大切である。経験を活かすものはそのような理論乃至思想であつて、これを基礎にして積極的な活動が可能になる。政府においても過去の経験を十分に検討して、明確で具体的な事変処理の方針を明らかにしなければならぬ。

この四箇年の間に我々は、国内的にも、国際的にもいろいろな変化を経験して来た。しかしそれは単に複雑怪奇などというべきものでなく、そこにやはり一貫して必然的なものが認められると思う。

経験を活かせ！これが支那事変四周年を迎えるに當つて言いたいことである。

(一九四一年六月二十六日)

## 文化の力

高度国防国家の理念は、あらゆるものが国防力の意義を有することを意味するものであろう。一見国防と無関係であるかの如きものもお国防的意義を有するということが、この理念の示すところである。そしてこれはまた近代戦が総力戦であるといわれる理由でもある。

種々の文化のうち科学の如きは国防との関係が明瞭である。近代戦は科学戦として特徴付けられている。高度国防国家の立場から科学の振興が緊要であることはいうまでもない。しかるに文学の如きは従来国防と没交渉のように見られてきたのであるが、それが実は国防力としての意義を有すると考えるのが高度国防国家の思想である。

今日の文化政策の立場が国防力としての文化に存するのは当然である。ところで国防力としての文化を考える場合、注意すべきことは、例えば「国防文学」と名付けられる種類のもののみが国防的意義を有するのではないということである。むしろ国防と無関係であるかのように見える種類の文学もお国防力として重要であることを理解することが、高度国防国家の理念において要求せられるのである。

文学は精神の糧である。それは人間の心に慰めや、潤いや、落ち着きを与える。このような精神の糧は戦時の国民生活においても必要であり、それによって国民は物質的生活における欠乏に

堪えることができ、心のゆとりをもって非常時に処してゆくことができる。国民の持久力を養う上において文学は特に重要な力である。

我が国の現状を顧みて科学書の普及が大切であることは論ずるまでもなく明らかである。ところで殆どすべての人は文学書から読書に入るであろう。先ず文学書によつて読書することを覚え、それから他の種類の書物を読むようになるのが一般である。もし文学書が少なくなると人々は容易に読書の習慣を得ることなく、従つてせっかく科学書を普及しようとしてもその目的を達することが困難であろう。この点から考えても、不要不急であるかのように見える文学書の出版の決してそうでないことが理解されるであろう。すべて文化上においては余りに功利的に考えることは却つて功利性を失うことになるのである。

最近の出版において純文学の書物がいささか継子扱いされる傾向のある場合、文化の力がどこにあるかについて一層深い考察が必要である。

(十月二日)

## コラム『一朝一夕』

## 重点主義と均衡

先日相撲を観に行つて感じたことがある。双葉山の人気はいくらか落ちたらしいが、強い事は相変わらず強い。双葉山が強い理由は玄人にいわせると色々あるであろうがわれわれ素人が見て感じるのは彼の身体が力士としていかにも均整がとれていることである。背丈の高い割に肉附がとばしかつたり、肩の張つている割に腹が小さかつたりする者があるなかに、双葉山の身体はよく均整がとれているように思われた。そしてこれが彼の強い一つの理由でないかと感じた。

これはいつも考えられることである。ほんとに強いというのは、特殊の部分だけが発達しているのではなく、全体が均整的に発達しているものである。運動の選手などで意外に若くて死ぬものも多い。体操の目的としているのは身体の均整のある発達である。このような体操は精神についても考えることができ、修養というのはいわば精神の体操によつてわれわれの心において理性と

情念との間に調和或いは均整を作り出すことである。同じことが個人についてのみでなく、社会についても考えられるであろう。ほんとに強い国というのは、単に軍事だけに強い国ではない。政治がこれに伴わねばならないし、更に経済や文化がこれに伴わねばならないであろう。

近年重点主義というものがとなえられているのはもちろん理由のあることである。現に戦争をしている日本としては、戦争目的の上から緊要なものに重点をおかねばならないのは当然である。しかしながら、どれほど重点主義が必要であるにしてもそこにはまた均整或いは均衡という大切な問題があることを忘れてはならない。重点は軍需産業にあるからといって、そのために平和産業はただ犠牲にすればよいと考えてはならない。重点主義によつて国民生活を規正するというのは正しいにしても、その為に国民生活の安定について考える事を忘れてはならない。

いわゆる重点主義は、重点主義以外のものは何でも犠牲にしてよいということではなく、新たに重点となるものを中心として新しい均衡を作り出すということではなければならぬ。大切なのはこの新しい均衡を作り出すことである。均衡が必要になつたのではない。ただ均衡の中心となるものが移動したというだけである。

文化についても、いわゆる重点主義の立場から、文化は不要であると考えることが間違つてい

るのはもちろん、ただ時局に直接関係のあるものだけを認めて、他はすべて不急不要のものとして排することは間違っている。問題はここでも新しい均衡である。政治家は国家の体操ともいべきものを理解しなければならぬ。

(一九四一年五月二十七日)

### 統制下の個人

科学技術の新体制要綱が発表されて、統制はこの方面でも強化されることになった。これまで日本の科学は個々分散的に研究されて、仕事の協同に欠けていた事を考えると、一定の組織のもとに学者の活動を集中し、統合しようという新体制は大いに意味がある事といわねばならぬ。

元来、学問上の共同研究というものは、近代における科学的方法の確立を俟つて可能になったのである。すなわち近代科学における観察、実験、推理等の方法は主観的、独断的なものでなく、誰でもが自分の頭で理解し、自分の手で検証し得るような客観的なものである。かように客観的なものであるから、全体の研究を分割して、各人がそれぞれの場面で働くことによつて協同するということもできるのである。この点、近代科学は、封建時代の学問とは本質的に異なっている。

同じことが政治上の協同についても考えられるであろう。今日いわゆる一億一心の国民的協同が大切なことは異論のあり得ないことであるが、ただそのような協同が完全であるためには政府の政策に国民の誰もが理解し得るような客観性とか、一貫性とかがなければならぬ。その意味での科学性、或いは近代性が政治に要求されるのである。

ところで一つの全体主義的機構によつて学者の研究を統合するにしても、その統制下にある個々の学者が学問的良心を失わないで研究してゆく有能な人間でないならば、成績を挙げることはできない。組織はもちろん重要ではあるが、組織の中に入る個々の人間がしっかりしていなければ組織のために彼等は却つてつぶされてしまうことになるであろう。組織の威光で自分の無能を隠したり、組織の圧力で自分の良心を曲げたりするようなことがあつては研究の進歩があり得ないことは、自然のような客観的なものを研究する学問の場合特に明瞭である。

政治においてもやはり同じことがいえるであろう。全体主義的な政治は、個々の国民がしっかりとした人間であることを必要とするのである。わが国において統制経済が困難であるのも、弱小な商工業が余りに多いことによるといわれている。国民のめいめいが立派でなければ全体主義は完全であることができず、却つて国民を無力化してしまうことになる。それが封建的政治と現代

の全体主義との異なる点であつて、この全体主義が自由主義の後のものであるからといつて決して個人の完成が不要になつたのではない。特に自由主義が十分に発達しないで終つたといわれる日本の場合、今の世においても各人がめいめい働きのある、強い、立派な人間になるように心がけることが大切であつて、それで初めて職域奉公ができるのである。

(六月八日)

### 府県ブロックの反省

府県経済ブロックが国民生活を無用に窮屈にしている事が各方面で指摘されている、この問題はいろいろ重要な示唆を含んでいると思う。

元來、今日ブロックというものはアウトルキーの理念と結びついている。つまり一定の経済圏を設定し、その内部に於て自給自足を行おうというのであつて、そこにおのずから閉鎖性が生じてくる。かような閉鎖的な自給自足は、それ自体として考えると、封建時代における経済がそれであつたといひ得るであらう。それは局限された生産力、狭隘な交通、固定した社会關係に基づいて成立したのであり、逆にそのような局限性、狭隘性、固定性を結果した。自由主義経済は、



生産力の増大、交通の発達等によって、かくの如き封建的閉鎖性を破つて発展したのである。然しその結果また経済は全く無統制、無計画なものになつてしまつた。

いわゆるブロック経済はある意味においては経済の中世的な形の復活である。そこにわれわれは今日他の方面においていろいろみられる「新しい中世」というものを認めることができるであらう。しかしながらこの場合においても、それは単なる中世の復活でなく、却つて新しいものの創造でなければならぬ。既に自由主義時代を経てきた今日の経済はますます世界的になつてゐる。従つて、ブロックといつても封建的狭隘性のものであることは不可能である。今日は国といふものでさえ経済単位としては狭小になり、広域経済ということがいわれる時代である。世界がますます世界的になつた現在、ブロックといつても単に閉鎖的でなく、同時に開放的でなければならぬ。日本としても大東亜共栄圏という広域経済を考えている場合、国内において府県ブロックの如きものを考えることは経済を封建的な閉鎖性と狭隘性に逆転させる危険が多いのである。同じことが文化の方面についていわれ得るであらう。日本文化とか日本精神とかを強調することはもちろん極めて大切であるが、封建的閉鎖的にならないように注意することが肝要である。日本文化の特殊性を考えるばかりでなく、東亜文化の全体について考えねばならぬ。自由主義の

抽象的な世界主義は克服さるべきものであるが、しかし日本文化といい、さらに東亜文化といつても封建的閉鎖性に陥ることなく、同時に世界文化に向つて開放されていなければならぬ。今日、地方文化というものが強調されている場合、府県経済ブロックの問題に關聯して文化上においても反省を要するものがあるであらう。

(六月二十六日)

### 時間の新体制

節約は今日の国民の最も大きな道德である。従来節約と考えられたのは主として金銭の節約であつた。物資の節約ということはあまり考えられず、考えられたにしても、金銭の節約という見地からであつた。物資の節約のそれ自身として重要であることが一般に理解されるようになったのは最近のことである。そして金銭の節約も逆に物資の節約という見地から考えられるようになった。それと同時に、節約が単に個人のためのものでなく、それがまた国家のためであるということが強調されるようになったのである。

然るに金銭の節約や、物資の節約と共に、今日特に力説されねばならぬのは時間の節約である。

従来しばしば日本人は時間の觀念に乏しいと言われて来た。今日では幾分改善されたにしても、まだまだ時間の節約は充分に行われているとは言ひ難い。「時は金なり」というが、金銭の節約ということも、時間の節約の見地から考えられねばならない。金銭の浪費は、物資の濫費になるのみでなく、時間の空費になるのである。

時間の空費はそれだけ我々の生産性の減少を結果するのであつて、生産力の拡充が何よりも重要である今日、特に深く考えねばならぬことである。また時間は一般に我々の生活を量る最も基本的な尺度であつて、時間を尊重することは生活において秩序を尊重することである。生活の無秩序は極めてしばしば時間の觀念の欠乏から生じている。生活の新体制は、先ず時間の尊重からといわねばならぬであらう。

時間の尊重という点で今日考えるべき現実の問題は、わが国家には会というものが余りに多いことである。筆者の如きでさえ、案内される会にすべて出席するとしたら、殆ど連日そのために時間をつぶさねばならぬことになり、時には、二つ三つと会の重なる日もある。殊に新体制がいわれるようになってから、会が多くなつた。しかもその会に出てみると、集まるのはいつも同じような顔触れで、いつも同じようなことを話しているに過ぎぬことが多い。かようなことは各方

面において普通のことではないかと思う。とりわけ官僚の關係する方面ではそれが甚だしいのではないか。調査会とか委員会とかいふものが多く、そのために却つて非能率的になり、責任の所在も不明になつて、効果も挙がらないということは、従来もよく言われたことであるが、一向改まつていないのではないかと思う。会が多いのは時間の空費である。官界新体制として最も要望されている事務の簡捷化かんせつ化ということも時間節約の觀念の徹底によつて達せられる。自分の時間を大切にすると共に、他人の時間を尊重することが肝要である。

(七月六日)

### 流言蜚語の払拭

相変わらず流言蜚語が多いというのは寒心すべきことである。流言蜚語は社会の秩序を破壊するものであるが、戦時においては殊にその害が大きい。それは国民を不安に陥れることによつてその団結を破壊するのである。戦時における流言蜚語が如何に恐るべきものであるかは、たとえばモーロアの『フランス敗れたり』を読んだ人の誰もが氣附いたことであろう。

流言蜚語をなくするに最も必要なことは、物を科学的にみることを学ぶということである。原

因結果の關係を認識し、あり得べき事と、あり得べからざることとを判断し得る人にとつては、流言蜚語は存在し得ないであろう。戦争というような非常時においては物の見方がとかく現象的に流れて科学的でなくなり、そのために流言蜚語を生じやすいのであつて、かような時こそ特に物を科学的に考へてゆくことが肝要である。科学的な考へ方が国防国家体制の基礎であることは、この一事からも理解されるであろう。

過般の翼賛会の中央協力會議において、国民にもつともを知らせよという要求が諸方面から出たようであるが、それは流言蜚語をなくするためにも甚だ必要な事である。政府は国民にもつともを知らせなければならぬ。ただしかし、もし国民に科学的に考へる力が欠けているとしたら、ものを知らせる事は却つて流言蜚語を生ずる原因になるだけである。

流言蜚語のうちでも單純に無知から出ているものは比較的その害も少なく、払拭することも容易である。暫らく時が経てばそれは自然に消滅してゆくから。しかるに何らか爲にするとところがあつて巧妙に用意され、執拗に散布されているものは、それほど容易に消滅し難い。戦争中においては各国とも宣伝に力を尽すのであるが、そこから生ずる流言蜚語もなかなか多い。流言蜚語はスパイ的な宣伝であるという事ができるであろう。流言蜚語にのせられることはスパイにかか

ることである。

流言蜚語をなくする最も手近な方法は、自分が聞いても他人に絶対に伝えないということである。流言蜚語は伝えられるに従って大きくなる。そして人間は、殊にものを十分に知らされていない場合、自分の聞いた事は何でも特別のニュースであるかの如く他人に話したがるものであるが、かような誘惑に打ち克つことが大切である。近來隣組の常会などが流言蜚語の製造所になりたり伝播所になったりすることがあるかの如く聞くのであるが、治安上からも、防諜上からも、十分に注意を要することである。

(七月十六日)

## 文化上の国土計画

最近私も東京に住んでいる者でも新刊書が手に入らなくて困ることがあるのであるが地方の人には特にその歎きが甚だしいようである。これは一方読書熱が旺盛になつてきたものにも拘らず、用紙統制で本の発行部数が制限されていることに基づくのであるが、それにしてもその配給が中央と地方とで余りに不均衡であるのは宜しくないことである。殊に地方文化の発達がやかま

しくいわれている折柄、地方への書物の出廻りが全く悪いというのは見逃せない問題である。新設された配給会社などで地方の読書状況を調査して計画的な配給を行うことが要望される次第である。

地方における図書の不足についても文化上の国土計画の必要が感じられる。国土計画は今日国防の見地からも一般に重要な問題になっている。その際さしあたり考えられることは、従来あまり一ヶ所に集中している産業の如きを分散させるということである。これは万一空襲を受けるようなことがあつた場合、被害を少なくするために必要である。しかるにこのような分散は文化上の国土計画においてまた大切なことである。

例えば図書について見ても、日本の出版業は殆ど全く東京に集中している。そのために現在のように日本の品不足の傾向が出てくると、地方の人には愈々行きわたらないということが生ずるのである。これがもし例えばドイツにおいてのように、ベルリンにも、ライプツヒにも、ミュンヘンにも、ケルンにもという風に、各地方に立派な出版書肆があるならば、地方の居住者の読書欲の如きも一層よく満足させられ得るはずである。

もちろん出版書肆の分散の如きはそれだけとして考えられ得ることではなく、そのためには地方

の大学を盛んにするとか、現在あまりに東京に集中している高等教育機関を地方に分散させることが必要であろう。そしてそのように分散することによって大学の如きもそれぞれの特徴を発揮して発達し得ることになるのである。分散の必要はあらゆる文化について認められることである。ここにも「新しい中世」というようなものが考えられるであろう。近代の中央集権主義に対して、中世では各藩の如きがそれぞれ中心になって独自の教育なり文化なりが発達していた。もちろん今日文化の分散といつても決して封建的な閉鎖性や分権主義の復活であつてはならない。地方に分散する一方、近代的な開放性や中央集権主義をどこまでも活かした全く新しい形を創造するということがあらゆる国土計画における根本理念でなければならぬ。

(八月二日)

### 生活正義の実現

今月の興亜奉公日に大政翼賛会では「生活正義」という題目を掲げてその実現を期した。生活正義というのは耳新しい言葉で、語呂も悪いが、意味するものは去る七月新発足の興亜奉公日に取り上げられた集団化、協同化による生活新設計の内容であるとすれば、その実現は当然すべて



の国民の努力すべきことである。

翼賛会で生活正義に関する事柄として挙げているものをみると、明朗な商業道德の樹立、買溜め、売惜しみ、闇取引等の排撃、生活費の切詰めと最低予算の確立、共同貯蓄の強化、社交様式の規準化、夏季における交通緩和への協力などで、いずれも結構であるが、いささか機械的な羅列で、問題の取り上げ方がやや表面的であるように思われる。具体的であるのはよいことであるが、もつと根本の考え方を示すことも大切であろう。そうでないと、生活正義というものも形式的な、末梢的なものになる惧れがある。

昔から正義は特に社会的な徳と考えられてきた。すなわち正義は個人が自分自身において自分で実現し得るものでなく、すべての人が社会的に社会において実現すべき徳である。簡単にいうと、正義は社会的諸関係そのものうちにある。戦時負担の均衡、物資分配の公平、取引の公正等、人間生活の社会的諸関係のうちに正義が考えられる。ヒットラーの「戦争で一人の成金のできることも許されない」という言葉は正義感の現れである。ある者は儉約しているのに、他の者は贅沢しているというが如きことは正義に反する。

かようにして生活正義というものは、近衛公が第一次の組閣の際に宣言した「社会正義」を基

礎にして考えられることであつて、社会正義を離れては生活正義も考えられない。生活正義という耳新しい言葉のために根本の社会正義の問題を忘れてはならぬ。他に向つて犠牲を要求する者が自分では犠牲を回避するようなことがあつては正義に反するわけで、何事も率先して実行することが正義の要求である。正義は単に個人的にでなく社会的全体的に実現される徳であるから、生活正義にとつて根本的に重要なことは国民生活の協同化である。

生活正義という場合、日常生活のことが考えられているようであるが、われわれの極めて日常的な生活も元来社会的なものである。それは経済的政治的諸関係によつて規定されている。従つて生活正義が実現されるためには、経済や政治に於る正義が実現されなければならない。昔から正義は特に社会的な徳と考えられたところから、正義は国家の力によつて実現されるものと考えられて来た。つまり強力な政治が必要なわけであつて、これに国民が協力することによつて生活正義というものも真に実現されるに至るのである。

(八月六日)

## 日本人の複雑性

先日或る雑誌の座談会に出たら、日本人の複雑さということについて話が出た。その時は立ち入って検討されないうでしまったが、これは日本の現在を考える上に重要な関係がある事柄ではないかと思う。

たとえば、日本人は熱し易く冷め易い国民であるといわれる。確かにそういわれてよいところがあるのである。けれども他方事変後既に四年以上を経て来た今日を考えると、日本人にもなかなか持久力があると感ぜざるを得ない。今後についても、私は日本人の持久力は安心できると思つてゐる。しかし必ずしも国民に、政治に対する信頼が十分にあるわけではないであらう。むしろ国民の多数は絶えず一層強い政治力を求めてきたし、現に求めている。それでいて、国民はいつもおとなしく政府についていつてゐるのである。その心理というものは複雑で、決して一本調子ではない。

日本人の複雑さを考える場合、私は徳川三百年がこのような日本の性格を作るにあずかるところが大きいように思う。近年、日本の性格を論じるのに古代に溯つて考えることが普通になつてゐるが、理想を求めるにはもちろんそうでなければならぬけれども、今日の現実の日本人の性

i 「三木清関連資料第4輯」収録座談会「現代の思想に就いて」

格においては徳川時代からの伝統によるものが多いのである。日本人の複雑さというものも徳川時代に作られて、それがいわゆる日本資本主義の後進性と閃聯して、新しい要素を加えながら今日まで継がれているのである。

複雑であるということは、それだけ適応性が大きいことである。どのような境遇におかれても、それに適応して生きてゆくというには、単純でなく複雑でなければならぬ。複雑であるということは、それだけ心が練れていることでもある。日本人が現実的であるということも、それに關係があるであろう。そこから持久力も生じるのであるが、しかし他方、その複雑さは消極性と停滞性をともない易い。その適応の仕方は単に消極的ではないにしても——単に消極的であるなら複雑とはいわれない——積極性の重要な要素である集中性、感激性を失いがちである。今日の日本の前進のためには、そのような消極性と停滞性を、特にそれが封建的性質を帯びている場合、克服してゆくことが必要である。

日本の政治の難しさも、かように複雑な国民心理の上に政治が行われねばならぬところにある。しかし他方、現在日本人の複雑さというものは政治の影響によることも多いのであって、複雑さを超えて国民を一層積極的行動的にするような感激のある政治、明瞭な一貫した方針のある政治

が要求されるのである。

(八月二十日)

### 神経戦への用意

近代戦のひとつの特色は神経戦にある。戦争の種々の形態が今日においては神経戦の意義を含んでいる。例えば宣伝というものも、敵を不安にし、心の落ち着きを失わせるという目的に使われる。また空襲の如きも、それが与える実害のみでなく、むしろその実害以上に敵の神経を疲れ、一般的な神経衰弱の状態を惹き起すことを目的としているのであろう。

臨戦態勢ということの叫ばれる現在、先ず必要なことが物的準備を整えるにあるのはいうまでもない。事変以来すでに四ヶ年以上を経過しているのに、各家庭の防空設備の如きがなお完全でないというのは遺憾な事である。これは、今までわが国土が一度も爆弾にさらされたことがないところから、現に戦争をしていながら戦争というものが甚だ観念的に考えられていたことによるであろう。またその原因は、従来あるゆるる方面に抽象的な精神主義が支配していたところにもあるであろう。今やそのような観念的な、或いは精神主義的な考え方を超えて、戦争に対する物的

な実質的な準備が急速に進められなければならないのである。

しかしながら他方、今日極めて大切なことは、国民の各自が神経戦に対する用意を整えるということである。その用意は十分であるとはいえないように思う。種々の流言蜚語の生じているのは、そこに何か不安があるためではなからうか。隣組の常会などがそのような流言蜚語の製造所乃至伝達所になっているというが如きは、神経戦の重大性に対する認識が国民の間に行きわたっていないためではあるまいか。或いはまた臨戦態勢ということでもひどく興奮して妙に張り切っているというようなことも、神経戦に対する用意を知らないものといわねばならぬであらう。もちろん緊張は絶対に必要である。しかしそれが神経質にならないようにすることが肝要である。妙な張り切り方は不和の原因となり、他の人間をも徒らに神経質にするものである。つねに心のゆとりがなければならぬ。過日、柳川翼賛会副総裁が国民に落ち着きを持ってといわれたのは、まことに適切な注意であつた。恐るべきものは一般的な神経興奮とその反面の神経衰弱である。

神経戦への用意として大切なことは、あらゆる事柄に対して合理的に、科学的に考えてゆくと  
いう事である。常に理性を失わないで、あり得べきこととあり得べからざることとを区別しなければならぬ。これは今日の如く国際間の宣伝が盛んなときには殊に大切である。その宣伝にのせ

られて絶えず一喜一憂して心の落ち着きをなくするようなことがあつてはならない。宣伝戦が神経戦であることを理解することは、神経戦に対するときに必要な用意である。 (八月三十一日)

## 戦争の見方

事変以来、軍人が物を書いて意見を述べることが多くなつたのは当然の現象であろう。その中にはもちろん批評の余地のあるものもあるが傾聴に値するものも尠くない。殊に戦争に関することでは、さすがに専門家だけのことはあると思わせるものがあるのである。

私の最近読んで特に興味深く感じたのは、浜田吉治郎海軍中将の「政策・戦略・戦術」(『国防教育』十月号)という小論文であつた。その中で浜田中将はまず、今日のような広域にわたる戦争においては、局部の勝敗では全局の勝敗は決定しないので、個々の戦闘のために全体の戦争を忘れてはならぬと注意している。これは簡単な真理であるが、日々の新聞のセンセイショナルな記事をみていると、とかく忘れられがちになるのであつて、つねに注意を怠つてはならないことである。

次に浜田中將は、海陸を包括する大戦略の必要を詳しく述べている。日露戦争における乃木將軍の旅順攻略は、ロシアの東洋艦隊を自滅に導いたものであり、逆に東郷元帥の日本海海戦は満洲におけるわが陸軍の後方を安全にしたもので、陸軍戦略の一部である。今度の戦争においても、ドイツが勝利を得るためには、イギリスの海軍を全く無力にしなければならないというのである。

ところで、浜田中將によるとイギリスの政治家にはこのような戦略的知識を持っている人が伝統的に多く、殊に戦時の首相になつた人は、みな大戦略家でもあつた。ナポレオン戦争時代のピット然り、前大戦のロイド・ジョージ然り、チャーチル然りである。もちろんヒットラー総統も決してこれに劣るものとは思われない。顧みてわが国の政治家はどうであろうか、「敵の悪口をいっただけでは敵は参らない。イギリスの悪罵はよく聞くことだが、志気振作のための敵を罵ることの必要な場合もあると思うけれど、敵性国家の長所を知つて、これに対する対策を講ずることもまた極めて必要なことである」と浜田中將は論じている。

国防の上からいうと、戦術は一部分であつて、戦術の上に戦略があり、戦略の上にさらに国家の政策がある。戦術・戦略・政策が密接な關係を保ち、相互に合致しなければならぬことを浜田



中将は強調しているのである。戦争と政治とは一つのものでなければならず、戦争を政治的にみることを忘れてはならない。

今日、重要なことは、政治家はもちろん、すべての国民が戦争の真の見方を知っていることである。個々のニュースに徒らに心を奪われることなく、戦争を全体の立場から正しくみることが知っているとすることは、高度国防に協力するために極めて大切なことである。(十月五日)

## コラム『大波小波』

## 悲劇の問題

先年ドイツから派遣されて日本へ来ていたシュプランガーの「如何にして国民的性格を把握するか」という論文の最後に次のように書いてある。

「民族の最も豊かな姿は偉大な悲劇的文学のうちに現れ、他のどこにも同様の純粹さと深さにおいて現れない。或る民族がもはや何等偉大な悲劇をその最も内面的な所から作り出し得ない場合、その民族は究極の深みに於いて既に崩壊しているのでないかと氣遣わねばならぬ。英雄的な行動と英雄的な悩みとは相伴う。その結果はつねに悲劇的なものである。諸民族よ、何を汝等が悲劇的として体験し、如何にそれを切抜けたかを語れ、何を汝等がそれから悲劇の姿において表現し得たかを示せ、そうすれば私は、汝等が如何なるものであるかを告げよう。」

この要求に対して我々日本人、殊に文学者は如何に応ふべきであろうか。ともかく今日わが国

の文学には悲劇的なものが余りに乏しいようである。それはことさら回避されているようにさえ見える。たとえば日支相戦うは「東洋の悲劇」であるといわれる。しかしそれは果たして真に悲劇的として体験されているであろうか。数年前不安とか危機とかを言いながらそれが何等内面化されなかつたように、今日もまたそのようであるのか。

それとも我々はシュプランガーの説においてドイツ精神と日本精神との根本的な差異を見るべきであるか。——危機意識、悲劇的精神とかについて深く考えてみなければならぬ。

(二九四一年十一月三日)

## 学術の協同と綜合

日本の歴史は大きな飛躍をしている。わが学術思想界にも同じく飛躍がなければならぬ。これはもちろん、徒らに大言壮語したり或いは只他に号令したりすることで出来るものではなく、各人が絶えず自省して研究に精進することによってのみ可能である。

先ず必要なのは協同である。官私、派閥、専門、その他種々の人間的感情にもとづく対立や反

感を一掃して、眞の協同が行われねばならぬ。すべての智能を国家的見地から最も能率的に働かせる工夫が大切である。遊休設備があつてはならぬように、遊休人間というものがあつてはならない。

要求されるのは研究において実践的であるということである。即ち我々は日本の現実が直面している問題の解決に眞剣に努力しなければならぬ。これはもちろん単にいわゆる實際的な問題にのみ没頭することではない。大東亜戦争の目的が新秩序の建設にある以上、そこに当然新しい理論がなければならぬのであつて、純粹に理論的な問題の研究も重要である。ただその理論は現実から游離することなく、現実の中から形成されてこなければならぬ。従つてまた実証的研究家と理論家との間にもつと密接な連繋がなければならないと思う。

研究の協同と関聯して大切なのは学術思想における新しい綜合である。これまで例えば日本の研究、支那の研究、欧米の研究等の間に協同が欠けていて、その諸成果を大きく綜合して新しいものを作るといふ努力が足りなかつた。今日必要なのはただ東亜の研究のみで欧米の研究の如きは無用だと考える者があるとすれば、間違つてゐる。新しい日本の綜合こそ要求されているのであつて、我々の建設すべき新秩序が世界的意義を有するとはその意味である。戦争のために

諸外国から切り離されているということは、わが学術思想界にとって独自のものを作る好機会であるともいえるが、同時に独善に陥らないように戒心しなければならぬ。

(一九四二年一月四日)

## コラム『銃眼』

## 日本とドイツ精神

近年、日本精神ということが頻にいわれ、その特殊性について喧しく論ぜられ、西洋思想の排斥さえも唱えられているに拘らず、日本精神とドイツ精神との差異は余り語られていないようである。むしろ今日行われているのはドイツの模倣に過ぎぬものが多いと批評されるほどである。かようなことはいわゆる日本精神が甚だ政治的なものであることを考えさせる。

もし政治が国民性を基礎にしてゆかねばならぬとすれば、日本精神とドイツ精神との差異を知ることが重要でなければならぬ。ドイツ精神の上に立つというナチス的政治が果たして我が国民性に適するかどうかの問題である。

ナチズムは何でも規格的であることを好むドイツ人の性質に基づくといわれている。これも一つの説明である。しかし私は、もつと根本的なものはドイツ人における悲劇的精神ではないかと

思う。歴史は悲劇であるという思想は全くドイツ的である。この頃のナチスの書物を見てもこのような悲劇の観念、そして運命の観念が到る処に見出されまた感ぜられる。古代ギリシアと音楽——ドイツ人の愛する二つのも——の精神を悲劇の精神と考えたニーチェにナチスの思想の源泉が求められるのも偶然でない。

しかるに日本人に欠けているのはまさに此の悲劇の精神である。日本的といわれる心中の如きも悲劇的ではない。日本人にも一種の運命観はあるが、悲劇的ではない。日本精神とドイツ精神とがこのように異なっているとすれば、日本においてナチスの独裁政治は可能であろうか。

日本と支那とは提携してゆかねばならない、それだのに今両国は血腥い戦争をしている。これほど大きな悲劇はない。支那事変は日本の経験したいずれの戦争よりも重大であり、それが国民生活に及ぼす帰結も極めて深刻であるに相違ない。しかし日本人は今真に悲劇を感じているであろうか。誤解のないように云っておかねばならぬが、悲劇はいわゆる悲観と同じでない。ナチスの独裁政治は果たして日本の国民性に適するであろうか。

(五月十七日 年不詳)

## 教師の小吏根性

小学校の生徒に対して国防献金を行わせたとき、板ノ間稼ぎをする子供が出た。また彼等に対して物資節約を奨励したとき、墓所の鉄柵を盗む者が出た。これは東京で生じた事件であるが、すべての教育家の反省しなければならぬ問題を含んでいる。

子供に愛国心を起させ、貯蓄心を養わはせることは、もちろん大切である。しかしその精神を取らないで形式に墮する場合、弊害は大きい。しかもこの弊害はこの頃特に教師の小吏根性に基づくことが尠くないように思われる。自分の利益のために上長の意を迎えて外に見える成績だけを善くしようというのは小吏根性であるが、そのような小吏根性が官界ばかりでなく教育界にも充満しているように思われるのである。

親からあり余る小遣を貰つて浪費している子供に対して献金や貯蓄を強制的に行わせることに意味がある。けれども、そのような余裕のないのみか日常の生活にさえ事欠く貧しい家庭の児童に対して同じような義務を説くことは幼い者の心を種々に傷つけることになるのである。現に東京市を初め全国において今も多数の欠食児童が存在している。まず彼等のことを心配するのが、



国民精神総動員のひとつとして保健の重要性が力説されている場合、先決問題ではないか。

官僚独善の弊害はすでに久しく叫ばれているが、かような弊害の存在するのも、一面から見れば、国民がその存在を許すほど不見識であるためである。とりわけ教育界における小吏根性の官僚独善を助長していることが多い。およそ社会の諸現象は孤立したものでなく、一方に或る事実が存在すれば他方に必ずそれに相応ずる事実の存在するものである。すべての者が大国民にふさわしく見識のある人間となることが今日大陸に飛躍しようという日本にとって要求されている場合、国民教育に最も深い関係を有する教師の間において、国民精神総動員の運動以来、小吏根性が特に著しく目立つようになってはいはしないであろうか。

(六月十二日 年不詳)

## 解題

第十六卷編者久野収によると、本巻は三つの部分からなる。単行本として作品社から出版された『時代と道徳』『現代の記録』（1939（昭和14）年2月刊）と、出版はされなかったが、同じく新聞時評を集めたものである。その二著と「統現代の記録」と題されたものは、読売新聞の『一日一題』欄に寄稿されたものである。『東京だより』は、『大新京日報』と思われる満州の新聞」に寄稿されたものと久野収は記している。『窓外』は、『新愛知』夕刊、『一朝一夕』は、『名古屋新聞』夕刊、『大波小波』は、『都新聞』（東京新聞の前身）、『銃眼』は、『河北新報？』に寄稿されたものである。

久野収によると、『時代と道徳』（1936（昭和11）年12月刊）を西田幾多郎が推賞し、田辺元も「民間で苦斗する知性でなければ書くことが出来ない批評精神のモデルだ」と激賞したという。また、戸坂潤の『思想時評』、中井正一の週刊文化新聞『土曜日』の巻頭言などとの相互比較も重要であろうといい、さらに、エルンスト・ブロッホの抵抗的思想評論『現代の遺産』、ヴァルテル・ベンヤミンの抵

抗的文化評論『イルミネーション』『新しい天使』との相互比較も興味深いだろうという。

底本：三木清全集 1968.1.17 岩波書店刊

作成者：石井彰文

作成日：2019.10.30